

1995年度教育研究学内特別経費

言語研究 VI

1 9 9 6

東京外国語大学

特集

「文型」について

ま え が き

言語の最も基礎的な単位が「文」であることは誰しも認めるところですが、また同時に、この「文」が複合的な構造をなす単位であることも、誰しも認めるところだろうと思います。つまり「文」は、基礎的な単位であるといいながら単純な、あるいは単一の要素からなる単位ではないわけで、この伸縮自在な、しかも場合により、幾つかの決まった特徴をもって現れる構造単位の扱いに、我々は今でもある戸惑いを感じることがあります。とりわけこの多様な構造単位を、如何にすれば網をかけて一網打尽にとらえ切ることができるでしょうか。

この『言語研究 VI』がそのテーマに掲げた「文型」の処理も、その試みの一つである筈です。

文構造をとらえるやりかたには大きく分けて、統辞核への一点集約型と、文の広がりを活かしたアナログ型がありますが、「文型」処理は典型的な後者の型でしょう。C.T. Onion の文型分析が行われてから、ほぼ100年が経過しようとしています。100年を迎えた「文型」分析の一つの課題は、「文型」分析に現れる要素を、そしてその相互関係を、どのように精密に規定することができるか、ということであろうかと考えます。

私たちの『言語研究』も早いものでこれで6年目を迎えました。しかし一応の区切りである10年に向けて、まだ折り返し点を越えたばかり、でもあります。

正真正銘の若者たちと、気分だけ若い老人の、10年を目指すマラソンがこれからも楽しからんことを心から祈りつつ、

1996. 1

執筆者を代表して

渡 瀬 嘉 朗

目 次

文型としての論理構造	宗宮喜代子	1
ドイツ語の「文型」の概観	在間 進	16
Einige Überlegungen zum „Generativen Mechanismus“		
für die Generierung der deutschen Sätze	Susumu ZAIMA	21
「文型」理論と統辞分析	渡瀬嘉朗	31
文型の変異に関する若干の考察	川口裕司	56
Cambiar de に関するスケッチ	川上茂信	83
現代ロシア語における普遍人称文について	中沢英彦	93
中国語の文型：語彙依存性と文脈依存性	望月圭子	101
マレーシア語の文型	正保 勇	112
ベトナム語の基本文型	宇根祥夫	137
La spécificité fonctionnelle et les types de construction	Yoichiro TSURUGA	145
——研究ノート——		
前綴 ein-, mit-, nach-, vor-, zu-, zurück-, zusammen- を伴う動詞のリスト	黒田 廉	165
非分離前綴 be- を伴う動詞のリスト	黒田 廉	197

序

アリストテレスの時代から19世紀に至る長い期間は、西洋の論理学の第1期と呼ばれ、この期間の論理学はアリストテレス的論理学 (Aristotelian logic)、形式論理学 (formal logic)、あるいは古典論理学 (classical logic) と呼ばれる。その後、長い眠りから覚めたように論理学は活性化し、19世紀半ばから世紀末の頃には、ブール (George Boole 1815-1864)、ド・モルガン (Augustus DeMorgan 1806-1871)、ヴェン (John Venn 1834-1923) らによる論理代数の手法が論理学に応用されて、ケンブリッジを中心に研究が行われた。これが論理学の第2期であり、この時期の論理学は命題論理学 (propositional logic) とも呼ばれる。そして、時間差攻撃をかけるかのように、ドイツのフレーゲ (Gottlob Frege 1848-1925)、ケンブリッジのラッセル (Bertrand Russell 1872-1970) らが述語論理学 (predicate logic) を完成させた。フレーゲが『概念記法 (Begriffsschrift)』を著した時をその起点とみなせば、1879年から現在に至る時期が論理学の第3期にあたる。述語論理学が命題論理学の全ての理論装置を包含することから、現代では命題論理学と述語論理学は一括して記号論理学 (symbolic logic) とも呼ばれる。

本稿の目的は、論理学が探究してきた命題の基本型を文型の観点から捉えて、第1期から第3期に至る論理学と現代の論理学的意味論ならびに言語学的意味論の方法を観察し、西洋的、インド・ヨーロッパ語族的思考の特徴とその変遷を論じることである。その特徴とは、主語と述語を異なったカテゴリーに属するものとみなして厳然と区別すること、さらに、この二つの要素を、文を成立させるための不可欠の要素とみなすことである。

古来から19世紀に至るまで、論理学者の関心は人間の思考の法則に向けられていた。言語は思考の透明な伝達手段として顧みられず、「命題」と「文」は区別されずに用いられていた。現代ではこのような言語道具観は影をひそめ、言語は思考に対して透明ではなく独自の構造と規則をもつと考えられる。しかし、それでは言語構造の分析は思考の法則の分析からどの程度自由であり得るだろうか。本稿では、この問題意識をも視野に納めながら、3期にわたる論理学と、その延長としての論理学的意味論、ならびに言語学的意味論の文型に関する部分を観察する。

1 古典論理学

古典論理学では4つの文型が設定されている。すべての自然言語の文は A、E、I、O と

略称される4種類の定言命題(categorical proposition)に振り分けられ、それにより推論の可能性が明らかになる。A、E、I、O は各々全称肯定命題、全称否定命題、特称肯定命題、特称否定命題を表し、次のように構造分析される。

文型	量化子	主語名辞	繫辞(copula)	述語名辞
A	All	S	are	P
E	No	S	are	P
I	Some	S	are	P
O	Some	S	are not	P

ここにおいては主語名辞(subject term)と述語名辞(predicate term)という2つの名詞がbe動詞で結合されることが重要である。また、意味解釈としては、主語名辞によって表される実体が述語名辞によって表される属性を有する、と考えられ、さらに、そのことがすべての当該の実体について言えるのか否かの情報が量化子によって明示される。すべての文はこの文型に分類された上で思考の道具として用いられる運びとなる。例えば次の各々の(a)文は(b)文のような標準形に置換される。

1. (a) チンパンジーは賢い

(b) すべてのチンパンジーは賢い物である

2. (a) Santa Claus is coming to town

(b) All things that are Santa Claus are things that are coming to town

3. (a) A few diamonds are blue

(b) Some diamonds are blue things

(b)文のような標準形の定言はいわば思考のための理想言語の文型であり、古典論理学はこの文型に基づいて、一つの定言から伴立命題を引き出す直接推理の規則や二つ以上の定言から結論を引き出す間接推理の規則の体系化に努力を集中させた。直接推理は文に関わり、間接推理は論証に関わる。前者については次のような規則が発見されている。

Aが真の時、Eは偽、Iは真、Oは偽

Aが偽の時、Oは真

Eが真の時、AとIは偽、Oは真

Eが偽の時、Iは真
 Iが真の時、Eは偽
 Iが偽の時、Aは偽、EとOは真
 Oが真の時、Aは偽
 Oが偽の時、AとIは真、Eは偽

主語名辞と述語名辞を入れ換えても(换位)、EとIは真理値が変わらない
 肯定文を否定文にし、あるいは否定文を肯定文にした後で述語名辞を否定しても
 (換質)、A E I Oのどの文型の場合も真理値は変わらない
 主語名辞と述語名辞を各々否定した後で入れ換えても(対偶)、AとOは真理値が
 変わらない

さて、ここで注目すべきは、古典論理学における文型という形式と意味解釈の内容との不整合性である。形式上は、主語と述語はどちらも「～であるもの」という概念を表し、固有名ですら「サンタであるもの」に置換される。こうして文は、主語概念と述語概念の重複の有無のみを言明するものとなる。定言三段論法を19世紀のヴェン図を用いて表してみれば、主語概念が左の円で表され述語概念が右の円で表されるという些細な慣習上の違いを除いて、主語と述語はどちらも概念という同等の資格で文を構成していることが明白である。

チンパンジー 賢い物

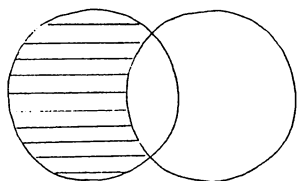


図1 1の文

サンタである物 町に来る物

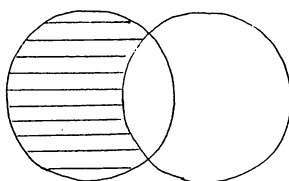


図2 2の文

ダイヤモンド 青い物

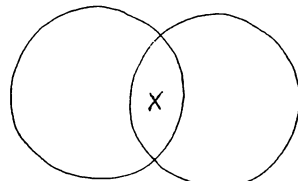


図3 3の文

しかし一方では、アリストテレスの次の言葉が示すように、古典論理学においては主語は実体を表し、述語は属性を表すと考えられていた。

That which is called a substance most strictly, primarily, and most of all -- is that which is neither said of a subject nor in a subject, e.g. the individual man or the individual horse ...

... it is because the primary substances are subjects for all the other things and all the other things are predicated of them or are in them, that they are called substances most of all. But as the primary substances stand to the other things, so the species stands to the genus: the species is a subject for the

genus.... (Aristotle, "Categories," 5).

(もっとも厳密な意味で、第一義的に、なかならず実体と呼ばれるところのものは、主語について言われることでもなければ主語の中にあるものでもない。例えば個人とか、個体である馬のことである。...

... 第1実体がなかならず実体と呼ばれるのは、第1実体が他のすべての物の主語となり他のすべての物は第1実体についての叙述となるかあるいは第1実体の中にあるからである。しかし、第1実体が他のすべての物に対して有する関係は種が類に対して有する関係に等しい。種は類の主語となるのである。...)

ここでは確かに、原則として、実体である実在する具象物が主語となり、実体についての叙述や属性は述語となると言われている。しかし、これが古典論理学における文の意味解釈であるとすれば、古典論理学の文型は文要素の機能を正しく表示できていないことになる。

ちなみに、ラッセルは、古典論理学の形式と内容の食い違いには言及せず、「主語－述語」の名辞論理と「実体－属性」の考え方を一括して批判している。

The influence of language on philosophy has, I believe, been profound and almost unrecognized. If we are not to be misled by this influence, it is necessary to become conscious of it, and to ask ourselves deliberately how far it is legitimate. The subject-predicate logic, with the substance-attribute metaphysic, are a case in point. (Russell 1924, p.330).

(思うに、言語が哲学に及ぼす影響は甚大で、しかもほとんど認識されずにきた。この影響に惑わされないためには、それを意識にのぼらせ、どこまで許容するかをよく考えることが必要である。つまり、「主語－述語」の論理学と「実体－属性」の形而上学が問題なのである。)

特に名辞論理については、ラッセルは次のように批判している。

... Traditional logic regarded the two propositions, "Socrates is mortal" and "All men are mortal," as being of the same form; ... this confusion ... obscured not only the whole study of the forms of judgment and inference, but also the relations of things to their qualities, of concrete existence to abstract concepts, and of the world of sense to the world of Platonic ideas...." (Russell 1914 p.50).

(伝統的論理学は「ソクラテスは必滅である」と「あらゆる人は必滅である」という二つの命題を同じ形式とみなした。この混同は、判断と推論の形式の研究そのものを曖昧にしたのみでなく、物とその性質の関係や、具象的存在と抽象的概念の関係、感覚の世界とブ

ラトンの概念の世界の関係をも曖昧にしてしまった。)

ラッセルの批判のポイントは、古典論理学の名辞論理は概念以外を扱うことはできないにもかかわらず、本来の主語でない抽象物をあたかも実在する具象物であるかのように扱い、「実体－属性」という思考法を助長している、ということである。しかも、一般的に実体と考えられていたものはラッセルにとっては真の実体ではなく、命題においては主語でなく述語に相当するものである。こうしてラッセルは、古典論理学の概念主義の統語論と実体主義の意味論を一括りにして批判したことになる。

実際には、古典論理において不整合に共存した概念主義と実体主義のうち、後者はラッセルらの記号論理学においても脈々と続いている。主語が実体を表し述語が属性を表すという考え方は、皮肉にも古典論理学よりも記号論理学において理論的に強力に推し進められ現代に定着している。このことが本稿の主張である。これについては後述する。

現代の言語学はむしろ、記号論理学に由来する実体主義、外延主義の束縛に苦しんでいる。そのような折から、古典論理学の概念主義の部分は再考の価値があると思われるが、本稿では立ち入らない。

以上、このセクションでは、古典論理学の4文型は概念の重複や包摂の関係を表すものであったこと、4文型の間の伴立の関係が研究されていたこと、また、当時から西洋的な「主語－述語」の実体主義が見られたことを論じた。

2 命題論理学

命題論理学は文型論としてはさしたる基本理念を提供するものではない。むしろ、言語学的観点からの命題論理学の成果は、機械的に意味の演算ができる範囲で複合命題の文型を定義したことにある。基本的な複合命題は、要素命題を5つの結合子のいずれかによって連結することにより作られるが、用いられる結合子に依存して新たな意味を獲得する。用いられる結合子はあくまでも論理結合子であり、自然言語の結合子のごく一部にすぎない上に意味も幾分か異なっているが、基本的な複合命題を組み合わせる様々な複合命題をその真理条件を明示しながら生成することを可能にしたという意味では、命題論理学の成果は大きい。

ウィーン生まれでケンブリッジに学んだウィットゲンシュタイン(Ludwig Wittgenstein 1889-1951)は、命題論理学で一般的に用いられていた次の5つの論理結合子を含む複合命題の意味を下のような真理値表にまとめて示した(『論考』4.31、5.121)。ただし、ここで T は真、F は偽を表す。

not p	: 否定	$\neg p$	(pが偽である時に真)
p and q	: 連言	$p \wedge q$	(pとqがともに真である時に真)
p or q	: 選言	$p \vee q$	(pとqの一方あるいは両方が真である時に真)

if p, then q : 条件 $p \rightarrow q$ (p と q がともに真であるか、又は p が偽である時に真)
p if and only if q : 双条件 $p \leftrightarrow q$ (p と q の真理値が等しい時に真)

p	q	$\neg p$	$p \wedge q$	$p \vee q$	$p \rightarrow q$	$p \leftrightarrow q$
T	T	F	T	T	T	T
T	F	F	F	T	F	F
F	T	T	F	T	T	F
F	F	T	F	F	T	T

命題論理学は厳密には否定命題を除く上の4種類の基本的な複合文の文型を設定し、さらに潜在的に無限の複合文をそこから派生させる方法を明示したことになる。

3 述語論理学

述語論理学は古典論理学の論理構造を否定するところから出発した。この時代には、観念に対する言語の不透明さが認識され、観念の構造を正確に表す言語が求められた。そして、フレーゲは数学のための理想言語として、ラッセルは自然言語に惑わされずに真の知識を得るための理想言語として述語論理に到達した。この理想言語のための述語論理は、1960年代以降、アメリカのモンタギュー(Richard Montague 1930-1971)やデヴィッドソン(Donald Davidson 1917-)らによって自然言語の意味表示に用いられており、その意味で、述語論理の命題構造は単に理想言語の文型として引用する価値があるのみでなく、自然言語の文型論としても貴重な資料を提供する。

述語論理学では、要素命題は $F(a)$ という基本形で表される。

$F(a)$: F =関数(function)

a =項(argument)

ここで、関数は述語に相当し、項は主語に相当する。フレーゲが創始した当初は $\phi(A)$ という表記がなされており、関数と項はどちらも大文字で表記されていたが、ラッセルが集合のパラドックスを発見して以来、関数は大文字で、項は小文字で表記されるようになった。この修正は大きな意味をもつ。規約によって大文字と小文字は次元の違いを表し、今や $F(a)$ は、文は主語と述語で成るということのみでなく、主語は述語より次元が低いことをも表すものとなった。このことから、主語は現実に属す実体であり述語は抽象的な概念であるという、アリストテレス以来の実体主義の観方が現代の記号論理学においても保持されていることが分かる。

$F(a)$ を集合図で表すと次のようになる。

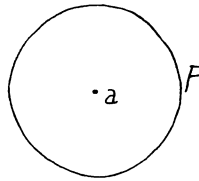


図2 $F(a)$

この図において、 $\cdot a$ は現実の個体を表し、大円はその個体が有する特質 F を表す。大円はまた、所与の特質を有する個体の集合をも表すため、図2 は a が F を有することを表すと同時に、 a が F を有する個体の集合の成員であることをも表す。こうして、古典論理学が観念の関係に終始したのに対して、述語論理学は個体と概念の関係を表すことに成功した。しかし、このことは、述語論理学が、「実体－属性」の考えをより確実に定着させたことに他ならない。

次の (b) 文は各々の (a) 文の述語論理翻訳である。ただし翻訳辞書によれば $S=\text{sings beautifully}$ 、 $M=\text{is mortal}$ 、 $h=\text{Susan Hampshire}$ 、 $s=\text{Socrates}$ であるとする。

4. (a) Susan Hampshire sings beautifully

(b) $S(h)$

5. (a) Socrates is mortal

(b) $M(s)$

関数と項は各々、述語定項 (predicate constant) と個体定項 (individual constant) ととも呼ばれる。個体定項になるのは上の例が示すような固有名 (proper name) のみであり、普通名 (common name) は述語定項の地位を与えられる。また、二つ以上の個体の関係を表す文も論理翻訳できる。以下に例を挙げるが、翻訳辞書は省略する。これらの例からも明らかなように、述語論理学には命題論理学が組み込まれている。

6. (a) Whales are mammals

(b) $\forall x [W(x) \rightarrow M(x)]$

7. (a) A cat grins

(b) $\exists x [C(x) \wedge G(x)]$

8. (a) Not every dancer is talented

(b) $\neg \forall x [D(x) \rightarrow T(x)]$

9. (a) Tom admires Susan

(b) $A(t, s)$

10. (a) Every boy loves some girl

- (b)-1 $\forall x [B(x) \rightarrow \exists y [G(y) \wedge L(x, y)]]$ (「男の子の各々に一人は好きな女の子がいる」)
 -2 $\exists y [G(y) \wedge \forall x [B(x) \rightarrow L(x, y)]]$ (「特定の女の子を男の子みんなが好きだ」)

11. (a) Tom gave Susan a book

- (b) $\exists x [B(x) \wedge G(t, s, x)]$

$\forall$ と $\exists$ は量化子、 x は個体変項(individual variable)と呼ばれる。9から11が関係を表す命題で、love のような動詞は2項述語(two-place predicate)、giveなどは3項述語と呼ばれる。4から11の例が示すように、述語論理学は述語に重要な役割を付与しており、そのことが名称の由来となっている。

以上が一般的に受け入れられている述語論理学の「文型」であるが、真正の論理的主語を求めるラッセルは、“On Denoting”で独自の記述の理論を提唱した。それによれば、確定記述(definite description)も実は主語ではなく述語であることになる。また、次の例にも用いられているように、述語論理学では、外延の同一性を表す記号「=」が用いられる。これにより be動詞の曖昧性が除去されたことは評価できる。

9. (a) The author of Waverley was a man (Russell 1905 中の例文)

- (b) $\exists x [\forall y [A(y) \leftrightarrow (y=x)] \wedge M(x)]$ ただし、 A =author of Waverley、 M =was a man

「現代のフランス王」というような、実在しないものを誤って主語としてしまうことを恐れたラッセルは、その代わりに正体不明の x を論理的主語として設定したのである。この x こそは、ラッセルが批判した古典論理学的形而上学からラッセル自身も自由ではなかったことを物語る。実体と属性の思考法は西洋的思考を現在も支配している。

以下は述語論理学の文型をまとめたものである。これらはモンタギュー意味論でも、また、一般的に現代の意味論でも受け入れられている。

- 1 固有名+1項述語： $F(a)$
- 2 固有名+2項述語： $F(a, b)$
- 3 固有名+3項述語： $F(a, b, c)$
- 4 量化子+変項+束縛変項をもつ1～3形式の命題：
 $\forall x [P(x) \rightarrow Q(x)]$
 $\exists x [P(x) \wedge Q(x)]$
 $\exists x [\forall y [P(y) \leftrightarrow (y=x)] \wedge Q(x)]$ など。

3.1 ラッセルの論理的原子論

述語論理学に多大な貢献をしたラッセル自身は、言語の論理分析を認識論の域にまで追求した結果、上の1～3の文型を否定し、1～3のような単純な形式は自然言語には存在

せず、命題構造としてのみ可能であると結論した。

論理的原子論(logical atomism)の中で、ラッセルは世界を構成するもっとも単純な事実を原子事実と呼び、それを表す命題を原子命題(atomic proposition)と命名する。原子事実はある特殊な物とその性質から成り、それを表す原子命題は「特殊(particular)」と呼ばれる論理的主語と述語から成る。もう少し複雑な原子事実を表す原子命題もあり、こちらは二つ以上の特殊と動詞(句)から成る。

次に原子命題が言語でどのように表されるかと考えれば、理論的には、特殊を表し得る言語的要素は固有名において他には無い。しかし分析を極めてみれば、日常的に固有名として用いられている「ソクラテス」などという名前は実は記述の省略であり、特殊は理論が要請する虚構にすぎないことが判明する。

... The names that we commonly use, like "Socrates," are really abbreviations for descriptions; not only that, but what they describe are not particulars but complicated systems of classes or series.... (Russell 1918, p.200).

(「ソクラテス」のような、われわれが普通に使う名前は実際は記述の省略である。しかも、名前が記述するのは特殊ではなくクラスや連続の複雑な体系である。)

自然言語に失望を示すラッセルではあるが、ラッセルが希望を託す理想言語の原子命題の「文型」は次の通り述語論理学の文型の1～3に完全に一致する。

原子命題 1 : 述語と特殊から成る。 $F(a)$

2 : 動詞(句)と二つ以上の特殊から成る。 $F(a, b)$

3 : " $F(a, b, c)$

そしてこの1～3の形式の背後にある意味論は、アリストテレス以来の「実体と属性」の形而上学に合致している。「実体と属性」という西洋的思考法は、述語論理学においても保持されているのである。

こうして設定された複数の原子命題を命題論理学の結合子によって繋げば、分子命題(molecular proposition)が生成される。分子命題とは複合命題のことである。その結合の可能性については命題論理学の文型のところで既に述べた。

3.2 モンタギューの形式意味論

モンタギュー意味論は、固有名に関する部分を除いてラッセルの提案をすべて受容した形で述語論理を自然言語である英語に適用し、さらに述語を細分化した。モンタギュー意味論はラッセルのような認識論の深みには踏み込まず、もっぱら機械的に適格文を生成できる文法を探究した。その結果、範疇文法(categorial grammar)の考えを採用し、述語を

細分化することを余儀なくされたのである。

モンタギュー意味論は基本的には「実体と属性」の思考法を引き継ぐ理論である。モンタギュー意味論では文は名詞句の範疇と自動詞または普通名の範疇から成るが、ここには実在の個体が特質を有するという思想がある。しかし、フォーマリズムを重んじるモンタギュー意味論は、時には意味論的直観より技術的便宜を優先させる。そのために、主語である名詞句の範疇が述語より次元の高い概念の意味的タイプとして設定されたり、述語である自動詞に様々な下位範疇が設定されたり、be が他動詞として扱われたりする。

モンタギュー意味論のうち特に PTQ 文法に準拠すれば、自動詞には、本来の自動詞、他動詞に名詞句を連結して自動詞になったもの、他動詞に文を連結したもの、他動詞に不定詞を連結したもの、の 4 種類がある。しかし、名詞句や限定詞を含めたすべての連結 $\alpha\beta$ は入れ子式に $\alpha'(\neg\beta')$ という形に翻訳された後、 $\beta'(\alpha')$ という述語論理学の論理構造に立ち戻るのである。ここで「 $\neg$ 」は内包記号であり、連結の後半の方が前半より次元が高く抽象的であることを意味する。内包記号は本来、言表の読み (de dicto reading) と事象の読み (de re reading) を区別して論理表記するためにモンタギューが使用したものであるが、本稿ではそれには立ち入らず、この内包記号が抽象性を表すことを理解するにとどめる。また、論理翻訳の過程の説明は省略する。

	PTQ 文法の文の種類	文の統語構造 $\Rightarrow$ 文の論理構造
1	名詞句 α + be + 不定冠詞 + 普通名詞 β	$\alpha \text{ be } a/an \ \beta \Rightarrow \neg \beta'(\alpha')$
2	名詞句 α + 自動詞 β	$\alpha \beta \Rightarrow \neg \beta'(\alpha')$
3	名詞句 α + 他動詞 β + 名詞句 γ	$\alpha \beta \gamma \Rightarrow \neg \beta'(\alpha', \neg \gamma')$
4	名詞句 α + 他動詞 β + that + 文 γ	$\alpha \beta \text{ that } \gamma \Rightarrow \neg \beta'(\alpha', \neg \gamma')$
5	名詞句 α + 他動詞 β + 不定詞 $\text{to } \gamma$	$\alpha \beta \text{ to } \gamma \Rightarrow \neg \beta'(\alpha', \neg \gamma')$
6	文修飾の副詞 $\alpha + 1 \sim 5$ の文 β	$\alpha \beta \Rightarrow \neg \beta'(\alpha')$
7	2 の文または 3 $\sim$ 5 の文 + 述語修飾の副詞 δ	$\alpha \beta \delta \Rightarrow \neg \delta'(\alpha', \neg \beta')$ $\alpha \beta \gamma \delta \Rightarrow \neg \delta'(\alpha', \neg \beta'(\neg \gamma'))$
8	1 $\sim$ 2 の文または 3 $\sim$ 5 の文 + 述語修飾の前置詞 δ + 名詞句 ε	$\alpha \beta \delta \varepsilon \Rightarrow (\neg \delta'(\neg \varepsilon'))(\alpha', \neg \beta)$ $\alpha \beta \gamma \delta \varepsilon \Rightarrow (\neg \delta'(\neg \varepsilon'))(\alpha', \neg \beta'(\neg \gamma'))$

明らかに、モンタギュー意味論ではすべての文が $F(a)$ または $F(a, b)$ の形式に論理翻訳される。また、文頭の語句のみはそれが何であれ常に実在として扱われるが、PTQ 文法で主語以外に文頭に現われるのは特別な論理記号で置換される文副詞としての necessarily のみであるため、実際には主語のみが実在の地位を与えられる。その他の要素は一律に抽象物として扱われる。ただし、例えば下の 12 のような場合には、いわば例外として、目的語の実在性が意味公準 (meaning postulate) によって保証される。

注目すべきことは、モンタギュー意味論が認識論を持たず、むしろ機械的な手順によって意味解釈を行なうことを第一の目的とした結果、名詞句以外に述語や文をも命題の項として扱うようになったことである。モンタギュー意味論は、述語論理学をまるごと受入れて出発したにもかかわらず、古典論理学以来述語論理学においても少くとも無意識のうちに保持されていた西洋的認識の枠組をこともなげに捨象した。こうして「実体と属性」の形而上学は時代にとり残され、意味論は根本的な変化を遂げようとしている。

範疇文法を取り入れたモンタギュー意味論の機械的な手順とは関数適用 (functional application) である。要素は二つずつ連結され、論理翻訳に際しては翻訳規則の指定に従って、必ずどちらか一方が関数に、他方が項になる。このため、不定詞を目的語とする構文や節を目的語とする構文、副詞に修飾される動詞などにおいては、非実在が項とならざるを得ない。この関数と項による思考法は述語論理学の方法を引き継いだものであり、理念上は実体と属性の形而上学に由来するにもかかわらず、関数と項による方法を機械的に推し進めようとした結果、実体と属性の原則は棚上げされたのである。ギリシャ以来の西洋的形而上学は、認識論に欠けるモンタギュー意味論の機械主義によって意味論からはじき出されてしまった。

次に、上の PTQ 文法の 8 文型の例とその論理翻訳を示す。

- 10. 1 の例 : Tom is a student $\Rightarrow$ student' (t)
- 11. 2 の例 : Tom sings $\Rightarrow$ sing' (t)
- 12. 3 の例 : Tom finds a zebra $\Rightarrow$ find' (t, a zebra')
- 13. 4 の例 : Tom believes that John has a secret
 $\Rightarrow$ believe' (t, have' (j, a secret'))
- 14. 5 の例 : Tom tries to find a unicorn $\Rightarrow$ try' (t, find a unicorn')
- 15. 6 の例 : Necessarily, John finds a unicorn
 $\Rightarrow$ $\Box$ find' (j, a unicorn')
- 16. 7 の例 : Tom walks slowly $\Rightarrow$ slowly' (t, walk')
- 17. 8 の例 : Tom sings in the park $\Rightarrow$ in the park' (t, sing')

述語論理学は他動詞構文を二つの実在の間の関係を表すものとみなし、その点で古典論理学の概念主義から大きく飛躍したが、モンタギュー意味論では再び、目的語に相当する実在は抽象物として扱われることになってしまった。しかし一方では、上の例が示すように、名詞句のみでなく動詞(句)や節もまた命題の項として扱うようになったわけで、これは、認識論に無頓着な意味論ならではの大きな飛躍である。

3.3 デヴィッドソンの行為文の文型

デヴィッドソンは、自然言語としての英語を対象とした点ではモンタギューと同様であ

るが、モンタギュー意味論が認識論を持たなかったのに対して、デヴィッドソンは、従来の述語論理学が「属性」として表していた行為すなわち出来事(event)を個体として論理表記することを理論的にも正当化しようとした。デヴィッドソンの理論は、述語論理学の内部で、「実体」の再定義、再範疇化をしようとする試みである。ここにおいては、西洋的認識の枠組は保持されている。

デヴィッドソンによれば、行為文は、 $F(a, e)$ という基本形で表される。

$F(a, e)$: F =関数(function)
 a =項(argument)
 e =項としての出来事(event)

デヴィッドソンの挙げた有名な例文は次の通りに論理翻訳される。

18. Jones buttered the toast in the bathroom with a knife at midnight.

$\Rightarrow \exists x [\text{Buttered}(\text{Jones}, \text{the-toast}, x) \wedge \text{In-the-bathroom}(x) \wedge \text{With-a knife}(x) \wedge \text{At-midnight}(x)]$

この方法によれば、出来事の項が加わるために、従来の述語論理学に比べて述語の項の数が従来よりも1項多くなり、1項述語は2項述語に、2項述語は3項述語に順次繰り上げられる。一方では、モンタギュー意味論に比べて、副詞句が幾つ連結されても命題は高階にならず、1階の述語論理で事足りる。

3.4 ダウティの主題役割理論

例文18の論理翻訳においては、動詞の他に、時や場所、手段等の副詞句が関数の地位を与えられている。これに注目したのが、モンタギュー意味論を普及するのに貢献した言語学者ダウティ(David Dowty)で、ダウティはこれらの副詞句を主題役割(thematic role)と個体に分割し、主題役割を個体と出来事の間関係を表す関数として設定した。主題役割は言語学的意味論の主要なテーマの一つであり、現在までに、動作主や経験主などと並んで時、場所、道具、といった主題役割が提唱されている。ダウティによれば、18の文は次の19のように論理翻訳される。ただしここでは、理論的に定着した主な主題役割のみが用いられている。

19. $\exists e [\text{buttered}(e) \wedge \text{Agent}(\text{jones}, e) \wedge \text{Patient}(\text{the-toast}, e) \wedge \text{in-the-bathroom}(e) \wedge \text{with-a-knife}(e) \wedge \text{at-midnight}(e)]$

ダウティが新デヴィッドソン主義 (Neo-Davidsonian system) と呼ぶこの方法によれば、従来は関数の地位を与えられていた「出来事」が項の地位にいわば降りてくることになり、また、主題役割という、文中のどの要素によっても言語化されないにもかかわらず話者によって理解されるという意味で抽象度の高い意味関係が、関数になり得る論理的述語として新たに設定されることになる。この2点において、デヴィッドソン以降の論理学的意味論の文型は、標準的な述語論理学の文型を、ひいてはギリシア以来の西洋的認識の枠組を大きく修正するものである。

宗宮 (Sohmiya 1995) は、主題役割のみを関数とし、他は項とすることを提案した。これは、従来の「実体」と「属性」を同等の地位に置くこと、西洋的思考法を再検討することの提案であるが、ここでは言及するにとどめる。しかし、いったい主題役割とは何物であり、どのようにして生じるのか。主題役割を論理構造中に用いようとするすべての理論において、主題役割が新たな形而上学を構成しないよう十分注意することが必要であるのは言うまでもない。

4 言語学的意味論の文型

最後に、言語学的意味論の分野にあってデヴィッドソンやダウティに通じる分析をしているジャクソン (Howard Jackson 1945-) の例を挙げる。これは、R. Quirk et al. (1985) の *A Comprehensive Grammar of the English Language* に準拠しながら、特に意味的側面を重視した記述の枠組を構築しようという試みであり、現代の言語学的意味論における一つの標準的な見解であると言える。

通常の方法では、文の要素はパラダイムとシンタグムの観点から分類され、各々、動詞あるいは名詞、副詞などと呼ばれたり、主語、動詞、目的語、補語、副詞的語句などと呼ばれる。通常、「動詞」が曖昧に用いられるのが紛らわしいが、この二つの観点は構造と機能という、言語の重要な側面を表すものとして容認されている。ジャクソンは、この二つの側面に加えて新たに意味の側面を文法記述に導入しようとしているのである。そこにおいては主題役割が不可欠の要素である。

ジャクソンによれば、文は、動詞が創り出す状況 (situation) に従って、状態 (state)、出来事 (event)、行為 (action) の3種類に分類できる。また、名詞は、各々の状況中で何らかの意味役割 (semantic role) すなわち主題役割を担う物や事を表し、これらの物や事は参与者 (participant) と呼ばれる。動詞と参与者は文の基本的な構成要素であるが、これらの間に線的な順序は無い。参与者の他にも、名詞は時間や場所、理由などといった周辺的な情報をも表し、こちらは付帯事項 (circumstance) と呼ばれる。付帯事項もまた意味役割を担う。

ジャクソンの言語学的意味論は認識論の深みに入らない。3種類の状況は動詞に基づいて設定され、意味役割は名詞の機能を意味の観点から分類・命名したものにすぎない。参与者は、人、動物、その他の具象物と抽象物、と定義されるが、これらは名詞が表し得る

反映する。意味論は、論理的であればあるほど述語論理学に忠実であり、言語学的になればなるほどこれから離反する。この点で、モンタギュー意味論が、述語論理学に依存しながら「実体－属性」の認識の枠から逸脱し、連結という前後関係に基づいた「項－関数」の関係を記述の中心に据えたことは興味深い。述語論理学とモンタギュー意味論の間には、認識論と記述の対立、原則と実用のずれが見られた。言語哲学者たちを束縛して止まない「実体－属性」の図式を、文法家は容易に棚上げにするようにも見えた。

ジャクソンに代表される言語学的意味論の分析でも、「実体－属性」の認識枠は大きく崩れており、実体が属性をもつというよりは、参加者が状況を創り出すという解釈がなされる。参加者は属性をもち、それに基づいて役割の可能性が決定されるとはいえ、参加者はもはや実体に限定されず、むしろ、名詞として捉えられるすべてのものである。そして動詞が状況の種類を指示する。

「実体－属性」は、「主－従」および「具象－抽象」といった言語記述の枠組の中で分散的に保持されているのかもしれない。西洋的思考法を追って、問題の焦点は、言語記述におけるカテゴリーの異なる二つの要素、あるいは、名詞的なものと動詞的なものへと移っていく。

参考文献

- Barnes, Jonathan (eds.). *Complete Works of Aristotle*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Dowty, David. 1985. "On Recent Analyses of the Semantics of Control," in *Linguistics and Philosophy* 8.
- 1989. "On the Semantic Content of the Notion of Thematic Role," in G. Chierchia (eds.), *Properties, Types, and Meaning*. Vol. 2. Dordrecht: Kluwer.
- Frege, Gottlob. 1967. "Begriffsschrift, a formula language, modeled upon that of arithmetic, for pure thought," (1879), translated in Jean van Heijenoort, (ed.), *From Frege to Godel*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Goodman, Michael F. 1993. *First Logic*. Lanham, Maryland: University Press of America.
- Jackson, Howard. 1990. *Grammar and Meaning*. New York: Longman.
- Montague, Richard. 1974. "The Proper Treatment of Quantification in Ordinary English," in R.H. Thomason (ed.), *Formal Philosophy*. New Haven: Yale University Press.
- Russell, Bertrand. 1905. "On Denoting," in Robert C. Marsh (ed.), *Logic and Knowledge*, 1956. New York: Routledge.
- 1914. *Our Knowledge of the External World*. New York: Routledge.
- 1918. "The Philosophy of Logical Atomism," in *Logic and Knowledge*, 1956. New York: Routledge.
- 1924. "Logical Atomism," in *Logic and Knowledge*, 1956. New York: Routledge.
- Sohmiya, Kiyoko. 1995. "Event as a Thematic Role." 岩崎研究会(編)東信行教授還暦記念論文集. 研究社.
- Wittgenstein, Ludwig. 1914-16. *Tractatus Logico-Philosophicus* 奥雅博(訳)『論理哲学論考』1975. 大修館書店.

§ 1 補足成分と添加成分

1. 文を構成する文肢には、削除すると当該の文が非文法的になるものと削除しても当該の文が非文法的にならないものがある。たとえば、動詞 **besuchen** の場合、主語と直接目的語をかならず表示しなければならない。

Er besucht seinen Onkel ab und zu.

- a) Er besucht seinen Onkel.
- b) *Er besucht ab und zu.
- c) *Besucht seinen Onkel ab und zu.

また、動詞 **legen** の場合は、主語と直接目的語と場所副詞類をかならず表示しなければならない。

Er legt ein Tuch sorgfältig auf den Tisch.

彼はクロスをテーブルの上に丁寧に置く。

- a) Er legt ein Tuch auf den Tisch.
- b) *Er legt sorgfältig auf den Tisch.
- c) *Er legt ein Tuch sorgfältig.
- d) *Legt ein Tuch sorgfältig auf den Tisch.

さらに、動詞 **wohnen** の場合は、主語と場所副詞類がかならず表示しなければならない。

Er wohnt seit drei Jahren in Koeln.

彼は3年来ケルンに住んでいる。

- a) Er wohnt in Köln.
- b) *Er wohnt seit drei Jahren.
- c) *Wohnt seit drei Jahren in Köln.

2. 削除すると当該の文が非文法的になる文肢を補足成分、削除しても当該の文が非文法的にならない文肢を添加成分と呼ぶ（補足成分と添加成分は、削除テストによって区別され抽出される単位である）。動詞の、特定の補足成分を要求するこの特性を「結合価」と呼ぶ。上例における補足成分と添加成分は次のようになる。

besuchen → 補足成分： er, seinen Onkel

添加成分： ab und zu

legen → 補足成分： er, ein Tuch, auf den Tisch

添加成分： sorgfältig

wohnen → 補足成分： er, in Köln

添加成分： seit drei Jahren

【メモ】-----

補足成分のなかには、一定の条件のもとで削除可能なものもある（他動詞の絶対的用法）が、ドイツ語を学ぶ際、動詞の結合価を知ることが、ドイツ語の正しい文を作る上で非常に重要なことであり、結合価の研究も、外国語教育のとしてのドイツ語教育上の必要性から生じたものである。

§ 2 文型

1. 文型は、動詞と補足成分が構成する文の基本的構造である。動詞がどの補足成分を必要とするかは動詞のそれぞれの意味用法において決まっており、一つの動詞が複数の意味用法を持ち、それに応じて複数の文型を構成することがある。

Die Suppe kocht.

Die Mutter kocht die Suppe.

複数の補足成分を択一的に要求する場合もある。

Er wartet auf sie.

Er wartet schon lange.

2. 文型の設定にはいくつかの可能性がある。もっとも基本的な方法は、補足成分の数によって文型を規定する方法である。補足成分の数よりもさらに細かな文型を設定する場合、どのような基準をとるかによっては下位区分の仕方が異なってくる。ここでは、次のような形態的多様性は無視して、同一文型のバリエーションとして考える。

Er hofft auf ein baldiges Wiedersehen.

Er hofft (darauf) , daß er ihn bald wiedersieht.

Er hofft (dafauf) , ihn bald wiederzusehen.

§ 3 文型リスト

1. 主語 + 動詞

Das Kind schreit.

Das Faß rollt.

Das Kind wacht auf.

【メモ】-----

主語の種類

非人称 es + 動詞 : Es blitzt.

2. 主語 + 動詞 + 述語

Der Lehrer ist krank.

Das Mädchen wird Lehrerin.

Er wird zum Lehrer.

【メモ】-----

主語の種類

Es ist bekannt, daß er kommt.

Ihn zu sehen ist wichtig.

3. 主語 + 動詞 + 副詞類

Er steigt in den Zug ein.

Der Arzt wohnt in Köln.

Die Versammlung dauerte zwei Stunden.

【メモ】-----

Die Kritik geht zu weit.

4. 主語 + 動詞 + 目的語

目的語の種類

〔4 格〕

Der Direktor erwartet seine Gäste.

Sie hat einen Ausländer geheiratet.

Der Lehrer lobt den Schuler.

〔3 格〕

Das Kind folgt seiner Mutter.

Der Raum gehört der Universität.

Es gelingt ihm, den Patienten zu helfen.

〔前置詞句〕

Der Dozent verweist auf das neue Buch.
Er baut an einer Hundehütte.
Er leidet an einer unheilbaren Krankheit.

〔副文〕

Er findet, daß der Patient besser aussieht.
Die Hausfrau kostet, ob das Fleisch gut ist.
Er beschreibt, wie etwas zu tun ist.
Er hat gemessen, wie lang der Tisch ist.

〔2格；文語〕

Die Klasse gedachte des verstorbenen Schülers.

【メモ】-----

主語の種類

Daß er nicht kommt, ärgert ihn.
Es freut den Arzt, seinen Kollegen wiederzusehen.
Es gefällt ihm, daß er eingeladen wird.
Es gefällt ihm, eingeladen zu werden.
Daß er in Berlin war, bedarf keines Beweises.
Daraus folgt, daß er unschuldig ist.

5. 主語 + 動詞 + 目的語 + 目的語

Der Hund brachte dem Mann eine Verletzung bei.
Er empfahl mir, zum Arzt zu gehen.
Die Mutter erzählt den Kindern eine Geschichte.
Der Staatsanwalt klagt den Mann des Mordes an.
Sie bezichtigt den Nachbarn der Lüge.
Das Haus kostet die Familie kein Geld.

6. 主語 + 動詞 + 目的語 + 副詞類

Der Lehrer legt das Buch auf den Tisch.
Die Mutter gewöhnt die Kinder daran, pünktlich aufzustehen.
Der Lehrer dankt dem Schüler für die Hilfe.
Die Mutter beauftragt die Tochter, die Wäsche zu waschen.
Der Diskussionsleiter bittet die Zuhörer, Fragen zu stellen.
Das Rauchen bekommt ihm schlecht.

7. 主語 + 動詞 + 目的語 + 述語

Er nannte die Frau eine gute Arbeiterin.

Der Lehrer nannte den Schüler fleißig.

Der Lehrer bezeichnet den Schüler als fleißig.

Der Direktor bezeichnet den Mathematiker als guten Lehrer.

Wir betrachten es als notwendig, daß die Jugend viel lernt.

Wir betrachten es als wichtige Aufgabe, ihm zu helfen.

Arbeiterkinder zu fördern, halten wir für nötig.

Einige Überlegungen zum "Generativen Mechanismus" für die Generierung der deutschen Sätze

Susumu ZAIMA

1 . Vorwort

Unter dem "Generativen Mechanismus" für die Generierung der deutschen Sätze verstehe ich ein Regelsystem, das die Generierung der deutschen Sätze syntaktisch und semantisch bestimmt. Ich nehme nämlich an, daß der Generierung der deutschen Sätze ein Regelsystem zugrunde liegt, das die Kombination der Satzkonstituenten syntaktisch und semantisch bestimmt(Siehe Zaima 1987a, 1987b).

Um diesen Mechanismus klar zu machen, analysiere ich gegenwärtig etwa 1300 wichtige deutsche Verben, die aufgrund verschiedener Wörterbücher statistisch gesammelt worden sind. Dabei werden vor allem die syntaktische Struktur, das Reflexivpronomen und die Präfixe vom semantischen Standpunkt aus in Betracht gezogen, weil diese drei Faktoren in der semantischen Variierung der "Verbbedeutung" eine wichtige Rolle spielen. Durch die Analyse der semantischen Variation der "Verbbedeutung", so hoffe ich, kann wenigstens ein Teil des Generativen Mechanismus für die Generierung der deutschen Sätze effektiv klargemacht werden.

In diesem Referat stelle ich dar,

1. welche Erscheinung mich jetzt am meisten beschäftigt
2. welche Erscheinungen ich als weitere Schritte zu untersuchen vorhabe.

Das Ziel dieses Referats liegt vor allem darin, die Richtungen bzw. Umriss meiner Untersuchung vorzulegen, um meine zukünftigen Arbeiten sicherer und fruchtbarer zu machen. Außerdem muß ich im voraus um Ihr Verständnis dafür bitten, daß hier verschiedene Termini noch nicht genau definiert sind.

2 . Untersuchungsgegenstände

Erstens möchte ich die Erscheinung, die mich im Moment am meisten beschäftigt, darstellen. Der Hinweis darauf, daß die Konstruierung der Satzbedeutung durch bestimmte Regeln durchgeführt wird, ist gar nicht neu. Die grammatischen Regeln wie z.B. Attribuierung, Passivierung sind jedem bekannt.

Aber das Regelsystem im Deutschen, nach dem die Satzbedeutung generiert wird, ist viel komplizierter, als man sich denkt. Die Konstruierung der

Satzbedeutung wird z.B. nicht nur aufgrund morphologisch expliziter Einheiten durchgeführt. Bei der Konstruierung der Satzbedeutung spielt die Wechselbeziehung zwischen verschiedenen morpho-syntaktischen Konstituenten eine wichtige Rolle. Die Satzbedeutung wird teilweise dadurch gebildet, daß die Satzkonstituenten nicht nur miteinander verbunden werden, sondern auch aufeinander einwirken und dadurch neue morphologisch nicht explizite semantische Einheiten generieren. Ich führe einige konkrete Beispiele auf.

In folgenden Satzpaaren haben die a-Sätze keine Richtungsangabe, die b-Sätze sind dagegen mit einer Richtungsangabe kombiniert.

- (1) a. Das Meer braust. [GESCHEHNIS]
b. Das Auto ist durch die Stadt gebraust.
[FORTBEWEGUNG]
- (2) a. Der Wind saust. [GESCHEHNIS]
b. Das Auto ist um die Ecke gesaut.
[FORTBEWEGUNG] (TABATA, 1987)

Diese Sätze haben verschiedene Bedeutung je nach dem Vorhandensein bzw. Nicht-Vorhandensein einer Richtungsangabe.

Die a-Sätze ohne Richtungsangabe bedeuten ein Geschehnis, und die b-Sätze mit einer Richtungsangabe eine Fortbewegung. Dieser Unterschied widerspiegelt sich im Hilfsverb beim Perfekt.

Wichtig ist aber dabei, daß die Bedeutung der a-Sätze, wie in (3) dargestellt, als Artangabe in der Bedeutung des b-Satzes enthalten ist.

- (3) a: Bedeutung des a-Satzes : BRAUSEN/SAUSEN
b: Bedeutung des b-Satzes : BRAUSEN-d/SAUSEN-d
SICH FORTBEWEGEN

Aufgrund dieser und anderer Daten nehme ich an, daß das semantische Merkmal SICH FORTBEWEGEN in diesem Beispiel nicht von einem bestimmten Morphem zum Ausdruck gebracht wird, sondern durch die Wechselbeziehung zwischen der Richtungsangabe und der Verbbedeutung generiert wird.

Dieselbe Erscheinung zeigt auch das nächste Beispiel. Hier spielt aber statt der syntaktischen Struktur die menschliche "Ergänzungsfunktion" eine große Rolle. Einige Verben kommen z.B. nicht zusammen

mit dem Verb BEGINNEN vor, wenn sie nur eine einmalige Handlung bezeichnen. Wenn sie aber eine iterative Handlung bezeichnen, können sie zusammen mit dem Verb BEGINNEN vorkommen, wie KURIYAMA (1984) zeigt.

(4) a. *Er begann in der Ecke zu stehen. (einmalig)

b. Er begann in der Ecke zu stehen. (iterativ)

(5) a. *Er begann das Theater zu besuchen. (einmalig)

b. Er begann das Theater zu besuchen. (iterativ)

(KURIYAMA 1984)

In der Situation, wo die betreffende Handlung als iterative aufgefaßt wird, können diese Verben mit dem Verb BEGINNEN verbunden werden, obwohl diese Kombination sonst nicht akzeptabel ist. Diese Veränderung der Akzeptabilität bedeutet m.E., daß im Fall der iterativen Auffassung ein semantisches Merkmal entsteht, das das im zu-Infinitiv stehende Verb regiert und die Kombination mit dem Verb BEGINNEN ermöglicht. Wenn dieses Merkmal mit dem Zeichen ▲ bezeichnet wird, kann die semantische Struktur z.B. des Satzes (3b) wie folgt charakterisiert:

(6) BEGINNEN (▲ ((i.E.stehen) , (i.E.stehen) , ...))

Dieses Merkmal, das über dem im zu-Infinitiv bezeichneten Verb steht und die Kombination mit dem Verb BEGINNEN erlaubt, ist selbstverständlich morphologisch nicht realisiert, sondern wird von einer menschlichen "Ergänzungsfunktion" in die Satzbedeutung hineingezogen.

Wenn man den generativen Mechanismus für die Satzbedeutung klar machen will, muß man unbedingt nicht nur die semantisch wohlgeformte Kombination der morphologisch realisierten Einheiten, sondern die Generierung semantischer Einheiten durch Wechselwirkung von verschiedenen Mitteln in die Untersuchung ziehen. Welche semantischen Merkmale von welcher generativen Regel ohne entsprechende morphologische Formen generiert werden, ist meine jetzige wichtigste Fragestellung.

Zum zweiten Punkt. Ich möchte darstellen, welche Erscheinungen ich als weitere Schritte zu untersuchen vorhabe. Hier erwähne ich zwei Erscheinungen.

3 . Kombinationen von semantischen Einheiten

Die eine Erscheinung, die ich als nächstes Problem untersuchen möchte, bezieht sich auf die Kombination der semantischen Einheiten. Einige semantische Einheiten setzen nämlich voraus, daß andere semantische Einheiten in der betreffenden Situation als bereits festgelegte Information identifiziert sind. Ich führe einige konkrete Beispiele auf.

Z.B. erscheint im transitiven Satz mit Dativ commodi das Akkusativobjekt mit einem bestimmten Artikel (WEGENER 1985, HORASAWA 1987) .

- (7) a. Er repariert ihr das Auto.
b.?Er repariert ihr ein Auto. (unspezifisch)
- (8) a. Sie stopft ihm den Pullover.
b.?Sie stopft ihm einen Pullover. (unspezifisch)

Der Grund dafür, daß im Satz mit Dativ commodi das Akku-sativobjekt mit einem bestimmten Artikel, als definit (bzw. wenn es mit einem unbestimmte Artikel vorkommt, dann mindestens als spezifisch) vorkommt, wird von Wegner (S.95) mit folgenden Worten erklärt:

- (9) Wenn man jemandem etwas verbessert oder verschlechtert..., so handelt es sich erfahrungsgemäß ... um einen bestimmten Gegenstand ..

Wenn man behaupten will, daß irgendein Sachverhalt für eine bestimmte Person einen Vorteil bzw. Nachteil hat, wird naturgemäß vorausgesetzt, daß der betreffende Sachverhalt in der Situation als bereits festgelegte Information vom Sprecher identifiziert ist. Im anderen Falle, wo es sich um einen nicht identifizierbaren Sachverhalt handelt, ist es nicht möglich, den Vorteil bzw. Nachteil festzustellen, den der betreffende Sachverhalt für eine bestimmte Person haben kann.

Wenn also Dativ commodi gebraucht wird, bedeutet es als logische Schlußfolgerung, daß der betreffende Sachverhalt und gleichzeitig das Akkusativobjekt als bekannt (bzw. spezifisch) vom Sprecher identifiziert ist. Deshalb erscheint das Akkusativobjekt im Satz mit Dativ commodi von einem bestimmten Artikel begleitet.

Hingewiesen wird auch darauf, daß bestimmte Adverbialen zum Gegenstand der partiellen Negation gemacht werden können -- (10)(11), aber im Fall der Satznegation nicht gebraucht wird -- (12)(13).

(HELBIG/BUSCHA 1977)

(A) Subjektive Zeitangabe

- (10) a. Er kommt nicht bald.
b.*Er kommt bald nicht.
- (11) a. Er ist nicht zeitig aufgestanden.
b.*Er ist zeitig nicht aufgestanden.

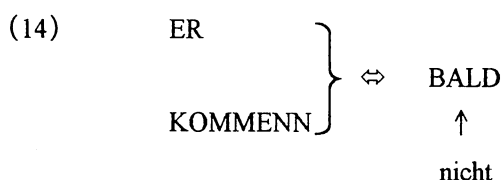
(B) Artangabe

- (12) a. Er las nicht mit guter Aussprache.
b.*Er las mit guter Aussprache nicht.

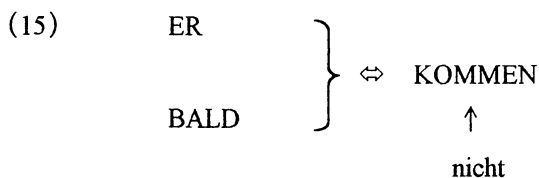
- (13) a. Er las nicht richtig.
 b. *Er las richtig nicht.

Die Erscheinung, daß diese Adverbialen nur dann gebraucht werden, wenn sie selbst negiert werden, aber nicht, wenn andere Satzkonstituenten negiert werden, kann folgendermaßen erklärt werden.

Die a-Sätze wie z.B. (12a) stellt eine semantische Struktur dar, in der zuerst das Subjekt und die Handlung als Basis der Äußerung festgelegt werden und dann nach dem subjektiven Urteil des Sprechers eine mögliche Zeitangabe zum Sachverhalt, nämlich BALD negiert wird. Diese semantische Struktur wird wie (14) grob schematisiert.



Die b-Sätze wie z.B. (12b) stellt eine semantische Struktur dar, in der das Subjekt und die subjektive Zeitangabe BALD zuerst als Basis (Topic) der Äußerung festgelegt werden und dann nach der Vermutung des Sprechers eine mögliche Handlung des Subjekts, nämlich KOMMEN negiert wird. Diese semantische Struktur wird wie (15) grob schematisiert.



Die Zeitangabe wie BALD wird gebraucht nach dem subjektiven Urteil des Sprechers in bezug auf den zeitlichen Aspekt eines Sachverhalts. Das bedeutet, daß diese Adverbien keinen objektiv festen Zeitpunkt bezeichnen. Es kann also z.B. sowohl "zwei Minuten" als auch "zwei Tage" "bald" sein. Sogar "zwei Jahre" kann "bald" sein. Wenn also der betreffende Sachverhalt vom Sprecher nicht identifiziert ist, ist es nicht möglich, die Zeitangabe wie BALD zu gebrauchen.

M.a.W.: Wenn man nämlich nicht weiß, um welchen Sachverhalt es sich dabei handelt, kann man nicht entscheiden, ob irgendein Geschehnis "bald" ist oder nicht. Nur wenn der betreffende Sachverhalt vom Sprecher identifiziert ist, kann diese Angabe gebraucht werden.

Da in der semantischen Struktur wie (17) das Adverb BALD --- anders als in (16) --- in die Basis der Äußerung eingegliedert ist und dieses Vorgehen als Konstruktion eines Sachverhalts nicht angemessen

ist, wird der entsprechende Satz als unakzeptabel betrachtet.

Wie oben dargestellt, setzen einige semantische Einheiten bei ihrer Kombination mit anderen Konstituenten die Identifizierbarkeit von anderen semantischen Einheiten voraus. Wenn der generative Regelmechanismus aufgeklärt werden soll, muß man auch solche Kombinationsregeln aufklären.

4 . Bedingungen der Akzeptabilität von Ausdrucksformen

Zum letzten Punkt. Das bezieht sich auf die Bedingungen, die die Akzeptabilität der Sätze bestimmen. Wenn man aufgrund einer Regel Sätze bilden will, kommen auch unakzeptable Sätze vor, obwohl andere mit derselben Regel gebildete akzeptabel sind.

Dieses Problem kann wohl auf verschiedene Weise gelöst werden. Die Verfeinerung der einzelnen Regeln ist auch eine Möglichkeit.

Einige Erscheinungen deuten aber, daß man auf alle Fälle allgemeingültige Bedingungen zur Bestimmung der Akzeptabilität von mit Regeln gebildeten Sätzen aufstellen muß.

Als solche Bedingungen nehme ich jetzt zwei folgende an.

Die eine Bedingung ist, daß eine Ausdrucksform fähig sein müsse, einen Sachverhalt bilden zu können, der aus Topic und Comment besteht, wenn sie akzeptabel sein will. Sehen wir ein konkretes Beispiel.

Das unpersönliche Passiv kann z.B. nicht bei den Fortbewegungsverben gebildet werden. Aber wenn die passivischen Formen mit einer Artangabe --- (16)(17) --- und als Verbot --- (18)(19) --- bzw. als Befehl --- (20)(21)(22) --- gebraucht werden, werden sie akzeptabel.

(IGUTI 1985)

- (16) a. *Nach London wird geflogen.
b. Nach London wird nur einmal am Tage geflogen.
- (17) a. *Jetzt wird nach Norden gegangen.
b. Damals wurde nach München zu Fuß gegangen.
- (18) a. *Auf den Rasen wird gegangen.
b. Auf den Rasen darf nicht gegangen werden.
- (19) a. *Im Korridor wird gelaufen.
b. Im Korridor darf nicht gelaufen werden.
- (20) Ins Dorf wird gegangen !
- (21) Diesmal wird mit dem Schnellzug gefahren !
- (22) Im Korridor wird nicht gelaufen !

Hier handelt es sich um die Frage, warum die eigentlich nicht akzeptablen passivischen Sätze von oben durch die Hinzufügung von Artangaben bzw. als Befehlsatz akzeptabel werden. Das kann wohl wie folgt erklärt werden:

Die passivischen Formen mit Fortbewegungsverben können alleine keinen Sachverhalt bilden, der aus Topic und Comment besteht, weil diese Formen ohne weitere Informationen das betreffende Geschehnis nur als einen Begriff bezeichnen. Wenn es sich nur um ein einfaches Geschehnis handelt, braucht keine passivische Form gebildet zu werden.

Durch das Hinzufügen einer Artangabe wird es aber möglich, einen Sachverhalt mit Topic und Comment zu bilden, der in einer passivischen Form angemessen zum Ausdruck gebracht werden kann. Die beiden semantischen Strukturen von z.B. (16) können wie (23) schematisiert werden:

(23)	Topic	Comment

a.	[n.L.f.]	— ϕ
b.	[n.L.f.]	— nur einmal am Tage

Ich nehme also an, daß die Ausdruckformen nicht akzeptabel sind, wenn sie nicht fähig sind, einen Sachverhalt mit Topic und Comment zu bilden, und umgekehrt, daß die Ausdrucksformen grundsätzlich akzeptabel sind, wenn sie fähig sind, einen Sachverhalt mit Topic und Comment zu bilden.

Das ähnliche Prinzip gilt auch für den absoluten Gebrauch --- (24)(25) --- bzw. die Intransitivierung der transitiven Verben --- (26)(27).

(A) Absoluter Gebrauch

(24) a. Er reibt den Tisch.

b. Du mußt kräftig reiben.

(25) a. Er schiebt den Kinderwagen.

b. Du mußt kräftiger schieben.

(B) Intransitivierung

(26) a. Er beschleunigt das Auto.

b. Das Auto beschleunigt gut.

(27) a. Er saugt den Teppich.

b. Der Staubsauger saugt gut.

In diesen Fällen wird das Akkusativobjekt bzw. das Subjekt getilgt, indem eine Artangabe hinzugefügt wird.

Ich nehme an, daß eine solche syntakto-semantische Umformung möglich ist, weil durch die Hinzufügung einer Artangabe --- in einer anderen Form ohne Objekt bzw. Subjekt --- das Bestehen eines Sachverhalts mit Topic (Handlung) und Comment (Artangabe) garantiert wird. Die semantischen Strukturen von (24b) und (26b) werden wie in (28) schematisiert.

(28)	Topic	Comment

(24b):	[du ϕ reiben]	— muß kräftig sein
(26b):	[d. A. besch.]	— gut sein

Diese Beispiele zeigen m.E. daß die syntakto-semantische Umformung nur dann akzeptable Sätze produziert, wenn danach auch die semantische Struktur mit Topic und Comment bestehen kann, also m.a.W.: daß eine Ausdrucksform fähig sein müsse, einen Sachverhalt bilden zu können, der aus Topic und Comment besteht, wenn sie akzeptabel sein will.

Diese Bedingung scheint nicht nur für bestimmte Regeln im betreffenden Mechanismus, sondern in einer allgemeinen Form für den ganzen Mechanismus zu gelten.

Die zweite Bedingung ist, daß der Inhalt der Ausdrucksform einen entsprechenden Sachverhalt in der realen Welt haben muß, wenn sie akzeptabel sein will. Sehen wir ein konkretes Beispiel.

Die folgenden Sätze z.B. sind beide grammatisch wohlgeformt, aber der b-Satz klingt merkwürdig. (TUNEKAWA 1978)

- (29) a. Bei Müllers ist jemand krank.
b. ?Bei Müllers ist jemand gesund.

Dieser Unterschied beruht darauf, daß in der menschlichen Gesellschaft normalerweise eine Person gesund ist.

Da die Information, daß jemand gesund ist, als Gerücht keinen Wert hat, klingt der Satz (29b) merkwürdig.

Dasselbe kann nach der Untersuchung von FUJINAWA (1987) in bezug auf die reflexivischen Ausdrücke transitiver Verben festgestellt werden, in denen das eigentliche Objekt zum Subjekt wird.

In bezug auf diese Ausdruckformen können z.B. folgende Beispielpaare

festgestellt werden.

- (30) a. Die Haut auf dem Rücken schält sich.
 - b. *Diese Mandarinen schälen sich.
 - c. Diese Mandarinen schälen sich leicht.
- (31) a. Ihre Haare spalten sich in den Spitzen.
 - b. *Dieses Holz spaltet sich.
 - c. Dieses Holz spaltet sich leicht.
- (32) a. Der Teppich hat sich verschoben.
 - b. *Der Schrank verschiebt sich.
 - c. Der Schrank läßt sich verschieben.

Die reflexivische Ausdruckform eines transitiven Verbs ohne Artangabe bezeichnet ein Naturphänomen, das ohne menschliche Beteiligung entsteht. Die a-Sätze bezeichnen alle ein solches Ereignis, und deswegen sind sie akzeptabel.

Die Ereignisse, die durch die b-Sätze zum Ausdruck gebracht werden könnten, sind diejenigen, die nur durch menschliche Beteiligung entstehen und normalerweise nicht als Naturphänomen vorkommen. Die Unakzeptabilität der b-Sätze beruht also darauf, daß ihr Inhalt in der realen Welt nicht als Naturphänomen vorhanden ist.

Diese Beispiele zeigen m.E., daß die Akzeptabilität der Sätze dadurch bestimmt wird, ob der durch sie auszudrückende Sachverhalt in der realen Welt einen entsprechenden haben kann oder nicht.

Diese Bedingung scheint auch nicht nur für bestimmte Regeln im generativen Mechanismus, sondern in einer allgemeinen Form für den ganzen Mechanismus .

Ich habe dargestellt, daß die Ausdrucksformen, die mit Regeln gebildet werden, folgende zwei Bedingungen erfüllen müssen, um akzeptabel zu sein:

1. daß eine Ausdrucksform fähig sein müsse, einen Sachverhalt bilden zu können, der aus Topic und Comment besteht,
2. daß der Sachverhalt, der durch die betreffende Ausdrucksform auszudrückend ist, auch in der realen Welt einen entsprechenden haben muß.

Während sich die zweite Bedingung eher auf außersprachliche Faktoren bezieht, ist die zweite Bedingung innersprachlich. Die Frage, welche Bedingungen eine Ausdruckform erfüllt, um akzeptabel zu sein, soll noch ausführlicher untersucht werden.

Zuerst ich dargestellt, welche Erscheinung mich jetzt hauptsächlich interessiert und danach, welche Erscheinungen ich als nächste Schritte zu untersuchen vorhabe. Ich danke Ihnen für Ihre freundliche

Geduld.

Literatur

Fujinawa, M.(1987): (noch nicht veröffentlicht)

Horasawa, S.(1987): (noch nicht veröffentlicht)

Iguti, E. (1984): Über das unpersönlich Passiv, in: Der Keim Nr. 8,
Tokyo

Kuriyama, F.(1984): Die Verben, die sich mit BEGINNEN verbinden, in: Der
Keim Nr. 8, Tokyo

Nagaoka, A. (1985): Über das Präfix mit- , in: Der Keim Nr.9, Tokyo

Tabata, Y.(1987): (noch nicht veröffentlicht)

Wegener, H. (1985): Der Dativ im heutigen Deutsch, Tübingen

Zaima, S. (1987a): "Verbbedeutung" und syntaktische Struktur, in: Die Deutsche Sprache, Heft 1,
Mannheim

--- (1987b): Eine Richtung der Erforschung der deutschen Sprache, in: Doitu Bungaku,
Nr. 79, Tokyo

(01.09.1987 Linguistenseminar)

「文型」理論と統辞分析

渡 瀬 嘉 朗

I. 「文型」とは何か？

I(1)(a) 「文型」については、いろいろと考えてみたいことがあるが、その最たる問題は、言語分析に「文型」がどんな風に役立つか、という問題であろう。言語分析の過程の中で、どうしても「文型」に登場してもらわなくては先に進めないという箇所は恐らくない。だが、何処かで、「文型」を立てることを考えて見ることによって、それを言語分析のチェックポイントとして役立たせることが出来るに違いない。また、周知のように「文型」は外国語教育 -- 主として英語教育である -- で盛んに利用されて来たが、英語という個別言語を離れて、他のさまざまな言語に「文型」概念を適用するには何が大切であろうか。この問いは結局、「文型」とは何かということを、再確認しようとするところに行き着くであろう。というのは、一方また「文型」とは、よくわかったようでいてわからない概念でもあるからだ。

「文型」とは何か。「文型」の理念はどういうものとして捉えるべきものか。そもそも、一言語の統辞資料が与えられたときに、「文型」をそこから引き出す、必要にして充分な理論的根底は何か。そういったことが、必ずしもそれほど明らかでない。そして、その辺りが明らかになるならば、文型を考えることを言語分析の必要なチェックポイントにしようという最初の発想も、まんざら捨てたものではなくなってくる。

I(1)(b) 勿論それだけではなく、「文型」概念は最終的には、それぞれの言語の学習 -- 学校教育における外国語教育の枠組みの中での学習 -- に役立つものでなくてはならないだろう。その点は疑いがない。けれども「文型」概念が本当の意味でその言語の教育に役立つためには、その言語のしっかりした統辞資料の積み重ねの上に立つものでなくてはならない筈である。そうなると、教育において有用な概念である前に、いやまさしく、それが教育において有用な概念であるためにも、「文型」概念は統辞分析の中で、はっきりした自律的な根拠をもつものでなくてはならない。

そうなると「文型」は、それぞれの言語の中で、-- それぞれの言語のしっかりした統辞資料の中で、-- これは一つの「文型」である、これは「文型」とはいえない、という明確な根拠をもつものでなくてはならない。それが、統辞分析の中で、はっきりした自律的な根拠をもつ、ということであろう。

I(2)(a) その場合、当然、さまざまな「文型」の中で先ず最小文の「文型」、つまりミニマルな「文型」が、先ず問題になるであろう。ミニマルな「文型」とは、その「文型」を整えてさえいれば話者の意図がそれによって十分に相手に伝わるかどうかを問う前に、少なくとも文としては成立していると認められる形式 -- 最小の文の形式 -- である。

話を無用に混乱させないためには、一定の文脈を受けて現れる省略文の形式は別個に扱うのがよいであろう。例えば *Quand partez-vous pour la France?* 「いつフランスにお出かけですか?」という問い掛け(文脈)があるとき、この文脈では返答の中で当然予想される部分 *je pars pour la France* 「私はフランスへでかける」を省略して(当然予想される部分は情報ゼロであるからこの扱いはけだし当然である)、例えば *A la fin de la semaine.* 「この週末に」のような返答(文)が可能であるが、これは *je pars pour la France* 「私はフランスへでかける」を情報ゼロにしてしまうような文脈が与えられているからである。このように一定の文脈を受けて現れる省略文の形式は別個に扱うのが筋道である。

I(2)(b) そのような文脈のないところで文として成立する最小の形式が、ここで言う<ミニマルな「文型」>である。先ずそれぞれの言語の中で、そのようなミニマルな「文型」が立てられなくてはならない。

こうしてフランス語では先ず<主辞+(動詞)述辞>のような最小の形式が抽出されるであろう。それに加えて幾つかの一般的な名詞文の形式(*il y a* + 名詞、*c'est* + 名詞(形容詞)、その他 *être* のような *copule* に支えられた名詞、形容詞を核とする文: *il est gentil.* など)が出てくるだろう。

I(2)(c) このようなミニマルな「文型」を核として話者は、自らの思いを相手に伝え伝達の必要と満たすために、さまざまな情報を補う。例えば *vite* 「すばやく」という副詞は動詞が何であろうと結合に特別な差し支えがない(*Il court vite.* 「彼ははやく走る」 *Vite il écrit la lettre.* 「たちまち彼はその手紙を書く」)。このような情報は結合に際して、核との間に統辞的な制約を持たない。しかし *Je lui demande la permission.* 「私は彼に許可を求める」の間接目的辞 *lui* や直接目的辞 *la permission* には形式的に結合に制約があって、どの動詞とでも結合できる訳ではない。このような情報は結合に際して、核との間に厳密な統辞的な制約をもっている。このように、核との間に厳密な統辞的な制約をもっている拡大を、ここでは<核が主導>する拡大の形式と呼んでおこう。

I(2)(d) 例えば前置詞＋名詞は、時には vite 「すばやく」のように、結合の核との間に統辞的な制約を持たない：Il voit un garçon de sa fenêtre. 「彼は窓から一人の少年を見る」。しかし、時には上で見た間接目的辞 lui や直接目的辞 la permission のように、核との間に厳密な統辞的な制約をもっているものもある：Il se débarrasse d'un fardeau 「彼は重荷をおろす」。すなわち、前置詞＋名詞には、ここで呼ぶところの（特別な）＜拡大形式＞を構成するものもあるし、構成しないものもある。その差は前置詞＋名詞がつくり出しているのではなく、もっぱら核となる動詞が如何なる前置詞を要求するか、という事実により決せられる。

I(2)(e) 以上で若干の例を通じて見たように、文をつくるとき話者は何らかの最小文の「文型」を核として選び、それにさまざまな情報を更に補うのが普通である。この補い方には、統辞的な制約がない場合もあれば、一定の形式に従い核との間に設けられた制約を満たさなくてはならない場合もある。後者の場合、この形式は先刻の＜ミニマルな「文型」＞を基礎的な土台として、それを補うミニマルなく拡大の形式＞と考えるのもよいであろう。ミニマルなく拡大の形式＞とは、先程のミニマルな「文型」の場合にならえば次のように規定できる：「その＜拡大の形式＞を整えてさえいれば、話者の意図がそれによって十分に相手に伝わるかどうかを問う前に、少なくとも＜拡大の形式＞としては成立していると認められる形式 -- 最小の形式 -- である」。

当然のことであるが、このような＜拡大の形式＞さえ満たせば (d'un fardeau)、話者はその拡大にさまざまな語句を更に自由に補うことができる (du grand fardeau qui le pèse.)。

I(3)(a) さて、我々は「文型」をどのように理解すべきか、という疑問から出発して、仮に「文型」概念が言語教育の領域で先ず役立たなくてはならない概念であるとしても、本当の意味でそれが言語教育に役立つためには、その言語のしっかりした統辞資料の積み重ねの上に立つものでなくてはならない筈である、と考えた。「文型」概念はその意味で、統辞分析の中でははっきりした自律的な根拠をもつものでなくてはならないだろう。そう考えた時に初めて、一言語の統辞資料を前にして「文型」をそこから引き出す、必要にして十分な根拠は何かと、問うことができる。「文型」概念が統辞分析の中で、はっきりした自律的な根拠をもつということは、一つ一つの「文型」が文構造の幾つかを図式化したものという以上に、それぞれの言語のしっかりした統辞資料の中で「これは厳密な意味における一つの「文型」である」「これは厳密な意味における「文型」とはいえない」という判断を下す事の出来る、明確な根拠をもつものでなくてはならない。統辞分析の中で、はっ

きりした自律的な根拠をもつ、というのはそういうことである。

そのような「文型」の基本的な要素として我々が以上で取り出したのは二つの要素である。一つは、それぞれの言語に存在する最小文の形式である（＜ミニマルな「文型」＞）。次に、そのようなミニマルな「文型」を拡大するために、それぞれの核（動詞述辞）が許容する形式 -- そしてその中で最小のもの -- である。それを、ミニマルなく拡大の形式＞と呼んだ。

ミニマルな「文型」と、ミニマルなく拡大の形式＞とは、先程、＜核が主導＞する拡大の形式と呼んだものを、「文型」のレベルで展開したものである。

I(3)(b) 以上の概観で述べてきたところから文型分析が言語分析のどの部分と相関するか想定してみると、ほぼ、次のようにいえるであろう。文型分析は、おそらく、核のヴァランスを表現する形式のひとつとして意味を持つが、加えて、核の周囲の、サテリット要素をふくめた総合的な表現形式として便利である。確かに核のヴァランスを表現するには様々なやり方がある。文型分析が核のヴァランスを表現する形式に留まるならば、それらの表現の一つにすぎない。文型分析が、表現形式としてすぐれる点があるとすれば、サテリットをふくめた表現であるという点だろう。この点については、二章でもう一度詳しく見たい。

I(3)(c) 文型分析と態、非人称形式、等。

話者が文をつくっていく過程を一貫してとらえてみると、そこには必ず態、非人称形式、等が介入してくる段階がある。これまで我々が考えてきたのは＜核が主導＞する拡大の形式であった。この段階では文型分析は動詞とその周囲の補足辞との間の関係を基礎に行われる。だから動詞に態、非人称、等が加わって生まれる文型は、いわば基本的な文型ではなく、基本的な文型が利用され、それが二次的三次的に変化したものだと考えられるであろう。これらの二次的三次的変容（文型の変容）は、また次の段階で、文型の問題として考えることになるだろう。

I(4)(a) しばしば言語表現を解析するのにミクロの立場とマクロの立場があるかのような議論を耳にする。もし、それが事実なら、「文型」分析は言語の統辞組織の＜マクロな様相＞を扱い、それにたいして統辞組織の＜ミクロな様相＞を扱うことになるだろうか。

だが、この問題に入る前に、使用者の立場からはマクロの様相もミクロの様相もないことを明確にしておく必要がある。おそらくこのような議論が出てくるのは、言語を観察する者（「観察者」）が、厳密にその問題の言語の「使用者」の立場と同化するのか、それとも「使用者」を越えた立場（専門

家の立場)をとるのか、この点が議論されずに済まされているからであろう。

I(4)(b) たしかに、もしも、「使用者」の立場とは異なる、独自の「観察者」の立場を認めるとすれば、文の構成に関するマクロな様相とミクロな様相は異なった別のものとなる。しかし「使用者」の立場から言えば、マクロな様相もミクロな様相も、結局、同じ事実を異なった視点から見たものであって、その元にあるものが同一の事実であることは、どうしても覆すことができないであろう。

いわゆる文型の指示で、<SV, SVC, SVO, SVOO>の形で示されるものはいずれも、V(動詞述部)の統辞的 implication を形であらわしたものにすぎない。それを潜在的可能性として示しただけでは大変わかりにくいので、動詞述部の統辞的 implication が行き着く、最終的な文構成の形でそれを示したものである。このことでわかる通り、マクロの指示であろうとミクロの指示であろうと、最終的に行き着くところは全く同じである。使用者が使い分けて、別のところに行き着く訳ではない。話者が選択する同じ図式を、どのようにあらわすか、何処に焦点を当ててあらわすかの違いにすぎない。実現されるものは全く同じである。

I(4)(c) 言語事実は話者の言語行動の中にしかない。だとれば、「使用者」の立場とは異なる、独自の「観察者」の立場を認めること自体が大きな矛盾であろう。

観察者の視点から言えば、ミクロの視点、マクロの視点は異なるが、両方の視点を介して観察されているものは、まさに一つの実事、すなわち文を構成する使用者の動きであり、使用者が従っている同じ拘束である。一つの文型を操ることは、言い換えればそれに当てはまる述辞を選び、その述辞が使用者に許す範囲の結合形式の中から、問題の文型に当てはまる結合形式を選ぶ、ということに他ならない。

II. 統辞機能：核が主導するもの、しないもの

II(1)(a) ここでは、統辞分析の中で「文型」を考えて見ることにして、ではその「文型」が取り上げなくてはならぬ統辞特性が、こういったものでなくてはならないかを詳しくみよう。

文の中では核の周りの周辺要素のすべてが、積極的に核に誘導されているものも、そうでないものも、その文脈の中で選択が許される統辞的關係(つなぎ) -- *implicite ou explicite* -- を核の方へさしのべている。このレベルでその統辞的關係のすべてを集約しても文型は得られない。それでは発散

するのみで、その中に含まれている特異な統辞的關係を見分けなくては、文型を得ることはできない。

では如何なる統辞的關係をもって、とり上げるべき特異な統辞的關係と見做すか。

核の種類が核の周りに生じる統辞關係を変えるのである。だとすれば核の周りに生まれる、核に向けられた統辞的關係のコングロメラションを追跡するには、核の側からの主導 -- 統辞的働き掛け、あるいは受け止め方の習性 -- を見なければならぬ。選ばれる核（動詞述部）の種類によって、述部に対する拡大に統辞的制約が生じるのだから、核との關係においてそこに生じる統辞的制約を考えるのが筋道であろう。

核の側からの主導によって成立する統辞關係、このように規定するだけで、既に、機能辞による統辞的關係だけがそこに残ることになる。いいかえると機能辞によらない統辞的關係、副詞のような限定辞（みずから限定のためのみの最小限の統辞的關係を含んでいるが、そこで統辞的關係を選択する余地がないもの）が核の方にさしのべる關係は排除される。このような關係を排除する理由は、何か？

II(1)(b) 一番単純な答えは次の通りである：もし、核の周辺の要素が核に差し向ける關係がすべて、そして常に、そのような一元的な -- 話者が選択する余地のない關係を「一元的な關係」と名付けて置く -- 關係ばかりであったら、核の周りに生じる統辞的關係のコングロメラションは常に同じ顔をもったかたまりであろう。これは言語事実とは合致しない。人間の言語においては統辞核の周りの多くの周辺項が、さまざまな異なった統辞機能と結合でき、異なった統辞機能と結合するたびに核と異なった關係を結ぶ。そこから、周知の巨大な経済性が生まれる。何故なら同じ周辺項（「太郎」）と核（「書く」）は、準備された機能辞の数だけ事態を区別して切り取ることができるからである：「太郎が書く」「太郎を書く」「太郎と書く」「太郎へ書く」。しかも、機能辞は周辺項を選ばず、どの周辺項とも使用可能である。

話者が選択する余地のない＜一元的な關係＞をこうして排除すれば、残った統辞關係はすべて、話者の選択を反映している。言語的建築はこのようにして必ず、その主要な部分においては、核と周辺項と、その間をつなぐ機能辞（あるいはそれに代わる語順）から出来ている。

II(1)(c) 問題はそのすべてを一手に取り仕切る核の働きであろう。

もし、核の許す統辞關係に限りがなく、話者が、最後の瞬間まで自分の意のままに機能辞を選び周辺項を選んでよいとすると、文の中をラブレール風の巨大な自由が支配し、情報の渦巻きが出現するだろう。聞き手は一点に集中

したありとあらゆる関係の流れを、どうとりまとめたらいだろうか。もし、核がそのように文中に話者が自由にそそぎ込む機能辞の関係情報を鷹揚に受け取るだけの〈透明な点〉のようなものであったら、どの核にも、独自の意味というものが全くないことになる筈だ。そうなれば、核はもう、どれをとってもすべて同じであって、それ自身が事態に対する独自の切り取りをすることもなくなる。だがそうなったとき、文とは一体何だろうか。話者が核を選び、その核が事態を、独自のやり方で切り取るときに、初めてそこに、その文の小さな顔が浮かび出るのではないか。だがそうすると、核には初めから個性的な顔があるのである。核にそのように個性的な情報が刷り込まれているとすれば、当然その核が主として受け取りつなぎ合わせる情報の種類には限りがある。その他は、ちょうど核が無色の透明の点であるかのように受け入れる情報のながれとなる。だが、それぞれの核には主として受け取りつなぎ合わせる情報の種類に幅が設けられているから、もう話者は、その他の情報に関しても核の顔に合わせて選ぶしか方法がないだろう。

II(1)(d) 先程、話者が選択する余地のない〈一元的な関係〉を排除した後、残った統辞関係はすべて、話者の選択を反映していると述べた。そして、言語的建築はこのように必ず、その主要な部分においては、核と周辺項と、その間をつなぐ機能辞（あるいはそれに代わる語順）から出来ている、と述べた。文を構成する要素は -- 〈一元的な関係〉も含めて -- 自由な話者の選択を反映していなくてはならない。たしかに、核には小さな顔がある。しかし話者は事態を前にしてその顔を選ぶのである。それが文のために話者のする、最も基本的な選択である。その後は、話者は核の許す範囲の機能を選び、選んだ機能によって文の核に結び付けられる周辺項を選ぶ。主辞に関してはその限りではなく、話者が核として動詞述部を選んだとき、同時に必ず使用しなくてはならない統辞関係として主辞機能に出会う。核の意義構造の中で、主辞機能を支える意義特性は最も濃く核の中に刷り込まれていると考えられる。たしかに話者は主辞機能については改めて、それを使用するかしないか選択をしない。だが、話者がその核を選んだ時に、まさにその主辞機能を、核の意義構造の最も主要な一部として話者は選択しているのである。

II(1)(e) 先に、文型を得るためには、核の周りに生まれる統辞的關係のコングロメレーションの中で、「特異な統辞的關係」を見分けなくてはならず、また何を以て「特異な統辞的關係」とするかについては、核の側からの〈主導〉 -- 統辞的働き掛け、あるいは受け止め方の習性 -- を見なければならない、と述べた (cf. § (1)(a))。

〈核の主導する統辞機能〉 -- これはマルティネが *fonction spécifique* と名付けて整理したものとはほぼ重なるが、一部分、重ならない

部分ももつ（たとえばマルティネは主辞機能を *fonction spécifique* に含めない）。筆者は、核が主導する統辞機能を、ほぼ以上述べたようなかたちで理解しており、この概念が操作概念として使いやすいものであるかどうかについては、やや疑問があるものの、言語の理解を進めて行く上で、この概念をもう少し深めてみたいと考えているので、ここでは問題を＜核主導の統辞機能＞という角度から眺めていくことにする。

さて前章において、文型処理（分析）は核のヴァランスを表現する形式のひとつとして便利ではないか、特に核のヴァランスを、周囲の、核に特有のサテリット要素 -- 核に主導された統辞機能をもつ周辺要素 -- を含めて、総合的に表現する形式として便利ではないか、と考えた。もし文型分析が必然的に、以上見てきたように＜核主導の統辞機能＞によって導かれるサテリットの抽出に向かい、それを表現するとすれば、文型分析は統辞分析にとっても大変興味深い表現形式である。

II(2)(a) こうして、核に特有の、統辞機能の受け止め方が登場する。そこから出てくる、核に支配され、核の周辺に形成される統辞機能のコングロメレーション。それを解析することが統辞分析の大きな課題の一つであることに疑いはないであろう。

最も単純なコングロメレーションは次のようなものである。自動詞一つを話者が選択することになったとき、逃れられない拘束として話者は主辞機能を使用する。ということは、主辞機能が導入する名詞の項を探し始めるということである。例えば *arrive(r)* 「到着する」という自動詞を軸に事態を切り取ろうと企てる話者は、次に必ずこの動詞の意味に導かれて、主辞機能を引き受ける名詞を探し始める。ここで、主辞機能を引き受ける名詞に話者が到達するのは、動詞の意味、つまり動詞の意義構造の中に刷り込まれた意義特性 -- この場合は主辞機能を支える意義特性 -- による、という点が大切である。話者は動詞の意義特性に誘われて、その意義特性に相応しい名詞の項 -- それは勿論代名詞でもよい -- を探し当てることになる。その結論が *Il arrive.* か *Taro arrive.* か、それともその他のかたちになるかはわからないが、とにかく *arrive* はそのように名詞的な項を伴って、おさまる形におさまることになる。この場合はこうして、核の周りには、ただ一つの統辞機能からなるコングロメレーションが現れる。

II(2)(b) では、次に示す二つの文型による統辞機能のコングロメレーションを見てみよう：

- (a) < V + O > + (prép. N) Il voit *de* sa fenêtre un garçon.
 (b) < V + O + prép. N > Il décharge un porteur *de* son fardeau.

「彼は窓から一人の少年を見る」

「彼はポーターから重い荷物を取り除いてやる」

(a) では「Y (窓) から X (一人の少年) を見る」ことが、

(b) では「Y (重い荷物) について、X (一人のポーター) をある状態にする」(ここではそれをとり除いてやる) ことが、話題になっている。

この二つの例では、目的辞機能については両者ともにそれをもっているが、*de* が担う機能については明らかに両者に違いがある。二つの意味内容にふれる前に、それぞれが核からの支配をどのように受けているかを考えてみよう。*décharger X de Y* から見るなら、この動詞の意味内容から言って *de* が周りに現れる確立は極めて高い。たしかに *décharger* には、重い荷物 (Y) だけを話題にする場合がある。その場合には「商品を降ろす、木材を降ろす」(*décharger des marchandises, du bois*) のように前置詞 *de* は現れない。更には *décharger des bagages(Y) de la voiture* 「車から荷物を降ろす」のように、「(荷物を) 運んでいる」参加者 -- この場合は車だが -- 「から」(*de*) 空間的に荷物を取り除く場合にも、動詞 *décharger* が用いられる場合がある。(この場合の *de* は上例 (b) の場合の *de* とは少し違う。共に、動詞 *décharger* に -- やや異なった程度に -- 支配されているが。)

しかし上例 (b) の *de* がこの動詞の周りに現れる確立は極めて高い。それはこの動詞が、<重荷を背負っている運搬者>を重荷から解放する場合に専ら使用されるからである。

それにくらべて (a) の *voir X de Y* の方は、動詞 *voir* の周りに *de* が現れる確立が格段に低い。

たしかに *voir* と *de ...* 「... から」の関係はたえず(頻繁に、規則的に)生じる関係とは言えないだろうが、しかし、何時生じてても不思議ではない関係ではある。というのは、「見る」以上は必ず「どこから」か見る訳であろうから、その事を時に話題にする必要が生じてても少しもおかしくないからである。それを言い換えれば、この関係が本来全く不当なものとはいえない関係、ある程度までは、動詞の意義構造の中に書き込まれた(刷り込まれた)関係であるということにもなろうか。たしかにまた、一般的に見て、*de* があらわす様々な関係(手段、道具、理由、等)は、事態が事態である限り -- 例えば「ペンで (*de*) 書く」「水で (*de*) 一杯にする」など -- それぞれに関係する手段、道具、理由、等がある筈であり、それが何時、話題

になっておかしくない、とは言えるのである。

けれどもそのような関わりは、問題の動詞があらわす特定の事態との特別の関わりではない。動詞を選ばずに何時でも生じ得る関わりである。voir と de ... の関係も、ほぼそのようなもの、つまり動詞を選ばずに生じる関係、コングロメラシオンの種類を規定しない関係、と考えておいてよいだろう。

もちろん、外国語教育の側の教育的見地からするなら、*décharger de* は *priver de* 「を奪う」、*prier de* 「を願う」などと並んで重要な語法であり、意味の見地を捨てて形の上から重要視すべきポイントであろう。筆者はそのことを充分承知の上で、核（動詞述部）のまわりに生じる統辞機能のコングロメラションが、その動詞のもつ、事態の切り取り方（当然それは形式処理の問題と表裏一体をなしている）に支配される点にまで遡って事柄を理解しようとしている。

II(2)(c) では、ここに、誰かが誰かの有り金を奪うという事態があるでしょう。

(a) 「XがY（太郎）からZ（金）を奪う」

(b) 「XがY（太郎）を欠乏状態にする、Z（金）に関して」

「Yを欠乏状態にする、Zに関して」は、奪われる物件（ここでは金）を直接の対象にせず、代わりに所有者（Y）を直接の対象にしている。周知のようにこのような捉え方は日本語には稀だが、フランス語の *priver*（英語の *deprive* も同様であろう）は何かを失うことになる「人物」または「もの」を対象にして、*priver Taro de tout son argent* 「太郎から持ちがね全部を奪う」のように用いる。

ちょっと注意しておきたいのは動詞の意味の切り取り方で、(a) の「奪う」ははげしくもぎ取ることをいう。(b) では、動詞の意味が、Z（物件、ここでは金）を取り去る（奪い去る）様態ではなく、所有者であるYが陥る状態の方を見ている。(a) が「奪う（激しく取る、取り去る）」のに対し(b) は「欠乏状態にする」ことに注目している。もちろん実際のことばの使用者は、「奪う」を用いながら所有者が窮乏する状態の方を見ているかもしれないし、*priver de* を用いる使用者は、強奪者の、有無を言わせぬやりかたを見ているかも知れない。そういう具体的な状況に支えられたことばの使用者のころもちではなく、ことばが事態を切り取る、切り取り方にしばし注目すると、ことばも様々な可能である筈の視点を、欲張って幾つも幾つも使っているわけではなく、意外と単純な視点から事態を切り取っているもので、むしろことばの使用者の方がそういう幾つも可能である視点

を自由に選んで、ことばに重ねて使っているものである。そしてそういう単純極まる、ことばが選んでいる視点からいうと、「奪う」（乱暴に取る）は強奪者の〈働き掛け〉のモデル、「欠乏状態にする」は〈実現される状態〉のモデルを選んでいる。〈働き掛け〉の方は空間行動であり、あるところから、あるところへ、行為は及ぶ。日本語の「から」（「太郎から」）は、こういう〈空間的軌跡の出発点〉をあらわしている。他方の、「欠乏状態にする」方は、もはや空間的軌跡の出発点ではなく、〈事態がかかわる問題の核心〉を指し示している。どうも、我々は機能辞（たとえば *de*）を何か具体的な状況または関係 -- たとえば *ablatif* -- に結び付けて解釈してしまう悪癖があるが、ことばは（誰か、また何かを）「欠乏状態にする」という切り取り方を始めるとき、そこに開く小さな穴、機能辞のギャップをたちまち、別の用途の機能辞を転用することで埋めてしまうのではなからうか。こうして〈事態がかかわる問題の核心〉を指す機能辞がたちまちそこに出現したに違いないのである。これは小さな奇跡（！）とでも呼びたいほどの早業であるが、ことばの織物は互いにつながっていて、ちいさなギャップが生じると、それは一種の構造の穴として力をもち、援軍を呼び寄せてたちまち埋められてしまうのであろう。

II(2)(d) こういうことは「奪う」「欠乏状態にする」だけに起きる訳ではない。（「を供給する」 *fournir X de* [=「についてXを満ち足りた状態にする」]「を頼む」 *prier X de* [=「についてXを頼る」] などを見よ。）こういうとき *de* は〈空間的軌跡の出発点〉を示すにせよ（cf. *tirer de* III(1)(b)）、〈事態がかかわる問題の核心〉を示すにせよ（cf. *priver de*）、いずれも目的辞に次ぐ第二補語を導く。

こうして機能辞は核（動詞述部）のまわりで、核に支配されながら、核に意味の助けを借り、ある場合には、殆ど核の延長物として手足のように働く。場合によると、それは実際に動詞の一部をなし、新しい熟語動詞のように働く（*compter sur lui* 「彼を当てにする」）。

と同時に、例えば「Xを満たす（... で）」 *remplir X de ...* に現れる *de* と、「Xを欠乏状態にする（... について）」 *priver X de ...* に現れる *de* は、同種の *de* の使い方なのではないか、と考えられる。いや、もっと言えば「欠乏状態にする（について）」における「について (*de*)」は、直接目的辞のそばで（核に主導されて）道具補語を導くさまざまな *de* と、同じグループをなす、と言えるのではないか、と考えられる。たしかに、これらの *de* の意味は場合によりそれぞれ異なるが、先刻見たように、これらの *de* はいずれも目的辞に次ぐ第二補語を導くのである。意味の相違は文脈的なものと考えられよう。つまり、第二補語を導く *de* が、核（動詞述部）の支配を受けて絶えず意味内容を変化させているのである。

II(3)(a) 以上の考察を通じて幾つかのことがわかった。

わかったことの第一は、「Xを満たす(で)」remplir X de と「Xを欠乏状態にする(について)」の「で(de)」と「について(de)」が同じグループをなす、ということである。

いや、もっと言えば、「Xを欠乏状態に突き落とす(に関して)」の「に関して」で、我々が「で」(満たす)の「で」が使用出来ないのは、これは日本語の問題であり、日本語の「で」が<非存在、不在、これから奪われるもの>に対しては使えないこと、に直接の関わりがあるらしい。日本語の「で」は、存在が確実なものに対してしか、使えない。だから「で満たす」といえるが、「で(?)空にする」とはいえない -- 「を取り除いて、空にする」と言わなくてはならない -- ことになる。「で、空にする」といえば、例えば「空気ポンプを使って、空気ポンプで、空にする」のような場合である。priver X d'eau は「Xの水を取り除いて、Xを空にする」であって、「Xを“水で”空にする」と言う訳にはいかない。それは、既に言ったように、日本語の「で」が<非存在、不在、これから奪われるもの>に対しては使えないことによる。

II(3)(b) そのために、「Xを満たす(で)」remplir X de と「Xを欠乏状態にする(について)」の「で(de)」と「について(de)」が同じグループをなすことが判明しても、日本語の訳では「で(de)」(存在が確実なもの)と「について(de)」(非存在、不在、これから奪われるもの)と言い分けなくてはならない。

だがしかし、<存在>に対しても<不在(あるいは不在に向かうもの)>に対しても全く同じように、それらを道具(手段、材料)視できる関係概念(仏 de, 英 of)をもつ言語では、「で満たす」といえる場合は「で空にする」(=「を取り除いて、Xを空にする」)といえる、ということである。

そして、これは既に詳しく述べたことであるが、「から奪う」(=乱暴に取る、激しくもぎとる)のような「から」(とる)型の表現を、外部から見た<働き掛け>のモデルをあらわすものとするなら、「について欠乏状態においやる」のような「について」(状態を変える)型の表現は、内部から見た<状態変化>のモデルをあらわすものと言うことができる。

II(3)(c) そこで、[日]「Xからその権利を奪う」と[仏]priver X de ses droits =「Xを奪われた状態に迫いやる(彼の権利に関して)」とは、二つの点で大きな違いをもつ。つまりまず、日本語ではこの文脈では「で」が使えない。そこで priver X de は「(その権利)で欠乏状態に追い込む」と言えずに「(その権利)に関して欠乏状態に追い込む」と言わな

なくてはならない。それは機能辞の問題。もう一つは動詞の問題で、「から奪う」は外の<働き掛け>のモデルに依っている。「に関して欠乏状態に追い込む」は内の<状態変化>のモデルに依っている。同じフランス語でも、demander à X「Xに対して要求する」、prendre à X「Xにおいて（から）取る」は外の<働き掛け>のモデル（空間的：何から何へ）に依っている。

II(3)(d) この章では、一貫して<核（動詞述部）が主導する統辞機能>について考えた。「文型」分析が取り上げなくてはならない特異な統辞機能は<核（動詞述部）が主導する統辞機能>である。その理由は、核の周りの統辞機能のコングロメレーションが異なったタイプを示すのは、選ばれる核（動詞述部）の性格によるからである。そして、同じ前置詞（例えば de）にも核に主導されるものと、されないものがあることを見た。更にこの章では、同じ事態を、（１）動詞が<外的な働き掛け>の観点から切り取る場合、機能辞は<空間的軌跡>を示し、（２）動詞が<内的状態の変化>の観点から切り取る場合、機能辞は<事態がかかわる問題の核心>を示すことを見た。ただしこの章で行った検討によっては、まだ、この（１）（２）の区別が、核に主導される統辞機能、されない統辞機能の区別とどの様に重なるのか、あるいは重ならないのか、が明らかではなかった。次章では、（１）（２）の区別と核に主導される統辞機能がどのように重なるかを見よう。

III. 「核主導の統辞機能」論

- フランス語の機能辞 de をめぐる「文型」 -

III(1)(a) 一般に、要素が高い頻度を示す場合、それを十分に説明しようとする、それだけ説得的な理論的枠組みが必要となる。意味領域においては頻度の上昇はしばしば、その要素の意味的な<特殊性>の減少と抽象度の増大、-- つまり、それだけ多くの状況に対して利用出来る幅広い意味特性の発生 -- に結びつくと考えられる。例えば、多くの言語においてしばしば時制の領域で最も頻度が高いのは（時制要素ゼロの）いわゆる「現在形」である。これは文脈的に見てあらためて時を特定する必要がない場合、時制ゼロが過去時にも未来時にも、そして勿論、現在時にも使用可能であるという事実と符合している。ここで私たちが問題にしている機能辞の領域においても、そういうことが時に起きる。例えば様々な<場所>特性を指示する機能辞の中で最も意味の特殊性の少ない機能辞といえば、フランス語では à ということになるが、それが他のものより頻度が高いのは、他の機能辞の身軽な身代わりとして役に立つ場合があるからであろう。例えば dans la banque 「銀行の中で」、à la banque 「銀行において」は共に、それぞれ

異なった含みを持っていて有用だが、「の中で」（内部性）を強調する必要がなければ、à la banque 「銀行において」で済ますことができる、などという場合がそれである。

しかし機能辞の場合、頻度の高さを、それが含む意味特性の一般性で説明しようとしてもうまくいかない場合が殆どである。例えば核（動詞述部）の周りに現れる機能辞の頻度をとると、しばしば一定の機能辞の頻度が有意に高い。それは機能辞の含む意味特性の一般性、希薄さとは無関係であって、核の方で、その機能辞を<予想>している（そのために、出現のある程度の規則性が生じている）と考えなくては説明がつかない。

III(1)(b) 前置詞 de は、さまざまな動詞の周囲で比較的頻度の多い前置詞である。この章では、前置詞 de が若干の動詞と共に起する場合について考えるが、この場合もまた de がこれらの動詞のまわりで、それが含む意味の一般性のために他に可能な前置詞の代わりに現れている、と考えることは大した助けにはならないであろう。その理由としてまず第一に、de を代表格とするような機能辞のパラディグムを想定することがむづかしい、ということが挙げられる。

むしろ de が、核として選ばれている動詞述部の統辞的な内容の一部と強く関連していて、そのためにその動詞述部の周囲で、ある程度共起の規則性をもつに至っている、と考える方が筋道が通っている。

III(1)(c) 機能辞 de はこれまでも見てきたように、すこぶる意味の多様性を具えているが、そのことは、機能辞 de が、（A）動詞述部の意味とは無関係に多様な意味をもつ、いわゆる ablatif の場合にも、あるいは、（B）核に主導されて現れている場合にも、全く同じようにそれぞれの文脈に適合して意味が広げているのではないかと疑わせる（後述III(2)(b)）。

機能辞 de の意味の、文脈への適合を考える場合、特に<文脈への適合>が顕著だと考えられるのは「について」と我々が解釈した意味をもつ de の場合であろう。しかし一方、「から」のように、起源となる点からの分離を示し明らかに ablatif との親近性を示すものもまた、核となる動詞の意義に支えられて現れる場合がある。

すでに見たように「について」は「で」と同義である(cf. 上述II(3)(a) : remplir X de ... 「... でXを満たす」 vs. priver X de ... 「... についてXを欠乏状態に追い込む」）。この二つ（「で」ou「について」）は動詞が添加や除去を示す場合、目的辞に立つ参加者（X）が事態の中で変化を被る時に、機能辞 de により導入される参加者を<加え>られたり<除去>されたりすることを示す。また動詞が依頼者の、強い力に取り縛るような依

頼を示す場合があるが (*prier X de ...*)、その場合、*de* は依頼者が振りかざした強い願いの筋をあらわす -- これも「でもって(迫る)」という、道具性の表現の一変形であろう -- など、様々である。

そういった事態は、例えば *X* が、単に *A* 点「から」*B* 点へ移動するのとは、非常に違った事態であろう。実際、何かを<加え>られたり<除去>されたり、強い依頼を受けたりする *X* は、そのことによって、豊かになったり、欠乏したり、あるいは張り切ったり困惑したりする訳である。*de ...* はそのような変化の実質を担う要因であろう。それに比して位置の移動は、単なる位置の移動であって、移動するものが様相を変えることはない。このように事態の性格は甚だ異なるが、そのような変化をあらわすのは核となる動詞であって、つなぎとなる機能辞は直接事態には関わらない。

だから事態にはそのような大きな違いがあるにもかかわらず、この二種類の *de* は共に核の主導のもとに現れる場合がある。*de* 「から」や、*de* 「で」「について」は、意味は異なるが、統辞型としての核主導型は、幅広く両者を含みこむ。ここではそのことを、*tirer X de ...* 「... から *X* を引き出す」と *décharger X de ...* 「... について *X* を重荷のない状態にする」等を例に確かめることにしよう (cf. III(4)(a) 以下)。

III(2) *de* と文脈：

III(2)(a) フランス語の *de* が引き受ける関係内容は既に述べたように極めて多様だが、それをもう一度確認しておく、それは既に述べたように大きく二つに分かれる。

(A) 動詞の語義によらず、話者が自由に選べる「起源」、「分離」、「話題」、その他一般に *ablatif* に含まれる内容をあらわす：*De sa fenêtre il voit ...* 「窓から彼は ... を見る」(起源)，*Il coupe la feuille du couteau.* 「彼は紙をナイフで切る」(道具)。(B) 動詞の語義により、分離をあらわす動詞のまわりでは分離、話題をあらわす動詞のまわりでは話題、という具合に、文脈にある動詞の意味を反映する：*Il tire son caractère de sa famille paternelle.* 「彼はその性格を父方の家族から受け継いでいる」(起源)，*Il vient de Londres.* 「彼はロンドン出身だ」(起源、出発点、出身)，*Il parle de son voyage.* 「彼は旅行のはなしをする」(話題)，*Il est content du résultat.* 「彼はその結果に満足だ」(起源、原因)，*Il remplit le verre de l'eau.* 「彼はコップを水で満たす」，*Il débarrasse son ami du pardessus.* 「彼は友人の外套をぬがせてやる(友人の邪魔者をどけてやる、外套について)」。

(A) についても (B) についても、*de* が示す内容の広がりはいずれも文脈とともに再現なく広がっていき、とりわけ成句的表現では、文脈を支配す

る意味の特性とともに殆ど「関係」一般をさし示すことになる：*Allez de ce côté. De l'autre côté.* 「この方向へ行きなさい」「逆の方向へ」、*De nos jours,* 「今日では」。

III(2)(b) *de* がこのように多様な、広い範囲の文脈に対応するのは、もはや、この機能辞の本来の意味の特性がそうさせるためだけではないだろうと考えられる。

このことについては二つの点を押さえておく必要があろう。まず第一に、実際に *de* のあらわす関係が個別の特殊な事態を越えて、様々な事態に一般的に観察できる関係だ、という点である。第二に、*de* のあらわす関係が *de* という機能辞の形式によって特定化されているというより、むしろ文脈によって補われて初めて、その関係が暗示される、という点である。

第一の点について。ためしに *de* のあらわす意味を、「道具」性、「様態」、「原因」に限って見てみよう：*couper d'un couteau* 「ナイフで切る」、*écrire d'un stylo* 「ペンで書く」、*marcher d'un pas chancelant* 「よろめく足で進む」、*parler d'une voix douce* 「やさしい声で語りかける」、*poussé d'une colère profonde* 「深い怒りにつき動かされて」。

「切る」「書く」といえば通常道具を用いるが、しかしそれはこれらの事態に限ったことではない。実はこれ以外にも多くの事態が何らかの道具を用いて生み出されている。道具はあちらこちらで用いられ、しかも事態の本質、中枢には関わらないから、道具を用いるということが事態の特殊性をなすことは少ない。逆の方向から考えて見ると、「切る」「書く」という事態は何か切り離されたり、文字が書かれたりすることを言うのであって、何で切られたか、また書かれたかを先ず念頭に置いているわけではない。同じように歩いたり話したりする事態も、何らかの様子を伴っていることは避けられないが、しかしその様子が、歩いたり話したりする事態を他の事態から区別しているわけではない。また一般に事態が発生するには何らかの原因が元にあるだろう。だから何らかの原因によって事態が発生したとしても、そのことがそのままその事態を他の事態から区別する訳ではない。このように事態と「道具」性、「様態」、「原因」の関係は、個別の事態の特殊性をあらわすというよりも、事態一般に広く見られる関係をあらわす。

第二の点について。*de* のあらわす「道具」性、「様態」、「原因」は、表現の中でどの様に互いに区別されているか。上の例文のそれぞれの場合、*de* が「道具」性、あるいは「様態」、あるいは「原因」をあらわすのは、勿論 *de* が機会あらば絶えずそういった関係を表現すべく、ある潜性を示しているからである。だが、ここで注意したいのは、それぞれの文脈 -- つまり動詞の選択、それと結合した名詞 (*de* が導入する名詞) の選択 -- があるからこそ、それにあわせて *de* が、「道具」をあらわしたり、「様態」を

あらわしたり、「原因」をあらわしたりしているのだという事実である。言い換えるなら、この機能辞の本来の意味特性が積極的に一定の関係を強調している訳ではない。むしろ文脈が自ずから＜含意＞するさまざまな関係を、*de* が形にしているにすぎない。

III(2)(c) その結果、-- これはとりわけ (B) 領域においていえることだが -- この機能辞をめぐり、主辞機能、目的辞機能につづく第三の、あるいは *datif* に次ぐ第4の、機能辞の＜構造的＞活動領域が確立していると考えることができる。そのことは、例えば動詞 *apercevoir* X 「Xを(ちらりと)見る」が本来の目的辞の位置を再帰形式 *se* に譲った後の成り行きを見ればよくわかる。この再帰形式は見せ掛けであるため〔形式は目的辞だが内容は行為者の側の強い参加の意思をあらわす〕、動詞の意義構造の中の本来の目的辞を受け止める意義特性は未だ相手を持たず宙ぶらりんである。そこに登場するのがこの *de* 導かれる＜代理目的辞＞(第二形式の目的辞)である：*s'apercevoir de* X 「Xをはっきりと見定める」。

III(3) 核に主導される *de* と、されない *de* :

III(3)(a) さて、機能辞 *de* の検討を、次のような形で始めよう。

先ず最初に機能辞 *de* を含む二つの文型を、いくつかの角度から少数の具体的な文例に当てはめて比較検討する(後述III(3)(b)(c))。

次にいくつかの動詞を通じて、どのような文型が実際にどのような形で現れるかを、具体的な文例でもって裏付けてみよう(後述III(4)(a)以下)。選ばれた動詞は、意味的にはやや異なった二つのタイプの動詞 *décharger* (類例として、*démunir*, *charger* を加えた)と *tirer* である。この二つのタイプの動詞の類似点と相違点は次の通りである：

類似点：共に前置詞 *de* を核主導の統辞機能としてもっている。

相違点：*tirer de* の *de* は＜空間的軌跡の出発点＞、それに対して *décharger de* の *de* は＜事態がかかわる問題の核心＞をあらわす。

両方の *de* が核主導の統辞機能と考えられるのは二つの動詞を通じて、動詞の周りで *de* が出現する頻度が有意に高いのではないかと考えられるからである。*tirer* には、*de* を伴わない用法もあるが(ex. *tirer le rideau* 「カーテンを引く」)、ここは *de* をかなり規則的に伴う用法を考える。

III(3)(b) では先ず、機能辞 *de* を含む二つの文型を、いくつかの角度から比較検討しよう。

下の例 A₁ と B₁ では文型は共に核主導の統辞機能であるから同じ文型となる。しかし両者の(文脈的)意味は、一方は＜空間的軌跡の出発点＞をあ

らわし、他方は＜事態がかかわる問題の核心＞をあらわす。

例 A₂ と B₂ では＜空間的軌跡の出発点＞をあらわす *de* は核主導の統辞機能とは見做されない (*voir de* の場合)。一方、*décharger de* の *de* が核主導の統辞機能のケースと見做され、＜事態がかかわる問題の核心＞をあらわしていることは前の例で見た通りである。

例 A₃ と B₃ では、*de* は共に＜空間的軌跡の出発点＞をあらわしている。しかし、*voir de* は核主導の統辞機能とは見做されないのに対し、*tirer de* が核主導の統辞機能とは見做されることは、まえの例で見た通りである。

(A₁) < V + O + prép. N > Il tire une plante *de* terre.

(B₁) < V + O + prép. N > Il décharge un porteur *de* son
fardeau.

「彼は地面から植物を引き抜く」

「彼はポーターから重い荷物を取り除いてやる」

(A₂) < V + O > + (prép. N) Il voit *de* sa fenêtre un garçon.

(B₂) < V + O + prép. N > Il décharge un porteur *de* son
fardeau.

「彼は窓から一人の少年を見る」

「彼はポーターから重い荷物を取り除いてやる」

(A₃) < V + O > + (prép. N) Il voit un garçon *de* sa fenêtre.

(B₃) < V + O + prép. N > Il tire une plante *de* terre.

「彼は窓から一人の少年を見る」

「彼は地面から植物を引き抜く」

III(3)(c) 以上の検討から結論出来ることは、この言語では同じ前置詞を想定しつつ、しかもその前置詞の意味内容も一致するものでありながら（共に＜空間的軌跡の出発点＞をあらわす）、動詞の意義に立て方により文型としては異なる二つがそこから出てくるということである。(A₃ B₃ を見よ)

同時に言えるのではないか、と思えることは、この検討の範囲内では＜事態がかかわる問題の核心＞をあらわす *de* が、もっぱら核主導の統辞機能として働くのではないかと思われることである。(B₁ B₂ を見よ)

ではこれから、上で述べたような二つのタイプの動詞を通じて、機能辞 *de* の現れる文型を見ることにしよう。

III(4)(a) *démunir* (PR) について：

まず、PR (*Petit Robert*) の例文では最後の受け身の例文を除いてすべてに *de* 機能辞に導かれる補足辞が入っている *démunir* をみよう。

< V + O (N₁) + [prép. N (N₂)] > 型：

1. *démunir une place forte d'une partie de ses effectifs*

「要塞から平常の兵員の一部を削減する」

2. *se démunir de son argent*

「金子を無くす」

3. *être démuní d'argent* 「金子に欠乏する」

4. *J'étais complètement démuní.*

「私は一文なしだった」(Absolt.)

III(4)(b) *décharger* (PR) について：

次に、*décharger* を見る。最初の 4 例には目的辞と *de* 補足辞がろっている (cf. ex. 1-4)。次の 6 例では (cf. ex. 5-10) 表現は最初の 4 例と同じく、重荷を背負った参加者が中心話題になっているが、今度は重荷が *de* 補足辞として表現されないまま了解されている。それ故、文は *de* 補足辞のない、動詞と直接目的辞だけの文になっている。

これに対して運搬人が消えた例も 4 例ある (cf. ex. 11-14)。つまり重荷だけ残り、重荷を背負う参加者がいない。そうすると、運搬人に代わり、重荷が直接目的の位置に立つことができる。その結果、最初の 4 例では *de* 補足辞として立てられていた参加者がここでは直接目的辞として立てられ、邪魔な重荷として放出される。第 1 3 例では、<重荷>の放出される先が<空間的軌跡の到達点>として示される (*sur qqn.*)。第 1 2 例では心に溜まった怒りが重荷としてとらえられている。放出先は問題ではない(誰かれとなく)。1 4 例(いわゆる絶対用法)では、布地の余分な染料が重荷(余計な荷重)としてとらえられ、自然に放出されるべきものと了解されている。

ここで扱う文例は：

〔A〕 < V + O (N₁) [+ prép. N (N₂)] > 型

〔B〕 < V + O (N₂) [+ prép. N (N₁)] > 型

の二つの文型に集約できる。〔B〕は、14. *décharger sa colère sur qqn.*

(自分の怒りを誰かにぶちまける)等の *sur qqn.* 「誰その上に、誰それに対して」を自由な限定文句と考えずに、これもまたその機能辞が、核に主導された要素と見なしたものである。この *sur* については、4. *Il s'est déchargé de certains travaux sur ses collaborateurs*, (彼は自分の荷を軽くした、幾つかの仕事を協力者に譲って)等の *sur* も考え合わせなければならない。なお、*sur qqn.* をここで自由な限定文句と見なさなかった理由については、次の *charger* を参照。

[A] < V + O (N₁) [+ prép. N (N₂)] > 型 :

1. *décharger un porteur de son fardeau* (ポーターを重荷のない状態にする、その〔運んでいる〕荷物に関して。)
2. *être déchargé d'un travail* (重荷から解放される、ある仕事に関して)
3. *Ses employés le déchargent de presque tout* (彼の使用人が彼を重荷のない状態にしてくれる、殆どすべて〔の仕事〕に関して)
4. *Il s'est déchargé de certains travaux sur ses collaborateurs.*
(彼は自分の荷を軽くした、幾つかの仕事を協力者に譲って)
5. *décharger une arme* (弾を撃つ)
6. *Le pistolet est déchargé.* (ピストルが撃たれる)
7. *décharger une poutre qui fléchit* (撓んでいる梁を重荷のない状態にしてやる、荷重をどけてやる)
8. *décharger un contribuable* (納税義務者を重荷〔税金〕のない状態にしてやる、免税してやる)
9. *décharger un accusé* (被告を重荷のない状態にする、無罪にする)
10. *décharger sa conscience* (良心を重荷のない状態にする、心の重荷をとってやる)

[B] < V + O (N₂) [+ prép. N (N₃)] > 型 :

11. *décharger des marchandises, du bois* (商品、木材を降ろす)
12. *décharger sa rate, sa bile* (怒りをぶちまける)
13. *décharger sa colère sur qqn.* (自分の怒りを誰かにぶちまける)
14. *étoffe qui décharge* (色が落ちる布地)

III(4)(c) *charger* (PR) について :

charger は *décharger* とは逆さまの事態を切り取る。だが共に運搬人を対象としてそこに重荷を加えたり (*charger*)、取り去ったり (*décharger*) する事態をあらわす。時に荷物に働きかけることもあるが (荷を担がせたり

charger, 荷を降ろしたり、放出したり *décharger*, cf. ex. 23, 24)、むしろ運搬人を対象として、その内部に重荷によって重圧感を作り出したり (charger)、重荷を取り去り重圧感を除去したり (*décharger*)する (cf. ex. 1-22)。

ここで扱う文例は：

[A] < V + O (N₁) [+ prép. N (N₂)] > 型

[B] < V + O (N₂) [+ prép. N (N₁)] > 型

の二つの文型に集約できる。[B] は、23. *charger une valise sur son épaule*. 「トランクを彼の肩に担がせる」等の *sur son épaule* 「彼の肩の上に」を自由な限定文句と考えずに、これもまたその機能辞が、核に主導された要素と見なしたものである。

この *sur* については、*à* を代表格とするさまざまな場所限定の機能辞のひとつで、この位置では場所限定の機能辞がすべて動詞 *charger* のもたらす拘束に従って現れていると見ることも出来る。ただし、さまざまな場所限定の機能辞の中で *sur* が、荷重の「落ちつき先、放出先」を示すのに、もっとも紛らわしくない形式である。その点でこの *sur* には、拘束が既に生じていると見る事が出来る。そのことは先の *décharger* で挙げた 4. *Il s'est déchargé de certains travaux sur ses collaborateurs*. (彼は自分の荷を軽くした、幾つかの仕事を協力者に譲って) の *sur* についても言えよう。そこからここでは、この *sur* を核に主導された機能辞と見なしている。

[A] < V + O (N₁) [+ prép. N (N₂)] > 型：

1. *charger un porteur, un cheval, une charette* (ポーター、馬、車を荷重のかかった状態にする)
2. *charger un navire* (船舶に荷を積む)
3. *charger une lettre* (手紙にお金を入れる)
4. *taxi qui charge un client* (Fam.) (客を拾うタクシー)
5. *charger un fusil, un revolver* (銃、拳銃に装弾する)
6. *charger un canon jusqu'à la gueule* (大砲に砲口一杯弾をこめる)
7. *charger à balles, à mitraille* (目的辞なし) (実弾射撃、一斉射撃をする)
8. *charger un fourneau, un poêle de combustible* (ストーヴに燃料を加ええる)
9. *charger une caméra* (撮影機にフィルムを装填する)

10. charger un pinceau *de* couleur (絵筆に色を含ませる)
11. charger une batterie d'accumulateurs (蓄電池に充電する)
12. charger une table *de* mets (テーブルを御馳走で一杯にする)
13. charger ses mains *de* bagues (指に指輪をいっぱいはめる)
14. charger son style *de* métaphores (文章を比喩的表現で一杯にする)
15. charger un ouvrage *de* citations (作品を引用で一杯にする)
16. charger le peuple *de* taxes, d'impôts (人民に税をかける)
17. charger sa mémoire *de* détails (記憶を細かい事実で一杯にする)
18. On l'a chargé *de* faire le compte rendu de la séance. (彼に会議の報告書を書かせた)
19. charger un avocat *de* la défense (弁護士に弁護をやらせる)
20. Il fut chargé *de* les surveiller, *de* leur surveillance. (彼らの監督を彼は頼まれた)
21. Je me charge *de* tout, je m'*en* charge. (私が総て引き受けます)
22. Je me charge *de* lui. (私が彼の面倒をみます)

[B] < V + O (N₂) [+ prép. N (N₁)] > 型 :

23. charger une valise *sur* son épaule (トランクを彼の肩に担がせる)
24. charger du charbon *sur* une péniche (石炭を積み荷船に積む)

III(4)(d) tirer (PR) について :

< V + O (N₁) [+ prép. N (N₂)] > 型 :

動詞 *tirer* は、何か、誰かを<空間的軌跡の出発点>から引っ張り出したり引きずり出したり、一定の成果を原料から絞りとったりすることをあらわす。典型的な<働き掛け>のモデルを選ぶ動詞と言えよう。

1. tirer qqn. *du* lit (ベッドから誰かを引き出す)
2. tirer une plante *de* terre (植物を地面から引き抜く)
3. tirer qqch. *des* mains de qqn. (何かを、誰かの手〔両手〕からとりあげる)
4. tirer le jus *d'un* citron (レモンからジュースをしぼり取る)
5. tirer le vin (*du* tonneau) (〔樽から〕葡萄酒をしぼり出す)
6. tirer qqn. *de* prison (誰かを牢から出す)

7. *tirer des blessés des décombres* (崩壊した建物からけが人を引っ張り出す)
8. *tirer qqn. de la boue (litt.)* (汚辱の生活から人を救い出す)
9. *Ce succès qui le tirait de l'obscurité. (Gautier)* (この成功が無名の状態から彼を引き出すことになった)
10. *Il les tire du sale pétrin où ils venaient de se fourrer. (Céline)* (彼は彼らがおしこめられた耐えがたい困窮の生活から引き出す)
11. *tirer qqn. du sommeil* (眠気から人を引き出す)
12. *tirer qqn. du doute, de l'erreur* (疑いのかかった状態、誤った生活から人を引き出す)
13. *tirer de l'huile des olives* (オリーブから油を絞る)
14. *L'opium est tiré d'un pavot.* (阿片はケシからとられる)
15. *tirer des sons d'un instrument* (楽器から音を出す)
16. *Il tirait argument et avantage de ce qu'il m'en coûtait de céder à mon désir. (Gide)*
(私が欲望に屈するということは高価な代価をはらうことであるのに、彼はそれを利して好き勝手なことをいい有利な立場を得ている)
17. *On ne peut rien en tirer.* (彼から何か聞き出すことはできない)
18. *On ne peut rien en tirer.* (彼から何か引き出す〔彼に何かやらせる〕事はできない)
19. *tirer de l'argent de qqn.* (人から金を引き出す)
20. *tirer des conséquences d'une formule* (定式からそこに含まれる帰結を引き出す)
21. *tirer des conclusions* (結論を引き出す)

IV. 結論にかえて

IV(1)(a) 核主導の統辞機能という概念を筆者が用いたのは、ほぼ20年前、頻度の高い機能辞を説明するためであった。核(動詞述部)を選んでその周りに現れる機能辞の頻度をとると、しばしば一定の機能辞の頻度が有意に高くなるようである。それは既に述べたように (cf. III(1)(a))、核の方で、その機能辞を予想しているとしか考えられない、つまり核をなす動詞述部の意義構造といったものを、もしいま仮定することになると、その意義構造の中に、問題のその機能辞は色濃く書き込まれているというわけである。その機能辞がどういう名詞を選んで導入するかは全く別の問題である。話者は自由に、自分の必要に応じて名詞を選ぶことができる。しかしその直接の

文脈となる動詞述部と、その名詞との間に設定される関係（統辞関係）についていえば話者はその動詞述部を選ぶか選ばないかのぎりぎりの選択に際して、周辺要素として候補に上がる名詞との関係を、絶えず、その動詞述部の中に刷り込まれた機能辞を通して見ることになる。＜核主導の統辞機能＞という捉え方はそういった形の統辞機能の設定を指している。

いま、「動詞述部の中に刷り込まれた機能辞」という言い方をしたが、厳密には動詞述部の中に機能辞はない。機能辞の映す＜影＞があるだけである。機能辞の影とは、これまたはっきりしない言い方であるが、動詞述部が規則的に引き受ける機能辞と、その機能辞があらわす統辞機能に対応するかたちで、動詞述部の統辞的な内容（意義構造）にあらわれる特性（存在様式としては＜意義特性＞である）が、ここでのその機能辞の影である。

IV(1)(b) この現象 -- 核が統辞機能を＜主導＞するという現象 -- を追跡する場合に問題になることが一つある。それは、核（動詞述部）に文句なしに支配されている主辞機能 -- 筆者の観点からはこれが核に主導された統辞機能の筆頭である -- を別として、核に主導＜されている＞統辞機能と、＜されていない＞統辞機能の間で、discret（離散的）な区別が立てにくいことである。

筆者は基本的な資料として、与えられた核の周辺における問題の統辞機能の＜頻度＞を考慮にいれることにしている。核の周りに集まる、統辞機能のコングロマレーションを解析することが統辞研究の大きな課題、いや最大の課題であることはその通りであるが、主辞機能、目的辞機能までは問題が少ないとして、*datif*、そしてここで扱った“*de*”機能（*Il voit de sa fenêtre un garçon*.「彼は窓から一人の少年を見る」の *de* は除外しなければならない）などになると、しばしば、「多少とも」という性格を帯びることになる。“*de*”機能の場合も、主導されているもの、されていないものが明らかにあるが、その境界線上に近づくと、明確なことを断言することは難しいことは認めなければならない。

IV(2)(a) だが、筆者が思うのに、統辞機能にこの二つの場合があるという点には疑問の余地がない。核に主導＜されている＞ものと、＜されていない＞ものがあることは、ことの筋道から言って否定する訳にはいかないのである。いわば、その姿を明らかにする手法、技術はいまだ完全なものとは到底言いがたいが、原理の問題としてこの区別は立てて置かなくてはならない。我々がそう断言できるフォーマルな根拠は、*Nexus* 構造をもった言語における主辞機能の存在である。主辞機能の出現は、核として動詞述辞が選ばれると同時に、その選択に全面的に包含されるかたちで決定される。その意味で、この機能は全面的に核に主導＜されている＞ものと考えなくては説明できない。

IV(2)(b) その他の統辞機能に関しては、潜性としては核に完全に従属している機能辞でも、その現れ方には話者の選択がかかわり、話者の選択によりその機能辞は、核の外にある情報を核につなぐ。

これまで見てきたところによれば、このつなぎには二つの図式がある。一つの図式によれば、あるものをそこに新しく加えることができる（「核に主導されない」機能辞の場合）。だがもう一つの図式によれば、核に引き寄せられてそこに予定されているものが、話者の判断により実現したり、しなかったりするのである。実現する場合は、それはつなぎ（機能辞）だから、同時に核の外にある名詞情報を核に従属的に係留することになる。当然、話者は、そのような名詞情報の選択も行わなくてはならない。

例えば *décharger sa conscience* 「良心を重荷のない状態にする（心の重荷を取り除いてやる）」(III(4)(b) ex. 10) に *d'une culpabilité cachée* 「深く隠された罪悪感について」を補ってみよう。あるいは、*tirer des conclusions (conséquences)* 「結論（結末）をひき出す」(III(4)(d) ex. 21) に *des conflits idéologiques* 「思想的な軋轢から」を補ってみよう。これらの *de* 機能は *décharger*, *tirer* に、話者の意思に従って新しく選ばれた名詞情報による限定を加えることになろう。表向きはその通りなのである。しかしこの *de* 機能そのものは、核によって既に予め選ばれてあり（核主導の統辞機能）、話者は単に選択するというボタンを押すか、押さないかを定めるだけになっていると考えるべきであろう。

Bibliographie

Martinet, A., *Grammaire fonctionnelle du français*, 1979, Didier.

———, *Syntaxe générale*, 1985, Armand Colin.

Onion, C.T., *An Advanced English Syntax*, first edition 1904, London.

馬場 彰, 「文型解説」, ロイヤル英和辞典, 1991, 旺文社.

渡瀬 嘉朗, 『文法領域における頻度調査』, 1981, 昭和55年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究報告.

———, 「〈核〉主導型の統辞機能について（1）」『東京外国語大学論集』 32 号, 1982.

文型の変異に関する若干の考察

ーラテン語公文書と中世シャンパーニュ南部の公文書の関連性ー

川口裕司

概要

た語でう分
れス部よに
サン南の的
成ラユど学
作フニが献
て古一現文
いてパ表を
おインのか
院にお型の
道スの切
修ン紀紋て
ーラ世るっ
オフ13れ持
ヴ北、らを
ルびてみ異
レよしに変
クおに書の
と一考証型
局ギ参の文
書ルを語な
尚ベ書スう
伯と証ンよ
ユ書のラの
ニ文古フど
一公最古、
パのたたれ
ン語れ現、
ヤンかさて
シテ書給し
ラで発に析
たお文るに
ラ台の

てなよ態はの語
らしたに状書市ス
み示新語用証都ン
くを、ス併る世ラ
多化でン語よ中フ
は進とラ言にる古
異のこフ重語また
変順る古ニス始め
の語えとのンにさる
型る換書種ラ紀行れ
文けみ証一フ世発わ
えお組る、古12で思
さにをよれの、一に
て文ルにさ部もギう
い散テ語成南らルよ
おのモン作ユがべた
に時書テて二なやい
書当証ラしーえス
文はの。行パまんし
な語た並ン踏ラと
質もンいにヤをフル
均るテて代シル北テ
的あうて時、テ、モ
較のは立同がモてな
比ちのちぼだのし
うも打ほけ書に接
いのを、わ証景直
と異あ式はた語背を
書変、形書ッテ頭証

内容

はじめに

I. 証書の構造分析

II. 証書の文型分析に向けて

III. 発信者と受信者

III. 1. ラテン語の公文書

III. 2. ラテン語文献から古フランス語文献へ

III. 3. シャンパーニュ南部の証書

III. 3. 1. 発信者と受信者の文型

III. 3. 2. 受信者の定義文

IV. 証明手続きと年代・作成地

IV. 1. ラテン語の公文書

IV. 2. ラテン語文献から古フランス語文献へ

IV. 3. シャンパーニュ南部の証書

IV. 3. 1. 証書の効力

IV. 3. 2. 印璽による証明

IV. 3. 3. 年代の表記

結論

引用文献

はじめに

ある事態を話し手が聞き手に伝えようとする時に、同じ事態が様々な文型となって現れることを我々は直観的に知っている。筆者は古フランス語の態に関する考察の中で、そのような「文型の変異」とも言うべき問題を扱ったことがある(川口 1994, pp.70-78)。

中世フランス語で書かれた不動産等の売却や贈与を記した証書において、「人1が人2にお金を支払う」という現実の事態を想定してみよう。筆者が調べた資料体¹⁾では、少なくとも次の4つの文型によってこの同一の事態が表現されている。

1. 人1 paier お金 a 人2
2. 人2 recevoir お金 de 人1
3. 人2 se tenir por/a païé お金
4. 人2 estre païé お金

一般に3と4の文型は態の選択(ここでは拡大再帰表現と受動態)に関わるとされる。1と2のタイプの違いは事態をお金を支払う側からみるのか、それとも受け取る側からみるのかといった視点の相違に依ると解釈できよう。同一の事態を伝えるのに、このような文型の変異が観察されるのは、おそらく話し手が事態をどのように捉え、どのように伝達しようとしているのが多様であり、その捉え方や伝達の仕方の違いが文型の変異に反映されるのであろう。文型の変異がどのようにして起きるのか、その理論的な枠組みを検討することは興味深いテーマである。しかしながら拙稿の目的はそうした理論的研究ではなく、比較的均質な資料体を用いて、古フランス語における文型の変異の現象がどのような広がりを持っているのかを文献学的に実証することにある。

ところで筆者は、数年前からDominique Coqにより校訂された13世紀の中世シャンパーニュ地方南部の証書¹⁾を分析し、報告書や論文の形で成果を公にしてきた(川口 1994, Kawaguchi 1994, *ibid.* 1995, 川口 1996参照)。ここでも同じ史料を資料体として用いることにしたが、Coqの資料のうち*1, *2, *3の公文書は本論の分析から除き、同書pp.3-118までに記載されている100件の証書について調査することにした。

I. 証書の構造分析

我々が以下に分析する13世紀のシャンパーニュ地方南部で作成された公文書の多くは、不動産や権利の譲渡・売却の際に取り交わされた証書の類である。若干の例外を除いてこれらの公文書には構成上の著しい定式化がみられる。Jacques Monfrinによると、中世の

脚注

¹⁾ COQ Dominique (1988) *Chartes en langue française antérieures à 1271 conservées dans les départements de l'Aube, de la Seine-et-Marne et de l'Yonne*, Editions du CNRS, Paris

ラテン語で書かれた文書は一般に次のような構成要素を持っていたという：1 冒頭の署名(souscription), 2 宛名書き(adresse), 3 挨拶(salutem), 4 前文(préambule), 5 本文(dispositif), 6 証明書き(formules garantissant l'exécution des dispositions), 7 作成年と場所。しかもこうした定式化は私的文書と公的文書のいずれにおいても現れ, それはローマ帝国崩壊以前というかなり早い時期に定式化したという²⁾。

Monfrinが指摘した形式はラテン語公文書のみならず, 中世フランス語で書かれた公文書の中でも概ね踏襲されている。証明書という文書の性格からしても, そこで伝達される内容には必ず証明書の発行者(=発信者)があり, 作成年と場所が明確にされながら, 証書の法的な実効力が証明されている筈である。中世フランスの証書はそうした明確な方向付けを持った文書であり, 証書の文面でそれが誰に向けられていたのか明記されるのが慣例であった。我々が分析の対象とする公文書のうち, 最も頻度が高く, かつ典型的な事例を表していると思われる不動産の譲渡・売却に関する証書を言語伝達モデルの観点から図式化するならば図1のようになろう。

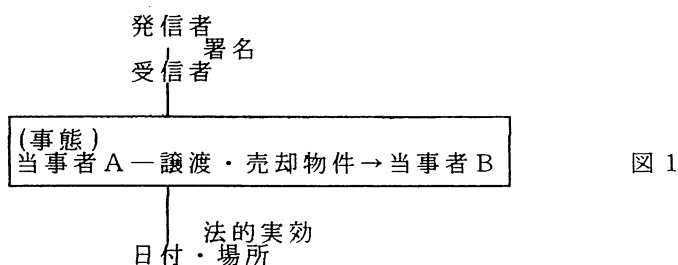


図 1

この言語伝達モデルでは発信者から受信者への一方的な伝達過程だけが問題になり, 言語情報の相互伝達は行われない。しかもここで扱う文献のほぼ半数(100文書中の48文書)において, 発信者と当事者Aは同一人物である。換言すれば, 証書を証明する人物は自身が譲渡・売却を行う当事者であるということだ。

発信者＝当事者Aの場合

発信者	内容	文書数
シャンパーニュ伯	特令 特許状 権利譲渡・売却	3 2 1
領主(sire, dame)	不動産譲渡・売却 権利譲渡・売却 贈与・寄進 その他	21 10 4 2
騎士(chevalier)	不動産譲渡・売却 権利譲渡・売却	4 1

表 1

²⁾ MONFRIN Jacques (1969) "Le latin médiéval et la langue des chartes", Vivarium 7/2, p.83

発信者≠当事者Aの場合

発信者	内容	文書数
シャンパーニュ伯および ブルゴーニュ公	不動産譲渡・売却 権利譲渡・売却 vidimus その他	4 1 1 2
領主(sire, vicomte, comte de Nevers)	不動産譲渡・売却 調停 贈与 その他	6 2 1 1
メール(maire)	権利譲渡・売却	3
プレヴォ(prévôt)	不動産譲渡・売却 権利譲渡・売却 調停	9 2 2
バイイ(bailli)	不動産譲渡・売却 調停	2 2
主席司祭(doyen), 司祭 (curé), 修道院院長(prie- ur), 副司教(archidiaacre) 聖堂参事会員(chanoine)	不動産譲渡・売却 権利譲渡・売却 調停	11 1 1
騎士(chevalier)	不動産譲渡・売却	1

表 2

表1と表2のような大雑把な分類に重要な意義を認めることは難しいかもしれない。確かに証書の中で取り扱われる個々の事例は細部が互いに微妙に異なっており、共通の基盤に立ってそれらを一義的に分類するには、勢い厳密な分類規準を断念せざるを得ないことも事実である。にも拘わらずそうした分類を通して幾つかの興味深い事実を指摘することができる。

発信者が当事者Aと同一人物になる文書は全てシャンパーニュ伯や領主あるいは騎士のような、言わば知的かつ文書作成にも明るい在地の権力者たちによって発給されている。しかしながら在地の権力者というのは証書発行のための必要にして十分な条件ではない。文献番号80の証書においてシャンパーニュ伯チボー5世は当事者A氏がNotre-Dame-des-Prés女子修道院に財産を売却したことを証明しているが、その場合の当事者A氏とはJaucourtの領主Erart 1世であった。一方、証書82ではJean 2世の補佐役(clers)Renaut de Chacenay氏が3アルパンのブドウ畑、さらに水車小屋と付属家屋をサンスのSaint-Pierre-le-Vif大修道院に売却したことが述べられているが、この証書の発給者であるArcis-sur-Aube領主のJean2世はRenaut氏の主君であった。これらの証書から、シャンパーニュ伯→在地領主→臣下という封建的身分階層を読み取ることができる。その場合に中間的な地位にある在地領主は、証書の発行者であると同時に贈与・売却の当事者という二重の役割を担っていたことがわかる。証書の法的な実効力を強化するために、自らよりも高い社会的地位に属する権力者に当時の人々は証書の証明を嘆願した。そのために在地領

主は二重の機能を果たすことになったのであろう。

次に発行者が当事者Aではない文書について見ておこう。表2からも明らかなように、ここでは在地権力者だけでなく、様々な地位の人々が証書の発行者となっていることがわかる。中でもシャンパーニュ南部の資料に関する限り、プレヴォと主席司祭の果たした役割は大きい。両者はしばしば証書に権威づけをするために証明者として登場しているからである。彼らが幾つかの係争調停文書(arbitrage)の発行者となっている点も注目される。

この種の証書の中には単一の印ではなく、複数の印の押された証書が6つある。いずれも土地の売却を記した文書であるが、4つはプレヴォーと主席司祭が、残りの2つはプレヴォーと修道院院長がそれぞれ印を押している。複数の印璽が押された証書はいずれもシャンパーニュ南東部のBar-sur-Aube, Chaumont, Laferté-sur-Aubeで作成されている。Robert-Henri Bautierによれば、同じ現象はシャンパーニュ西部の都市Provinsでも見られるという。単一の印璽では証書の法的実効力が弱いため、人々は複数の印璽を求めたとBautierは解釈する。彼はさらに「単一の証人は証人なしに等し(testis unus, testis nullus)」という原則とボーヴェ慣習法の例(chap. XXXV, art. 1092)を引用して自説を補強した³⁾。

ところで中世フランス語で書かれた証書の起源はどこにあるのか。この点については、既に引用したMonfrinによる論文を待つまでもなく、中世フランス語の公文書がラテン語の公文書を模範として発展してきたことは、両者を幾つか並行して読めば、誰もが直観的に気づくことである。しかしながら、少なくとも筆者は両者の関連性を実証的に調査した研究を知らない⁴⁾。本研究はそうした研究の空白地帯を埋める目的で執筆されたのだが、証書という極めて特殊な文体が持つ統辞的な性質は言うにおよばず、中世フランス語における文型とは何なのか、またラテン語のモデルからの進化を考える上で本研究は基礎的な方向づけを与えてくれるように思うのである。

II. 証書の文型分析に向けて

具体的な分析に移る前に、ラテン語と中世シャンパーニュ地方南部の公文書の形式と全体像がどのようなものであったのかを代表的な例を挙げ説明しておこう。そのうえで本稿の分析の主眼がどこにあるのかを明確にしたい。

³⁾ BAUTIER Robert-Henri (1958) "L'Exercice de la juridiction gracieuses en Champagne du milieu du XIII^e siècle à la fin du XV^e", Bibliothèque de l'école des chartes 116, p.32

⁴⁾ BAUTIER (1958) *op.cit.*, p.76によれば1958年当時、北仏の公文書に関する研究はA de BouardによるChâtelet de Parisの古典的な研究しかなかったという。その後Bautierは自らCharles, sceaux et chancellerie, Championと題する研究を1990年に出版している。残念ながら本論考ではその成果を利用することができなかった

次のラテン語で書かれた公文書は⁵⁾、1199年にトロワ伯チボー3世がPontigny修道院にOtheの森の使用権を譲渡したことを証明する文書である。以下にその全文を掲げる。

[1] (1) Ego T., Trecensis comes palatinus, (2) notum fieri volo tam futuris quam praesentibus quod, pro salute animae meae et praedecessorum meorum, dono et concedo in perpetuum ecclesiae Pontiniacensi ut possit de nemoribus suis de Ota, quae in grueria mea sunt, dare et vendere ad voluntatem suam libere et quiete, et ad usus suos extirpare et aedificare; similiter ad usus tantum proprios facere cinerem et corticem capere. Super hac autem donatione mea statui me et successores meos in perpetuum fratribus ejusdem loci adversus omnes homines garantiam exhibituros. (3) In cujus rei testimonium, praesentes litteras sigilli mei munimine confirmavi.
(4) Actum, anno Incarnationis Domini, MCXCIX, mense junio.

試訳

(1) 余チボー、トロワの宮仕え伯は、(2) 今いる者と同様に後の者に、知らしめる、余は余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、トロワの通行税収入を法的に司るよ、な、またその2名がトロワの監視に、Otheの森の使用のため、余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、その使用のみに、余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、贈与に、余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、修道に、余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、当該書状を、余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、の1199年6月に作成の証書。

次の証書は古フランス語で書かれており、1270年にシャンパーニュ・ブリー伯のチボー5世が十字軍遠征の途中でトロワ市民に与えた特例措置を記した文書である。

[2] (1) Nos, Thiebautz, par la grace de Dieu rois de Navarre, de Champagne et de Brie coens palazins, (2) faisons a savoir a touz ces qui verront et oront ces presentes lestres que nous volons et otroions a noz homes et a noz fame de Troies que elisent un prodome de par aus, avoec celui qui est de par nous, qui saiche les prisses et les misses de la chauciee de (de) Troies au costemant de la chauciee, et volons que cil dui meismes sachent les prisses et les misses dou gait de Troies, si que il lou poissent mener au profit de la ville. (3) En tesmoignage de la quel chose nous avons fait seeler ces lestres de nostre seel, donees par nos a Nuiz, (4) an l'an de grace mil .CC. sissante dis, lou diemanche prochiem après Pasques.

試訳

(1) 余チボー、神の恩恵によりてナヴァール、シャンパーニュとブリーの宮仕え伯は、(2) これらの書状を見聞きするであろう全ての者に知らしめる、余は余の臣下から選はれた者ととも、通行税支出のある下、トロワの通行税収入を法的に司るよ、な、またその2名がトロワの監視に、と女性の中から選出すること。

⁵⁾ ラコあり。味議し析対い
テピげ。本作を論たて照で
語を。論成もは分はをあ
文提こで年今析あ通つた
文献分代と後上るした
に、しで析の思ののがてと
つて扱さ隔わ検十、幾言
いうたうれたれ討分結つ
はたデ古に、題下とのう
熊くンフよラと準し重
本こ語ラるテし備て要
大と文ン文ン拙とラな
学が献ス献語論調テ結
文での語比文で查ン論
部たと献上があら経文導
山こどり問本てにとこ
田のはも題なこ行シと
雅を世世中かをれンで
彦場12半、のれわヤが
氏借紀紀でコ取たバき
かりに程もピリラーた
貴お成のめなげンユは
らて作前極一上テニの
文申てで要とい。料の中
なをれ書重か。い。史書幸
重礼さ文てのな語文不
貴お成のめなげンユは
らて作前極一上テニの
氏借紀紀でコ取たバき
雅を世世中かをれンで
彦場12半、のれわヤが
山こどり問本てにとこ
部たと献上があら経文導
学が献ス献語論調テ結
文での語比文で查ン論
大と文ン文ン拙とラな
本こ語ラるテし備て要
熊くンフよラと準し重
はたデ古に、題下とのう
いうたうれたれ討分結つ
つて扱さ隔わ検十、幾言
に、しで析の思ののがてと
文献分代と後上るした
文提こで年今析あ通つた
語を。論成もは分はをあ
テピげ。本作を論たて照で
ラコあり。味議し析対い

役の収支を司り、結果として町に利益をもたらすようにしたい。(3) この内容の証明として余は(4)主の年の1270年4月の復活祭後の最初の日曜日にNuits-Saint-Georgesで余によって授けられた(3)これらの書状に余の印璽を押させた。

2つの証書はいずれもシャンパーニュ伯の尚書局で作成された文書であり、言語形態こそラテン語と古フランス語でそれぞれ大きく異なっているが、証書を構造的に分析してみると、驚くほどその構成に類似点が多い。後の分析において明らかになることだが、こうした類似性は単にこの2つの証書だけにとどまるのではなく、ほとんどの証書に共通して観察されるのである。共通している部分とは(1)-(4)の下線を施した常套句的な表現であり、これらは証書作成上の言わば形式要件にあたる。これに対して冒頭部(1),(2)と末尾部(3),(4)に挟まれた本文の内容を記した箇所は、個々の証書によって多様な形式をとっており、その部分を共通の基盤に立って比較することはできない⁶⁾。ところで(1)-(4)が形式要件になっているというのは、発信者VS受信者、証明者と証明手続き、年代と作成場所という要素が証書の言語機能にとっては必須のものであるが故の当然の帰結である。

本論の冒頭でも触れたように、文型という概念は発信者が受信者に伝達しようと企図する事態を発信者がどのように認識しているのかということと切り離して考えられない。換言すれば、発信者は言語外現実をどのような言語現実として捉えているのか、その認識論的モデルが言語形式の上に如実に現れるのが文型であると言えよう。そう考えるならば、中世の証書は文型の問題を考える際の格好の題材である。なぜならば証書の内容自体がそれが作成された背景にある言語外現実を説明しており、その事態に関与する人々も限定されており、何よりも紋切り型の表現が多いことで文型の変異を容易に分析することができるからである。

拙稿では証書の構成上で重要と思われる4箇所を取りあげながら、ラテン語公文書との比較検討を通して、13世紀シャンパーニュ地方南部の証書に見られる紋切り型の文型における変異を分析する。尚、ラテン語で書かれた同種の公文書としてはシャンパーニュ伯の尚書局とクレルヴォー修道院の古文書集を用いた。本論考において利用したシャンパーニュ伯尚書局の文献は、Henri 1世の1150年の文書から1206年12月にBlancheが発行した証書までの114の文書からなる。Theodore Evergatesによれば、Henri 1世が1157年に自分の宮殿の隣りにSaint-Etienne de Troyesの参事会を創設し、その場所を書記局として利用したのが伯の尚書局の始まりらしい(EVERGATES 1993, p.31)⁷⁾。一方、クレルヴォー修

6) 本文中にも常套句的表現がないわけではない。たとえばラテン語文書中の *Super hac autem donatione mea statui me et successores meos in perpetuum fratribus ejusdem loci adversus omnes homines garantiam exhibituros.* の部分は中世フランス語の証書でも、たとえば *mes en-portera a judit Jehham et a sa fanme et a-lor oirs leaul garantie contre totes genz.* (文献番号62, Silvarouvre司教によるJeanとその妻Jacoteへの耕作地の売却を記した証書) のような表現で現れる。

7) しかしながら集中的かつ体系的に尚書局文書が作成されるようになるのは1200年頃からで、後のチボー4世の治世に尚書局が本格的に形成された(EVERGATES 1985, pp.162-168)。

道院の文書はJean Waquet (1950) *Recueil des chartes de l'abbaye de Clairvaux, XIIe siècle, fasc.1*, Archives départementales de l'Aubeを資料体とした。1121年から1163年までの記録が含まれるが、筆者のコピーには若干の欠落ページがある。

分析の対象となった項目を以下に列挙しておく。本論の進行はその項目の順序に従うものとする。1. 発信者の署名, 2. 受信者について, 3. 証明手続き, 4. 年代・作成場所。

Ⅲ. 発信者と受信者

Ⅲ. 1. ラテン語の公文書

Monfrin(1969, p.82)によると、ラテン語の古文書における冒頭部は一人称タイプと三人称タイプの2つが考えられるという。前者はTALIS, Dei gratia Francorum rex... mandamus (某, 神の恩恵によりフランク族の王は, ...命ずる)あるいはEgo TALIS notum facio quod vendidi (余, 某は余が売却したことを知らしめる)のような表現で始められ、後者はNotum sit omnibus quod TALIS fecit (某が行なったことを皆人に知らしむべし)で始まる。Monfrinは受信者に関する表現について触れていないが、これはpraesentibus et futuris (今いる者たちと後の者たちに)と述べられるのが一般的だったようである。証書の冒頭に記される発信者と受信者の表現については、シャンパーニュ伯の尚書局とクレルヴォー修道院の文書を分析すると、細かい個別的な文型特徴はさておき、次の4つの文型タイプに大きく分類されることがわかる。

I. NOTUM FACIO型

	伯尚書局文書 作成年	クレルヴォー文書 作成年
notum facio pr(a)esentibus et futuris quod...	1183,1184,1186, 1187,1188,1190, 1194,1196,1199	
notum facio omnibus tam presentibus quam futuris quod...	1191,1200	
notum facio tam presentibus quam futuris quod...	1187	
notum facio universis quod...	1193	
notum facio quod...	1198	

表 3

Ⅱ. NOTUM FIERI VOLERE型

	伯尚書局文書 作成年	クレルヴォー文書 作成年
notum fieri volo tam futuris quam presentibus quod...	1199,1199,1199	

notum fieri volo presentibus et futuris quod...		1150
notum fieri volumus universis praesentibus pariter & futuri quod...	1193	
notum fieri volo tam presentibus quam futuris quod...		1147-58
notum fieri volumus posteritati nostre quod...		1147
omnibus tam presentibus quam futuris notum fieri volo quod..	1198	
omnibus presentibus et futuris notum fieri volo quod...	1205	

表 4

Ⅲ. NOTUM SIT型

	伯尚書局文書 作成年	クレルヴォー文書 作成年
notum sit fratribus nostris tam Cluniacensibus quam illis de Clara Valle quod...		1122-35
notum sit omnibus tam presentibus quam futuris quoniam...		avant 1162
Notum sit omnibus tam futuris quam presentibus quod...		avant 1152

表 5

Ⅳ. NOTIFICETUR型

	伯尚書局文書 作成年	クレルヴォー文書 作成年
notificetur posteritati nostre quod...		1147
notificetur et presentibus et futuris quod...		1151

表 6

伯尚書局とクレルヴォー修道院の文体的相違は明らかである。伯尚書局では一人称タイプが圧倒的に優勢であるのに対して、クレルヴォー修道院の文書では三人称タイプが数多く見られる。シャンパーニュ伯の文書では、伯爵が能動的に事態に働きかけながら伝達を行なうためであろうか、notum facio（知らしめる）、notum fieri volo（知らしめたい）のように直説法一人称単数形で文書の導入が行なわれ、伯爵が事態に積極的に関与し、主体性をそこに読み取ることができよう。一方、クレルヴォー修道院の文書では事態が受動的に把握され、notum sit（知らしむべし）あるいはnotificetur（知らせる）という三人称単数形で証書が記録され、発行人は事態の単なる証人に過ぎないのである。さらに言うならば、伯尚書局において最も頻度の高いnotum facio, notum fieri volo型の文型では、

必ずその直前にEgo, TALIS,... (余, 某は) という下りが記されており, 証書の発行人が冒頭で明らかにされる。これに対して, クレルヴォーの文書に特徴的なNotum sit, Notificeturの表現はいずれも証書の冒頭に現れ, 証書の発行人は後にならないと明確にされず, 言わば, その人物は事態の客観的な証人として, 印を押すためにだけ証書の中に導入されたように感じられる。両者の文型はこうした事態の把握の仕方の違いを表していると言えるのではあるまいか。

[3] Notificetur et presentibus et futuris quod ego Theobaldus, Blesensis comes,... confirmo Clarevallensi monasterio quicquid Hugo Trecensis comes, avunculus meus, dedit ei..., sigilli mei impressione signavi et... (内容: 伯父トロワ伯Huguesによるクレルヴォー修道院への贈与をブロワ伯チボーが確認, 1151年作成)

[4] Notum sit omnibus tam futuris quam presentibus quod ego Theobaldus, Blesensis comes,... dedi Clarevallensi monasterio pro remedio anime mee... sigilli mei impressione firmavi et confirmavi in perpetuum. (内容: 伯父トロワ伯Huguesによるクレルヴォー修道院への贈与について, ブロワ伯チボーが自らの権利を確認)

伯尚書局の文書では, 一人称タイプではあるが, 単数形 volo の代わりに複数形 volumus の用いられた証書が2件ある。前者はサンス大司教, 後者はSaint-Quiriace参事会教会の主席司祭が発行者である。

[5] Guido Dei gratia Senonensis archiepiscopus; omnibus ad quos litterae praesentes pervenerint, in domino salutem. Notum fieri volumus universis praesentibus pariter & futuris, quod... (1193年)

[6] Gaufridus, Dei gratia ecclesie Beati Quiriaci decanus, totumque capitulum, universi presentibus et futuris presentes litteras inspecturis sive auditoris, salutem in Domino. Universitati vestre notum fieri volumus quod... (1204年)

発行者に関しては以上見てきたように, 大きく4つの文型タイプが観察される。これに対して受信者はpresentibus et futuris型とその変異形(たとえばtam presentibus quam futuris等)あるいは類似表現(posteritati nostre等)が圧倒的多数を占めていると考えてよい(表3から表6参照)。このような表現をとっているのは, 証書という伝達形式が「それを目にする不特定多数の現在と未来の人々」に向けられており, 既に触れたように, その方向性が発信者によって一方的に定義されるためと思われる。

Ⅲ. 2. ラテン語文献から古フランス語文献へ

ところでラテン語文書にみられる上記の発信者と受信者の表現が, そのまま古フランス語に受け継がれたと断言するのは, 実際のところ, その中間にあった歴史的経緯を無視した考え方である。そもそも中世においては, ラテン語文献と古フランス語文献は常に並行して作成され続けたのであって, ラテン語文献が古フランス語文献に時の流れとともに通

時的に進化を遂げたのではない。証書はラテン語と古フランス語の間で一種の二重言語併用状態にあったのであり、そうした状況が社会言語学的に機能していた地域があったことも知られている。たとえばシャンパーニュ南東部のChaumontやLangresといった都市では、領主や主席司祭のもとで作成された証書は古フランス語で書かれたものが多い。ところが、Langresの町の人々は教区法務員(official)からも認証を受けており、その結果、Langresの救済院(l'Hospice)の古文書は全てラテン語で記録されたのだった⁸⁾。

このようにラテン語の証書が発給され続ける一方で、古フランス語の証書が登場してきたわけであるが、二重言語併用は次の文書にも、はっきりと見てとることができよう。年代の記録がないために、12世紀の後半に作成されたとだけ推定されるその文書は、フランス北部のアラス(Arras)にあるSaint-Vaast修道院がBernayで徴収していた地代を記録したものである。末尾にも述べられているように、そこではラテン語の固有名詞が古フランス語の文脈の中に混在している。

[7] a Sanctus Vedastus et si parconier. le quarte part. de co a
 Sanctus Vedastus les trois pars... et Iohannes Crolles et si parconier
 les dex.... Co escrit Pieres dEstrees moitié romanz moitié latin. ⁹⁾

発信者の表現をみると、12世紀末にアラス近郊のHaute-Avesnesで作成されたと思われる文書の冒頭はCou sacent cil ki sunt et ki auenir sunt que... (今いる者と後の者たちは以下のことを知るべし) という三人称タイプの文型で始まる¹⁰⁾。1204年2月にDouaiで発給された証書も同じく三人称文型で始まる。Co sacent tot cil qui ces letres uerront. que... (これらの書状を見るであろう全ての者は以下のことを知るべし) ¹¹⁾。GYSELING (1949)の史料を見る限り、三人称タイプに代わって一人称タイプの文型が初めて現れるのは、Termondeの女領主Mathildeがフランドル・エノー女伯のJeanneと奴隷についてCourtraiで取り交わした1221年7月23日付けの文書においてである。

[8] Jo Mehaus dame de Tenremonde fas a sauoir a tous caus qui ces
 letres uerront que... (私Termonde領主Mathildeはこれらの書状を見る者
 全てに知らしめる...) ¹²⁾

ところでGYSELING(1949)を調べるとすぐに気づくことであるが、1220年代に古フラン

⁸⁾ MONFRIN Jacques (1968) "Le Mode de tradition des actes écrits et les études de dialectologie", *Revue de Linguistique Romane* 32, p.29-30. 中世末期の国王尚書局においても同様の二重言語併用がみられた。Serge Lusignanはその公文書の注記(notae)に現れる俗語とラテン語の関係を見事に分析している。LUSIGNAN (1995)を参照
⁹⁾ GYSELING Maurits (1949) "Les plus anciens textes français non littéraires en Belgique et dans le Nord de la France", *Scriptorium* 3, p.191
¹⁰⁾ *ibid.*, p.192. 北フランス最古の非文学文献を分析する場合、おそらくCAROLUS-BARREの*Les plus anciennes chartes en langue française* (1964)は重要な参考文献に違いない。しかしながら今回の論考ではそれを参照するだけの時間的余裕がなかった
¹¹⁾ *ibid.*, p.195
¹²⁾ *ibid.*, p.199

ス語で作成された公文書は、その全てがTournai, Mons, Douai等のベルギーの中世都市とSaint-Quentin, Arras, Saint-Omer等のピカルディー地方の町で発給されている。教会関係者がラテン語で文書を作る一方、11世紀から12世紀前半にかけて、慣習法文書(chartes de franchises)を賦与されて発展を遂げたベルギーと北フランスの中世都市では、ブルジョワ層が徐々に形成され、その権利が次第に拡大していく過程で古フランス語の文献が生み出されてきた。こうした歴史的な事実と言語学的にも注目し得る¹³⁾。初期の公文書に現れる古フランス語は、このようにして、当初から教会関係者のラテン語に対抗するための、在俗の公用語としての社会言語学的機能を担っていたと仮定できよう。13世紀シャンパーニュ南部の古フランス語で書かれた公文書が直接に受け継いだと考えられるのは、こうしたベルギーと北フランスにおける慣習法文書の伝統だったのではないだろうか。

Ⅲ. 3. シャンパーニュ南部の証書

Ⅲ. 3. 1. 発信者と受信者の文型

ラテン語の文書に最も頻繁に現れる文型である一人称型のnotum facioと三人称型のnotum fieri volereは、古フランス語の証書では、表7のような6つの文型タイプによって表現される。100例の文書のうち76例がこの6つのタイプのいずれかを利用している。

文型タイプ	頻度
1. JE FAIS SAVOIR A TOUZ CES QUI	(23)
2. JE FAIS A SAVOIR A TOUZ CES QUI	(25)
3. NOUS FAISONS SAVOIR A TOUZ CES QUI	(7)
4. NOUS FAISONS A SAVOIR A TOUZ CES QUI	(6)
5. JE... ET JE... FAISONS SAVOIR A TOUZ CES QUI	(10)
6. JE... ET JE... FAISONS A SAVOIR A TOUZ CES QUI	(5)

表7 ¹⁴⁾

3と4のタイプは発行人が一人の人物であるのに、一人称複数形が用いられた例である。このタイプは全部で13件あるが、そのうち8例はチボー4世あるいはチボー5世が発給した証書である。しかもその8件の中にはシャンパーニュ伯尚書局で作成されたと思われる

¹³⁾ MONFRIN (1968) *op. cit.*, p.29, PFISTER Max (1973) "Die sprachliche Bedeutung von Paris und der Ile-de-France vor dem 13. Jahrhundert", *Vox Romanica* 32, p.227-229および斎藤綱子(1992)『西欧中世慣習法文書の研究—「自由と自治」をめぐる都市と農村—』, 九州大学出版会, p.3-4
¹⁴⁾ 大文字表記は代表形を表し、実際には種々の綴り字の変異が観察される
(例 JE → Ge, Je, Gié)

5つの証書のうちの4つが含まれている(文献31,76,83,84)。シャンパーニュ伯の発行した証書は我々の資料体の中に全部で15件ある。従って、その約半数(=8件)の文書において発行人は一人であるが、一人称複数形NOUSで記されていることになる。あたかも伯の証書ではこれが慣例になっていたかのごとくである。シャンパーニュ伯の文書から3例だけを挙げておく。

[9] Nos, Thiebauz, par la grace de Dieu rois de Navarre, de Champaigne et de Brië cuens palazins, faisons savoir a-touz ces qui...
(チボ-4世(1247年), 文献7)

[10] Nous, Thiebauz, par la grace de Dieu rois de Navarre, de Champengne et de Brië cuens palazins, faisons a savoir a touz çaus qui...
(チボ-5世(1269/70年), 文献80)

[11] Nous, Thiebauz, par la grace de Dieu rois de Navarre, de Champengne et de Brië cuens palazins, faisons savoir a-touz çaus qui...
(チボ-5世尚書局(1270年), 文献84)

3と4のタイプに属する残りの5例の証書は、2件がヌヴェール・オセール・トネール伯のEudesとMahaut(文献26,37)により、1件はブルゴーニュ公Hugues4世(文献55)によって発行された。13世紀のシャンパーニュ地方南部においては、伯爵や公爵は自らを証書の中で、NOUS, TEL, FAISONS (A) SAVOIRと記録させる傾向が強かったと言いきよう。残る2例を挙げておく。それぞれプレヴォテの監督者と主席司祭の発給した証書である。

[12] Nos, Pierres Gaste Aveinne, garde de la prevoté de Vitri, fasons savoir a touz ces qui... (Vitry-en-Perthoisのプレヴォテの監督者Pierre(1263年), 文献45)

[13] Nos, Wiartz, deiens de la crestianté de Bar sor Seigne et curez de ce meismes leu, faisons a-savoir a-toz ces qui... (Bar-sur-Seineの主席司祭 Wiart(1268年), 文献68)

ラテン語文献において一人称単数の代わりに複数形を用いていたのは、サンス大司教とSaint-Quiriaceの主席司祭であった。ラテン語文献では教会権力が、一方、古フランス語では主に伯爵や公爵が、この複数形nos, nousを用いていたことになる。

ところで、表7を観察するとFAIRE SAVOIR A TOUZ CES QUI...という一人称文型がFAIRE A SAVOIR A TOUZ CES QUIと拮抗しており、両者をあわせると100例中の76例にのぼる。それほどこの表現は定着していたわけだが、これを年代的に調べてみると、1266年以前に作成された59件の証書において、FAIRE SAVOIRは24例、FAIRE A SAVOIRは20例であり、1266年以降の41件ではFAIRE SAVOIRが16例、FAIRE A SAVOIRが18例みられ、年代を経ても両者の力関係は変化していないことがわかる。FAIRE A SAVOIRが現れる証書の作成地は、南西部から南東部に広く分散しており、地理的な変異とも考えられない。ただし、伯尚書局の5件の証書にFAIRE A SAVOIRが一例もみつからないのは興味深い。

筆者はKAWAGUCHI(1994)の中で、幾つかの方言変異と考えられる綴り字を伯尚書局が回

避する傾向のあることを指摘したが¹⁵⁾、FAIRE A SAVOIR型の不在も同じ傾向に依るのかもしれない。

以上述べた文型以外に表7のタイプに類似する文型変異として次のようなものがある。

文型タイプ	頻度
FAIRE (A) SAVOIR A TOUZ	(7)
FAIRE SAVOIR A CES QUI	(2)
FAIRE SAVOIR ET TOUZ CES QUI	(1)
FAIRE (A) SAVOIR QUE	(2)

最初の3つの文型は、FAIRE (A) SAVOIR A TOUZ CES QUIという76%を占める優勢な文型の単なる変異と考えられるが、最後のFAIRE (A) SAVOIR QUE型は説明を要する。

[15] A noble home e sage monseigneur Dreue de Gaillart, Guillaumes des Barres, chevaliers, sires de Dian, saluz e boenne amour. Je vous faz a savoir que... (Diant領主Guillaume des Barres(1265年), 文献53)

[15]の証書はGuillaume des Barres氏がMisy-sur-Yonneに所有していた封地を従弟のJeanに贈与し、その権利を放棄したことを述べた文書であるが、この証書の受信者は他の大部分の証書のように、当該書状を目にする不特定多数の人々ではなく、具体的な特定の人物、すなわち、当該封地の本来の所有者たるDreux de Jaillac氏である。そのためにA TOUZ CESの表現が記載されなかったわけである。では次の文書はどうであろうか。

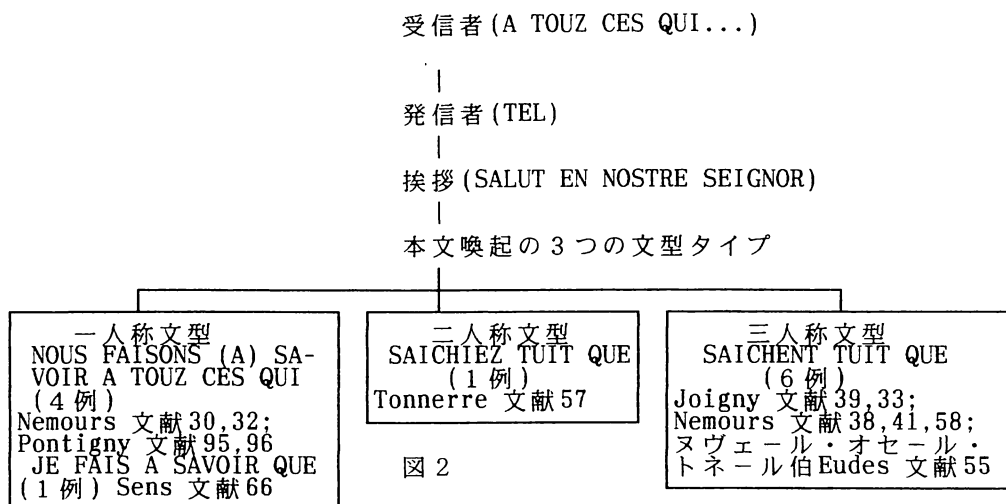
[16] A-touz gaus qui ces presentes lettres verront, je, Jehanz, chevaliers, sires dou Plaissie, salut en Nostre Seigneur. Je fais a savoir que... (Plessis-Saint-Jean領主Jean 2世(1267年), 文献66)

[16]では冒頭に不特定多数の受信者に対する表現が配置されている。換言するならば、ラテン語で書かれた証書の有していた伝統的な発話モデルが、ここでは意識的に組み換えられているのである。同じような発話モデルの変形は全部で12例みつける。

本論の冒頭でも提示した典型的な言語伝達モデルの中の「発信者→受信者」の順序を、「受信者←発信者」のように入れ換えることによって、発信者は発話の到達点である受信者を予め想定される要素としてテーマ化しようと企図したのかもしれない。このような文型の転調は、重要な統辞的变化を証書の冒頭にもたらすことになった。

文頭に受信者を配置することにより文体的な変奏を実現した文書を分析してみると、その構造を図2のように表すことができる。

¹⁵⁾ KAWAGUCHI Yuji (1994) *Recherches linguistiques sur le champenois au moyen âge: phonétisme I*, Université de Shizuoka, p.56-57およびp.68



この文型の組み換えに必ず挨拶表現が伴うのは興味深い現象である。

ところで、GYSSSELING(1949)に集められたベルギーと北フランスの最古の証書の中には受信者に関する表現A TOUZ CES QUI...で始まる例は一つもない。何よりも注目すべきは、これらの文書が全てシャンパーニュ地方の南西部にあるNemours, Sens, Joigny, Pontigny, Tonnerreの町々に集中して現れるという事実であろう。同じく南西部の都市であるサンスの大司教とプロヴァンのSaint-Quiriace教会の主席司祭の発給したラテン語の証書[5]と[6]には、ともにin domino salutemとsalutem in Dominoという挨拶の表現が記されてはいるが、「発信者→受信者」の順序はそのままである。いずれにしても1260年にはシャンパーニュ南西部から、ラテン語で書かれた文書の構成を踏まえながらも、その発話要素の組み換えを行なった証書が誕生していたという事実は疑う余地がない。

実はこのスタイルこそ1280年代以降にシャンパーニュ地方の公文書の特徴となった、バイイ発給書状(lettres de baillie)に受け継がれた形式なのである。バイイ書状がこのスタイルを用いたのは単なる偶然とは思えない。そもそもバイイ書状は、在地領主や教会権力者の発給した証書に対抗する形で現れてきており、そのために既存のスタイルとは異なる形式を独自に打ち出す必要があったと考えられるからである¹⁶⁾。

本文を喚起する表現は一人称型から三人称型まで現れるが、このうち一人称型がシャンパーニュ南部全域で最も広く定着していた文型であることはすでに見た通りである。三人称文型は、ラテン語文献においても、NOTUM SITとNOTIFICETURの2つの定着した表現があったようであるが、これらの非人称構文は、フランス語文書に見られるSAICHENT TUIT QUEの直接のモデルとは考えられない。一方、12世紀末に北フランスのアラス近郊で作成された証書にはCou sacent cil ki sunt et ki auenir sunt que...という表現が初めて

¹⁶⁾ BAUTIER (1958) *op.cit.*, p.35-42およびp.70-75

現れている。この文型は後に北フランスに広く定着していったが（Ⅲ．２．を参照），これこそ SAICHENT TUIT QUE型の直接のモデルであると筆者は考えたい。

挨拶表現と三人称文型による本文喚起を持ちながらも，次の２つの例では「発信者→受信者」の順序が保持されている。

[17] Je, Estesnes de Laferté sor Aube, bailliz de Chaumont, a touz ces qui verront ces letres, salut. Saichent tuit cil qui ces presentes lettres verront que... (Chaumontのバイイ(1248年), 文献8)

[18] Thiebauz, par la grace de Dieu rois de Navarre, de Champaigne et de Brië cuens palatins, a touz ces qui ses letres verront, saluz. Saichent tuit cil qui sont et qui a-venir sunt, que... (Troyesの教区法務員(official)(1264年), 文献46)

[17][18]はともにシャンパーニュ地方の南東部で作成された証書であるが，これとほぼ同じ形式を持つラテン語で書かれた証書が，すでに同じ南東部の都市ラングル(Langres)の司教Godefroiによって発行されている。

[19] In nomine sancte et individue Trinitatis. Godefridus, Dei gratia Lingonensis episcopus, omnibus fidelibus tam futuris quam presentibus ad quorum noticiam littere iste pervenerint salutem. Sciatis quod... (クレルヴォー修道院文書(1142-1146年))

ところで，[18]の古フランス語文献は冒頭の２行がラテン語で記載されているが，そのラテン語は面白いことに，古フランス語で始まる冒頭とは異なり，「受信者←発信者」という順序で記され，ラテン語の証書における無標(non marqué)の発話形式，「発信者→受信者」がやはり組み換えられているのである。

[20] Ominibus presentes litteras inspecturis, officialis Trecensis salutem in Domino. Noveritis nos tales litteras vidisse et de verbo ad verbum legisse in forma que sequitur: (上記[18]の冒頭のラテン語)

上記以外の文型は３例しかない。それについても検討しておく。

[21] Gié, Droës, sires de Triangnel, a touz çaus qui ces letres verrunt salut an Nostre Seigneur. Gié faz queneue chose a touz que... (Trainel領主Dreux(1253/54年), 文献14)

FAIRE CONNUE CHOSE A TOUZ QUEという文型はこの一例だけである。

[22] Thiebauz, par la grace de Deu rois de Navarre, de Champaigne e de Brië cuens palazins, au bailli de Chaumont, au majeur e au prévost de Bar sur Aube, salut. Nous vous mandons e commandons que... (チボー５世(1258年), 文献22)

[22]の文書の中で，シャンパーニュ・ブリー伯チボー５世は，Bar-sur-AubeのSaint-Nicolas 修道院の修道女たちの財産（具体的には館と馬や荷車），および彼女たちの安全

が10年間にわたって保障されるようにChaumontのバイイとBar-sur-Aubeのメールとプレヴォに命じている。残念ながら同種の文献が他にないため、この文型が個別的なものなのか、それとも財産管理を命じた証書に特有の表現なのか分からない。

[23] Je, Gautiers, chevaliers, sires de Nemos et marichaus de France, a touz caux qui verrunt ces presentes salut an Nostre Segnour. Comme je aüssé /XXXIII/ soz de cens de paresis qui... (Nemours領主Gautier (1265年), 文献59)

100件の証書のうち「～を知るべし」の下りが欠落しているのはこの一例のみである。

Ⅲ. 3. 2. 受信者の定義文

「受信者の定義文」とは、A TOUZ CES QUIの後に続く関係詞節のことである。全体としては、表8のように、2つの大きな文型と他の少数のタイプに分類される。

文型タイプ	頻度
1. QUI O V 型 QUI CES PRESENTES LETRES VERRONT, QUI CES PRESENTES LETRES VERRONT ET ORRONT,	(33) (12)
2. QUI V O 型 QUI VERRONT CES (PRESENTES) LETRES, QUI VERRONT ET ORRONT CES PRESENTES LETRES,	(30) (13)
3. QUI V O ET V 型 QUI VERRONT CES PRESENTES LETRES ET ORRONT,	(1)
4. A TOUZ QUE	(5)
5. A CES QUI SUNT ET QUI SERONT QUE	(2)
6. その他 a toz caux qui sont et qui seront qui cez letres verront (文献1) et toz ces qui verrunt et orrunt ces presentes letres que (文献20) au bailli de Chaumont, au majeur e au prevost de Bar sur Aube, (文献22) Saichent tuit que (文献29)	(4)

表 8

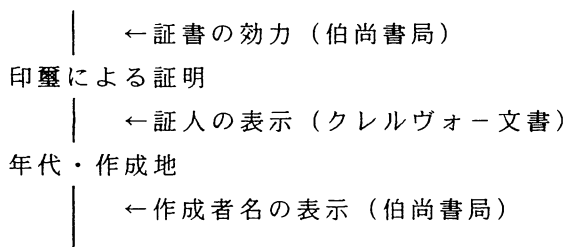
QUI O V 型(主格の関係詞+直接目的語+動詞)の語順は、Lucien Fouletがすでに指摘しているように、関係詞構文において頻繁にみられる文型であり、主文には稀にしか現れない(FOULET 1928, p.316; MARCELLO-NIZIA 1995, p.58)。

表8では、この古フランス語に特有のQUI O V型が、後に中仏語を経て現代フランス語において一般化したQUI V O型と、ほぼ同じ割合で現れている。13世紀のシャンパーニュ南部において、両者はすでに競合し合い、進化しつつあったと仮定できる。

IV. 証明手続きと年代・作成地

IV. 1. ラテン語の公文書

証明手続きを記録した部分から証書の末尾の年代・作成地の記載までは、一般に次のような流れで表記されることが多い。



しかしながら、これらの形式が全ての文書において慣行化していたわけではない。Theodore Evergatesによると、シャンパーニュ伯領では13世紀にはいって、ようやく印璽による証書の証明が公式化された (EVERGATES 1993, pp.xxi-xxii)。

伯尚書局で作成された証書のいくつかには証書の効力を表す表現が現れる。その全ての例を挙げておく。

ut ratum sit et inconcussum	{1184}
ut ratum permaneat	{1183, 1188}
ut notum permaneat	{1184, 1196}
ut ratum & inconcussum maneat	{1198}

ratum <<constant>>とinconcussum <<ferme>>は、ともに証書の実効力が「確かで、安定している」ことを示すために用いられている。

クレルヴォー文書は伯尚書局とは異なり、証書の実効力を強化するために、複数の証人を立てている点が注目される。次のような表現が現れるのはそのためである。

Hujus rei testes sunt...	{1143, 1151, 1155, 1147-58, 1162}
Testes sunt hujus cognitionis...	{1150}
Testes ejus sunt...	{1144-53}
Testes sunt...	{1140-63}

年代表記の後に証書の作成者が記載されるのは伯尚書局に特有の現象である。この部分の形式はかなり公式化しており、一般に Data per manum 人名1 cancelarii. Nota 人名2 の形式をとる。尚書係 (= 人名1) の手によって授与されたその文書の起草者は、人名2であったと考えられる。こうした所謂 notae の形式による起草者の表示は、そのまま古フランス語で書かれた伯尚書局の文書にも受け継がれた (COQ, 1988, AVANT-PROPOS par Jacques Monfrin, p.IX を参照)。

以上の3箇所を除くと、文書の末尾に関しては、伯尚書局とクレルヴォー文書の間には形式上の類似性がみられる。まずは、印璽による証明を記載するための文型を全て挙げることにしよう。資料中の(ク)はクレルヴォー修道院文書を指し、それ以外は全て伯尚書局の文書である。

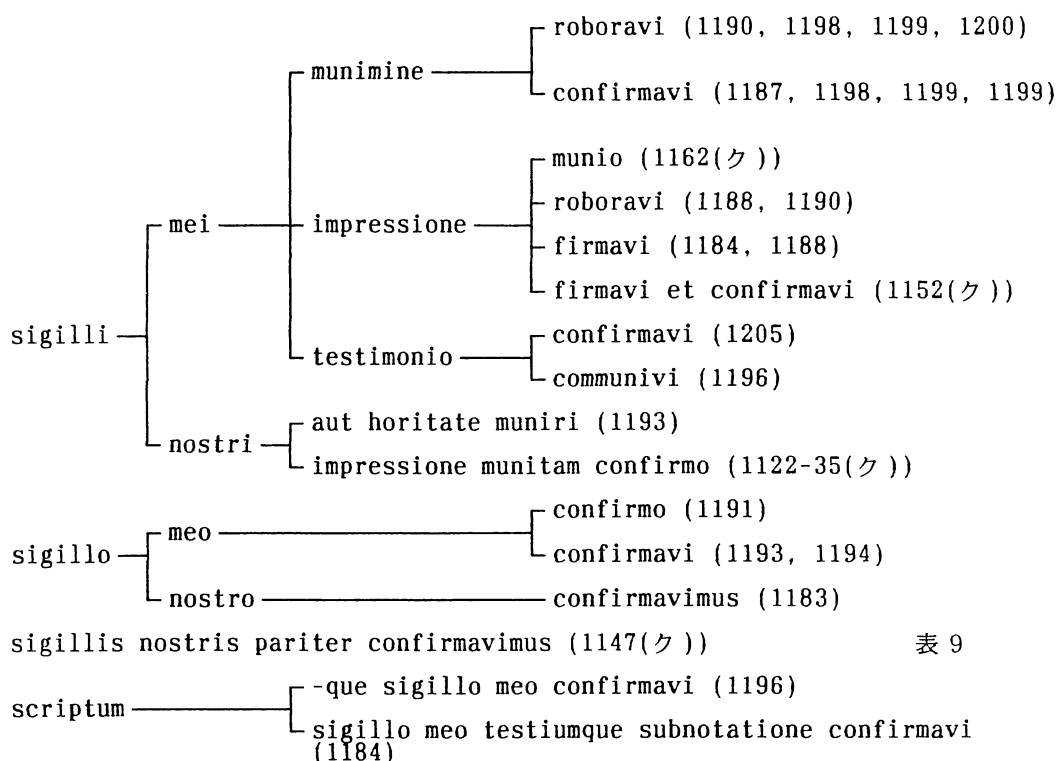


表 9

表 9 から分かるように、クレルヴォー文書ではこの形式が踏襲されない文書が多い。伯尚書局では sigilli mei/nostri あるいは sigillo meo/nostro による表現が圧倒的多数を占める。中でも前者の属格表現は後者の奪格表現よりもずっと頻度が高い。

証明手続きを表すこうした多様な文型の変異とは対照的に、年代・作成地の表記は両方の文献において変異形が少ない。年代は詳細な場合でも月名までであり、日時を記載した証書はほとんどない。作成地の表記は慣例ではなかったためか、必ずしも記録されていない。

文型タイプ	作成年
anno Incarnati Verbi	(1184, 1186, 1193, 1194, 1196, 1198, 1199)
anno ab Incarnatione Domini	(1147(ク), 1150(ク), 1151(ク), 1154(ク), 1155(ク))
anno Verbi Incarnati	(1188, 1190, 1190, 1196)

anno Domini	(1184, 1200, 1205)
anno	(1193, 1198)
anno Incarnationis Domini	(1199)
anno... ab incarnatione Domini	(1191)
anno Dominice Incarnationis	(1187)
anno gratie	(1204)

表 1 0

クレルヴォー文書に特有の anno ab Incarnatione Domini という形式は、伯尚書局では一例 (anno... ab incarnatione Domini (1191年)) しか現れない。

IV. 2. ラテン語文献から古フランス語文献へ

前節Ⅲ. 2. と同様に、ここでも GYSSELING (1949) に記載された古フランス語の証書を分析したい。印璽による証明は 1219 年に Quincy で作成された文献¹⁷⁾ より前は何の記録もない。ただし 1206 年 4 月に Tournai で発給された文書には以下のような下りがある。

[24] Et por cou que ce soit ferme chose et estaule si en est fais
cyrographies et liures en le main des eskieusins de Saint Brisse
Si comme Jakemon Warison...

印璽の存在はともかくも、[24]の文中に cyrographies とあることから、Saint-Brice のエシュヴァン (échevins) によって証書に署名がなされたことは間違いあるまい。またその直前の表現 por cou que ce soit ferme chose et estaule (これが確たる内容のものとなるように) は、ラテン語文書にみられた ut ratum sit et inconcussum をほぼ逐語的に古フランス語に翻訳した表現であり、証書の効力を示している。この同じ文書には作成年として以下の表現が記載されている。

[25] lan del incarnation Ihesu Crist .m.cc. et .vi. el mois de autil.

GYSSELING の史料を信頼するならば、古フランス語の証書において印璽による証明が確認されるのは 1219 年からである。証書の効力と年代の表現について、ラテン語の証書とこの北フランスとベルギーの文書の間には、明確な連続性と相互関係があり、この慣行がシャンパーニュ南部の証書にも継承されることになる。

¹⁷⁾ GYSSELING, *op.cit.*, p.197: 印璽による証明を記した箇所は次の通りである。
et por co ke je uuel ke co soit ferme et estaule je le conferme
de mon sel. et co fu fait a Quinci.

Ⅳ. 3. シャンパーニュ南部の証書

Ⅳ. 3. 1. 証書の効力

証書の効力に関する表現は表 1 1 の 6 つのタイプに分類できるであろう。

文型タイプ	頻度
1. POR CE QUE 型	(38)
POR CE QUE CE SOIT FERME CHOSE ET ESTABLE	(9)
POR CE QUE CE SOIT FERME ET ESTABLE	(7) ¹⁸⁾
POR CE QUE CESTE CHOSE SOIT FERME ET ESTABLE	(7)
pour ce que toutes choses e les convenances dessus dites soient formes e estables	(3)
POR CE QUE CES CHOSES SOIENT FERMES ET ESTABLES	(3)
POR CE QUE TOUTES CES CHOSES SOIENT FERMES ET ESTABLES	(3)
por ce que ce soit forme chose a toz jorz	(1)
por ce que ceste chose soit plus ferme	(1)
por ce que ceste chose soit certaine	(1)
por ce que ceste chose soit plus creable	(1)
por-ce que ceste chose soit plus seure et plus certainne	(1)
pour ce que ceste chose soit plus seure et plus estauble et plus ferme	(1)
2. QUE 型	(5)
ET QUE CESTE CHOSE SOIT FERME ET ESTABLE	(3)
ET QUE CE SOIT FERME ET ESTABLE	(2)
3. POR QUE 型	(3)
POR QUE CE SOIT FERME CHOSE ET ESTABLE	(3)
4. EN TESMOIGNAGE DE 型	(40)
EN TESMOIGNAGE DE LA QUELE CHOSE	(21)
EN TESMOIGNANCE DE CESTE CHOSE	(6)
EN TESMOIGNAGE DE CESTE CHOSE	(5)
EN TESMOIG DE CESTE CHOSE	(4)
EN TESMOIGNAGE DE CES CHOSES	(3)
en tesmoignance de toutes ces choses devant dites	(1)
5. その他	(7)
por totes ces chose tesmoignier (文献3)	
volons que ces lettres leur valent jusqu-a deis anz (文献22)	
Et por-ce que cete aumone soit plus ferme et plus etable (文献43)	
pour ceu que ces chosses ne soient rapeles des hors enn-avant ne par moi ne par autre (文献47)	
por-ce que ce qui an-sera fait vaille et teigne a toz jorz (文献55)	
an remembrance de la quelle chose (文献58)	
an cui tesmoignaige (文献68)	
6. 記載なし	(7)

表 1 1

¹⁸⁾ 文献番号 1 のチボー 4 世による特許状の中に記されている por ce que ce ferme et estable は明らかに soit の書き忘れであろう

表 1 1 からわかるように、シャンパーニュ南部の証書においては、93%の割合で証書の効力に関する記述がみられる。従って、この事項は証書作成に際して、おそらく慣例になっていた事項と考えられる。特にPOR CE QUE型とEN TESMOIGNAGE DE型の2つの文型が全体の78%を占めており、接続詞句の前者と前置詞句の後者が拮抗していた。

IV. 3. 2. 印璽による証明

印璽による証明の表現もやはり6つの文型タイプに分類できる。

文型タイプ	頻度
1. S V O 型	(70)
1.1. S V O PrepN 型	(62)
J-AI SEELES CES LETRES DE MON SEEL	(17)
NOUS AVONS SEELES CES LETRES DE NOSTRE SEEL	(13)
J-AI MIS MON SEEL EN CES LETRES	(6)
NOUS AVONS FAIT SEELER CES LETRES DE NOSTRE SEEL	(6)
J-AI MIS MON SEEL A CES LETRES	(6)
J-AI FAIT SEELER CES LETRES DE MON SEEL	(4)
J-AI FAIT METRE MON SEEL EN CES LETRES	(2)
NOUS AVONS MIS NOS SEES EN CES LETRES	(6)
j-ai fait ces lettres seeler de mon seel	(1)
NOUS AVONS FAIT METRE NOSTRE SEEL EN CES LETRES	(3)
nous avons seellé ces lettres	(1)
1.2 S V PrepN O 型	(8)
J-AI SEELES DE MON SEEL CES LETRES	(2)
J-AI MIS EN CES LETRES MON SEEL	(3)
nous avons de noz seaux saeles ces lettres	(1)
je ai mis a ces presantes lettres mon seel	(1)
j-ai en ces presentes lettres mis mon seel	(1)
2. V S O 型	(8)
AI JÉ SEELEES CES LETRES DE MON SEEL	(3)
Ai je fait ces lettres seelees de mon seel	(1)
AVONS NOUS SEELEES CES LETRES DE NOSTRE SEEL	(2)
AVONS NOUS FAIT SEELLER CES LETRES DE NOSTRE SEEL	(2)
3. S O V 型	(3)
J-AI CES LETRES SEELEES DE MON SEEL	(3)
4. O S V 型	(1)
et ces lettres j-ai fait seelees de mon seel	(1)
5. その他	(12)
En ce temoig je par mes lettres (文献12)	
nous avons confirmé ces presentes lettres par lou guarnissement de noz seals (文献25)	
je ai baillé ces presanz leitres seielees de mon seel (文献29)	
a mis son seel an ces presentes lettres (文献43)	
gié en-ai bailees a ces presantes lettres mon seel (文献47)	
il miest son sael an ces presantes lettres (文献57)	
gié les ai confermees de mon seel (文献67, 75, 77)	
nos avons penduz nos saés en cest present escrit (文献73)	
nous leur en avon doné noz lettres seelees en nostre seel (文献84)	
je en ai dounees ces presentes lettres ouvertes... seelees de mon propre seel (文献86)	
6. 印璽なし (文献番号 22, 30, 32, 36, 53, 81)	(6)

表 1 2

100件の証書のうちで、印璽に関する表現がない文書は6件だけであり、当時の公文書において印璽が習慣化していたことは明らかである。印璽による証明が記載されていない6つの証書を全て検討しておこう。

Ⅲ. 3. 1で文献22の受信者表現の特徴について触れた。この文書はチボー5世がバイイとプレヴォに修道女の財産管理を命じたものだが、印璽に関する記述がない。おそらくは、伯領の管理職に対する伯爵からの内部文書の性格を持っていたからかもしれない。

文献30と32にも印璽による証明の記述がない。両文書ともにChâteau-Landonのプレヴォとその印璽保持者が作成した封地譲渡に関する証書である。印璽の証明の代わりに証書作成の時の立会い人が列挙されている点が注目される。

文献36はTrainelの領主Henriが作成した文書で、Vauluisant修道院にマン・モルトとして穀物の贈与が行なわれたことを証明しているが、この書状は以前にトロワで発給され、印璽が押された公式証書の内容を単に確認しているにすぎない。

文献53はⅢ. 3. 1で受信者表現が特異であると述べた。Diantの領主Guillaume氏が従弟に封地を永久に贈与したことをDreux de Jaillac氏に伝えたこの文書は、ある意味で私的な書簡であって、他の証書とは性格が異なっている。

残る一つの文献81では、印璽による証明の箇所に次のような表現が記載されている。

[26] Et des choses devant dites nos li prometons a porter loial garantie envers toutes gens aus us et aus coustumes dou pais, et a ce faire nos obligons nos et nos oirs.
(この地方の慣習と習慣に則って、我々は上記の内容を全ての人に対して忠実に保証することを約束し、我々と後継者もそうするように強制する)

ここでは具体的な慣習法を引き合いに出すことで証書の権威づけが行なわれていると考えられる。「印璽を押す」という事態に対して、シャンパーニュ南部の証書では、作成者が次の4つの文型の間で選択を行なうのが一般的であった。

1. SEELER + LETRES + DE + SEEL
2. METRE + SEEL + EN/A + LETRES
3. FAIRE SEELER + LETRES + DE + SEEL
4. FAIRE METRE + SEEL + EN/A + LETRES

このうち最も頻度が高いのは1と2の文型であり、全体の67%を占める。また1の文型は2よりも倍以上頻繁に用いられていた。3のタイプが次に頻度が高く、しかもNOUS AVONS FAIT SEELER CES LETRES DE NOSTRE SEELという文型は、その現れの全てがシャンパーニュ伯のチボー4世と5世の文書に由来する。シャンパーニュ伯の文書がこの文型を好んで用いていたことは疑いの余地がない。

構文としてはSVO PrepN型とSV PrepNO型が、それぞれ全体の62%と8%を占め、SVOの語順が既に定着していたことを思わせる。それ以外の語順はいずれも少数派である。

IV. 3. 3. 年代の表記

年代の表記法は、ほとんどの場合、以下の3つの文型タイプのいずれかになる。

文型タイプ	頻度
1. L-AN DE GRACE CE FU FAIT EN L-AN DE GRACE... (34) ...EN L-AN DE GRACE... (12) L-AN DE GRACE... (7) CE FU DONE L-AN DE GRACE... (3)	(56)
2. L-AN DE L-INCARNATION CE FU FAIT AN L-AN DE L-INCARNATION NOSTRE SEIGNOR (14) ...AN L-AN DE L-INCARNATION NOSTRE SEIGNEUR (5) CE FU FAIT AN L-AN DE L-INCARNATION (3) CE FU FAIT, ACORDE E OTROIE EN L-AN DE L-INCARNATIO (3) NOSTRE SEIGNOR CE FU FAIT AN L-AN DE L-INCARNATION JHESU CRIST (1)	(26)
3. L-AN NOSTRE SEIGNOR CE FU FAIT AN L-AN DE NOSTRE SEIGNOR (8) ...AN L-AN NOSTRE SEIGNOR (6)	(14)
4. その他 en l-an de grace qui li miliaires coroit (文献 11) Ce fu fait en l-an... (文献 44) ...an l-an que l-am dit (文献 59) Ce fu doné en l-an... (文献 66)	(4)

表 1 3

タイプ1が最も頻度が高いのだが、不思議なことにラテン語文献ではこの表現は一例みつかるとのみであった(anno gratie 伯尚書局 1204年)。一方、タイプ2はラテン語の文書にも広くみられる表現であった。また、ラテン語のanno Dominiを古フランス語に訳したものがタイプ3であると思われる。

結論

I. 発信者と受信者の文型

1. 発信者→受信者型	(83)
最も頻度が高く、ラテン語文献も一般にこの構成をとる 一人称発信者のタイプ	
JE FAIS (A) SAVOIR A TOUZ CES QUI	(48)
JE..ET..JE..FAISONS (A) SAVOIR A TOUZ CES QUI	(15)
NOUS FAISONS (A) SAVOIR A TOUZ CES QUI	(9)
JE FAIS (A) SAVOIR A TOUZ	(7)
JE FAIS SAVOIR A CES QUI	(2)
JE FAIS (A) SAVOIR QUE	(1)
JE FAIS SAVOIR ET TOUZ CES QUI	(1)
2. 受信者←発信者→挨拶→本文喚起型	(12)
シャンパーニュ南西部で1260年以降に見られるようになり、1280年以降にバイイ発給書状(lettres de baillie)のモデルとなった 本文喚起の3つのタイプ	

一人称文型 NOUS FAISONS (A) SAVOIR A TOUZ (CES) QUI	(4)
JE FAIS (A) SAVOIR QUE	(1)
二人称文型 SAICHIEZ TUIT QUE	(1)
三人称文型 SAICHENT TUIT QUE	(6)
3. 発信者→受信者→挨拶→三人称喚起型	(2)
12世紀末から北フランスに見られる文型で、ラテン語の「発信者→受信者」の文型を保持している TEL, A TOUZ CES QUI..., SALUT. SAICHENT TUIT CIL QUE	(2)
4. 上記以外	(3)

II. 受信者の定義文

1. QUI O V 型	(45)
2. QUI V O 型	(43)
3. QUI V O ET V 型	(1)
4. その他	(11)

13世紀シャンパーニュ地方において、すでに古フランス語に特有のQUI O V 型と現代フランス語のQUI V O 型が競合していた。

III. 証書の効力

1. EN TESMOIGNAGE DE 型	(40)
2. POR CE QUE 型	(38)
3. QUE 型	(5)
4. POR QUE 型	(3)
5. その他	(7)
6. 記載なし	(7)

POR CE QUE型の接続詞表現とEN TESMOIGNAGE DE型の前置詞表現の競合。

IV. 印璽による証明

1. S V O 型 S V O Prep N 型 (62) S V Prep N O 型 (8)	(70)
2. V S O 型	(8)
3. S O V 型	(3)

4. O S V 型	(1)
5. その他	(12)
6. 記載なし	(6)

受信者の定義文でも明らかなように、主格の関係詞節でもすでにV O型がO V型と拮抗していた。すなわち当時からS V O型が優勢になっていた可能性は十分に推測される。この印璽による証明の表現を見てみると、もはやS V O型がかなり定着していたことは疑う余地がない。

V. 年代の表記

1. L-AN DE GRACE 型	(56)
2. L-AN DE L-INCARNATION 型	(26)
3. L-AN NOSTRE SEIGNOR 型	(14)
4. その他	(4)

ラテン語文献において稀であったANNO GRATIE型が古フランス語では最も頻度が高くなった(表中のL-AN DE GRACE型)。

引用文献

- 川口裕司 (1994) 「古フランス語の態に関する若干の考察 (代名動詞の用法を中心に)」, 人文論集 (静岡大学人文学部) 44/2, pp.53-83.
 — (1996) 「中世シャンパーニュ南部の公文書における貨幣と土地単位を表す語の言語地理学的意義」, ロマンズ語研究 29 (出版予定).
 斎藤綱子 (1992) 『西欧中世慣習法文書の研究—「自由と自治」をめぐる都市と農村—』, 九州大学出版会.
- BAUTIER Robert-Henri (1958) "L'Exercice de la juridiction gracieuse en Champagne du milieu du XIII^e siècle à la fin du XV^e", Bibliothèque de l'école des chartes 116, 1958, pp.29-106.
 COQ Dominique (1988) *Chartes en langue française antérieures à 1271 conservées dans les départements de l'Aube, de la Seine-et-Marne et de l'Yonne*, Editions du CNRS.
 EVERGATES Theodore (1985) "The Chancery Archives of the Counts of Champagne: Codicology and History of the Cartulary-Registers", Viator 16, pp.159-179.
 — (1993) *Feudal Society in Medieval France. Documents from the County of Champagne*, University of Pennsylvania Press.
 FOULET Lucien (1928) *Petite syntaxe de l'ancien français*, 3^e éd., Librairie Honoré Champion.
 GYSSELING Maurits (1949) "Les plus anciens textes français non littéraires en Belgique et dans le Nord de la France", Scriptorium 3, pp.190-209.
 KAWAGUCHI Yuji (1994) *Recherches linguistiques sur le champenois au moyen âge: phonétisme I*, Shizuoka, Université de Shizuoka.
 — (1995) "Frontière linguistique de la Champagne occidentale au XIII^e siècle", Revue de Linguistique Romane 59, pp.117-130.

- LUSIGNAN Serge (1995) "Ecrire en français ou en latin en pays d'oïl: le cas de la chancellerie royale française au début du XVe siècle", *Parlure, "Ces Mots Qui Sont Nos Mots"*, Mélanges d'Histoire de la Langue française de Dialectologie et d'Onomastique offerts au Professeur Jacques Chaurand, pp.19-30.
- MARCELLO-NIZIA Christiane (1995) *L'Evolution du français, Ordre de mots, démonstratifs, accent tonique*, Armand Colin.
- MONFRIN Jacques (1968) "Le Mode de tradition des actes écrits et les études de dialectologie", *Revue de Linguistique Romane* 32, pp.18-47.
- (1969) "Le latin médiéval et la langue des chartes", *Vivarium* 7/2, pp.81-98.
- PFISTER Max (1973) "Die sprachliche Bedeutung von Paris und der Ile-de-France vor dem 13. Jahrhundert", *Vox Romanica* 32, pp.217-253.
- WAQUET Jean (1950) *Recueil des chartes de l'abbaye de Clairvaux, XIIe siècle, fasc.1*, Archives départementale de l'Aube.

Cambiar de に関するスケッチ

川上 茂信

1

アカデミアの辞書 [4] の *cambiar* の項は、次のように始まっている。

cambiar. (Del galo-lat. *cambiāre*.) tr. Tomar o hacer tomar, en vez de lo que se tiene, algo que lo sustituya. Ú. t. c. prnl., y con la prep. *de*, como intr.
CAMBIAR DE *nombre, lugar, destino, oficio, vestido, opinión, gusto, costumbre*.

つまり、他動詞の語義の中で「*de* を伴って自動詞として用いられる」としているわけで、*cambiar de* + 名詞は他動詞構造と同じ意味で使われているように読める。

また、Moliner [3] も *cambiar* の他動詞の語義「交換する」の中で

(1) He cambiado el [mi, de] puesto con un compañero.

という例文を挙げているが、定冠詞 *el* と前置詞 *de* が同等に扱われている。同じ語の別の語義「別のものに替える」については「他動詞または *de* と共に」となっていて、例文には

(2) Cada nuevo profesor cambia el libro de texto [de libro de texto].

が挙がっていて、こちらでも、*cambiar de* が他動詞構造と同列に置かれている。

このように *cambiar de* + 名詞は、スペインの代表的な辞書において、構文的な観点からすればかなり奇妙な記述をされていることが分かる。仮にこれと他動詞構造との間に意味的な差異が全く見出せないとするならばこのような扱いも正当化されるのかもしれないが、実際には重要な違いが観察される。本稿では、*cambiar de* が他動詞構造に近いという従来の扱いを批判して、*cambiar* が取り得る諸文型 (構造) の可能性の中に、これを整合的に位置付けることを試みる。

2

2.1

高橋 [5]¹、出口 [2] (p.15) に従って、*cambiar de* + 名詞のタイプを A 型構文、他動詞構造を B 型構文と呼ぶことにしよう。

- A 型構文 *cambiar de* + N
- B 型構文 *cambiar* + SN

¹ 現時点で、高橋の論文は参照できていない。本稿でのこれに対する言及は、全て出口 [2] からの引用である。

出口は、A 型構文の *de* の後には限定詞の付かない裸名詞が現われるのに対して、B 型の方には定冠詞、不定冠詞、指示形容詞、所有形容詞を伴った名詞句が現われるという「明瞭な相補性 (p.16)」を根拠に、A 型構文の基底には他動詞構造があるとして、その派生には「擬似編入」というプロセスを考えている。

(3) [[cambiar]_V [imagen]_N]_{VP}

↓

[[[cambiar]_V de imagen]_V]_{VP}

これによって、名詞が「動詞領域内に編入され、あたかも合成動詞に近似した統語的特徴も獲得する」。また、*de* は「動詞に組み入れられるときに得る小辞、または編入名詞をマークする限定詞と考えられ」る。

出口の説は *cambiar* が他動詞として特殊な振舞いをするという解釈であると看做せるが、擬似編入という概念は何故この特定の動詞がそのような特殊性を持っているのかという問いには答えない。また、*de* の機能についても十分に説得的な説明を与えているとは言い難い。A 型構文を他動詞的な基底から派生させる根拠となるのは B 型構文との「相補性」だが、まずこの点から検討していくことにしよう。

2.2

A 型においては *de* の後には限定詞なしの名詞のみが現われる。この点については繰り返し指摘されてきているので、本稿では問題にしない。では、B 型において限定詞のない名詞が現われることはないのだろうか。確かに、出口による事例に基づく調査からは、ほぼそのような印象を受ける。しかし、事例の集積だけでは何かが現われ得ないという証拠にはならない。そこで次のような創作例をネイティブ・スピーカーに見てもらった。

(4) Si quieres dólares, en los bancos cambian dinero.

(5) Creen que esta materia mágica cambia sal en oro.

インフォーマントは 2 人で、以下メキシコ人女性を InfA で、スペイン人男性を InfB で表わす。(4) は 2 人とも OK で、(5) は InfB が OK、InfA は、最初は *esta materia mágica* という表現に引掛りを感じたために定冠詞の有無は問題にできなかったが²、後からそれに注目して、自信はないが *sal* よりも *la sal* の方が良いだろうと答えた。ただし、定冠詞なしの言い方が出来る文脈もあるだろうということだった。もう少し慎重な調査が必要であるにしても、このことから、B 型構文が限定詞なしの名詞を伴うことができるのは間違いない。

また、出口は A 型構文の *de* の後と B 型の直接目的語に同じ名詞が現われることに注目している。彼が挙げている例の中には *cambiar de tema* (A) / *cambiar el tema* (B) のように、一応同じような状況に用いられていると考えて良さそうなものもあるが、その他の名

² *estos polvos mágicos* のような言い方にしないと場面を想像しにくかったようだ。

詞 *vida, actitud, rumbo, aspecto* の場合は、B 型構文の例文は主語が他者の何かを変えるという、A 型では許されない構造を持っている³。

以上の 2 点から、擬似編入という操作を仮に認めるとしても、編入される名詞の「非特定性」だけでは条件として充分ではないということが言える。本稿ではそのようなプロセスを指定せず、出口とは逆のアプローチを取る。つまり、A 型構文は自動詞構文であり、B 型とは最初から異なる構造を持つ。両者が一見交換可能に見え、またネイティブ・スピーカーにもそう感じられるとすれば、それは両者の間に生じ得る概念的差異を実際の言語使用上区別するのが難しい、あるいはそのが必要ないからだ、と考えることにする。

2.3

Cano Aguilar [1] (p.378) は、*cambiar* が「変化」という概念で使われるとき、例えば

(6) Juan cambió sus ideas.

(7) Juan cambió.

(8) Juan cambió de ideas.

のような場合、後の 2 つが意味的により近いと述べている。そこでは動作主を欠いたプロセスの意味が表現されているという。しかし、「交換」ないしは「交替」の意味の時には、

(9) Juan cambió de coche.

(10) Juan cambió el coche.

(9) は (10) から派生したようだと述べる。

この考え方に従えば、A 型構文は「意味」によって 2 つの異なる基底構造を持つことになる。しかし、本当にそう分析しなければ (10) は説明できないのだろうか。

(8) では、変化したのは *Juan* で、どういう点で変化したかという、持っている考えが変わったわけだ。一方、(9) は *Juan* の変化という解釈を与えにくい。何かしら *Juan* の意志とは関係のない自然なプロセスによって彼の車が替わるとは考えられないからだ。しかし、「どういう車を持っているか」ということが *Juan* についての記述だと看做せれば、考えの変化と同様、車の買い換えも *Juan* の状態変化と考えることが可能だろう。実際には *Juan* の「行為」のように感じられて (10) との区別が曖昧になっているが、それは *Juan* と *coche* との関係を前者の変化というプロセスとして解釈することがそれほど容易ではないことから、概念上の再解釈が行なわれた結果だと考えられる。しかも、再解釈によってこれが他動詞構文と同じ意味を持つには至らない。次の節では、両者の差異についての簡単なインフォーマント・チェックの結果を検討してみる。

³ 「A 型は対象が主語の一部または属性と考えられるときのみ使用できる」というのは高橋の指摘である (cfr. 出口 [2] p.18)

3

前述のインフォーマントのうちの1人 (InfA) に、A 型構文と B 型構文を並べたペアを比較してもらった。そのうち幾つかを紹介するが、前もって次の点を確認しておきたい。つまり、この調査結果は実際の使用を反映したものというよりは、構造的に可能な区別がどのように利用し得るかの例と考えた方がよい。用例収集とその分析からは、そのような区別が見えてこない可能性はあるだろうし、2つの構文による例を並べなければ差異が意識されないということも充分考えられる。しかし、言語が可能性の体系であるという観点からは、このようなデータも実際の使用例と同等の重要性を持つはずだ⁴。

3.1

まず、Cano Aguilar の例から見てみよう。

(9) Juan cambió de coche.

(10) Juan cambió el coche.

InfA によれば、(9) は、それまで日産に乗っていたのがフォードに替えたような場合で、(10) は車が古くなったので新しいのに買い換えたような場合。前者における「車」の抽象性にまず注目しておこう。出口が指摘しているように ([2], p.23)、他動詞構文は「変化前の指示対象を具体的に明示する」と考えられる⁵。しかし、A 型構文では乗る車のメーカーが変わるという、個体としての車を越えた要因が絡んでいる。これは、具体的な車の変更よりは *Juan* と車の関係の変化 (例えば車の趣味が変わった) が問題になっていると考えられる。あるいは *Juan* の習慣に関わる発言だと捉えることもできる。そうなると車を替えることは *Juan* の状態変化だという、先に述べた解釈が突飛なものではないことが理解できるだろう。

車は毎日替えたりするものではないが、次の「靴」の例は、その点に関して興味深い論点を提供する。

(11) Juan cambió de zapatos.

(12) Juan cambió los zapatos.

InfA によれば、(11) で理解されるのは、今までは普段スニーカーを履いていたのが革靴を履くようになったというようなことで、(12) では靴を何か他の物と交換するような状況が考えられる。前者で問題になっているのは *Juan* がいつも履いている靴であって、それが変わったということは、*Juan* がある程度安定的に持っていた特徴 (「スニーカーを履いている」) が変わったことになり、それはとりもなおさず *Juan* 自身の状態変化である。

ちなみに、靴を履き替えるという動作は再帰構文で表わされる。

⁴ 同列に扱ってよいということではない。

⁵ *el coche* が *Juan* にとっての特定の車、つまり「自分の車」という役割を表わす可能性についても検討の余地があると思われるが、今のところインフォーマントからそれを示唆するような反応は得られていない。

(13) Juan se cambió de zapatos.

「自分の車」よりもさらに安定的な特徴と考えらるのが「生活のしかた」であろう。次の例では、InfA にとって他動詞構文は容認不可だった⁶。

(14) Juan cambió de vida.

(15) *Juan cambió la vida.

「電車」の場合も他動詞構文が不可とされた。

(16) Juan cambió de tren.

(17) *Juan cambió el tren.

車のように所有できる物と違って電車は個人についての記述として解釈しにくい。InfA によれば (16) は「乗り換え」または「通勤経路の変更」と解釈される。「乗り換え」については「移動」の例を後でいくつか見る。「経路の変更」は習慣の変更だから、*Juan* の状態変化だ。なお、他動詞構文が不可となったのは、電車が普通の人には簡単に交換したりできないという現実があるからだろう。ゆっくり考えれば使えそうな文脈が見つかったかもしれない。

3.2

高橋の指摘によれば、主語の移動を表わすときは A 型構文が好まれる (出口 [2], p.18)。しかし、より正確に言えば、A 型によって表現されているのは「移動」の行為そのものではなくて「位置の変更」だろう。*Cambiar* の用法の観点からは「変化」と「移動」を分けると便利だが、「位置」をある個体についての記述だと考えれば、本稿で問題にしている状態変化という概念のもとで両者を統一的に扱うことが可能になる。

電車の乗り換えは一時的な動作のように見えるかもしれないが、電車に乗っているという、ある程度持続性のある状況の中で、電車 A から電車 B へと *Juan* の位置が変更されたと見るならば、電車 A に乗っているときと電車 B に乗っているときでは *Juan* についての記述が異り、従って状態変化と看做することができる。

もちろん、乗っている電車より持続性のある位置についても同じことが言える。

(18) Juan cambió de casa.

(19) Juan cambió la casa.

InfA によれば、(18) は引越して、(19) は間取りの変更 (家の改造) になる。後者については別の解釈も充分可能だろうが、この 2 つを比較したときのネイティブ・スピーカーの反応の例として興味深い。

なお、(18) は居所の変更と捉えられるので *Juan* の状態変化と看做せるが、「引越し」という具体的な行為は再帰構文で表現される。

⁶ もちろん、*Juan* が他人の人生を変えてしまったのなら OK になる。*Juan le cambió la vida a Susana.*

(20) Juan se cambió de casa.

ここで (18) と (20) に関する InfB の反応を紹介しよう。最初はこの 2 つの間に特に違いはないという答えだったが、「ニュアンスの違い」が無いのか考えてもらったところ、上のような違いが感じられるということになった。さらに InfB 自身が次のような例を作って違いを説明してくれた。

(21) Mañana cambio de casa.

(22) Mañana me cambio de casa.

「明日私は引越しをする」というのには後者のみを用いて前者は言わない。もし前者を用いる場合があるとすれば、もう既に荷物の運び入れなどが全て完了していて、明日は行つて寝るだけというような状態だろう、ということだった。また、やはり InfB によれば、再帰構文の方は *casa* の代わりに *domicilio* を使うことができないようだ。

このことから、*zapatos* の例 (11, 12) と同様に、再帰構文ではより行為性、主語の能動性が感じられるのに対して、A 型構文では主語にまつわる物事の変化 (ひいては主語自身の状態変化) が表現されていることが分かる。この差異がネイティブ・スピーカーによって常に明確に意識されているとは言い難いが、前述の例からも、基本的に区別は保たれていると考えられる。

4

ここで少し A 型構文の他動性について考えてみよう。出口 [2] (p.23) には次の例文が挙げられている。

(23) España cambió de imagen. スペインはイメージチェンジをした。

(24) España cambió su imagen. スペインはそのイメージを変えた。

ここで注目したいのは例文に付けられた日本語訳だ。この訳し分けは出口の提唱する「擬似編入」の考えに沿ったもので、両者の間で、各項の意味役割の違いがないという前提に立っている。しかし、私の調査では主語の動作主性に関して明らかな違いが観察された。

前記例文の *España* を *Japón* に変えて

(25) Japón cambió de imagen.

(26) Japón cambió su imagen.

2 人のインフォーマントに見せたところ、InfA は (25) を言うならむしろ (27) の方が普通で、(26) は (28) のような文脈で使えると答えてくれた。

(27) La imagen de Japón cambió.

(28) Japón trató de cambiar su imagen pero no lo logró.

InfB の反応も同様で、他動詞構文は日本が自分のイメージを変える必要性を感じていると努力したように聞こえるが、A 型構文では単に日本のイメージが変わったことを言っているだけで、日本の能動性は感じられないという。従って、A 型と B 型では主語名詞句の「出来事」への関与の仕方が異なっているわけだ。

もう少し例を見てみよう。

(29) Juan cambió de escuela.

(30) Juan cambió la escuela.

InfA によれば、後者は例えば私立学校の経営者である *Juan* が学校を移転させたように理解される。従って主語は動作主と看做せる。前者は「転校」だから、動くのは *Juan* の方だ。こちらの方が明らかに他動性の度合いが低い。

他動詞構文からの派生を Cano Aguilar が示唆している「車」の例 (9) も、*Juan* に能動性が感じられるが、それは「車の買い換え」のような現実の行為として再解釈されているからで、これを「移動」として、つまり日産からフォードへの乗り換えとして解釈することも可能だ。

次の例はどうだろうか。

(31) Juan cambió de planes.

(32) Juan cambió los planes.

InfA によれば、(31) はアカプルコに旅行する予定を変更してハワイに行くことにしたような場合。これはプラン A からプラン B への乗り換えと考えて良い。従って、基底にある概念パターンは「移動」であると看做せる。それに対して、(32) は銀行強盗グループのボスである *Juan* が、アジトを出発する時刻を変更したような場合だという。これは (19) の場合と同様、主語の働きかけによって目的語が変容させられているわけで、明白な他動性が見てとれる。

5

以上の議論から明らかなように、A 型構文と B 型構文の差異を名詞の定性のみで説明するのは無理だ。では、前者にはどのような構造を設定すればいいのだろうか。それには、出口 [2] (p.24) が C 型構文と名付けた、他動詞構文が de+名詞を伴う構造の存在を確認しておく必要がある。

(33) Han cambiado las oficinas de piso. (Moliner, s.v. *cambiar*)

これは、例えばオフィスを3階から4階に移したような場合だろう。学校を移転させた例 (30) と同じ関係 (移動させるものとするもの) が項同士の間認められるが、*de piso* は *cambiar* がどういう点について行なわれたかを特定している。実際、*de piso* が無ければ家の例 (19) と同じように「変容」の解釈も可能になるはずだ。A 型構文の「移動」は「場所の変更」と考えれば「変容」の場合と同列に扱うことができた。この C 型構文でも、*de piso* が変更点に言及している点で、A 型構文の *de*+名詞と同じ働きをしていると思われる。そこで、*cambiar* は次のような構造をとると考える。

(34) X cambia Y (de Z). [B, C]

(35) Y cambia (de Z). [D, A]⁷

(34) は他動詞構文、(35) が自動詞構文で、X は Y を変容または移動させるもの、Y は変容または移動するもの、Z は変化する部分、変更点を表わす。ただし、あくまでも概念的な対応関係であって、どちらか片方からもう一方が派生するわけではない。スペイン語では、他動詞構文と再帰構文による他動詞・自動詞対応が多く観察されるが、今 *cambiar* に対して考えたような対応関係を持つ動詞も存在する⁸。

(36) Juan despertó a María.

(37) María despertó.

(38) María se despertó.

さて、Y の位置にも Z の位置にも現われ得る名詞が存在することは、私の分析にとって別段不都合なことではない。言語外現実としては同一の事物や出来事であっても、それを変化するもの (Y) として表現することもできるし、変更点 (Z) として表現することもできる、ということに過ぎないからだ。また、言語外現実との関連で差異が殆ど認められない例を根拠に両者に同じ意味役割を割り振っておいて、実際に観察される差異を後から説明するよりは、構造的に存在する差異が言語外現実との関連において利用されないことがあると考える方が、記述としても無理がない。

⁷ 自動詞で *de* + 名詞を欠く構文には特別な名前を付けていなかったのが便宜的に D 型を追加したが、4 タイプの相互関係を考えるなら別のラベル付けが必要だろう。

⁸ 再帰構文と自動詞構文の両方が可能な動詞においては、両者の使い分けはかなり微妙な場合がある。*Cambiar* の再帰構文の例は幾つか見て、自動詞構文よりも他動性の度が高かったが、結論を出すためにはより広汎な資料を検討する必要があるだろう。

本稿のテーマとは直接関係ないが、例に挙げた *despertar* についての InfA の反応を紹介しよう。(37) と (38) の差はかなり微妙だが、例えば寝過していつもより遅く目覚めたり、物音で目が覚めたりしたときは自動詞構文 (37) の方が相応しい。それに対して、普段通りの時刻に、あるいは目覚し時計をかけてその時刻に目覚めた場合などは再帰構文 (38) の方が良い。自動詞構文は *María* のコントロールできない何らかの原因が目覚めに関与している場合に使われるようだ。少なくとも InfA 個人の直観においては自動詞構文の方が主語の被動作主性がはっきりと表われているわけで、*cambiar* について観察されたことと平行性が認められる。

6

最後に、A 型構文と C 型構文に現われる de+名詞の位置付けについて触れておこう。今のところ、私の予想を簡単に述べることにしか出来ないが、A 型構文が状態変化を表わすとすれば、次のような属性記述の例に現われる de+名詞と同じ機能を持っていると考えてよいのではないだろうか。

(39) Juan es alto de estatura.

(40) Juan es corto de inteligencia.

(41) Juan es pobre de espíritu.

属性記述の構文と *cambiar* について、同じ名詞を使ったペアを考えることもできる。

(42) Juan es amplio de criterio.

(43) Juan cambió de criterio.

(44) Lo más normal será representarlo actriz distinta que no sea demasiado diferente de aspecto físico. (Ueda, p.679)

(45) Juan no ha cambiado mucho de aspecto físico, pero sí de carácter.

(46) Soy practicante de profesión y de vocación. (Ueda, p.421)

(47) Es posible cambiar de profesión, pero no de vocación.

また、出口 [2] (p.26) が指摘するように、*cambiar* の他にも *mudar*, *variar*, *mejorar* のように「変化」を表わす動詞、*aumentar*, *disminuir*, *crecer*, *subir*, *bajar*, *ascender* のように「増減、上昇下降」を表わす動詞が de+名詞と共起することも、属性記述と状態変化の関係から理解できる。(39) と平行した次のような例を挙げておこう。

(48) Juan creció mucho de estatura, pero no de peso.

注意すべきこととしては、例えば「車」について

(49) Juan es ADJ de coche.

の ADJ にあてはまるような形容詞は存在しないだろうから、属性記述と状態変化が同じ概念領域をカバーしているわけではない。しかし、それと de+名詞がどのような機能を果しているかとは別の問題だ。この de+名詞は、属性・状態・変化についてその領域を限定する、あるいはどの点に注目して記述をしているかを明示するものだと言えるだろう。

資料体

(参考文献欄に挙げたものを除く)

Hiroto Ueda. *Análisis lingüístico de obras teatrales españolas (III): textos e índice de palabras (versión aumentada)*. Universidad de Estudios Extranjeros de Tokio, Tokyo, 1987.

参考文献

- [1] Cano Aguilar, Rafael. *Estructuras sintácticas transitivas en el español actual*. Gredos, Madrid, 1981.
- [2] 出口 厚実. 動詞 cambiar + de + N の周辺. 大阪外国語大学論集, No. 10, pp. 13-28, 1993.
- [3] Moliner, María. *Diccionario de uso del español*. Gredos, Madrid, 1981.
- [4] Real Academia Española. *Diccionario de la lengua española*. Espasa-Calpe, Madrid, 21^a, 1992.
- [5] Takahasi, Kakuzi. ¿Cambiar con *de* y cambiar sin *de*, oposición facultativa? *Voz de Iberoamérica, suplemento*, 1980.

0.

統語論もほかのあらゆる学問同様、対象のモデル化を目指す、モデル化とは対象を構成する単位の発見と体系の構築にほかならない。文の統語論に即しいうならば、まず第一に多様な文を生成させる文型 *структурная схема предложения* とその構成単位の発見、文型の分類・体系化が目的となろう。

ところでロシア語の統語論においては、この文型に対する考え方が近年著しく変化してきている。

ロシア語の文の統語論は、アカデミア文法 60年版（60年文法と略す）[1] に集約された記述方法、すなわち文の成分に基づき単文を二肢文と一肢文とに区分する方法が、70年版[2]を境に変化した。70年版では二肢文—一肢文の区分の下位区分にすぎなかった *компоненты*（必須）要素が、80年版（80年文法[3]と略す）では記述の中心となったのである。

しかし、この要素を中心にした文の分類にも問題がないわけではない。第一には抽出された文型が31もあり、煩雑すぎる、さらに必須要素の定義が不明瞭であることなどである。

また従来の説に比べて一見斬新と感じられる80年文法の分類も、二肢文—一肢文という区別と実態はさほど変わらず、旧来の分類の一部、特に無人称文を細分化したに過ぎないとも言える。60年文法以来未解決だった問題が形を変えてそのまま残っている可能性もある。

例えば、いわゆる普遍人称文（あるいは一般人称文）について言うならば、そもそも *Шерба* は不定人称文に含めたが[4,111]、*Распопов И.П.* [5,66-83] は、動詞文では人称文、不定人称文、無人称文に分類するのみであり、普遍人称文を文型としては認めていない。

文の成分を認めない80年文法の分類でも、*Пишу письмо. Что имеем — не храним...* など定人称文や普遍人称文は含まれていない。

しかし、文の成分に対する考えの見直しを主張する立場といっても *Кокорина С.И.* [6,221] のように、*Туда не проедешь. Там не отдохнешь. Его не поймешь.* などを *V₂* として独立の文型と認める研究者もいる。

他方では、文の成分を支持する立場からは、*Валгина Н.С.* のように、「現代においては一肢文を単文の独立の意味・構造的な型として抽出することには異論がない。ただし、一肢文の範囲の規定、その分類、形態上似ている統語的な現象の区分となると統一的な見解はない。」[7,162] として、60年文法の考えを修正、発展させようとする考えもある。

このように成分を否定し要素を文の統語論の単位とする考えが一般に認められたわけではないのである。

特にこれから検討する普遍人称文に関しては見解の一致が見られないことが多い。

小論で我々は、否定、肯定にかかわらず現代統語論の出発点となる60年文法の再検討を普遍人称文を通して行ない、文の統語論の問題の解決の糸口を探っていこうとおもう。

ではまず60年文法の一肢文の分類を簡単に振り返ろう。

1.

60年文法では、文は成分により体系づけられる。文は、主語と述語という主要成分を共に持つ二肢文と、一方しか持たない一肢文に大別され、一肢文は下のように分類される。なお例文は60年文法のものを使用した〔1,5-120〕。

1) неопределенно-личные предложения 不定人称文

Нам пишут о новых достижениях строителей.

2) обобщенно-личные предложения 普遍人称文

Что имеем — не храним, потерявши — плачем.

Любишь кататься, люби и саночки возить.

3) безличные предложения 無人称文

Вечереет. — Не спится, няня: здесь так душно!

4) инфинитивные предложения 不定法文

Тебе искать. Быть дождю. Молчать!

5) номинативные предложения 名辞文〔1〕

Ночь. Тишина. Двенадцать часов.

6) слова-предложения 一語文

Да. Нет. Верно! Едва ли!

7) неполные предложения 不完全文

Я в лес ← (完全文 Я иду в лес.)

Ты о чем? ← (完全文 Ты о чем говоришь?)

— Может, мы ее не пустим с вами, — без уверенности произнесла Вера Никандровна. — Не пустим?

以上の分類には形態的観点からも、意味的観点からも少なからず矛盾点が含まれている。

一例を挙げれば、ここには下のような一肢文が区別されていない。これは主語を欠く点では他の無主語文と同じである。しかし、この文では、1、2人称の主語は動詞の形により類推され、省略されている。

Люблю тебя, Петра творенье...

Надевайте коньки и давайте же кататься вместе.〔8,180〕

60年文法の分類に（研究者によって項目の取捨選択はあるものの〔2〕）
определенно-личные предложения 定人称文を加え、上の6)の слова-предложенияを除いたものが、一肢単文の区分の伝統的な分類になった。その典型は
Гвоздев〔10,85-99〕〔8,180〕などに見られる。

上記の4) 5) 6)については問題も多いが、その検討はここでは割愛し、これ

から我々の関心のある1)2)3)7)、特に 2)に焦点を当てて考察を進めよう。

2.

まず、実践的な統語論の研究者である Валгинаの考えを通して普遍人称文が一般にどのように考えられているかを見てみたい [7,168]。

彼女によれば、普遍人称文とは、一肢単文のうち、主要成分が現在・未来形の 2人称単数形の動詞によって表されるものをいう。他の時制、人称形はまれである。その最大の意味特徴は、動詞によって表される動作が任意の лицо人称に関係する、つまり人称は一般的、普遍的に考えられていることである [3]。

彼女が、「動詞形態の意味特性は超時間性の表示」と述べているのは注目に値することである [4]。

さて、このような普遍人称文の基本的な機能は、一般的な判断、広範な一般化を示すことである [7,169]。

普遍人称文は、ある状況中で典型的で、必ずみられる動作の行なわれ方や状態の現われ方をありありと描くのに効果的である。民衆の諺や文学作品や言葉に多く用いられる所以である。批評文や評論文では普遍人称文は判断により客観性を与えるのに役立っている。

とくに主要成分が直説法 3人称複数形の文は、ある動作の通常性を表すために科学文献においても見られる。

いま3人称複数形の文と言ったが、では普遍人称文を表す手段には他にどんなものがあるであろうか。

2.1.

ここでは主要成分が動詞の直説法、命令法、仮定法で表されるものの順に見ていこう [5]。

I.直説法

1. 1人称単数形—それほど多くはない。

Чужую беду руками разведу, а к своей ума не приложу.

Хочу - казню, хочу - милую.

Не струшу, так отведу душу. [6]

2. 現在形、未来形の 2人称単数形—もっとも頻度数が高い。

Любишь кататься — люби и саночки возить. (諺)

Слезам горю не поможешь. (諺)

Иные места покидаешь и все думаешь, что когда-нибудь сюда вернешься.

Глядишь и не знаешь, идет или не идет его величавая ширина.

3. 3人称単数形現在、未来形—比較的まれである。

Мягко стелет, да жестко спать. (諺)

В глаза говорит сладко, за глаза — гадко. (諺)

4.1人称複数形－頻度は高くない

Что имеем — не храним, потерявши — плачем. (諺)

Чего боимся, того и стыдимся. Чего стыдимся, того и таимся. (諺)
学術文献では、すでに共同でなされている動作という感じを与える。

В этих примерах наблюдаем разные функции формы повелительного
наклонения. В данном предложении находим только один главный член.

- ・未来1人称複数－学術文献などで、共感を惹起、あたかも共同動作に参加を呼びかける感じ [7]。

Рассмотрим две точки зрения на этот вопрос. Сравним приведенные
примеры.

5.3人称複数形現在、未来形

В лес дров не возят. (諺) (これについては後述する。)

6.単数過去形－典型的ではない [12,20] [11,151]

За дымом погнался, без огня остался. (諺)

Метил в лукошко, а попал в окошко. (諺)

Далеко шел, а добра не нашел.

Ехал прямо, да попал в яму.

Умел ошибиться, умей и поправиться.

- ・過去複数形－まれである [11,151]。

Но вот вы собрались в отъездное поле, в степь. Верст десять проби-
рались вы по проселочным дорогом! вот, наконец, большая.

II 命令法－かなり広範に見られる。

Век живи — век учись. Семь раз отмерь — один раз отрежь. (諺)

III 条件法 [11,151]

Не искал бы в селе, а искал бы в себе.

IV.固定した表現。後述(2.4.)

このように普遍人称文には不定人称文のような一定の文型というものはない。
従って一定の人称も厳密な意味ではない。動詞が 2人称の形、および現在形、
未来形で現われることが多いのは、Jakobson R. [13,130-147] の言うように、
欠性二項対立に基づく人称の体系のなかで 2人称が無標項であるので当然であ
ろう。これを Виноградовは「2人称の形態は1人称よりも抽象的である。ある
具体的な話し相手に対する直接の関係を失うことによって、それは一般的な意
味を得るのである」と表現している [14,365.]

2.2.

ところで、上述のように直説法 3人称複数形現在、未来形の動詞が普遍人称文を構成することがあり、しかも決してまれではない。

Об отсутствующих плохо не говорят. От добра добра не ищут. (諺)

Зимой свет зажигают рано. Магазин открывают в разное время.

Читальный зал в библиотеке проветривают регулярно. (日常の言語)

Различают три вида подчинительной связи...; Словосочетания по структуре делят(разделяют) на простые и сложные. (学術文献)

この場合、不定人称文との形態上の相違はないが、一体何が両者を区別するのであろうか。

Кленинаにならって述べれば [11,151] [12,19]、同じ直説法 3人称複数という形態であっても、普遍人称文では動作は一般的な、任意の人物に関係し、超時間的な性質を帯び、常にどんな人にも起こりうる、典型的なものとなる。かりに具体的な動作であっても反復される結果、典型的なものを意味するようになる。

一方、不定人称文ではかならず動作は具体的な人物、時間に関係するのである。

このように不定人称文とは人称の「意味」によって区別されるだけである。

あらゆる文は必ず述定を持ち、現実と関係づけられる。文の関係づけられる現実との具体性－抽象性・一般性の度合いが異なるということである。

ここに述定は法、時制、人称のカテゴリーとして現実化するので、それらのカテゴリーを表す形態的な手段、さらに統語的な手段、例えば従属節の存在が具体性(定性) ⇄ 抽象性・一般性(不定性) という相違を実現する。

а. Когда пашут, руками не машут. 普遍人称文

б. В колхозе уже пашут. 不定人称文

а.' В детском саду детей готовят к школе. 普遍人称文

б.' Детей к прогулке пока еще не готовят. 不定人称文

これらの例の б. б.'における уже、еще не という語の存在に注目されたい。普遍人称文では動詞は特定の時、所に関係しない、つまり超時間性を示しているが、不定人称文では具体的な時、所と関係している。

このような語がないと相違はあいまいなものとなり、不定人称文と普遍人称文との中間タイプ(中和)と取られる場合もでてくる。

2.3.

逆に文脈上、状況上その他により、動作主体が具体的な人物に関係せず、一般性が与えられれば、ты вы という形態的な主語すら使われることもある。人称代名詞はここでは一般的な人称の意味で用いられるのである。この場合は当然普遍人称文は一肢文でなく、二肢文になる。

この種の文は決してまれではなく、Гневко、Кленинаも言うように文学的な描

写や日常会話に特徴的である [12,20] [11,151]。

...Все проснулось и все молчит. Вы проходите мимо дерева - оно не шелохнется : оно нежится. Сквозь тонкий пар, ровно разлитый в воздухе, чернеет перед вами длинная полоса. Вы принимаете ее за близкий лес; вы подходите - лес превращается в высокую грядку полыни на меже...

(И.С.Тургенев)

Ну что ты с ним сделаешь; Ну что ты скажешь;Хоть ты семи пядей во лбу.
(日常会話)

もし文が動詞文でなく名詞文であるならば、主体の人称は、人称代名詞で統語的に示すしか方法がない。

Жизнь проходит быстро, тебе уж семнадцать или восемнадцать лет, а ты еще ничего не сделал. Неизвестно даже, есть ли у тебя какие-нибудь таланты. (Ю.Казаков)

このような文は典型的な普遍人称文の意味をもち、二肢文の意味的、文体的な変種と考えられる。

2.4.

より一歩進んで、動詞が形式的にも意味的にも完全に主語（主体）への従属性から解放されてしまえば、もはや普遍人称文ではなく成句的な結合と見なしうる。これが下の例である。

Хоть сто лет думай, ничего не придумаешь.

Что ни говори, а осень — славная пора.

以上みたように、普遍人称文には固有の文型はなく、動作の主体、状態の担い手への帰属性の意味を一般化する手段がありさせすれば、意味的に普遍人称文と解釈されるのである。

もちろん、このようないわば普遍人称文の「拡大解釈」に対して反対する研究者もいる。

その一人が Скобликова Е.С.である。彼女によれば、普遍人称文の最大の意味要素は、（話し手、聞き手を第一とする）任意の人の、文に述べられた観察への個人的な関与 личная причастность の意味なのである。だから話し相手の共感を誘う効果を狙って、完全に個人的な、反復された過去の動作が普遍人称文で語られることがある。

Бывало, стоишь в углу... и думаешь : 《 Забыл про меня Карл Иванович 》. (Л.Н.Толстой)

ここで個人的関与の意味を保証するのは動詞 2人称単数形の述語だけなのである [15,109-113]。

Цыплят по осени считают.Обещанного три года ждут.などの文は抽象的、一般的な内容をもつものの、ここには話し手、聞き手の個人的な関与の意味は

ないので普遍人称文ではないとする。

これは意味・ニュアンスという微妙な問題で慎重な扱いが必要だが、しかしこの考えでは、完全に動作主体から分離した動作を表す成句的な表現の成立の理由を説明できないのではないだろうか。ちなみに、Белошапковаによれば、不定人称文の動作主体は完全に不定ではなく、一定の範囲内の主体でなければならないのである [16, 56]。

以上述べたことを次にまとめよう。

2.5.

	V S (形態的; 統語的)			
二肢文	○	○	× [8]	○は存在を、×は非存在を、○は存在 非存在に対する無関与を表す。なお、 ここではVは動詞・連辞を示し、Sは主 語、統語的な Sとは、無人称文におけ る与格主体や 不定人称文 (例 у нас не курят.) における у нас などを表 す [17, 171] [9]。
一 名辞	×	○	× [8]	
定人称	○	×	× [8]	
不定人称	○	×	○	
肢 普遍人称	○	○	○	
無人称	○	×	○	
不定法	○	×	○	
文 不完全	○	○	○	

一肢文のうち、不完全文と普遍人称文には固有の文型がない。しかし不完全文は他の文型に依存し、普遍人称文は意味に依存している点で異なっている。すなわち、文は動作主体、状態の担い手に対する文の独占的指示の度合いが薄れ、動作主体が一般化されれば普遍人称文と解釈されるのである [10]。

3.

普遍人称文とは、主体が一般化、普遍化された人称文の、ことば *речь* 中での実現形である。換言すれば、論理・思维的なカテゴリーである (定性 - 不定性の) 不定性が、文に表現される動作、状態とその動作主体、担い手との照応に際してことばの中で実現したものであるといえる。

注

※ [] は注を、[] は文献を示す。括弧内の初めの数字は、注、文献の番号を、後の数字はその注、文献に挙げられた参考文献のページをさす。

1. ふつう現代では *назывные предложения* という。例えば、参照 [8, 174]。ただし、[1] を踏襲する考えの研究者ではこの名称を用い、かつ現代の動向を反映して *генетивные предложения* を導入している。参照 [7, 181-200]。
2. 不定法文を一肢文の特別な型と認める 60年文法 [1, 43] 的な考えと認めない考え [9, 200] があり、名辞文の変種についても異論が多い。
3. これは Валгина [7, 168] の訳ではなく、我々による要約である。
4. これは Клеминаも同じ意見であるが、彼女にあっては「普遍人称文は主要な

- 成分が、一般的に提示される人の典型的な動作を表す一肢文」と「典型的な」と述べているのは完了体の例示的用法との関係で重要である [11,151]。
5. 本文では出典をその都度ことわらなかったが例は、[7,168]を中心に[7,151]、[12,19]その他や我々の集めた例を加え編成し直したものである。
 6. Гвоздев А.Н. [10] は、この文における普遍性は文の文法的な特性に由来するものでなく、用法に由来するものであるから普遍人称文に含めないとしている。
 7. Кленинаは、この形態は典型的な動作を表さないと述べている [11,151]。
 8. この箇所の×についての検討は別の機会に譲りたい。
 9. 主体、(論理的、統語的)主語の問題の厳密な検討は小論では割愛した。
 10. 名辞文、定人称文、無人称文、不定法文は除く。

文 献

1. АН СССР Грамматика русского языка. Т.2. М., 1960.
2. АН СССР Грамматика современного русского литературного языка. М., 1970.
3. АН СССР Русская грамматика. Т.2. М., 1980.
4. Щерба Л.В. Грамматика русского языка. 『ロシヤ文法』白水社
稲垣敏夫訳
5. Распопов И.П. Строение простого предложения в современном русском языке. М., 1970. pp.66-83
6. Кокорина С.И. Еще раз о структурной схеме простого предложения. В кн.: Проблемы учебника русского языка как иностранного/Синтаксис. М., 1980.
7. Валгина Н.С. Синтаксис современного русского языка. М., 1991.
8. АН СССР. Русский язык. Энциклопедия. М., 1979.
9. Галкина-Федорук Е.М. Безличные предложения в современном русском языке. М., 1958.
10. Гвоздев А.Н. Современный русский литературный язык. М., 1968. Т. II.
11. Кленина А.В. Простое предложение в современном русском языке. М., 1989.
12. Гневко В.Т., Кавченко З.Ф., Хмелевская Е.С. Современный русский язык. Минск, 1975.
13. Jakobson R. Shifters, Verbal Categories, and the Russian Verb, In "Selected Writings, II" 1971.
14. Виноградов В.В. Русский язык. М., 1972.
15. Скобликова Е.С. Современный русский язык. М., 1979.
16. Белошапкова В.А. Общность семантического наполнения нулевых позиций субъекта и объекта в русском предложении. В кн.: Русский язык за рубежом. 1987. №2.
17. 角田太作. 1991. 世界の言語と日本語. 東京: くろしお出版.

中国語の文型：語彙依存性と文脈依存性

望月圭子

0. はじめに

中国大陸の言語学界では、1980年代半ばから、‘三個平面論’という考え方が主流を占めてきている。この論は、おおむね、次のような主張である。

- (1) 中国語の文法研究は、他言語と異なり、‘句法’‘語義’‘語用’の三つのレベルに分けて進めることが特に必要である。

‘句法’‘語義’‘語用’は、筆者の見解では、各々以下のような日本語の解釈が与えられる。

(2)

- I ‘句法’：文法機能
- II ‘語義’：意味役割
- III ‘語用’：談話

では、何故、中国語では、この三つのレベルが、特に必要なのであろうか。それは、次のような中国語の特質にある。即ち、中国語では、文法機能を示す形態的標識が欠如していることが多いため、文の解釈が、語彙及び文脈に依存することが多々あるからである。こうした中国語の特質が、日本人の中国語学習者を困惑させる最大の学習困難点となっている。「中国語は、日本人には易しい」と勘違いされることが多いけれども、それは、両語間の共通語彙の多さ（日本語が未だに漢字を享受していることによる）にのみ注目した幻想であって、実は、中国語は深みに入れば入る程、難しいのである。

基本文型に関しては、望月(1992)ですでに触れてあるので、本稿では、中国語の学習困難点といえる、語彙依存性と文脈依存性に絞って、以下、考察を進めてゆく。

1. 中国語の語彙依存性

角田(1991, p. 167)では、文法分析の四つのレベルとして、文法機能、意味役割、情報構造、そして格が必要とされると述べている。そして、格はあくまでも形態的な格であり、ゼロ格も格の一種であると述べている。(2)で挙げた、‘三個平面’の内容では、格のレベルは含まれていない。中国大陸の学界では、「中国語には格のレベルは必要ない」とみなしているようである。というよりもむしろ注意を払うことさえもないようである。中

中国語では、英語の ‘I, my, me’ のような屈折や、日本語にみられるような格助詞というような格標識とみなされるものが全く存在しないからである。英語や日本語の格標識体系のなかで、形態をもつ格との対比の上で、空になっている形態をゼロ格と呼ぶならば、中国語の場合、格標識そのものが存在しないのであるから、ゼロ格という範疇の設定も不可能と思われる。

ここで注意すべき点は、「では、中国語の介詞は、格標識なのではないか」、という疑問である。例えば、‘由’及び‘把’は、それぞれ、主格及び対格を表す格標識なのではないか、という疑問である。しかし、筆者の立場では、これらは、それぞれ、動作主及び対象という意味役割の標識である。その根拠は、‘把+名詞’が、目的語としての文法機能を持っていないことを示す現象にある（望月（1992））。筆者の立場では、主題化や前置などの、情報構造上の要因が加わっていない基本語順において、動詞の直後に後続する名詞句を目的語とみなすが、何を以て目的語とするかという判断も、文法家によって一致をみない。その理由は、動詞の直後に後続する名詞句が、以下に示すように、多種多様な意味役割を担っているという、中国語の所謂“VO”文型の意味的特殊性にある。以下、《動詞用法詞典》を参考にして例を挙げる。対応する日本語訳で用いられている格助詞に注意されたい。

- (3) 動作主 : 来了一個人。(誰か人が来た)
- (4) 被動者 : 打他。(彼を殴る)
- (5) 受益者 : 給他。(彼にあげる)
- (6) 対象者 : 感謝老師。(先生に感謝する)
- (7) 客体 : 掛着一層土。(埃がかかっている)
- (8) 道具 : 洗熱水。(お湯で洗う)
- (9) 数量 : 少五塊錢。(五円φ少ない)
- (10) 場所 : 睡小床。(小さなベットに眠る)
- (11) 起点 : 離開北京。(北京を離れる)
- (12) 終点 : 到北京。(北京に着く)
- (13) 通過点 : 走這條路。(この道を歩く)
- (14) 原因 : 愁經費問題。(經費問題を心配する)
- (15) 目的 : 考研究生。(大学院生になるための試験を{受ける／する})
- (16) 共動者 : 大勝南朝鮮隊。(韓国チームに大勝する)
- (17) 方式 : 走圈。(円を画くように歩く)
- (18) 職務 : 当工会主席。(労働組合の委員長{になる／をしている})
- (19) 同一者 : (我) 是小山愛子。(私は) 小山愛子です)
- (20) 所属域 : (我) 是日本人。(私は) 日本人です)

《動詞用法詞典》は、‘雑類’として、次のような例を挙げている。

- (21) 雑類 : 上年紀。(年をとる)
- (22) 雑類 : 醒酒。(酔いを醒ます)
- (23) 雑類 : 出風。(出しゃばる)

以上の例にみられるように、多種多様な意味役割をもつものが、所謂“目的語”の位置にくるのである。そして、述語と所謂“目的語”との意味的關係（即ち、目的語がどのような意味役割をもつか）は、両者の語彙的意味によって決定されるのである。

以下の例は、同じ動詞‘出’が、その所謂“目的語”として、5種類の意味役割をもつことを示している。

- (24) 主体 : 出太陽。(太陽が出る)
- (25) 客体 : 出錢。(お金を出す)
- (26) 起点 : 出軌。(レールから外れる(脱線する))
- (27) 通過点: 出門。(門を出す)
- (28) 終点 : 出洋。(海外に出る; 外国へ行く)

もう一例、挙げよう。

- (29) 客体 : 装葡萄乾。(干し葡萄を入れる)
- (30) 終点 : 装箱子。(箱に入れる)

以上の例からいえることは、中国語の基本文型の一つであるSVO文型という一つの形態が、実は、多種多様な意味関係をはらむ形態であり、多種多様な意味関係を認識しなければ、この基本文型を習得したことにはならないのである。

次に、所謂‘動補動詞’（望月(1990)参照）文型の解釈もまた語彙的意味にのみ頼って意味解釈が行なわれることをみよう。まず、‘動補動詞’とは、複合動詞の一種で、前項が原因となる動作を表し、後項が結果となる状態を表すような構造をもつ。呂(1986)が挙げている次の例文を考えよう。（下線部分が動補動詞である）

- (31) 中国隊 打勝了 日本隊。(中国チーム {は・が} 日本チームに打ち勝った)
- (32) 中国隊 打敗了 日本隊。(中国チーム {は・が} は日本チームを打ち負かした)

- (33) 中国隊 打勝了。 (中国チーム {は・が} 打ち勝った)
- (34) 日本隊 打敗了。 (日本チーム {は・が} 負けた)

‘日本隊’は、‘中国隊’によって‘敗’という状態になった主題である。この分析を支持する根拠として、以下の三つの現象が挙げられる。

I 対応する日本語訳で、「比較」の θ 役割を与えられたとする‘日本隊’は「に」格として具現化し、「主題」の θ 役割を与えられたとする‘日本隊’は「を」格として具現化する。

II 中国語では、(31')は、受動化が不可能であるが、(32')は受動化が可能である。

(31') * 日本隊 被 中国隊 打勝了。

比較 経験者

＜日本チームは中国チームに勝たれた＞

(32') 日本隊 被 中国隊 打敗了。

主題 動作主

＜日本チームは中国チームに負けた＞

III 日本語において、「負かす」「負ける」という、{他動詞+対応する非対格動詞}のペアがあるのに対し、「勝つ」は、この他動詞に対応する非対格動詞がない。

I が根拠となるのは、日本語で比較の対象を表す場合、「に」格が表れるからである。「～に{比べて、比較して}」と、「に」格が用いられることが、(31')の‘勝’の目的語に「比較」という θ 役割を設定可能だといえる。少なくとも、「を」格で表れる「主題」という θ 役割とは一線を画しているといえるのではないだろうか。

次に、II が根拠となるのは、(32')で、負けて影響を被ったと考えられる「主題」という θ 役割を担う‘日本隊’が、受動文の主語になれるのに対して、(31')では、「比較」という θ 役割を担う‘日本隊’が、受動文の主語になれない、という非対称性が、 θ 役割の相違、ひいては、‘打勝’‘打敗’の動作性の相違によって生じていると考えられる。

IIIについては、少し詳述したい。日本語と中国語の「勝つ」対「負かす」及び‘打勝’対‘打敗’の「項構造‘argument structure’」（ある述語が、その語彙特性として必要とする項（主語となる外項及び補部になる内項）の数、及び各項がどのような θ 役割をとるかを示したもの）を以下にまとめよう。下線を付した部分が、外項、即ち主語となる項である。

(39) ‘打勝’及び「勝つ」 < Experiencer, Comparative >

(40) ‘打敗’及び「負かす」 < Agent, Theme >

(39) 及び (40) の他動詞に対応する自動詞の項構造は、(41) (42) のようになる。

(41) ‘打勝’及び「勝つ」 <Experiencer>

(42) ‘打敗’及び「負ける」 <Theme>

(39) (41) の項構造を比較してみると、他動詞 (39) で主語として具現化する ‘Experiencer’ は自動詞 (41) においてもやはり、主語として具現化している。一方、(40) (42) の項構造を比べてみると、他動詞 (40) で目的語として具現化する ‘Theme’ は自動詞 (42) では主語として具現化する。(41) のような項構造を持つ自動詞は、「非能格動詞 ‘unergative verbs’」と呼ぶことができよう。一方、(42) のような項構造を持つ自動詞は、「非対格動詞 ‘accusative verbs’」(能格動詞 ‘ergative verbs’ と呼ばれることもある) と呼ばれる。こうした、異なる種類の自動詞の項構造の相違が、‘打勝’ 及び ‘打敗’ の自動詞文におけるふるまいの非対称性を生み出している。(33) (34) を θ 役割を付した形でもう一度挙げよう。

(33') 中国隊 打勝了。<中国チーム {は・が} 勝った>
経験者

(34') 日本隊 打敗了。<日本チーム {は・が} 負けた>
主題

ここでいう非対称性とは、他動詞文 (32) (33) では、この反義語を用いても、同義文となったのなら、対応する自動詞文も、同様に同義文になると予想されるのに、予想に反して、対応する自動詞文 (33) (34) は、主語を入れ替えないと、同義文にならない、という非対称性である。これは、‘打勝’ 及び ‘打敗’ の、項構造の相違という語彙的特性の相違によるものである。ここで注目すべき点は、日本語では、他動詞－非対格自動詞のペアは、「負かす－負ける」のように動詞の自他の形態的区別が普通あるのに対し、中国語では、声調の相違によって自他を区別する極少の例（‘倒’ dào<倒す> dǎo<倒れる>、‘轉’ zhuǎn <回す> zhuàn<回る>等）を除いては、自他の形態的区別がない。ということは、自他動詞の区別も、動詞の項構造と、名詞の意味との関連で、語彙依存的に決定されるということになる。

中国語の語彙依存性をさらに明示するために、動補動詞の例をもう少しあげよう。

(43) a 我 [喝 醉] 了 酒。<私はお酒を飲んで、酔った>
b 我 [喝 醉] 了。<私は飲んで酔った>

- (44) a 我 [讀 壞] 了 身体。＜私は勉強しすぎて身体を壊した＞
 b 身体 [讀 壞] 了。 ＜身体は勉強しすぎて壊れた＞

(43)の動補動詞‘喝醉’は‘打勝’と同じタイプで他動詞－非能格自動詞のペアを持ち、(44)の動補動詞‘讀壞’は‘打敗’と同じタイプで他動詞－非対格自動詞のペアをもつ。さて、ここで問題となるのは、文全体の解釈が動補動詞の前項及び後項の項構造と、主語目的語の意味素性間の意味的照合のみに頼って行なわれる点である。格標識も動詞の自他の区別も形態上、欠如しているからである。いや、むしろ、欠如しているからこそ、(43)及び(44)のような文型が許されるといったほうがよいのかもしれない。日本語で、対応する複合動詞を作ろうとすると、全く許容不可能な複合動詞ができあがる。

- (43') ‘喝醉’： 他動詞用法「*呑み酔う」 非能格用法 「* 呑み酔う」
 (44') ‘讀壞’： 他動詞用法「*読み壊す」 非対格用法「* 読み壊れる」

次に、動詞の語彙的意味特性のみに依存することによって、直接疑問文か間接疑問文かが決定される例をみよう。

次の(45)(46)は、文型的には、両者とも、「主語＋動詞＋目的語節」という全く同じ文型である。しかし、(45)は、間接疑問文の解釈しかなく、一方(46)は直接疑問文の解釈しかもたない。[]の部分为目的語節である。

- (45) 他 介意 [誰去日本]。(彼は誰が日本に行くのかを気にしている)
 (46) 他 希望 [誰去日本]？(彼は誰が日本に行くのを希望しているのか？)

対応する日本語訳をみると、「か」が、間接疑問文(45)の場合は、目的語節の末尾に置かれ、直接疑問文(46)では、文全体に置かれて、「か」の位置によって疑問のスコープの相違が示されている。しかし、中国語の疑問詞疑問文には、「か」にあたるような疑問の助詞は付かないし、また英語のように、疑問詞が目的語節の先頭にあるか、文全体の文頭にあるかなどの、疑問のスコープの相違を示す形態的表示がないのである。ちなみに、目的語節が直接疑問となるか或いは間接疑問となるかは、おおむね、述語がその目的語節に「叙実性‘factiveness’」を要求するか否かと関わっているようである。つまり、叙実述語の場合は、間接疑問となる場合が多いし、非叙実述語の場合は、直接疑問となる場合が多い。しかしその他の意味的要因あるいは語用論的要因も関わっており、いまだはっきりしない。

次の例は、「主語節＋動詞」という同じ文型が、動詞の語彙的素性によって主語節が直接疑問になるか間接疑問になるかが解釈される例である。[]で囲まれた部分が、主語節である。

- (47) [他什麼時候來] 是小事。 <彼がいつ来るかは些細な事だ>
 (48) [他什麼時候來] 好? <彼はいつ来るのがよいか?>

全く同じ主語節が述語の語彙的素性に頼って、直接疑問か間接疑問かが解釈可能となる。日本語では、目的語節の場合と同様、「か」の位置によって疑問のスコープが表示されている。

以上、①VO文型の目的語が担う意味役割の多様性、②{他動詞－非能格動詞}及び{他動詞－非対格動詞}という動補動詞文解釈が、格標識と自他の区別の形態的標識の欠如の上で行なわれるという語彙依存性、③述語の意味素性による直接疑問と間接疑問の解釈の決定、という3つの現象を通して、中国語の語彙依存性を述べた。

2. 中国語の文脈依存性

中国語では、何故、談話のレベルが特に必要なのかを述べるために、中国語の文脈依存性を示す現象として、①テンス形式の欠如、②接続詞の省略、③疑問詞の疑問用法と不定用法の三現象を以下述べたい。

まず、次の例文をみよう。

- (49) 話 說 完 、 就 走 了。

この文は、文脈によって、次の3通りの解釈が可能である。

- (50) a. 過去の解釈：話を終えて、すぐにその場を離れた。
 b. 非過去の解釈1：話を終えたら、すぐにその場を離れよう。（条件文の解釈）
 c. 非過去の解釈2：話を終えたら、さっさと行け。（命令文の解釈）

何故このような多義が生じるのであろうか。まず、(50)で、a 対 b, cの対立は、テンス形式が欠如しているために生じる、「過去」対「非過去」の対立する解釈である。「過去」か「非過去」かの解釈は、談話の中で初めて決定される。

次に、b対cの対立は、共に未来の解釈を受けるが、主語の省略と、「意志」対「命令」を示すような形式の欠如のために、2通りの解釈が生じるのである。例えば、(49)のD-構造は以下のようなものである。‘pro’は省略された主語を示し、下付きの指標‘i’は、省略されたふたつの主語が同じ指示をもつことを示す。

- (51) pro_i 話 說完、 pro_i 就 走 了。
 (50) b, cは、この主語の人称によって、解釈が異なる。

(52) ① pro＝一人称 ‘我、我們’ <私、私たち>→(52) bの解釈：条件文

② pro＝二人称 ‘你、你們’ <君、君たち>→(52) cの解釈：命令文

省略された主語が、一人称か二人称かは、談話の中で初めて決定されるのである。以上、同一文の多義的解釈が、テンス及び人称の、文脈に依存した解釈によって初めて決定されることをみた。

次に、中国語では、接続詞がしばしば省略されて文が繋がっていくために、文と文の論理関係が文脈に依存しないと、学習者にとっては困難である現象をみる。

(53) 他 死 了、 我 做 和尚。

この文の解釈は、次のうち、どちらであろうか。。

(54) ① 「過去」：彼が亡くなったので、私は出家しました。（原因－結果）

② 「非過去」：彼が亡くなったら、私は出家します。（条件－結果）

中国語学習者は、①と答えることが多いだろう。実際、筆者も、混乱することがあるのである。ところが、ネイティブスピーカーは、②の解釈だと真っ先にいうのである。そして考え込んでから、もしかしたら、①も文脈によっては可能かもしれない、という人がいるのである。(53)は、もし次の下線のような接続詞及び副詞が各々付いていたら、解釈は明瞭で、(55)①及び②は、それぞれ(54)①及び②に対応する。

(55) ① 因為 他 死了、 所以 我 做 和尚。

なぜなら それで

② 他 死了、 我 就 做 和尚。

条件句を受けた結果文に

付く副詞

しかし、実際に私達が触れる中国語には、省略されていることがしばしばあるのである。

このような場合、学習者は、文脈から判断することが最も有効だろう。

最後に、疑問詞の疑問用法と不定用法に関わる二義性を考えよう（例文は、台湾國立清華大學博士資格試験問題より引用）。

(55)

a. 他 昨天 没 吃 什麼？（麻辣火鍋。）

<彼はきのう何を食べなかったの？（答え：劇辛なべだよ）>

b. 他 昨天 没 吃 什麼 （、現在当然餓得発慌）。

<彼はきのう何も食べなかった（から、今は当然お腹ぺこぺこだよ）>

(56)

a. 他 昨天 可能 吃了 什麼？（麻辣火鍋。）

<彼はきのう多分何を食べたかもしれないの？（答え：激辛なべだよ）>

b. 他 昨天 可能 吃了 什麼（、現在才一直拉肚子）。

<彼はきのう何か食べたのだろう（今になってお腹をこわしている）>

(57)

a. 要 我 請 誰 來 証 明 (、 你 才 會 相 信 我) ?

<誰にお願いして証明してもらったら、あなたは私を信じてくれるの>

b. 要 我 請 誰 來 証 明 (、 你 可 別 妥 賴) 。

<誰かにお願いして証明してくれ (なんて、おまえ、とばけるんじゃないよ) >

(55) (56) (57) の各文の a は、疑問詞‘誰’の疑問詞用法、bは疑問詞‘誰’の不定用法である。対応する日本語訳をみると、日本語の場合、「も・か」という助詞を「誰」に付加することにより、文脈に依存しなくても、不定用法だと判別可能である。しかし、中国語の場合、疑問用法と不定用法は、形態的には、全く同じであり、文脈に依存する形でしか、どちらの解釈かが決定できないのである。

3. 結び

以上、中国語の語彙依存性と文脈依存性を述べ、同じ文型でも、多種多様な意味解釈が生じることを示した。さて、最後に、中国大陆での、文型への視点について述べて、小論の結びとしたい。「文型」という日本語は、中国語では、‘句型’‘句式’‘句類’と訳され、これらの術語の用いられ方については、一致をみていない。例えば、‘句式’は、基本文型も特殊文型（‘把字句’‘被字句’‘連動句’‘兼語句’等）をも全部総称している場合もあれば、基本文型のみを指す場合もある。総称的用法は、呂叔湘氏主編(1980)『現代漢語八百詞』の使い方である。一方、基本文型のみを指したいとするのは、胡裕樹教授が『漢語的句子類型』の序文に表している立場である。筆者は、この、範曉氏主編の『漢語的句子類型』を未入手であるが、胡教授の序文だけは、『漢語學習』1995年第5期に掲載されている。本書を入手後は、何か大きな示唆を得るかもしれない。

中国の学校文法で描かれている文型について触れておくと、これは、『現代漢語八百詞』や、『中学教學語法系統提要(試用)』に示されているが、文法機能のレベルのみに始終しており、小稿で触れたような、意味役割や文脈のレベルへの配慮がなく、満足のいくものではない。例えば、

(58) 象 鼻 子 長。 <象は 鼻が 長い>

[主語 [主語－述語]]

という説明がなされているだけである。今後の発展を期待したい。

参考文献

- 陳高春・主編 1995 『實用漢語語法大辭典（增補本）』、北京：中國勞動出版社。
- 陳亞川・責任編輯 1992 「三個平面：語法研究的多維視野－黃山語法修辭座談會發言摘要」、『語言教學與研究』第1期、4-27。
- 胡裕樹 1995 「試論句子類型的研究」、『漢語學習』第5期、55-57。
- 呂叔湘・主編 1980 『現代漢語八百詞』。北京：商務印書館。
- 呂叔湘 1986 「漢語句法的靈活性」、『中國語文』第1期、1-9。
- 孟琮・等編 1987 『動詞用法詞典』。上海：上海辭書出版社。
- 望月圭子 1987 「談話指向言語としての中國語」、『音声・言語の研究-3』、27-42。東京外國語大學音聲學研究室。
- 望月圭子 1990 「‘動補動詞’の形成」、『中國語學』第237号、128-137。
日本中國語學會。
- 望月圭子 1992 「中國語の語順」、『言語研究Ⅱ』、98-112。東京外國語大學語學研究所。
- 人民教育出版社中學語文室 1984 「中學教學語法體系提要（試用）」、『語文教學通訊』第3期、5-14。
- Tang, Ting-Chi. 1994 "A 'Minimalist' Approach to a Contrastive Analysis of English, Chinese and Japanese", in *Proceedings of the Forth International Symposium on Chinese Languages and Linguistics*. 102-138.
- 角田太作 1991 『世界の言語と日本語』、東京：くろしお出版。

1. はじめに

次の文は全て、表面上動詞の後にゼロ補文子に導かれるセンテンスが続く形を成している。しかしこれらは、幾つかの統語的操作に対して異なる振る舞いを示すことから、これらは見かけ上の一致にも拘らず、夫々異なる構造を成していると考えられる。

- 1) Mereka mencadangkan Tuan Pengerusi membubarkan persidangan itu.
- 2) Guru mengarah murid-murid membacakan buku itu.
- 3) Kapten tersebut mengarahkan orang-orang bawahannya mengepung kubu pengganas itu. (Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 25)
- 4) Arman mengajak saya menziarahi datuknya di kampung.
- 5) Saya membantu Ahmad menyelesaikan masalah itu.
- 6) Saya merayu mereka mempertimbangkan keputusan itu semula.
- 7) Kerajaan Mesir telah mengerahkan angkatan perangnya menyerang musuhnya.
- 8) Pergerakan pemuda UMNO hari ini mahu kerajaan menyiasat dan bertindak semula ke atas kumpulan yang mengedar surat layang untuk melaga pemimpin dan memecahbelahkan perpaduan parti itu. (Berita Harian 6/11/1992)

先ず第一に、他動詞の後のセンテンスに焦点前置変形を掛けると、次の様になる。

- 8) Mereka mencadangkan persidangan itu dibubarkan Tuan Pengerusi.
- 9)* Guru mengarah buku itu dibaca murid-murid.
- 10) Kapten tersebut mengarahkan kubu pengganas itu dikepung orang-orang bawahannya.
- 11)* Arman mengajak datuknya di kampung saya ziarahi.
- 12)* Saya membantu masalah itu diselesaikan Ahmad.
- 13)* Saya merayu keputusan itu dipertimbangkan semula oleh mereka.
- 14)* Kerajaan Mesir telah mengerahkan musuhnya diserang angkatan perangnya.
- 15) Pergerakan pemuda UMNO hari ini mahu kumpulan yang mengedar surat layang itu disiasat kerajaan.

mencadangkan, mengarahkan, mahuを除き、他は全てこの操作を加えると、非文

となる。

第二に、動詞の直後の名詞句を接語代名詞の形で動詞に付加すると結果は次の様である。

- 16)* Mereka mencadangkannya membubarkan persidangan itu.
- 17)* Guru mengarahnya membacakan buku itu.
- 18)Kapten tersebut mengarahkannya mengepung kubu pengganas itu.
- 19)Arman mengajakku menziarahi datuknya di kampung.
- 20)Saya membantunya menyelesaikan masalah itu.
- 21)Saya merayunya mempertimbangkan keputusan itu semula.
- 22)Kerajaan Mesir telah mengerahkannya menyerang musuhnya.
- 23)* Pergerakan pemuda UMNO hari ini mahunya menyiasat dan bertindak semula ke atas kumpulan yang mengedar surat layang untuk melaga pemimpin dan memecahbelahkan perpaduan parti itu.

第三に、動詞の後に、supayaを挿入できるかどうかを観てみると、その結果は次の如くである。

- 24)Mereka mencadangkan supaya Tuan Pengerusi membubarkan persidangan itu.
- 25)* Guru mengarah supaya murid-murid membacakan buku itu.
- 26)Kapten tersebut mengarahkan supaya orang-orang bawahannya mengepung kubu pengganas itu.
- 27)Arman mengajak supaya saya menziarahi datuknya di kampung.
- 28)* Saya membantu supaya Ahmad menyelesaikan masalah itu.
- 29)Saya merayu supaya mereka mempertimbangkan keputusan itu semula.
- 30)* Kerajaan Mesir telah mengerahkan supaya angkatan perangnya menyerang musuh-nya.
- 31)Pergerakan pemuda UMNO hari ini mahu supaya kerajaan menyiasat dan bertindak semula ke atas kumpulan yang mengedar surat layang untuk melaga pemimpin dan memecahbelahkan perpaduan parti itu.

更に、supayaを挿入することが可能なグループの中にも相違が観られる。例えば、supayaの中の文頭の名詞句を取り出して、supayaの前に置くことが可能かどうかを観てみると次の様な結果を得る。

- 32)Mereka mencadangkan Tuan Pengerusi supaya membubarkan persidangan itu.

33)Kapten tersebut mengarahkan orang-orang bawahannya supaya mengepung kubu pengganas itu.

34)* Arman mengajak saya supaya menziarahi datuknya di kampung.

35)Saya merayu mereka supaya mempertimbangkan keputusan itu semula.

36)* Pergerakan pemuda UMNO hari ini mahu kerajaan supaya menyiasat dan bertindak semula ke atas kumpulan yang mengedar surat layang untuk melaga pemimpin dan memecahbelahkan perpaduan parti itu.

動詞の直後にsupayaを入れることはできなくても、見かけ上の補文主語とその後の述部動詞の間に割り込ませれば非文ではなくなる例としては次の文がある。

37)Guru mengarah murid-murid supaya membacakan buku itu.

第四に、見かけ上の補文主語と述部動詞との間にuntukを挿入することができるかを観てみると次の様になる。

38)* Mereka mencadangkan Tuan Pengerusi untuk membubarkan persidangan itu.

39)Guru mengarah murid-murid untuk membacakan buku itu.

40)* Kapten tersebut mengarahkan orang-orang bawahannya untuk mengepung kubu pengganas itu.

41)Arman mengajak saya untuk menziarahi datuknya di kampung.

42)* Saya membantu Ahmad untuk menyelesaikan masalah itu.

43)* Saya merayu mereka untuk mempertimbangkan keputusan itu semula.

44)Kerajaan Mesir telah mengerahkan angkatan perangnya untuk menyerang musuhnya.

45)* Pergerakan pemuda UMNO hari ini mahu kerajaan untuk menyiasat dan bertindak semula ke atas kumpulan yang mengedar surat layang untuk melaga pemimpin dan memecahbelahkan perpaduan parti itu.

第五に、見かけ上の補文主語を焦点前置変形によって、主文の文頭に移動させることが可能かどうかについて観てみると、その結果は次の如くである。

46)* Tuan pengerusi dicadangkan membubarkan persidangan itu oleh mereka.

47)Murid-murid diarah membacakan buku itu.

48)* Orang-orang bawahannya diarahkan mengepung kubu pengganas itu oleh kapten tersebut.

49)Saya diajak menziarahi datuknya di kampung oleh Arman.

50)Ahmad saya bantu menyelesaikan masalah itu.

51)* Mereka saya rayu mempertimbangkan keputusan itu semula.

52) Angkatan peranginya telah dikerahkan menyerang musuhnya oleh Kerajaan Mesir.

8) に現れるmahuは抑、他動詞ではないので、人称形を作れない。従って、焦点前置変形も掛けることはできない。しかし、他方でmahukan という他動詞が存在し、8) のmahuをこの他動詞で置き換えることができるので、今この他動詞mahukan を使って、焦点前置変形を掛けてみると、結果は非文となる。

53)* Kerajaan dimahukan oleh pergerakan pemuda UMNO menyiasat dan bertindak semula ke atas kumpulan yang mengedar surat layang untuk melaga pemimpin dan memecahbelahkan perpaduan parti itu.

以上観てきた如く、冒頭で挙げた1) から8)迄の文は、見かけ上は全て同じ形、即ち、動詞の後にゼロ補文子に導かれる補文が続く構文の形を取ってはいるが、上述の様に、幾つかの統語的操作に対して、異なる振る舞いを示した。このことは、とりもなおさず、これらの構造が、見かけ上の一致にも拘らず、実際は夫々異なる構造を成していると思ふべきであると考えられる。この様に、補文子がゼロ補文子である場合、見かけ上の補文主語が主文の領域に属する要素なのか、或いは、実際上も補文に属している要素なのかの特定を巡って屡々問題を生じることがある。というよりも、実際には、1) から8) の様な構文の異同に就いては、これまで筆者の知る限り、論じられたことは無かったと言える。本論で、筆者は、これまでその異同について論じられることの無かった上記の様な構文が実は夫々に異なる構造を成すということを示すと共に、主要な動詞に就いて、その分類を行うと共に、取り得る補文の種類からの分類も併せて行うつもりである。

次章以下に於いては、これらの見かけ上同じ構造を成している文が実際は異なる構文に属するものであることを論証するつもりである。論を進めるに当たっては、ゼロ補文子を取る動詞に重点を置くが、同じ動詞であっても、複数の補文子を取るものもあることを考えて、他の有形の補文子に就いても分析の対象に含めることにする。

2. 補文子の種類

マレーシア語に於ける有形の補文子としては、次の様なものがある。補文子の用法を、それが実際に使われた文によって観ることにする。

54) "Undian menyaksikan 15 daripada 16 pemain mendesak agar Zvunka meninggalkan kelab ini ," kata wakil pemain. (H.S./B.H.,24/9/1992)

55) Dia sentiasa cenderung untuk berbohong.

56) Para pekerja kerajaan di Perancis mengancam untuk memperluaskan mogok mereka terhadap langkah-langkah tugas kerajaan.

(Radio Jepun 4/12/1995)

57) Orang salah itu merayu supaya hukumannya itu diringankan.

58) Seorang pegawai kerajaan telah mengajak petani-petani untuk bekerja kuat dan saling bantu-membantu di antara mereka.

(Kamus Utama, P. 6)

59) Dumlao memberitahu askar-askar di wilayah Iloilo semalam supaya melengkapkan borang peribadi dengan menjelaskan siapa tanggungan mereka.

60) Statistik menunjukkan bahawa ia tidak memilih mangsa malah semakin ramai wanita meninggal dunia.

(Berita Wanita/Berita Harian 3/11/1992)

61) Subramaniam mendakwa mayat anaknya ditanam pembunuh dalam kubur lama itu dan memohon kebenaran Mahkamah Majistret di sini bagi menggali semula kubur lama itu untuk memastikan sama ada anaknya ditanam dalam kubur itu atau tidak.

(B. H., 24/9/1992)

先ず agar と supaya に就いてその特徴を述べてみよう。他動詞の目的節を導く補文子の agar と supaya は相互に交換可能であるといえることができる。例えば、54) の agar を supaya で置き換えても意味に変化は生じない。同様にして、57) の supaya を agar で置き換えても意味に変化は生じない。又、次の文に示される様に、menganjurkan は、その後に agar に導かれる補文も取れるし、supaya に導かれる補文も取れる。

62) Kerajaan menganjurkan agar/supaya semua rakyat memakai ubat ini.

次に untuk に就いて述べてみる。この補文子は、自動詞の直後にも、他動詞の直後にも現れる。例えば、55) では untuk 補文子が自動詞 cenderung の直後に現れている。一方、56) では、untuk が他動詞 mengancam の直後に現れている。しかし乍ら、マレーシア語では他動詞の目的語が untuk 補文で出現する例は非常に少ないと言える。例えば、同じ他動詞でも、mengugut は untuk 補文を取ることはなく、次の様に、ゼロ補文子に導かれる補文を取る。

63) Mereka mengugut hendak membunuh anaknya jika ia tidak menyerahkan uang tebusan.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 755)

そして、untuk 補文子が自動詞と共に使われる場合でも、或いは他動詞と使われる場合でも、孰れの場合に於いても、untuk 補文中の解釈上の主語は主文の主語

と同一であるという解釈を常に受けるという特徴が観られる。このことは、別の観点から述べると、*untuk* 補文の文頭の位置には常にPRO が充填されているといえることができる。従って、次の様に、*untuk* 補文中の主語の位置に有形名詞や有形代名詞が現れる文は許容されない文となる。

64)* Seorang pegawai kerajaan telah mengajak petani-petani untuk mereka-
ka bekerja kuat dan saling bantu-membantu di antara mereka.

一方、*supaya*補文は次に観られる如く、有形の補文主語が現れることが可能である。

65)Nani merayu kedua-dua ibu bapanya supaya mereka membelikannya sebuah komputer.

次の文では、*supaya*に導かれる補文の中に主語が現れていないが、それは*untuk*の様に、基底構造にPRO が充填されているので出現できないのではなくて、本文の主語と埋め込まれた補文の主語が共通である場合には、後者の主語が削除されるという随意規則が適用された結果そうなのである。

66)Perdana Menteri menyeru rakyat Malaysia supaya bekerjasama membantu teras masalah dadah. (Kamus KBSR Baru Bahasa Melayu, P. 452)

以上は、マレーシア語の有形の補文子に就いて観て来たが、次の様な例に於いてはゼロ補文子が存在すると考えられる。

67)・・・DAP bercadang [ϕ mengadakan pertemuan sulit dengan PAS di Jakarta].

68)Langkah itu akan membantu [ϕ menyelesaikan masalah itu].

69)Polis mensyaki [ϕ Ahmad mencuri basikal itu].

70)Mereka menyuruh Ramli [ϕ mengangkat kanak-kanak tersebut].

71)Ia menyuruhkan adiknya [ϕ keluar bilik].

(Kamus Pelajar Sekolah Menengah, P. 499)

ゼロ補文子も、*untuk* と同じく、自動詞の後にも、他動詞の後にも用いられる。例えば、67)では、ゼロ補文子が自動詞の*bercadang* の後に現れている。一方、68)から71)では、ゼロ補文子が他動詞と共に用いられている。その中、69)では、ゼロ補文子が他動詞の直後の位置に現れている。70)と71)では、ゼロ補文子に導かれる補文が、目的語を介して二番目の位置に現れている。68)は、これだけ眺めれば、ゼロ補文子が他動詞の直後の位置に現れている様に見えるが、*membantu*は次の如く、直後に目的語を持つ構文も取れる。

72)Langkah itu akan membantu mereka menyelesaikan masalah itu.

このことも考え併せると、68)では、ゼロ補文子に先導される補文は、動詞の

直後の位置に現れているのではなく、削除されて表面上は現れていない目的語の後に現れていると考えるべきであろう。つまり、68)の表層構造は73)の様なものであると考えられる。

73)Langkah itu akan membantu [e] [ϕ menyelesaikan masalah itu].

次に、補文中に主語が現れるかどうかという観点から眺めてみると、主語の出現が可能なのは、69)だけで、その他は全て主語が現れない。71)は、このままでは74)に観られる如く、主語を挿入することができない。

74)* Ia menyuruhkan adiknya[ϕ dia keluar bilik].

しかし乍ら、ゼロ補文子の代わりにsupayaが充填されると、75)の様に、主語を挿入することが可能となる。

74)Ia menyuruhkan adiknya[supaya dia keluar bilik].

このことは、言い換えると、69)を除いて、その他の文に現れているゼロ補文子に先導される補文の主語の位置にはPRO が充填されていると考えられるということになる。つまり、主語の位置にPRO を取るゼロ補文子と、そうではないゼロ補文子の二種類が認められるということである。それでは、次の例はどうだろうか。

75)Mereka mengugut hendak membunuh anaknya jika ia tidak menyerahkan wang tebusan.

この文は、次の様に補文中に主語を取る形は許容されない所から考えると、補文主語の位置にはPRO が充填されていると考えるかもしれない。しかし、正保勇(1995)で主張した様に、hendakに代表されるモーダルは主格付与と深く関わっているとという立場に立てば、75)のゼロ補文子は主語の位置にPRO が来ているのではなく、最初は有形の代名詞が主語の位置に充填されていたが、本文の主語と同一であることによって、義務的に削除変形が掛かったと考えるべきであろう。

次にuntuk との交換可能性に就いて観てみることにする。70)も71)も、共に、主語にPRO を取るゼロ補文子が現れている例であるが、70)の方は、76)の様に、untuk で交換することが可能であるのに対して、71)の方は、77)が示す如く、そうすることができない。

76)Mereka menyuruh Ramli [untuk mengangkat kanak-kanak tersebut].

77)* Ia menyuruhkan adiknya[untuk keluar bilik].

これは、同じ語根から派生しているにも拘らず、接尾辞-kanの有る無しがこの相違を生み出していると考えられる。このことに就いては、次章で考察するつもりである。

3. - k a nの有無

76)と77)の違いを考える前に, mengarahとmengarahkan との相違に就いて観てみよう。次の二文は表面上は同じ構造をしている様に見える。

78) Saya mengarah setiausaha supaya menaip surat.

79) Saya mengarahkan setiausaha supaya menaip surat.

しかし乍ら, 78) は他動詞の直後の名詞句の前に kepada を入れることができないのに対して, 79) の方はそうすることができる。

80) *Saya mengarah kepada setiausaha supaya menaip surat.

81) Saya mengarahkan kepada setiausaha supaya menaip surat.

このことは, 80) の - k a n が付加されていない mengarah にとっては supaya 補文ではなく, setiausaha の方が重要であるのに対して, 81) では逆に, - k a n の付加された mengarahkan にとって重要なのは, supaya 補文の方であるということの意味している。正保勇(1996)で主張した様に, マレーシア語では他動詞の真正目的語は唯一つであり, しかもそれは他動詞の直後に置かれるという立場を採れば, 80) の mengarah の真正目的語は setiausaha であるのに対して, 81) の mengarahkan の真正目的語は基底では supaya 補文であったが, この基底構造に間接目的語前置変形が掛った結果, 間接目的語であった setiausaha が動詞の直後の位置, 即ち真正目的語の位置に格上げされたと考えられる。別の面から観れば, 80) には真正目的語は setiausaha 一つであるのに対して, 81) には, 新たに真正目的語に格上げされた setiausaha と, 真正目的語ではなくなったが, 以前の真正目的語(これを退役真正目的語と呼ぶことにする)である supaya 補文の二つが存在する構文である。81) の構造はもっと単純な構造に例えれば, 次の memberi によって作られる二つ目的語を取る構文の如きものと言い得る。

82) Dia memberi saya sebuah buku bergambar.

ここで注意すべきは, 退役真正目的語であれ, 真正目的語であれ, 目的語になり得るのは supaya であって, untuk は目的語となることはないという点である。即ち, 80) の文に於いては, untuk 補文は目的語としてではなく, いわば次の英語の例に於ける to 不定詞の目的格補語の様な機能を果たしていると考えられる。

83) I ordered my secretary to type the letter.

以上述べてきたことを参考にして考えると, 76) と 77) も同じ様に考えられるのではないだろうか。今 76) と 77) を 84) と 85) として再度掲げることにする。84) では, ゼロ補文子の代わりに untuk を入れられる所から考えて,

“mengangkat kanak-kanak tersebut” の部分は目的語ではなく, 真正目的語はその前に位置する Ramli であると言える。それに対して, 85) は 81) と同じ構

造を成していると考えれば, adiknya は格上げされた真正目的語で, keluar bilik は退役真正目的語ということになる。

84) Mereka menyuruh Ramli mengangkat kanak-kanak tersebut.

85) Ia menyuruhkan adiknya keluar bilik.

同じことは, menasihatkanに就いても当て嵌まる。次の文 86) も 79) や 8*5) と同じ構造を成していると考えられる。

86) Ia sentiasa menasihatkan anak-anaknya supaya tidak meninggalkan sembahyang. (Kamus Dewan(1989), P. 790)

86) のsupaya補文が目的語の資格を有していることは, menasihatkanは, 次の様に, 直後にsupaya補文に従える構文を取ることも分かる。

87) Ia sentiasa menasihatkan supaya tidak meninggalkan sembahyang. (Kamus Dewan(1989), P. 790)

又, 86) のanak-anaknyaが本来は間接目的語であることは, anak-anaknyaに kepadaを被せた次の様な形も存在することから知られる。

88) Ia sentiasa menasihatkan kepada anak-anaknya supaya tidak meninggalkan sembahyang.

しかし乍ら, 85) は 81) とは違い, 次の様にadiknya の前に, kepadaを置くことはできない。

89)* Ia menyuruhkan kepada adiknya keluar bilik.

これは, menyuruhkan という他動詞はmengarahkan とは違い, supaya補文子を取らないという事実によって説明されると考えられる。つまり, 退役真正目的語を導く補文子はゼロ補文子であってはならないという原則が支配していると考えられる。

87)* Ia menyuruhkan adiknya supaya keluar bilik.

一方, menyeru とmenyerukanの用法上の差異は, 以上述べてきたことではうまく説明できない。次の例から明らかな如く, menyeru は, 動作の向かう対象, 即ち間接目的語を直後に取ることが可能である。それに対して, menyerukanはそうすることができない。

88) Perdana Menteri menyeru rakyat Malaysia supaya bekerjasama membanteras masalah dadah. (Kamus KBSR Baru Bahasa Melayu, P. 452)

89)* Perdana Menteri menyerukan rakyat Malaysia supaya bekerjasama membanteras masalah dadah.

しかし, menyerukanは, 次例の如く, supayaやagar補文を直後に従えることはできる。

90)* Perdana Menteri menyerukan supaya rakyat Malaysia bekerjasama membanteras masalah dadah.

91) Tulisan itu menyerukan agar para pendidik memandang berat akan masalah ini. (An Illustrated Malay English Dictionary, P. 466)

つまり、menyerukanがmengarahkan やmemerintahkkan と異なる点は、前者は真正目的語として、supaya補文を取り、格上げされた間接目的語を真正目的語には取らないという点に求められる。

4. 補文を取る動詞の分類

前節で、menyeru の後に間接目的語が現れる次の文 (= 88) を観た。

92) Perdana Menteri menyeru rakyat Malaysia supaya bekerjasama membanteras masalah dadah. (Kamus KBSR Baru Bahasa Melayu, P. 452)

menyeru は又、supaya補文を直後に従える次の様な構造を取ることにも可能である。

93) Polis menyeru supaya mereka keluar dari tempat bersembunyi. (Kamus Umum untuk Sekolah Menengah, P. 266)

しかし、この文を次の様に変えると、非文となる。

94)* Polis menyeru kepada mereka supaya keluar dari tempat bersembunyi.

このことから、92) の“rakyat Malaysia” は、mengarahkan やmemerintahkkan の場合と同じ様に、格上げされた間接目的語と考える訳にはいかない。即ち、“rakyat Malaysia” は基底構造でもこの位置を占めていたと考えられる。他動詞の直後の位置は真正目的語が占める場所であるから、言うまでもなく、“rakyat Malaysia” が真正目的語ということになる。元々、92) の構文は、supaya補文を真正目的語とする94) の様な構文から、補文中の主語を補文子の外に出すことにより生じたと考えられる。

95) Polis menyeru supaya rakyat Malaysia bekerjasama membanteras masalah dadah.

92) は英語の対格付き不定詞を取る構文に例えることができる構文で、この類いの構文では、不定詞に当たる部分の補文子としては、前に述べた様に、通常次の様に、untuk が使用される。

96) Seorang pegawai kerajaan telah mengajak petani-petani untuk bekerja kuat dan saling bantu-membantu di antara mereka.

(Kamus Utama, P. 6)

97)・・・dan membantu mereka untuk mengamalkan satu cara pengawasan yang sesuai terhadap anak itu. (Berita Harian 17/9/1992)

しかし乍ら、元々supayaを真正目的語として取る構文から派生した構文の場合には、元々の補文子を引き継ぐことになる。こういう理由によって、92)の構文には、untuk 補文ではなく、基になった構文中にあったsupayaが顔を出しているのである。92)の様な構文のもう一つの特徴としては、supaya補文の主語は、主文の主語と常に同一であると解釈されるということである。92)と同じ類型(資料1に於けるB-8)に属する他の例を挙げる。

98)Dia mendesak saya supaya menyiapkan kerja itu secepat mungkin.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 151)

99)Abang menggalakkan kami supaya belajar bersungguh-sungguh.

今、98)の文中のsupaya補文を変えて次の様になると、非文となる。

100)* Dia mendesak supaya kerja itu disiapkan secepat mungkin.

それに対して、supaya補文の前に位置する名詞句にkepadaを挿入できる次の様な動詞類(資料1に於けるB-7)では、必ずしも、supaya補文の主語と主文の主語とが同一である必要はない。例えば、次101)、102)を103)、104)の様に変えることが可能である。

101)Saya merayu mereka supaya mempertimbangkan keputusan itu semula.

102)Ketuanya mengarahkannya supaya mnaip surat itu. (Kamus Ayat, P. 19)

103)Saya merayu mereka supaya keputusan itu dipertimbangkan semula.

104)Ketuanya mengarahkannya supaya surat itu ditaip.

つまり、92)に代表されるB-8の類型の動詞の場合には、supaya補文の前に置かれた名詞句は元々のその出所であるsupaya補文と意味上の連関は維持しつつも、他動詞の真正目的語としての完全な資格を得ていると考えられる。それに対して、101)、102)に代表されるB-7の動詞類の場合には、supaya補文の前の名詞句の前にkepadaを挿入できることから分かる様に、この名詞句は、他動詞の新たな真正目的語とはなっているものの、間接目的語起源であるから、supaya補文内の要素と意味上の連関を有しなくても当然と言える。この様な両類型の出自上の差異というものがsupaya補文の主語の解釈に関する制約の違いにも現れていると考えられる。

扱、次に補文子が無形である場合、表面上は全て次の様なパターンで現れることになるが、実際には、ここに四つの相異なる構造が、言わば合流しているのである。

105) (N₁) + V (T)₁ + N₂ + V₂・・・(ここでV (T)₁ は他動詞)

先ず、他動詞の直後の名詞句 (N₂) が主文中の要素か、若しくは補文中の要素かによって、次の様な二種類の異なる構造が浮かんでくる。

106) (N₁) + V (T)₁ + N₂ [s · φ V₂ …]

107) (N₁) + V (T)₁ [s · φ N₂ + V₂ …]

前者の構造に入るものとしては次の様なものがある。

108) Kerana hujan lebat ,dia mengajak saya naik ke rumahnya.

109) Ia menuduh kawannya mencuri wangnya.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 737)

後者の構造に入るものとしては次の様なものがある。

110) Polis mensyaki Ahmad mencuri basikal itu.

111) Menurutny a, Apcc perlu menimbang secara serius bagi membolehkan Asia Pasifik dibahagikan kepada kawasan kecil. (B. H., 10/9/1992)

112) Menurutny a, setiap kali Keong pulang ,dia sering mengadu diganggu sekumpulan lelaki yang menetap di kampung itu.

(B. H. (Edisi Tengah), 6/11/1992)

108) の補文には、相助動詞も法助動詞も現れないのに対して、109) の補文にはこれらの助動詞が現れるという違いが観られる。次例を参照されたい。

113)* Kerana hujan lebat ,dia mengajak saya akan naik ke rumahnya.

114) Ia menuduh kawannya telah mencuri wang itu.

先にも述べた如く、法助動詞が主格付与と深く関わっているという前提に立てば、108) の補文中に有形の主語が現れることがないということになるから、この補文の主語の位置にはPRO が充填されていると考えられる。従って、この構造 (資料1 に於ける B-5) の中には今述べた様に、ゼロ補文子に二種類の区別を設ける必要があるということになる。

後者の構造 (資料1 に於ける B-2) に於いても、B-5 のタイプの構造に於いてと同様、ゼロ補文子に、主格付与に関与する法助動詞が存在するものと、それを欠くものとの二種類を区別できる。例えば、110) と 112) は後者に属し、111) は前者に属すると言える。次の様な文が非文となる所から観ても、membolehkan の後のゼロ補文子には法助動詞や相助動詞が欠けていることが確かめられる。

115)* Menurutny a, Apcc perlu menimbang secara serius bagi membolehkan Asia Pasifik dapat dibahagikan kepada kawasan kecil.

116)* Menurutny a, Apcc perlu menimbang secara serius bagi membolehkan Asia Pasifik akan dibahagikan kepada kawasan kecil.

そして、法助動詞を欠く、言い換えれば主語の位置に主格を付与できない、英語の非定形節に相当する補文を導くゼロ補文子には又、その補文にSバー削除を許すという特徴が観られる。次の文で、*membolchkan* に付加されている接語代名詞の-nyaは、ゼロ補文中の主語が*membolchkan* によって目的格を付与されていることを示している。

117) *Keccmerlangan Chong sepanjang perlawanan itu membolchkannya mendahului dengan 3-0 sebelum Manalo dapat memungut mata pertamanya.*

(*Harian Sukan/B.H.* ,19/6/1993)

つまり、この場合ゼロ補文中の主語は補文中では主格を得られないので、どうしても補文外から格を付与される必要がある訳で、それが可能となるためには、Sバー削除が前提となるのであり、Sバー削除は格理論からの要請によるものである。

更に、又このB-2の構造を作る動詞の中には、次の様に補文主語に上昇変形が掛かったと思われるものが認められる。

118) *Ahmad disyaki polis mencuri basikal itu.*

119) *Gigi palsunya disahkan terlekat di kerongkongnya.*

これらの補文主語上昇が掛かった構文に特徴的なのは、主文の動詞が三人称に限られ、しかも動作主が現れない*d i* -だけが付加された形の場合が殆どである。次の例からも分かる様に、この構文の補文には法助動詞が現れているので、補文の主語にはこの補文内で主格が付与され得ると考えられる。もし、主文の動詞も格を付与する形であると、補文主語は二重に格を受けることになり格理論上不都合を生じることになる。よく言われる様に、*d i* -形動詞が受動形であるとの立場に立てば、受動形動詞は目的格付与能力を欠いているので補文主語に格を付与することはあり得ないことになる。こう考えれば、上昇構文の主文の動詞が*d i* -形の受動形でなければならないということがうまく説明されることになる。

120) *Marga munasabah diharapkan dapat ditawarkan oleh Proton.*

これまで述べてきたことを総合して、1) ゼロ補文子、2) *u n t u k* 補文子、3) *s u p a y a* 補文子、4) *a g a r* 補文子、5) *b a h a w a* 補文子の孰れかを取る動詞に就いてその種類の割り出しを行ったのが資料1である。又、主要な動詞に就いて、それが取り得る補文を一覧表の形で提出したのが資料2である。

参考文献

- 稲田俊明(1989). 『補文の構造』 (「新英文法選書」第3巻). 東京: 大修館書店.
- 正保勇 (1995). 'I-lowering in Malay Focus Fronting Constructions',
Kumpulan Kertas Kerja Jilid II. Kuala Lumpur: Kongres
Bahasa Melayu Sedunia.
- (1996). 「受動文と主題文」. 『語研論集』第2号. 東京外国語大学
語学研究所.
- 鈴木英一(1993). 『統語論』. (安井稔(監修)「現代の英語学シリーズ」5).
東京: 開拓社.
- 渡辺登士(1989). 『英語の語法研究・十章』. 東京: 大修館書店.

補文を取る動詞の類型 (資料1)

A - 1 : V I + [s- φ PRO]

- 1) ...DAP bercadang mengadakan pertemuan sulit dengan PAS di Jakarta.
- 2) Ia cenderung membaca.
- 3) Saya masih belum mampu membeli rumah.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 430)

A - 2 : V I + [s- untuk]

- 1) Dia sentiasa cenderung untuk berbohong.
- 2) Dunia perniagaan cuba untuk menghindarkan keadaan kemelesetan ekonomi yang berpanjangan ini dengan menghuraikan secara bertenaga atau membuat penyusunan semula. (Radio Jepun, 3/1/1996)
- 3) Murid-murid Tahun Enam Kenanga bercadang untuk melawat guru mereka yang sakit.
- 4) Abdul Mutalib segera bermohon untuk berangkat balik ke Mekah.

(Hikayat Umar Umayyah, P. 23)

A - 3 : V I + [s- φ]

- 1) Penduduk pulau berharap golongan muda pulang semula supaya bekerja di kampung kerana banyak industri menghadapi masalah ekonomi. (B. H. , 15/7/1993)
- 2) Seorang siswa yang menjayakan projek itu, Norhammad Mohd Noor, 21, dari Kota Bharu berkata dia bangga turut terpilih dalam program yang banyak faedahnya terhadap pelajar. (Berita Pelajar/Berita Harian, 30/11/1992)
- 3) "Kita berharap Korea Selatan akan turut membuat pelaburan di Malaysia pada masa hadapan. ...," katanya. (B. H. , 20/4/1993)

A - 4 : V I + [s- agar/supaya]

- 1) Setelah berunding dengan para menterinya , Abrahah bersetuju agar Umar menjaga kaabah itu. (Hikayat Umar Umayyah, P. 23)

B - 1 : V T + [s- Ø PRO]

- 1)Langkah itu akan membantu menyelesaikan masalah itu.
- 2)···objektif utama Mara ialah membantu secara langsung membina usahawan serta keusahawanan Bumiputera. (B. H., 6/11/ 1992)

B - 2 : V T + [s- Ø]

- 1)Polis mensyaki Ahmad mencuri basikal itu.
- 2)Hilmi mengesyakkan sesuatu buruk sedang berlaku. (Kamus Dewan, P. 1253)
- 3)Belum ada tangkapan dibuat dan pihak berkuasa merayu saksi kejadian itu membuat laporan. — AFP (Berita Harian 15/12/1994)
- 4)"Saya mencadangkan pengusaha yang mendakwa kerugian mengkaji balik strategi dan jika perlu bergabung dengan pengusaha lain jika mereka cnggan menyerah semula permit yang diberikan kepadanya,"katanya. (B. H. (Edisi Tengah), 26 Mei 1993)
- 5)"Pihak HBS ketika membuat pemeriksaan X-ray mengesahkan gigi palsu-nya terlekat di kerongkongnya ," katanya. (B. H., 24/9/1992)
- 6)"Saya khuatir kerana mulanya minta dihentikan iklan dalam bahasa Inggeris saja, sekarang timbul pula ucapan dalam bahasa Inggeris juga tidak bolch dan suratkhbar bahasa Inggeris tak bolch.
- 7)Menurut Perdana Menteri , adalah keterlaluan jika golongan pejuang bahasa berkenaan mendesak hanya bahasa Melayu saja digunakan dalam semua keadaan. (B. H., 10/9/1992)
- 8)Menurutnya , Apcc perlu menimbang secara serius bagi membolehkan Asia Pasifik dibahagikan kepada kawasan kecil. (B. H., 10/9/1992)

B - 3 : V T + [s- untuk]

- 1)Para pkerja kerajaan di Perancis mengancam untuk memeperluaskan mogok mereka terhadap langkah-langkah tugas kerajaan. (Radio Jepun 4/12/1995)

B - 4 : V T + [s- supaya]

- 1)Orang salah itu merayu supaya hukumannya itu diringankan.
- 2)Ketua pejabat telah mengarahkan supaya kakitangan melayan orang ramai dengan hormat. (An Illustrated Malay English Dictionary, P. 18)

- 3) Tuan pengerusi mencadangkan supaya persidangan itu dibubarkan.
- 4) Polis mengarahkan supaya ikut jalan depan istana, dan terus ke Jalan Syed Putera," tegas ayah Arif lagi. (Lelaki Misteri, P. 65)
- 5) Perskutuan Majikan Majikan Malaysia (MEF) hari ini meminta supaya definisi 'upah' disragamkan kerana takrifannya masih menjadi punca kontroversi bagi pekerja, majikan, pihak penguatkuasa dan pegawai mahkamah. (B. H. 5/1/1993)

B – 5 : V T + O + [s-Ø]

- 1) Mereka menyuruh Ramli mengangkat kanak-kanak tersebut.
- 2) Kerana hujan lebat, dia mengajak saya naik ke rumahnya.
- 3) Tak ada orang yang berani menghalang dia mengambil wang itu. (An Illustrated Malay English Dictionary, P. 145)
- 4) Dia mempelawa kami makan di rumahnya. (An Illustrated Malay English Dictionary, P. 354)
- 5) Ia menuduh kawannya mencuri wangnya. (Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 737)
- 6) Ia menyuruhkan adiknya keluar bilik. (Kamus Pelajar Sekolah Menengah, P. 499)
(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 501)
- 7) Dialah yang mendorong saya melanjutkan pelajaran hingga ke universiti. (Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 161)
- 8) Raja Haji memerintah rakyatnya membuat kubu di sepanjang pantai. (Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 490)

B – 6 : V T + O + [s- untuk]

- 1) "Saya begitu terperanjat lalu memanggil Ramli (kawannya) untuk menolong kanak-kanak itu. . . .," katanya.
- 2) Kerajaan mengarahkan rakyat untuk menjayakan projek itu. (Kamus Delta, P. 295)
- 3) Seorang pegawai kerajaan telah mengajak petani-petani untuk bekerja kuat dan saling bantu-membantu di antara mereka. (Kamus Utama, P. 6)
- 4) . . . dan membantu mereka untuk mengamalkan satu cara pengawasan yang sesuai terhadap anak itu. (Berita Harian 17/9/1992)

5) Lokasinya yang berhampiran Sekolah Kebangsaan Chenuk, dekat sini, memudahkan pelajar di situ untuk menggunakannya.

(Berita Pelajar/Berita Harian, 30/11/1992)

B - 7 : V T + (kepada) O + [_s agar/supaya]

1) Dumlao memberitahu askar-askar di wilayah Iloilo semalam supaya melengkapkan borang peribadi dengan menjelaskan siapa tanggungan mereka.

2) Saya merayu mereka supaya mempertimbangkan keputusan itu semula.

3) Ketuanya mengarahkannya supaya menaip surat itu. (Kamus Ayat, P. 19)

4) Seorang jeneral Filipina memerintahkan askar-askarnya supaya merekodkan nama isteri mereka yang sebenarnya untuk mengelakkan kekeliruan yang timbul apabila terdapatnya lebih daripada seorang wanita menuntut mayat seseorang anggota tentera yang terbunuh.

5) Saya merayu mereka supaya mempertimbangkan keputusan itu semula.

6) Dr Yusof juga mengarahkan Lembaga Pelesenan Kenderaan Perdagangan (LPKP) supaya memberi perhatian khusus kepada pengangkutan awam di Lembah Klang. (B. H. (Edisi Tengah), 26 Mei 1993)

7) Ia memerintahkan saya agar pergi ke sana.

(Kamus Pelajar Sekolah Menengah, P. 387)

8) Bagaimanapun Wak Nani mendakwa dirinya bukan pewaris sebenar tetapi secara kebetulan menerima mimpi mengarahkannya mengambil alih tugas penjawatnya yang meninggal dunia lapan bulan lalu. (Metro 6/8/1994)

9) Nani merayu kepada kedua-dua ibu bapanya supaya membelikannya sebuah komputer. (Kamus KBSR Baru Bahasa Melayu, P. 406)

10) Speaker Parlimen, Gohar Ayub, yang menyokong Sharif, merayu Mahkamah Tinggi supaya mengeluarkan satu injuksi membantah perintah Presiden. (B. H., 20/4/1993)

11) Zain berkata, MEF sudah memohon kepada KWSP dan Perbendaharaan supaya akta itu dikaji hampir dua tahun lalu. (B. H. 5/1/1993)

B – 8 : V T + O + [s- agar/supaya]

1) Dia mendesak saya supaya menyiapkan kerja itu secepat mungkin.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 151)

2) Ibunya mendesaknya supaya dia berhenti sekolah dan mencari kerja.

(Kamus Ayat, P. 125)

3) Dr Yusof juga mengingatkan pengusaha pengangkutan awam supaya jangan terlalu memikirkan keuntungan sehingga mengabaikan kenderaan mereka.

(B. H. (Edisi Tengah), 26 Mei 1993)

4) Ia memerintah saya supaya pergi.

(Kamus Pelajar Sekolah Menengah, P. 387)

5) Hakim Mahkamah Sesyen, Haji Mohd. Noor Haji Abdullah membenarkan kes Dato' Choo dan Lau yang didakwa atas tuduhan serupa supaya dibicarakan secara serentak pada 8 Mei tahun depan.

6) Abang menggalakkan kami supaya belajar bersungguh-sungguh.

(Kamus Pelajar KBSR Baru Bahasa Melayu, P. 169)

7) Dia memujuk hatinya supaya bersabar.

(Lelaki Misteri, P. 45)

8) Amerika Syarikat akan cuba meyakinkan Korea Utara supaya membenarkan pemeriksaan ke atas tapak yang disyaki pusat pembinaan senjata nuklear, selepas kata dua Presiden Bill Clinton.

(B. H., 15/7/1993)

9) Beliau telah mencabar pegawai itu supaya mengulangi tuduhan tersebut.

(Kamus Pelajar Bahasa Malaysia, P. 100)

動詞が取り得る補文子 (資料 2)

[文形 1] S + V I + C (complementizer)

補文子 (C) 動詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
beramanat		○	○		
beranggapan	○				○
berani	○				
bercadang	○			○	
bercita-cita				○	
berdoa		○	○		
berfikir				○	
berharap	○	○	○		
berhasrat		○	○		
berjaya	○				
berkata	○				○
berkeras					○
mampu				○	

動詞が取り得る補文子 (資料 2)

[文形 1] S + V I + C (complementizer)

補文子 (C) 動詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
berminat	○			○	
bermohon				○	
nampak	○				
sepakat	○			○	
berpeluang	○				
berpendapat	○				
sedar	○				○
sedia	○			○	
bersedia	○			○	
setuju		○	○	○	
bersetuju		○	○	○	
tak segan-segan	○				
berusaha	○			○	

〔文形 2〕 S + V T + C (complementizer)
動詞が取り得る補文字 (資料 2)

補文字 (C) 動 詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
mengadu	○				
mengakibatkan	○				
mengaku	○				○
mengancam	○				
menganggap	○				○
menganjurkan		○	○		
mengarahkan		○	○		
membnarkan		○	○		
membolehkan	○				
mencadangkan		○	○		
mencuba	○			○	
mendakwa	○				○
mendapati	○				○

〔文形 2〕 S + V T + C (complementizer)
動詞が取り得る補文字 (資料 2)

補文字 (C) 動 詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
mendesak	○	○	○		
menggalakkan		○	○		
menggesa		○	○		
mengharap	○				
menghendaki	○				
menjanka	○				○
mengatakan	○				○
makukan	○	○	○		
minta	○				
meminta				○	
menyatakan	○	○	○		○
memastikan	○	○	○		
memrintahkan	○	○	○		

動詞が取り得る補文子 (資料2)

[文形2] S + V T + C (complementizer)

補文子 (C) 動詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
memohon		○	○		
memujuk		○	○		
mengesahkan	○				○
menyarankan		○	○		
menyebabkan	○				
menyeru		○	○		
menyerukan		○	○		
menyadari	○				○
menyokong		○	○		
menegaskan	○				○
menuntut	○	○	○		
menimbang	○				
menibangkan		○	○		

動詞が取り得る補文子 (資料2)

[文形2] S + V T + C (complementizer)

補文子 (C) 動詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
menunggu	○				
mengulangi					○

[文形 3] S + V T + N + C (omplementizer)
動詞が取り得る補文字 (資料 2)

補文字 (C) 動 詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
mengajak	○			○	
menganjurkan		○	○		
mengarah	○	○	○	○	
mengarahkan	○	○	○	○	
membantu	○			○	
membenarkan	○				
membritahu	○				○
membujuk	○		○	○	
membuatkan	○				
mencabar	○	○	○		
mencadangkan	○	○	○		
mendidik		○	○		
mendcsak		○	○		

[文形 3] S + V T + N + C (omplementizer)
動詞が取り得る補文字 (資料 2)

補文字 (C) 動 詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
mendorong	○			○	
mendorongkan	○				
mengclakkan	○				
menggalakkan	○	○	○		
menggesa	○	○	○		
menggugat		○	○		
menghalang	○			○	
mengingatkan		○	○		○
menjempuk	○			○	
meminta	○	○	○	○	
memudahkan	○			○	
menasihati		○	○		
menasihatkan	○	○	○		

動詞が取り得る補文子 (資料 2)
[文形 3] S + V T + N + C (omplementizer)

補文子 (C) 動 詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
menyuruh	○			○	
memaksa	○			○	
memperlawa	○			○	
mempengaruhi			○		
memerintah	○		○	○	
memesan	○		○		
memujuk	○	○	○	○	
merayu		○	○		
merclakan	○				
mengesyorkan		○	○		
menuduh	○				
menugasi	○				
menugaskan	○				

動詞が取り得る補文子 (資料 2)
[文形 3] S + V T + N + C (omplementizer)

補文子 (C) 動 詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
mengundang	○			○	
mengusulkan		○	○		
meyakinkan	○	○	○		○

動詞が取り得る補文子 (資料 2)

[文形 4] S + V I + KEPADA ~ + C (omplementizer)

補文子 (C) 動詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
bermohon		○	○		
berpesan		○	○		
berseru		○	○		

[文形 5] S + V T + KEPADA ~ + C (omplementizer)

補文子 (C) 動詞	φ	agar	supaya	untuk	bahawa
mengajak		○	○		
menandatangani		○	○		
memesan		○	○		
memohon		○	○		
merayu		○	○		
mengadu	○				○

本稿ではベトナム語教育の視点からベトナム語の基本文型についてまとめてみる。ベトナム語の文の構造上の原則は、主語－動詞－補足語（目的語や補語）という語順であるが、ここではあらゆる文（単文、複文など）の核となっている主述関係の〔主語－述語〕の文型について考察する。最も基本的で、最も重要な文の骨格であるこの文型をよく把握していれば、他の種々の成分が加わって一見難解な文でもその構造を十分に分析し理解できるのである。

1. 主題語と主語が一致する場合

主語（＝主題語）－述語

1.1. 繋辞のlàのある場合

(1) 名詞－là－名詞

Hà Nội là thủ đô của Việt Nam.

ハノイはベトナムの首都です。

この場合は絶対的の同一であるので順序を逆にすることができる。

Thủ đô của Việt Nam là Hà Nội.

Bố tôi là công nhân.

私の父は労働者です。

この場合は、個別的名詞－là－包括的名詞で順序を逆にすることは原則としてできない。

* Công nhân là bố tôi.

労働者は私の父です。

国籍、出生地、時間、曜日、これらの意味を表わす場合にはlàの存在は随意である。

Chị ấy người Pháp.

彼女はフランス人です。

Anh ấy người Huế.

彼はフエ出身です。

Bây giờ 5 giờ.

今は5時です。

Ngày mai thứ ba.
明日は火曜日です。

以下の例は一般的にはlàがない文が使われるが、làのある文に変換することが可能なものである。

Đồng hồ này của tôi.
Đồng hồ này là đồng hồ của tôi.
この時計は私のです。

Hoa này để tặng em.
Hoa này là hoa để tặng em.
この花は君に贈るためのものです。

同一語の繰り返しはなるべく避けるのが一般的であり、その場合にlàも一緒に省いているのである。

(2) 名詞－là－動詞句

Nguyện vọng của tôi là trở thành ca sĩ.
私の願望は歌手になることです。

(3) 動詞句－là－名詞

Trở thành ca sĩ là nguyện vọng của tôi.
歌手になることが私の願望です。

(4) 動詞句－là－動詞句

Thi đua là yêu nước.
競い励むことは国を愛することだ。

(5) 文－là－名詞

Chị đi xem là một điều tốt.
あなたが見に行くことはよいことです。

(6) 名詞－là－文

Điều quan trọng là anh phải chăm học
大切なことはあなたが真面目に勉強しなければならないことです。

(7)動詞句—là—文

Hợp tác là mọi người chung sức lại mà làm.

協力するということはみんなが力を合わせてするということです。

(8)文—là—文

Chúng ta thi đua là chúng ta yêu nước.

我々が競い励むことは我々が国を愛することだ。

1.2. 繫辞のlàのない場合

(1)名詞—動詞—（補足語）

Tôi chạy.

私は走る。

(2)名詞—形容詞

Anh ấy béo lắm.

彼はとても太っている。

ベトナム語では英語のbe動詞に相当するものはなく名詞の後にすぐ形容詞が来る。

(3)文—動詞句

Chị không đến khiến các con buồn.

あなたが来なかったことが子供達を悲しませた。

(4)動詞（句）—動詞句

Thức dậy sớm đã trở thành thói quen,

早起きが習慣となった。

(5)動詞句—形容詞

Học tiếng nước ngoài dễ.

外国語を勉強することは易しい。

Dạy tiếng nước ngoài không dễ.

外国語を教えることは易しくない。

この場合は、名詞と形容詞が接続しているので修飾関係でないことを示すために、読む場合には名詞の後に短いポーズを入れる。又、書く場合は主語と述語との区切りを明確にするために副詞のlàを挿入するのが普通である。

Học tiếng nước ngoài là dễ.

Dạy tiếng nước ngoài là không dễ.

(6)名詞一名詞

Tôi 37 tuổi.

私は37才です。

これは年齢表現の慣用的な表現形式と言える。…tuổiを述語として用いているのである。因に、子供の年齢について言う場合は、lên〈上がる〉を使う。

Con tôi lên 5 tuổi.

私の子供は5才になりました。

2. 主題語と主語が異なる場合

主題語－主語－述語

2.1. 主題語－主語－述語の場合

(1)名詞一名詞－動詞

Vấn đề này chúng tôi đã giải quyết rồi.

この問題は我々が既に解決した。

Tiếng Đức tôi thích lắm.

ドイツ語は私はとても好きです。

この2文では、主題語は述語の行為の及ぶ対象である。即ち、論理的格関係からは述語の補足語（＝目的語）である。いずれも主題主語文に換えることができる。

Chúng tôi đã giải quyết vấn đề này.

Tôi thích tiếng Đức lắm.

(2)名詞（句）－名詞－形容詞

Anh Nam tính rất tốt.

ナム君は性質がとてもよい。

Cây này hoa rất đẹp.

この木は花がとてもきれいだ。

この2文では、主語は主題語の属性を表すものであったり、その一部であったりするという特徴を持っている。

(3)名詞－動詞句－形容詞

Người nước ngoài phát âm tiếng Việt khó lắm.

外国人はベトナム語を発音するのがとても難しい。

この文は論理的意味関係から、phát âm tiếng Việtがkhóなのであって、người nước ngoàiがkhóなのではない。発話の際には主題語の後で若干のポーズがおかれる。

(4)動詞句－名詞－形容詞

Dạy tiếng Việt chị ấy rất giỏi.

ベトナム語を教えるのが彼女はとても上手だ。

Lái xe anh ấy rất giỏi.

車の運転が彼はともうまい。

この2文は(3)のパターンにすることができるが、表現のポイントが異なったものになることは言うまでもない。

Chị ấy dạy tiếng Việt rất giỏi.

Anh ấy lái xe rất giỏi.

2.2. 主題語－ ー述語の場合

主語が省略されているパターン。

(1)名詞－ ー動詞

Nhà này đã xây xong.

この家はもう建て終わった。

Vấn đề này đang nghiên cứu.

この問題は研究中です。

この2文は一見すると主題主語文のようであるが、実際は全く異なるものである。

nhà và vấn đề là xây và nghiên cứuの行為主体ではなくそれらの補足語である。

(人) đã xây nhà này xong.

(人) đang nghiên cứu vấn đề này.

のように行為主体があると普通の主題主語文となる。

Nhà này (人) đã xây xong.

Vấn đề này (人) đang nghiên cứu.

こうすると主題－主語文となる。

主語の省略には次のような理由が考えられる：

- ・主語を省略しても意味上曖昧さが生じない。
- ・行為主体が不明、不特定で表現できない。

3. 動詞（句）を主語として用いることのできる場合

(1) 述語が事柄の性質を表す場合

Đi lại trong thành phố rất khó khăn.

市内の往来はとても難しい。

(2) 述語が存在、出現、変化などの意味を表す場合

Hy vọng về quê đã thành sự thật.

故郷へ帰るという希望が現実となった。

(3) 述語が使役の意味を表す場合

Mất mùa khiến mọi người rất buồn.

不作であることがみんなをととても悲しませた。

(4) 述語が関係の意味を表す場合

Học đi đôi với hành.

(5) 述語が比較の意味を表す場合

Tiết kiệm khác với hà tiện.

儉約であることはけちであることとは違う。

(6) 述語が要求的意味を表す場合

Kiểm tra yêu cầu phải nghiêm minh.

検査は厳正であることを要求する。

主語となる動詞（句）は以下の2つの特徴を持っている。

・ sự, việc, cuộcなどを付けて名詞化することができる。

元々、それらの語がなくても名詞的に用いられているのであるが。

Việc thức dậy sớm đã trở thành thói quen.

・ đang, đã, sẽなどの時制詞やcó thể, có lẽなどの副詞を付けることはできない。

* Đã thức dậy sớm đã trở thành thói quen.

* Có thể mất mùa khiến mọi người rất buồn.

（但し、có thểがmất以下の全文にかかる場合は可能である）

4. 「時」を表す語と主題語

ベトナム語では、未来の「時」を表す語は原則として文頭に置かれ、主題語と解釈される。

Bao giờ chị ấy về quê ?

いつ彼女は田舎に帰りますか。

Bốn giờ chiều tôi đi.

午後4時に私は行きます。

Chủ nhật tới tôi đi xem phim đó.

今度の日曜日に私はその映画を見に行きます。

注意しなければならないことは既に行われた事柄に関して表現する場合には、「時」を表す語は原則として文末に置かなくてはならないということである。その場合、その文は主題主語文となる。

Chị ấy về quê bao giờ ?

彼女はいつ田舎へ帰りましたか。

Tôi đi bốn giờ chiều hôm qua.

私は昨日の午後4時に行きました。

Tôi đi xem phim đó hôm qua.

私は昨日その映画を見に行きました。

(1996・2・13)

参考文献

- Lê Xuân Thai Câu chủ vị tiếng Việt, Hà Nội 1994
Hoàng Trọng Phiến Ngữ pháp tiếng Việt-câu , Hà Nội 1980
Điệp Quang Ban Câu đơn tiếng Việt, Hà Nội 1987
Cao Xuân Hạo Tiếng Việt sơ thảo ngữ pháp chức năng Quyển I, Hồ Chí Minh 1991
Nguyễn Minh Thuyết Động, tính và cụm chủ vị làm chủ ngữ, Ngôn ngữ 2, 1990

La spécificité fonctionnelle et les types de construction

Yoichiro TSURUGA

1. Introduction

La double articulation du langage permet de réduire un nombre infini d'éléments d'expérience à un nombre fini d'unités minimales significatives (monèmes). Mais le nombre des unités significatives est assez élevé et le nombre des phrases que sont les combinaisons de ces unités est pratiquement illimité, même si l'on se limite aux phrases dites simples. On peut donc espérer l'existence d'un nombre relativement peu élevé de formes de phrases. En effet, ce n'est pas seulement les occurrences des mêmes unités significatives qu'on peut formellement constater dans les phrases réalisées. On peut bien reconnaître l'existence de ce qu'on appelle "types de phrases". Le centre d'une phrase est souvent un verbe. Si donc l'on se limite aux phrases verbales, c'est le verbe même ou son signifié combinatoire même qui décide la forme phrastique. Il s'agit donc dans ce cas des types de constructions verbales. Dans cet article, nous jetterons d'abord un coup d'œil aux types de phrases en général, ensuite examinerons quelques fonctions spécifiques en *de* de constructions verbales. Et à la fin nous essaierons de voir les liens fondamentaux qu'il y a entre l'existence nécessaire d'un nombre peu élevé de types de constructions et la nécessité de la spécificité fonctionnelle qui correspond aux sous-classes de prédicats verbaux.

2. Types de phrases

En français il y a des types variés de formes phrastiques. Ce n'est pas seulement les phrases au noyau verbal que nous rencontrons, mais il faut reconnaître aussi que dans la plupart des phrases il y a au moins un élément verbal et que c'est cet élément verbal qui fonctionne comme centre syntagmatique. Et quand il y a un élément verbal fini, il y a aussi, presque toujours, un élément souvent nominal auquel correspond la forme verbale et qu'on appelle "sujet". Si donc on veut respecter toutes les possibilités formelles phrastiques en français, nous pouvons trouver des critères de classement de types de phrases dans ce que nous venons de dire.

On peut d'abord séparer les phrases non verbales qui ne contiennent aucun élément verbal fini comme noyau de celles qui en contiennent au moins un. La phrase comme *Et tout le monde de s'esclaffer, sauf le Japonais* sera classée comme non verbale. Remarquons qu'un élément infinitif est plutôt considéré comme nominal du point de vue des

types de phrases. A part ces phrases non verbales, il y a donc un élément verbal fini dans toutes les autres phrases.

Ensuite on peut séparer les phrases avec un verbal fini mais sans fonction sujet. Remarquons que le premier critère est formel et catégoriel mais que le second semble fonctionnel. Mais en fait le second critère est aussi formel parce que les formes qui assument la fonction sujet sont strictement déterminées en français. Les phrases comme *Nous y voilà!*, *Qu'importe!* seront considérées comme verbales mais sans sujet. La distribution des pronoms par rapport à *voilà* peut permettre de considérer comme verbal ce dernier élément figé.

Les phrases qui restent ont toutes un élément verbal fini comme centre et un élément nominal auquel correspond la forme verbale. Autrement dit, elles ont toutes un centre syntagmatique verbal et une fonction sujet.

Troisièmement on peut séparer les phrases ayant un sujet impersonnel de celles ayant un sujet personnel. Le sujet impersonnel a le paradigme fermé comme dans *Il se passe beaucoup de choses* et *C'est à Paris que j'ai rencontré Pierre*. L'organisation syntagmatique peut être syntaxiquement significative dans la mesure où elle est soutenue par l'organisation paradigmaticque. La fonction dite sujet impersonnel n'est donc pas un sujet au sens plein du terme puisque son paradigme est fermé. Il fait presque partie du syntagme verbal.

Les constructions impersonnelles étant séparées, il ne reste que les phrases qui ont un sujet personnel et un centre syntagmatique verbal. Le classement qui suit sera effectué selon la variété des éléments qui sont organisés par le verbe. Il s'agit donc du classement des constructions verbales. Le classement peut être varié. On peut, par exemple, remarquer la transitivité. En termes fonctionnalistes, on peut remarquer la spécificité fonctionnelle. Une fonction spécifique est celle qui n'est combinable qu'avec une sous-classe de prédicats et une fonction non spécifique est celle qui est combinable avec toutes les sous-classes de prédicats (donc, en pratique, avec tous les prédicats). La fonction spécifique la plus remarquable est celle d'objet direct.

Quatrièmement on peut séparer les phrases organisant une fonction d'objet: *Pierre rencontre Marie*. La phrase avec un objet et un attribut comme *Pierre trouve Marie très belle* peut être mise dans ce groupe. (Le sous-classement à l'intérieur d'une sous-classe est bien sûr toujours possible.)

En même temps que cette quatrième séparation, on peut séparer les phrases avec un verbe dit pronominal comme cinquième groupe. (Il est possible de diviser les constructions des verbes pronominaux en plusieurs groupes et de mettre la phrase comme *Pierre se lave* dans le même groupe que *Pierre rencontre Marie*. Mais nous pensons qu'il y a intérêt à regrouper tous les verbes pronominaux.)

Sixièmement on peut séparer les phrases organisant une fonction spécifique ayant un indicateur de fonction (c'est-à-dire, une préposition en français). Les phrases ayant une

fonction d'objet et une fonction indiquée par un fonctionnel seront mises dans le quatrième groupe. On peut dire que le degré de spécificité fonctionnelle de l'objet est plus élevé que celui d'une fonction indirecte. Il est connu que c'est entre les fonctions spécifiques à un fonctionnel et celles de circonstance (qui sont typiquement non spécifiques) que la distinction est souvent difficile et délicate. Les phrases comme *Pierre pense toujours à Marie*, *Pierre dépend de Marie* seront mises dans le cinquième groupe.

Septièmement on peut dégager les phrases organisées par les verbes qui n'ont aucune fonction spécifique (sauf celle de sujet). Il s'agit des verbes dits intransitifs. Il est évident que le degré de transitivité (c'est-à-dire, de spécificité fonctionnelle) de ces verbes est encore moins élevé que celui des verbes précédents. La phrase comme *La technique a beaucoup évolué depuis un siècle* sera mise dans ce groupe.

Huitièmement on peut envisager un groupe de phrases organisées par les verbes prenant une fonction dite attribut. (Rappelons que les phrases ayant un objet et un attribut sont mises dans le quatrième groupe.) La phrase comme *Pierre devient malade* sera mise dans ce groupe. En comparant *Marie devient sa femme* et *Pierre rencontre sa femme*, on distingue l'attribut *sa femme* et l'objet *sa femme*, parce que le paradigme de l'attribut comprend des adjectifs et que ce paradigme est en principe indispensable, tandis que ce n'est pas le cas du paradigme de l'objet. Tout en reconnaissant la centralité syntagmatique de ces verbes attributifs, on peut mettre en doute leur centralité syntaxique, leur capacité prédicative. Un verbe comme *devenir* garde un signifié suffisamment important, mais comment peut-on traiter le verbe *être* ? Nous séparons un groupe de phrases organisées par *être*. (On peut mettre en doute la capacité prédicative des verbes attributifs mais n'oublions pas l'existence des phrases comme *Nous sommes parce que nous devenons*. Mais cette phrase-ci serait plutôt mise dans le septième groupe à une seconde étape de classement. Si les phrases attributives se distinguent des autres, c'est dans la mesure où l'attribut reste indispensable.)

Neuvièmement on peut grouper les phrases organisées par *être*. Les phrases comme *Pierre est à Paris*, *Pierre est content* sont mises dans ce groupe. Ces phrases-ci peuvent être distinguées par les pronominalisations *Pierre y est* et *Pierre l'est*. Le sous-classement est toujours possible. La phrase *Même si cela ne vous plaît pas, cela est* est d'abord mise dans ce groupe, mais dans une seconde étape elle serait plutôt mise dans le septième groupe.

Dans le dixième groupe, on peut mettre les phrases mises au passif. *Pierre a été battu par Jean* sera mis dans ce groupe. Le lien qu'a cette phrase-ci avec *Jean a battu Pierre* est évident. Mais du point de vue formel, on peut reconnaître une parenté entre les phrases de ce groupe et celle du groupe précédent: *Pierre a été battu par Jean* - *Pierre l'a été*, *Pierre est content* - *Pierre l'est*.

Récapitulons ce qui est dit ci-dessus.

1. *Et tout le monde de s'esclaffer, sauf le Japonais.*

2. *Nous y voilà!*

Qu'importe!

3. *Il se passe beaucoup de choses.*

C'est à Paris que j'ai rencontré Pierre.

4. *Pierre rencontre Marie.*

Pierre trouve Marie très belle.

5. *Pierre se lave.*

Pierre et Marie s'aiment.

Une branche se casse.

Ce livre se vend bien.

Pierre se souvient de cela.

6. *Pierre pense toujours à Marie.*

Pierre dépend de Marie.

7. *La technique a beaucoup évolué depuis un siècle.*

8. *Pierre devient malade.*

Marie devient sa femme.

(Nous sommes parce que)nous devenons.

9. *Pierre est content.*

Pierre l'est.

Pierre est à Paris.

Pierre y est.

Même si cela ne vous plaît pas, cela est.

10. *Pierre a été battu par Jean.*

Pierre l'a été.

Dans la première étape de classement des types de phrases présentée ci-dessus, il reste beaucoup de problèmes. Mais à notre avis aucun de ces problèmes n'est encore suffisamment résolu. D'abord, la séparation du premier groupe n'est pas bien reconnue. L'analyse même de ce groupe de phrases est loin d'être suffisante. La construction de *voilà* est bien reconnue, mais elle est plutôt considérée comme périphérique. Et la place qu'occupent les constructions de ce genre dans le système syntaxique est loin d'être éclaircie. Concernant le troisième groupe il y a tendance à le considérer comme une variante d'autres groupes. D'un certain point de vue (que nous n'adoptons pas, cf. TSURUGA, 1993), on peut considérer la phrase *Il se passe beaucoup de choses* comme variante de *Beaucoup de choses se passent*. Alors celle-là serait dérivée de celle-ci. (Et cette phrase-ci serait-elle dérivée d'une autre du quatrième groupe?) Mais l'importance du troisième groupe subsiste toujours, parce qu'il y a des phrases comme *Il faut beaucoup*

de courage, Il pleut beaucoup cette année, qui n'ont aucun lien avec les phrases personnelles. Le quatrième groupe est une grande sous-classe et à l'intérieur de ce groupe le sous-classement détaillé est indispensable. Le cinquième groupe pronominal est aussi très complexe. L'existence de *se souvenir de...* prouve la nécessité de ce groupement. Mais ce cas-ci doit être également analysé du point de vue de la synthématisation. La nécessité de ce groupe est plutôt pour les constructions de *se casser, se vendre*, etc. A la base des phrases *Une branche se casse* ou *Ce livre se vend bien*, faudrait-il supposer un agent humain ou autre? (Si oui, ces phrases dériveraient du groupe quatre.) Nous sommes bien tenté de supposer une construction sans agent du type transitif, une construction bien comparable avec celle du type intransitif. A la base même on pourrait supposer ce groupe de constructions, mais s'il est difficile de le faire, on pourrait reconnaître *ce livre* dans le paradigme même de *A* de *A vend A* et de *A se vend*, par exemple. Le groupe six est bien sûr indispensable mais il pose des problèmes d'identification de la spécificité fonctionnelle. Le groupe sept même est simple et ne pose aucun problème. La distinction entre *Pierre devient malade* et *Pierre est malade* n'est pas essentielle. Concernant le groupe dix, il y a une forte tendance à le considérer comme variante du groupe quatre. Mais dans *Pierre a été battu par Jean* et *Jean a battu Pierre*, peut-on considérer *par Jean* et *Jean* comme variantes d'un point de vue fonctionnel? La fonction agent (l'appellation n'importe pas) *par Jean* peut-elle être considérée comme variante de la fonction sujet *Jean*? Ou bien, si l'on suppose une fonction (ou quelque chose d'autre) plus fondamentale à la base de ces deux fonctions distinctes comment pourrait-on la nommer et la qualifier?

En fait, le classement des types de phrases suffisamment détaillé et convaincant exigerait une série d'analyses préalables. Ci-dessous nous verrons quelques problèmes que soulève la spécificité fonctionnelle des fonctions indiquées par la préposition *de*.

3. Fonctions indiquées par *de*

Dans sa *Grammaire fonctionnelle du français*, 1979, pp.151-230, A.Martinet essaie de mettre en ordre toutes sortes de fonctions syntaxiques du point de vue rigoureusement fonctionnaliste. C'est à notre connaissance le seul classement qui couvre la plupart des fonctions syntaxiques et qui est effectué d'un point de vue déterminé. Mais le fait est complexe et nous nous rappelons bien ce que Martinet a dit en 1972: "Our aim, [...], was therefore by no means to posit case or function universals, but only to suggest how some order could be established in the maze of the functions facing any one who tries to discover the main features of a syntactic structure." ("Cases or Functions?", dans A.Martinet, *Studies in Functional Syntax*, München, Wilhelm Fink, 1975, p.230, traduction de "Cas ou fonctions?", *La Linguistique*, 8, fasc. I, 1972, pp.5-24.)

Jetons un coup d'œil à ce que dit Martinet à propos des fonctions indiquées par *de*.

"On parlera de fonctions indirectes, sans plus, lorsqu'un indicateur de fonction
 1. introduit nécessairement une expansion particulière au verbe. Par ex., *Je doute de sa parole*, [...], *Elle l'a convaincu de son erreur*;
 2. alterne sans différence de sens avec zéro devant l'expansion particulière: [...].
 Il est normal que l'indicateur d'une «fonction indirecte» en *de* [...] prenne la forme *que* devant une subordonnée: *Je doute qu'il vienne*, [...], *Elle l'a convaincu qu'il se trompe*.
 [...]
 L'indicateur d'une fonction indirecte assure l'identité du verbe en le distinguant de ses homonymes:
 [...]
Il joue du piano = «Il pratique cet instrument de musique» (verbe *jouer de*) distinct de *Elle joue à la marelle* = «Elle pratique ce jeu» (verbe *jouer à*); les deux s'opposent à *Il joue sa fortune*=«Il met sa fortune en jeu».
 [...]
 On trouvera ici des verbes toujours réfléchis: *Il se souvient de sa venue*, [...]."
 (A.Martinet (dir.), *Grammaire fonctionnelle du français*, 1979, p.165)

"Lorsque le fonctionnel est *de*, il se maintient, en langue officielle, devant un pronom personnel 3 et 3 pl. qui représente un animé: *Elle doute de son ami* > *Elle doute de lui* mais s'amalgame en *en* s'il y a renvoi à un inanimé: *Elle doute de sa sincérité* > *Elle en doute*. Dans l'usage quotidien, l'amalgame en *en* est fréquent dans tous les cas: *Elle s'occupe de ses amies* > *Elle s'en occupe*.
 [...]
 Il n'y a, bien entendu, aucune valeur signifiée commune aux différentes fonctions indirectes qui se caractérisent uniquement du fait de leur extrême spécificité." (*Op.cit.*, p.172)

Quand le verbe *douter* organise une expansion plus ou moins étroitement liée c'est presque toujours la préposition *de* qui est exigée. Mais *de* n'accompagne pas toujours ce verbe: *Pierre en doute*, *Pierre doute qu'elle vienne*. Par conséquent, le syntagme ne fonctionne pas tout à fait comme un verbe. Mais on peut dire que la fonction indiquée par *de* accompagne presque toujours ce verbe. Dans les énoncés donnés ci-dessus, la fonction en question est dans *en* et *que* (remarquons que dans *Pierre doute qu'elle arrive*, *que...* doit être remplacé par *en*. Dans *Pierre doute de cela*, on peut dire que le paradigme de *cela* est presque ouvert. Il comprend même des infinitifs: *Pierre doute d'avoir fait cela*. Les caractéristiques (présence obligatoire et paradigme ouvert) sont comparables avec celle de la fonction d'objet direct.

Le cas de *jouer* est plus complexe. *Jouer* accepte trois constructions: *jouer de* -N, *jouer à* - N et *jouer* -N. Quand on pense à la phrase comme *Pierre joue du violon*, le paradigme de *violon* semble assez fermé. Mais il y a des énoncés comme *Pierre joue du couteau*, *Pierre joue de ses relations pour accéder à un poste*. Le paradigme du nominal de *de*-N de ces énoncés-ci n'est pas très fermé. Mais la différence d'avec *douter*, c'est que *jouer* n'a pas nécessairement besoin d'une fonction indiquée par *de* quand il organise une expansion plus ou moins étroitement liée avec lui. Remarquons que *jouer* a aussi une construction absolue: *Les enfants jouent dans la rue*. En comparant la ou les fonctions de *de*-N de *douter* et de *jouer*, on peut en général dire que la fonction de *de*-N de *jouer*

est déterminée plus en détail que celle de *douter*. C'est que *de* s'oppose à *à* et à $\emptyset$ autour de *jouer*, tandis que *de* ne s'oppose à rien autour de *douter*.

Au début de la première citation donnée ci-dessus, Martinet donne deux conditions pour les fonctions indirectes. *Douter* remplit ces deux conditions mais *jouer* ne peut pas remplir la seconde. *Jouer* ne permet pas d'alterner sans différence de sens avec zéro (ce "sans différence de sens" peut être délicat selon le cas) devant l'expansion particulière. *Jouer* permet une construction comme *Pierre joue le rôle de Hamlet*, *Pierre joue sa fortune*, mais Martinet reconnaît bien sûr une différence entre la fonction en *de* et celle d'objet. D'ailleurs, il semble reconnaître trois *jouer* homonymes dans les trois constructions en question. En comparant *Pierre joue du Piano*, *Pierre joue à la marelle*, *Pierre joue sa fortune* et *Pierre joue le rôle de Hamlet*, peut-on reconnaître trois ou quatre *jouer* homonymes? Les *jouer* des deux derniers exemples semblent assez différents du point de vue sémantique, bien qu'ils n'aient aucun indicateur fonctionnel qui en assure la différence. Mais remarquons bien que "homonyme ou non" est une question d'identification sémantique ou mieux axiologique, tandis que "fonctionnels *de*, *à* ou $\emptyset$ " est une question d'identification des constructions. A notre avis, dans les quatre exemples donnés ci-dessus, il y a nettement trois constructions qui assurent trois fonctions spécifiques distinctes, mais on peut supposer à la base une seule valeur (certes, plus ou moins abstraite) identique de *jouer*. L'assurance formelle est importante pour l'identification axiologique, mais cette assurance doit être soutenue par une considération sémantique: en comparant *Pierre joue sa fortune* et *Pierre joue le rôle de Hamlet*, peut-on conclure l'identité des deux *jouer* en se fondant seulement sur la morphologie de *jouer* et sur la construction sans indicateur fonctionnel?

La première condition pour une fonction indirecte mentionnée ci-dessus n'est pas sans problème, non plus. Dans *Je doute de sa parole*, par exemple, Martinet dit que *de sa parole* est particulière au verbe *douter*. Il s'agit là du fond même de la spécificité fonctionnelle. Martinet dit qu'il n'y a aucune valeur signifiée commune aux différentes fonctions indirectes, mais dans *Je doute de sa parole*, *Il joue du piano* et *Il se souvient de sa venue*, reconnaît-il trois fonctions indirectes distinctes? Dans une centaine de verbes (voir l'appendice donné à la fin de cet article) qui organisent une expansion en *de* plus ou moins étroitement liée au verbe, combien de fonctions distinctes doit-on identifier?

Concernant la spécificité fonctionnelle de la fonction indirecte, il y a un autre problème. En comparant *Elle doute de son ami* et *Elle doute de sa sincérité*, on peut reconnaître une différence reflétée dans les pronominalisations *Elle doute de lui* et *Elle en doute*. Mais cette différence n'altère en rien l'identité fonctionnelle de *de-N*. La distinction humain - non-humain ne concerne pas dans ce cas l'identité fonctionnelle. Toutes les distinctions formelles ne reflètent bien sûr pas celles qui sont fonctionnelles. En comparant une identité de construction (*douter de-N*) et une différence de construction (*douter de lui* et *en douter*), on choisit la première. Dans cette décision il y a une considération non

formelle. Du point de vue de la considération sans doute sémantique, le *Nouveau Petit Robert* (1994), par exemple, reconnaît une même fonction "grammaticale" pour *de*-N de: *douter de*-N, *se souvenir de*-N et *parler de*-N. Quand on traite de la spécificité fonctionnelle de *de*-N de *parler*, on est tenté de penser à une fonction comme à *propos de*-N, *au sujet de*-N, *concernant*-N, *en ce qui concerne*-N, etc. qu'on rencontre au début de toutes sortes de types de phrases et qui devrait, par conséquent, être considérée plutôt comme non spécifique.

Citons ce que dit Martinet sur la fonction d'origine:

"La fonction ainsi désignée est toujours marquée par *de* devant les expansions nominales: *Il parle du projet à son ami*, *Elle tinct ce trait de son père*. En langue officielle, il n'y a amalgame de *de* avec les personnels 3 et 3 pl. que pour les inanimés; *Elle s'inspire d'un précédent* > Elle s'en inspire, alors qu'à partir de *Il parle de sa femme à un ami*, on attend, dans un usage soigné, *Il parle d'elle à un ami*. Dans le parler familier on entend souvent *en* dans ce cas [...].

Cette fonction est spécifique. On peut parfois hésiter à identifier une fonction comme indirecte en *de* ou d'origine, des critères formels ne permettant pas toujours de les distinguer." (*Op.cit.*, p.172)

Comment peut-on qualifier d'origine la fonction en *de* de *Il parle du projet* ? On peut sémantiquement reconnaître une fonction d'origine dans *provenir de*..., *dériver de*..., *tenir de*... Mais la fonction qu'on peut communément reconnaître dans *décider de*..., *discourir de*..., *discuter de*..., *disputer de*..., *dissenter de*..., etc. semble différente de celle d'origine. Mais c'est là une question d'identification sémantique. Sémantiquement, il serait de la même manière possible de reconnaître une fonction d'origine dans *douter de*... Mais il est important ici de distinguer les deux cas: le cas où le verbe en question n'a que la construction avec *de* (*douter de*...) et le cas où le verbe organise d'autres constructions (*décider de/sur/ø*..., *discourir de/sur*..., *disputer de/sur/ø*..., *dissenter de/sur/ø*...). Le verbe *jouer* aussi a différentes constructions: *jouer de/à/ø*... Martinet dirait-il si *décider*, par exemple, se distingue de *jouer*, c'est que pour *décider* on peut reconnaître un seul et même verbe, tandis qu'il y a différents *jouer* ? Mais c'est une question délicate, car il est là question de l'identification purement sémantique. (Rappelons la remarque du *Petit Robert* et aussi différents classements de *de* dans des dictionnaires et des grammaires traditionnelles.) Martinet semble vouloir qualifier une fonction d'indirecte là où le choix du fonctionnel est rigoureux et où aucune caractérisation sémantique (comme d'origine, par exemple) n'est possible.

"La fonction d'origine se distingue de la fonction d'agent [...] par le fait que *de* n'y alterne pas avec *par*.

On peut considérer que la fonction ablative [...], qui est également marquée par *de*, n'est qu'une variante spatiale de la fonction d'origine qui répond à *d'ou* ? au lieu de *de qui*?, *de quoi*?

[...]

Sera également à considérer comme une variante de la fonction d'origine la fonction temporelle en *de*, réponse à *de quand*?" (*Op.cit.*, pp.172-173)

Dans *Pierre va de Paris à Marseille*, on peut reconnaître une fonction ablative. Mais si l'on reconnaît une fonction d'origine dans *Pierre parle de Paris* et que l'on considère la fonction ablative comme variante de la fonction d'origine, comment peut-on expliquer la compatibilité des deux fonctions en *de* dans *Pierre parlera de Paris continuellement de Paris à Marseille*? (Nous reconnaissons toutefois que ce genre de compatibilité ne constitue pas à elle seule un critère de distinction fonctionnelle.)

"Le terme de fonction d'origine doit être conçu comme une désignation conventionnelle correspondant à une entité caractérisée constamment par *de*, plutôt que comme parfaitement descriptif de toutes les valeurs en cause.

La valeur d'origine, nette dans *Il tient de...*, *Il s'inspire de...* l'est beaucoup moins dans *Il parle de...* où *de* implique une sélection: *Il parle de son projet* implique qu'il n'est pas fait, de ce projet, un exposé total. On pourrait, ici, si l'on n'hésitait pas à multiplier les fonctions, parler d'une «fonction de propos» caractérisée formellement par la possibilité de faire alterner *de* avec *sur*. Toutefois, dans bien des cas où l'on pourrait parler de propos, le remplacement de *de* par *sur* n'est pas attesté: *Elles s'est plainte du bruit à ses voisins.*" (*Op.cit.*, p.173)

En comparant *Pierre boit d'un vin*, *Pierre essaie d'un vin* et *Pierre parle d'un vin*, on peut interpréter que les deux premiers énoncés (qui comprennent plutôt *de* partitif) signifient *Pierre boit une partie d'un vin* et *Pierre essaie une partie d'un vin*, tandis qu'il est difficile de dire que le troisième signifie **Pierre parle une partie d'un vin*. De la même manière, *Pierre parle du français* ne signifie pas **Pierre parle une partie du français*. La distinction entre fonction d'origine et celle de propos nous semble importante.

"[...] elle [=l'élimination du monème passif] permet au monème assumant la fonction instrumentale de le (=le sujet) devenir, lorsque l'agent n'est pas exprimé: *Les murs sont recouverts d'affiches* > *Des affiches recouvrent les murs*, mais *Les murs sont recouverts d'affiches par les militants* > *Les militants recouvrent les murs d'affiches*.

[...]

La fonction agent peut être marquée, quel que soit le contexte, à l'aide de la préposition *par*, et, souvent, *par et de* sont également utilisables: *Il est estimé par ses collègues*, *Il est estimé de ses collègues*. [...]

De façon générale, *de* se rencontre surtout là où le verbe (*il*) est à sa valeur de copule et où le participe suivant a sa valeur d'accompli: *Il est accablé de chagrin* ne décrit pas un processus, mais un état, au contraire de ce qu'on constate dans *Il a été écrasé par un rocher.*" (*Op.cit.*, p.175)

L'instrumental *d'affiches* est distinct de l'agentif *par les militants*, ce que démontre leur compatibilité sans coordination autour d'un même prédicat. Remarquons qu'en partant de l'énoncé *Des affiches recouvrent les murs de saletés*, on ne peut pas avoir **Les murs sont recouverts d'affiches de saletés*. Mais ?*Les murs sont recouverts de saletés par des affiches* est peut-être plus acceptable que l'énoncé précédent. C'est la distinction nette entre sujet et instrumental qui permet la compatibilité de *des affiches* et de *de saletés*. Et c'est la distinction entre *par* et *de* qui permet la meilleure acceptabilité en question.

"Elle (=la fonction modale) est marquée essentiellement par la préposition *avec*: *Il répond avec calme*, et, accessoirement par *de*: *Il agit de sang-froid*, ou *à*: *Il parle à voix basse*. [...]

Cette fonction est non spécifique donc indépendante du choix du verbe, puisque la forme sous laquelle se présente une action, un état ou un comportement, dans une situation donnée, peut ou non être précisée. [...]

Marquée par *de*, la fonction peut parfois être identifiée par la possibilité de remplacer *de* par *avec*: *Il agit de* ou *avec sans froid*." (*Op.cit.*, pp.176-177)

La fonction modale est une fonction typiquement non spécifique. Et le fondement sémantique de sa non spécificité fonctionnelle est qu'on peut en principe toujours ajouter une façon dont se présente une action ou un état à n'importe quelle sous-classe de verbes. Mais il n'est pas tout à fait facile de le démontrer formellement et combinatoirement. Par exemple, dans *Pierre se comporte de cette façon*, *de cette façon* est indispensable à ce verbe, ce qui ne signifie pas qu'il ait besoin d'une fonction en *de*: *Pierre se comporte bien*. Par exemple, *de façon furieuse* ne peut pas être combiné avec tout verbe: ?*Pierre dort de façon furieuse*. Ce fait s'explique bien sûr par une incompatibilité lexicale individuelle. Mais justement il n'est pas toujours facile de distinguer entre la combinabilité de sous-classes et celle d'éléments lexicaux individuels.

"Elle (=la fonction instrumentale) est marquée essentiellement par la préposition *avec*: *J'écris toujours avec un feutre*, [...] et occasionnellement, dans des figements, au moyen de *de*: *Il conduit d'une main*, [...].

Cette fonction est généralement indépendante du choix du verbe, toute action pouvant être conçue comme réalisée ou susceptible de l'être avec le concours d'une autre entité que le sujet. (*Op.cit.*, p.177)

La fonction instrumentale est proche de celle qui est modale et il y a des problèmes du même genre.

"La fonction ablative est marquée par le fonctionnel *de*: *Il arrive de Berlin*. Cette fonction est souvent indépendante du choix du verbe: *Il voit, de sa fenêtre...*, mais, avec ceux, comme (*il*) *vient*, qui indiquent la provenance, elle est d'une extrême fréquence, sans être nécessairement exprimée: *Elle vient de son travail*, *Il arrive d'Afrique*, [...]. [...] Elle est en fait une variante spatiale de la fonction d'origine [...]. (*Op.cit.*, p.187)

La fonction d'origine est considérée comme spécifique, tandis que la fonction ablative semble indépendante du choix du verbe, donc non spécifique pour Martinet. Comment alors une fonction non spécifique peut-elle être une variante d'une autre qui est spécifique?

"C'est la réponse à *de quand?*, par exemple, dans *De quand date cet ouvrage?* --- *De 1840*. Il s'agit, en fait, de la variante temporelle de la fonction d'origine [...] dont la fonction ablative [...] est la variante spatiale." (*Op.cit.*, p.192)

Faut-il reconnaître des emplois non spécifiques de fonctions spécifiques? Comparer *Cela date de 1840* et *Il voit, de sa fenêtre, le paysage*.

"La question *de combien?* et la réponse à cette question ne représentent pas une fonction différente de la précédente (=la fonction correspondant à *combien?*), car elles sont toujours sous la dépendance du choix du prédicat: [...], *Il recule de trois pas* [...]" (Op. cit., p.196)

Martinet semble reconnaître comme spécifique la fonction de *de trois pas* dans *Il recule de trois pas*. En comparant *Combien cela t'a-t-il coûté?*, *Qu'est-ce que cela t'a coûté?* et *De combien recule-t-il?*, il nous semble difficile de reconnaître une même fonction dans *Qu'est-ce que* et *De combien*.

4. Sous-classes et spécificité fonctionnelle

Ce qu'on peut remarquer dans l'analyse de A.Martinet, c'est qu'il insiste sur le choix individuel du verbe et sur la dépendance ou l'indépendance d'une fonction donnée par rapport à ce choix. Pour lui une fonction spécifique caractérise un ou des verbes individuels. Pour nous, **une fonction spécifique est celle qui n'est combinable qu'avec une sous-classe de prédicats et une fonction non spécifique est celle qui est combinable avec toutes les sous-classes de prédicats.**

Pour nous, l'existence indispensable d'un nombre limité de sous-classes de constructions (=verbes) est étroitement liée au fait que les fonctions spécifiques caractérisent les sous-classes de verbes et non pas les verbes individuels. Supposons qu'il y a dix mille verbes et que les fonctions spécifiques soient particulières aux verbes individuels. Alors il peut y avoir dix mille fonctions spécifiques. Mais bien sûr ce n'est pas du tout le cas. Pourquoi? C'est qu'un nombre limité de "moules" de constructions est indispensable entre un nombre assez élevé d'unités minimales significatives et un nombre infini de phrases réelles réalisées, pour qu'une langue donnée fonctionne plus ou moins suffisamment pour les êtres humains qui ont par nature une mémoire non infinie. Prenons par exemple, la construction de la fonction spécifique objet. Beaucoup de verbes sont regroupés par ce même "moule" formel. Par exemple, en comparant *manger de la soupe* et *boire un café*, supposons que l'on doive recourir à deux constructions distinctes: *manger de la soupe* et *boire f-1 un café* (f indiquant un indicateur fonctionnel). S'il ne s'agit que de ces deux constructions il n'y a aucun problème. Mais si l'on suppose que cet état de choses soit étendu à tous les verbes transitifs français et que le fonctionnel doive être toujours particulier, et en plus que cet état soit étendu à tous les objets dits indirects aussi, on voit bien que ce genre de langue ne fonctionne plus. D'ailleurs, dans l'état supposé ci-dessus, il n'y aurait pas de raison pour qu'on utilise une même construction directe pour les deux cas de *jouer son rôle* et de *jouer sa fortune*.

Bien sûr en partant de la supposition que les fonctions spécifiques caractérisent les verbes individuels, on peut dire que s'il n'y a qu'un nombre assez limité de fonctions spécifiques, c'est qu'il n'y a qu'un nombre limité de types de signifiés relationnels prédicatifs. Mais pourquoi en est-il ainsi? Pourquoi n'y a-t-il pas autant de fonctions spécifiques (au moins) que de verbes individuels qui ont tous des signifiés distincts? Notre réponse à ces questions est qu'étant donné notre capacité de mémoire, le nombre de signifiés relationnels doit être nettement inférieur à celui de signifiés non relationnels, ou plutôt que toutes sortes de signifiés verbaux indispensables aux analyses d'expériences doivent être versés dans un nombre préalablement limité de "moules" relationnels. Le sous-classement, ou plus simplement, le regroupement de signifiés relationnels verbaux est préalablement indispensable pour qu'une langue donnée fonctionne plus ou moins suffisamment. Et ce qui est plus important est le fait que ces signifiés relationnels prédicatifs sont reflétés dans un nombre peu élevé de constructions, soit dans la construction directe, soit dans les constructions indirectes indiquées par un nombre très restreint de prépositions. Nous supposons que dans toutes les langues le nombre de constructions spécifiques que permettent les prédicats est nettement inférieur à celui de prédicats mêmes. C'est que les fonctions spécifiques ne caractérisent pas les verbes individuels qui sont prêts à découper toutes sortes d'aspects d'expériences mais qu'elles caractérisent et reflètent plutôt les sous-classes dont le nombre est préalablement limité et dans lesquelles les verbes individuels doivent être regroupés.

5. Pour ne pas conclure

La nécessité d'un nombre limité de sous-classes est évidente. Il est aussi certain que les fonctions spécifiques caractérisent les sous-classes de construction, donc de prédicats. Mais cela ne signifie pas qu'il est facile d'identifier les fonctions spécifiques et de les sous-classer. Il semble d'abord indispensable de comparer toutes les constructions organisées par chaque verbe (c'est-à-dire, d'effectuer l'analyse paradigmatisée détaillée des constructions de chaque verbe) et ensuite de confronter divers verbes. Il est aussi indispensable d'établir des critères fonctionnels pour identifier des fonctions syntaxiques.

Bibliographie

- CAPUT, J. et J.-P. : *Dictionnaire des verbes français*, Paris, Larousse, 1969.
 MARTINET, André : "Cases or Functions?", dans A. Martinet, *Studies in Functional Syntax*, München, Wilhelm Fink, 1975, pp.216-232.
 ----- : *Grammaire fonctionnelle du français*, Paris, Didier, 1979, pp. 151-230.
 TSURUGA, Yocihiro : "Les constructions impersonnelles sont-elles des variantes?", *Area and Culture Studies* 47, Université des Langues Etrangères de Tokyo, 1993, pp.213-225.

TSURUGA, Yoichiro : "Les fonctions spécifiques et non spécifiques en français", *Area and Culture Studies* 51, pp.282-288.

Appendice

Les constructions: Sujet - Verbe - *de*-N selon Caput, J. et J.-P.

Caput, *Dictionnaire des verbes français*, Paris, Larousse,
1969.

1. abuser
Pierre abuse de l'alcool. : en user avec excès
Cf. *Laisse-le tranquille, tu abuses.*
2. accoucher
Marie accouche d'un garçon d sept livres. : le mettre au monde
Cf. *Marie a accouché dans une clinique parisienne.*
3. appeler
Pierre appelle d'un jugement. : en réclamer la réformation devant une juridiction supérieure
Cf. en appeler: appeler d'un jugement devant une juridiction supérieure
en appeler à...
4. approcher
Pierre approche du feu. : venir près de..., n'en être pas loin
Cf. *Sa maison est proche de la nôtre.*
5. arguer
Pierre argue de son ancienneté pour obtenir un avancement. : en déduire une conséquence
Cf. *Vous ne pouvez rien arguer de ce fait.*
6. bénéficier
Pierre bénéficie d'une chance extraordinaire. : en tirer un profit
Cf. tirer un bénéfice de...
7. changer
Pierre change de chemin. : le remplacer par un autre
8. cligner
Pierre cligne de l'œil. : faire un signe de l'œil à quelqu'un
Cf. cligner les yeux
cligner des yeux
9. combattre
Pierre et Jean combattent de générosité. : lutter, faire des efforts pour surpasser
quelqu'un en quelque matière
10. dater
Cette édition date du XI^e siècle. : avoir commencé d'exister à telle époque

11. déborder
Pierre déborde de sa tâche. : s'étendre au-delà des limites
12. débouler
Les ordures déboulèrent de la boîte métallique. : tomber en roulant sur soi
13. déchoir
Vous ne pouvez pas déchoir de votre dignité. : s'humilier, baisser
14. décider
Pierre décide de la suite. : se prononcer sur cette chose, prendre parti à son sujet
15. découcher

Pierre ne peut pas découcher toute une nuit de son hôtel. : coucher hors de chez soi
16. dégouliner
L'huile dégouline d'un bidon mal bouché. : couler lentement, goutte à goutte ou en filet
17. dégoutter
La sueur lui dégouttait du front. : couler, tomber goutte à goutte
18. dégringoler
Pierre est dégringolé d'une échelle. : tomber ou rouler de façon désordonnée, le long d'une pente
19. démarrer
Pierre ne démarre pas de cette idée-là. : quitter
20. démeriter
Pierre démerite de ses ancêtres. : agir de manière à perdre l'estime
21. démordre
Pierre ne veut pas démordre de cette idée. : renoncer à...
22. dépendre
Cet organisme dépend du ministère de l'Education nationale. : être de son ressort
Cf. lat. *dependere* "pendre de"
23. dériver
Le théâtre profane dérive du théâtre religieux. : en provenir
24. descendre
Les troupeaux descendent de la montagne. : aller de haut en bas
25. désespérer
Pierre désespère de la guérison. : perdre l'espoir en...
Cf. espérer une aide de qn
26. dévier
Pierre dévie de son chemin. : s'écarter de...
27. deviser
Ils devisent de la situation internationale. : s'entretenir familièrement d'une question
28. différer
Tu diffères de moi. : être différent de...

29. dîner
Pierre dîne d'un canard laqué. : ?
30. discourir
On va discourir des vices et des vertus. : parler sur un sujet en le développant
31. discuter
On discutera de cette affaire. : échanger des idées sur un sujet défini
32. dispenser
Le bon sens qui dispense de savoir. : vieillir ?
Cf. dispenser quelqu'un de quelque chose : libérer quelqu'un de quelque chose
33. disputer
On dispute d'un grave problème. : avoir une discussion
Cf. disputer de/sur...
34. dissenter
Pierre se mit à dissenter de la situation politique. : traiter de..., discourir de...
35. diverger
Pierre diverge de la ligne du parti. : se séparer en diverses directions
36. dodeliner
Pierre dodeline de la tête. : balancer la tête doucement
Cf. *Il s'endort ; sa tête dodeline.*
37. douter
Pierre doute du succès. : ne pas avoir confiance en...
38. échapper
La bouteille lui a échappé des mains. : tomber
Cf. échapper à/de...
39. écoper
Pierre écopa d'une forte amende. : recevoir, subir
Cf. écoper de/ø...
40. émaner
Cela émane des autorités académiques. : provenir, tirer son origine de..., venir
Cf. Si *de -N de émaner* est considéré comme spécifique, celui de *venir* doit aussi être considéré comme spécifique. Remarquons que le *D.F.C.* donne *venir de* ...comme synonyme de *émaner de*...
41. enrager
Pierre enrage de ses échecs. : éprouver un violent dépit
42. essayer
Pierre essaye d'un vin.
Ils essayèrent de plusieurs restaurants. : employer, user d'une chose pour la première fois, pour voir si elle convient et si on peut l'adopter.
Cf. *Le Petit Robert*, 1994, considère le *de* en question comme partitif. La différence entre *Pierre essaye un vin* et *Pierre essaye d'un vin* est en ce que *d'un vin* signifie inévitablement "essayer en prenant une quantité d'un vin" qui n'est pas loin de "essayer une partie d'un vin".

43. étinceler
Son regard étincèlent de joie. : briller d'un vif éclat
44. être
Pierre est d'une générosité sans égale. : ?
 Cf. *Il est plein de générosité.* ?
Pierre est des nôtres. : participation, faire partie de...
Pierre est de Normandie. : provenance, provenir de...
45. exulter
Pierre exulte de joie. : éprouver une joie très vive
46. foisonner
Ce romancier foisonne d'idées ingénieuses. : être abondamment fourni en...
 Cf. foisonner de/en...
47. fourmiller
Les boulevards fourmillent de promeneurs endimanchés. : être peuplé de...
48. frémir
Pierre frémit de colère. : être agité par un léger tremblement sous l'effet d'une émotion.
49. goûter
Goûtez de ce gâteau. : en prendre une petite quantité
50. gratter
Pierre gratte du violon. : en jouer mal
 Cf. jouer de... ; jouer avec...?
51. griller
Pierre grille d'impatience. : avoir une extrême impatience de faire quelque chose
52. guérir
Pierre va guérir d'un cancer. : aller mieux et sortir d'une maladie.
53. hériter
Pierre a hérité d'une ferme. : recevoir un bien transmis par succession
 Cf. *hériter de quelque chose* est plus fréquent que *hériter quelque chose*
Pierre hérite une ferme de son père.
54. jaser
Pierre jase de choses et d'autres. : bavarder sans fin sur des sujets futiles
 Cf. jaser de/sur...
55. jouer
Pierre joue du piano. : se servir de..., manier avec plus ou moins d'adresse
 Cf. jouer du couteau.
56. jouir
Pierre jouit de la vie. : en tirer un vif plaisir
57. juger
Pierre juge de la conduite de Jean. : porter une appréciation sur...
 Cf. juger quelque chose = le régler
 juger de quelque chose = l'apprécier, l'estimer
58. languir

- Elle languit d'ennui dans la solitude.* : être dans un état d'abattement
59. lutter
Pierre lutte de vitesse avec Jean. : rivaliser
60. manger
Pierre mange de chaque plat. : ?
Cf. Je ne mange pas de ce pain-là. : Je n'accepte pas de ces procédés.
61. manquer
Pierre manque d'expérience. : ne pas en avoir suffisamment, être dépourvu de...
62. médire
Pierre médit de ses voisins. : en dire du mal avec l'intention de nuire
63. mourir
Pierre est mort d'un cancer. : cesser de vivre
Cf. mourir de sa belle mort.
 vivre ø une vie terrible
64. naître
Pierre est né de parents riches. : être issu par sa naissance de...
65. pâlir
Pierre pâlit de rage. : devenir pâle
66. participer
Le drame participe de la tragédie. : en présenter certains caractères, tenir de la nature de...
67. partir
Pierre part de son pays. : le prendre comme base, comme origine
68. pâtir
Sa santé pâtit de ses excès. : souffrir à cause de...
Cf. souffrir de...
69. payer
Pierre a payé de sa personne. : agir par soi-même
Cf. payer d'audace = faire preuve d'audace
70. pétiller
Pierre pétille d'esprit. : manifester un esprit vif
71. préjuger
Je ne peux pas préjuger de sa réaction. : s'en faire une opinion avant d'avoir tous les éléments nécessaires.
Cf. juger de...
 préjuger un problème
72. présumer
Paul présume trop de son talent. : en être trop persuadé
Cf. présumer l'existence d'une chose = considérer comme probable que...
73. procéder
La philosophie de Marx procède de celle de Hegel. : découler de...
Cf. procéder à...

74. profiter
Pierre a profité de la première occasion pour s'enfuir. : en tirer un avantage
 Cf. tirer profit de...
75. protester
Pierre proteste de son innocence. : en donner l'assurance formelle
 Cf. protester contre...
76. raffoler
Nombre de jeunes filles raffolent de la danse. : avoir pour elle un goût très vif, en être formellement épris
 Cf. être fou de...
77. r  chapper
Paul a r  chapp   d'une grave maladie. : gu  rir de...,   chapper par chance    un danger mena  ant, s'en tirer
 Cf. r  chapper   /de...
78. redoubler
Pierre redouble d'attention. : apporter, montrer encore plus de...
79. regorger
Cette r  gion regorge de fruits. : en avoir en tr  s grande abondance
80. relever
Cette affaire rel  ve du tribunal correctionnel. :   tre du domaine de...
 Cf. relever de maladie = en sortir
81. r  pondre
Je ne r  ponds de rien. : je ne garantis rien
Vous pouvez engager cet employ  , je r  ponds de lui. : accepter la responsabilit   de...
 Cf. r  pondre de/pour une personne
82. ressortir
Tu viens d'entrer dans le magasin et tu veux d  j   en ressortir ? : sortir de nouveau de de...
 Cf. sortir de...
83. r  sulter
Son   tat de sant   r  sulte d'un exc  s de travail. : provenir de...
84. revenir
Marie revient de l'  picerie voisine. : venir de nouveau
 Cf. revenir de ses erreurs
 d'un   vanouissement
 d'une mode
85. r  ver
J' ai r  v   de vous cette nuit. : voir en r  ve
 Cf. r  ver    quelque chose = y penser
86. rire
Pierre rit des snobs. : se moquer de...
87. rivaliser
Pierre rivalise d'effort avec Jean. : chercher    l'  galer ou    le surpasser
88. rougir

- Pierre rougit de honte.* : devenir rouge par l'effet d'une émotion
89. ruissseler
Son visage ruissselait de sueur. : être inondé d'un liquide qui coule
90. saigner
Pierre saigne du doigt. : perdre du sang
91. servir
Cela me sert de couverture. : être utilisé à titre de...
92. sonner
Pierre sonne de la trompette. : jouer d'un instrument à vent
93. sortir
Pierre va sortir de prison. : aller hors d'un lieu
94. souffrir
Pierre souffre des dents. : avoir mal aux dents
Pierre souffre de la faim. : être tourmenté par la faim
95. sourire
Tout le monde a souri de son accent. : rire de...
96. suffoquer
Pierre suffoque de colère. : ressentir une vive émotion au point de perdre la respiration
97. surgir
L'avion a surgi des nuages. : apparaître brusquement en sortant de...
98. témoigner
Ce fait témoigne de l'importance qu'il attache à cette affaire. : servir de preuve à...
Cf. témoigner en faveur de quelqu'un = rapporter ce qu'on sait ...
99. tenir
Cet enfant tient de son père. : lui ressembler d'une certaine manière
100. toucher
Pierre touchait agréablement de la guitare. : en jouer en amateur
101. trafiquer
Pierre trafique de son influence. : tirer un profit d'une chose qui n'est pas vénale
102. trancher
Pierre tranche de tout sans hésiter. : en décider d'une manière catégorique
Cf. trancher de/sur...
103. triompher
Pierre triomphe de ses adversaires. : remporter sur eux un succès définitif
104. user
Pierre a usé de procédés déloyaux. : s'en servir, l'employer
Cf. user quelque chose = le détériorer par l'emploi constant
105. vivre
L'homme ne vit pas seulement de pain. : en tirer sa subsistance

——研究ノート——

【前綴 ein- 】

einatmen

I 他

<et⁴> (気体⁴を) 吸い込む (反 ausatmen) :

giftige Dämpfe einatmen

II 自〔完了 haben〕

息を吸い込む :

tief einatmen

einbilden

再

① <sich³ et⁴> (…⁴を) 思い込む、錯覚する :

Kein Mensch verachtet dich, du bildest dir das nur ein.

② <sich³ viel<nichts> auf et⁴> (…⁴を) 大いに自慢する :

Er bildet sich³ nichts auf seinen Erfolg ein.

einbrechen

I 自〔完了 sein〕

① (どろぼうなどが) 押し入る :

Ein Dieb ist in den Keller eingebrochen.

② (敵などが) 強引に侵入する :

Der Gegner ist in unsere Stellung eingebrochen.

③ くずれ落ちる :

Das Gewölbe ist eingebrochen.

④ (表面が割れて) 下に落ちる :

Er ist auf dem Eis eingebrochen.

⑤ 《雅》 (夜明け・夜などが) 突然始まる :

mit einbrechender Nacht

⑥ 《口語》 (予期しない) 敗北を喫する.

Ⅱ 他

<et⁴> (…⁴を) 打ち破る、こじ開ける :

Er mußte die Tür einbrechen.

einbringen

他

① <et⁴> (穀物など⁴を) 取り入れる :

die Ernte in die Scheune einbringen

② <et⁴> (利益・名声など⁴を) もたらす :

Das hat ihm eine Menge Geld eingebracht.

③ <et⁴> (損失・遅れなど⁴を) 取り戻す :

die Verluste einbringen

④ <et⁴> (法案など⁴を) 提出する :

einen Antrag im Parlament einbringen

eindringen

自〔完了 sein〕

① <in et⁴> (水などが…⁴に) しみ込む :

Das Wasser drang in den Keller ein.

② <in et⁴> (どろぼうなどが…⁴に) 侵入する :

Der Dieb drang durch ein Fenster in das Haus ein.

③ <auf j⁴> (…⁴に) 襲いかかる :

Zwei Männer drangen mit Messern auf ihn ein.

《比ゆ》

Sie drangen mit Fragen auf mich ein.

einfahren

I 自〔完了 sein〕

(汽車・船などが) 入る、入って来る (反 ausfahren) :

Der Zug fährt bald ein.

Ⅱ 他

① <et⁴> (…⁴を) 〔車をぶつけて〕 壊す :

Unser Zaun wurde von einem Traktor eingefahren.

② <et⁴> (収穫物など⁴を) 〔車で〕 運び入れる :

Wir wollen morgen die Ernte einfahren.

③ <et⁴> (車など⁴を) 慣らし運転する、乗り慣らす :

das neue Auto einfahren

Ⅲ再 < sich⁴ >

〔車などの〕運転に慣れる：

Ich muß mich erst einfahren.

einfallen

自〔完了 sein〕

① < j³ > (…³ の) 念頭に浮かぶ、思いつく：

Sein Name fällt mir nicht mehr ein.

② (建物などが) 崩壊する；(屋根などが) 陥没する：

Die alte Mauer ist eingefallen.

《比ゆ》

Seine Wangen sind ganz eingefallen.

③ < in et⁴ > (…⁴ に) 侵入する；(光などが…⁴ に) 差し込む；
(合唱・演奏など⁴ に) 途中から加わる：

Der Feind fiel in unser Land ein.

Das Licht fällt durch ein Fenster ein.

An dieser Stelle fielen die Geigen ein.

④ 《雅》(季節・気象現象などが) 突然始まる：

Der Winter fällt ein.

einfassen

他

① < et⁴ > (…⁴ を) 囲む；縁どる：

einen Garten mit einer Mauer einfassen

《物を主語にして》

Eine Hecke faßt den Park ein.

② < et⁴ > (…⁴ を) 〔たるなどに〕詰める：

Heringe einfassen

einfügen

I 他

< et⁴ in et⁴ > (…⁴ を…⁴ に) はめこむ；挿入する：

ein paar Steine in den Riß einfügen

Er fügte noch einige Sätze in das Manuskript ein.

Ⅱ再

< sich⁴ in et⁴ > (…⁴に) 適合する、順応する :

Er fügte sich schnell in die neue Umgebung ein.

einführen

他

① < et⁴ > (…⁴を) 輸入する :

Erdöl aus Saudiarabien einführen

② < et⁴ > (制度・品物など⁴を) 取り入れる、採用する :

An unserer Schule wurde ein neues Lehrbuch eingeführt.

③ < j⁴ bei j³ > (…⁴を…³に) 引き合わせる、紹介する :

Er hat das Mädchen bei seinen Eltern eingeführt.

④ < j⁴ > (…⁴に) 手ほどきをする :

Er führte uns in die Philosophie ein.

⑤ < et⁴ in et⁴ > (…⁴を…⁴に) 差しこむ、差し入れる :

einen Schlauch in den Magen einführen

eingehen

I 自 [完了 sein]

① < auf et⁴ > (問題など⁴を) 取り上げる、取り組む :

Ich bin auf seinen Vorschlag nicht eingegangen.

② < auf j⁴ > (…⁴に) 理解を示す、耳を傾ける :

Wir konnten auf ihn nicht eingehen.

③ (郵便物などが) 到着する、届く :

Briefe sind eingegangen.

④ (布地が) 縮む :

Der Stoff ist beim Waschen eingegangen.

⑤ (店などが) つぶれる :

Das Geschäft ist eingegangen.

その店はつぶれた

⑥ (主に動物が) 死ぬ ; (植物が) 枯れる :

Der Hund ist an der Staupe eingegangen.

Während der Dürre sind viele Pflanzen eingegangen.

II 他

< et⁴ > (…⁴の) 関係に入る (☆ 特定の名詞と ; 完了の助動詞として sein をとることが多い) :

eine Ehe eingehen 婚約する

einen Vertrag eingehen 契約を結ぶ

einhalten

他

- ① <et⁴> (約束・期限など⁴を) 守る、遵守する：

Er hielt den Termin pünktlich ein.

- ② <et⁴> (コース・間隔など⁴を) 守る：

Das Flugzeug hält den Kurs ein.

Ⅱ 自〔完了 haben〕

- <in/mit et³> (…³を) 止める：

im/mit dem Lesen einhalten

einholen

他

- ① <j⁴> (…⁴に) 追いつく：

Ich holte ihn gerade noch ein.

- ② <et⁴/j⁴> (遅れなど⁴を) 取り戻す：

Er konnte die verlorene Zeit nicht wieder einholen.

- ③ <et⁴> (情報など⁴を) 〔求めて〕手に入れる：

Wir haben Auskünfte über ihn eingeholt.

- ④ <et⁴> (綱など⁴を) たぐり寄せる；(旗など⁴を) 降ろす：

den Anker einholen

die Fahne einholen

einkaufen

I 自

買い物をする：

Ich muß noch einkaufen.

Ⅱ 他

- <et⁴> (…⁴を) 購入する、買い入れる：

Lebensmittel einkaufen

Ⅲ 再

- <sich⁴ in et⁴> (…⁴に) 〔金を払って〕入る；入会資格を買う：

Ich muß mich bald in ein Altersheim einkaufen.

einladen

他

- ① <j⁴> (…⁴を) 招待する :

Ich habe ihn zum Essen eingeladen.

- ② <j⁴ zu et³> (…⁴に…³をするように) 求める :

Sie lud ihn ein, einzutreten.

- ③ <et⁴> (…⁴を) 積み込む (反 ausladen) :

Sie laden Güter ins Schiff ein.

einlaufen

I 自 [完了 sein]

- ① (船が) 入る、入って来る :

Das Schiff ist gerade einlaufen.

- ② (水などが) 流れ込む (☆ 主に lassen と) :

Sie läßt Wasser in die Wanne einlaufen.

- ③ (郵便物などが) 到着する (☆ 主に会社などで) ; (苦情などが) 舞い込む :

Täglich laufen Zuschriften ein.

Es sind viele Beschwerden eingelaufen.

- ④ (布地などが) 縮む :

Die Vorhänge sind beim Waschen eingelaufen.

II 他

<et⁴> (靴など⁴を) はきならす :

Er läuft die neuen Schuhe ein.

III 再

<sich⁴> (機械などが) 本調子になる :

Die Maschine hat sich noch nicht eingelaufen.

einleiten

他

- ① <et⁴> (手続きなど⁴を) 開始する :

Man hat ein Verfahren gegen ihn eingeleitet.

- ② <et⁴> (催しもの⁴を) [音楽などによって] 開始する、導入する :

Wir leiteten die Feier mit Musik ein.

einleuchten

自

<j³> (…³にとって) よくわかる、納得がゆく :

Dieses Argument leuchtet mir ein.

einnehmen

他

- ① <et⁴> (薬⁴を) 服用する ; 《雅》 (食事など⁴を) 摂取する :

Tabletten einnehmen

Wir nahmen das Frühstück auf der Terrasse ein.

- ② <et⁴> (お金⁴を) 稼ぐ、儲ける :

Er nimmt monatlich 2000 Mark ein.

- ③ <et⁴> (場所など⁴を) 占める ; 《軍事》 (陣地など⁴を) 占領する :

Der Tisch nimmt viel Platz ein.

eine Stadt einnehmen

- ④ <et⁴> (席⁴に) つく ; (地位⁴を) 占める :

Bitte nehmen Sie Ihre Plätze wieder ein.

Er nimmt die Stelle eines Abteilungsleiters ein.

- ⑤ <et⁴> (ある態度⁴を) とる :

Er nahm eine abwartende Haltung ein.

- ⑥ <et⁴> (積み荷など⁴を) 積み込む :

Das Schiff nimmt Kohle ein.

einrichten

I 他

- ① <et⁴> (部屋・住まいなど⁴を) [家具などで] 設備する :

Ich habe mein Zimmer neu eingerichtet.

- ② <et⁴> (施設など⁴を) [公共の目的のために] 設立する :

Hier soll ein Kindergarten eingerichtet werden.

- ③ <et⁴> (…⁴を) 手直しする :

ein Orchesterstück für Klavier einrichten

- ④ <et⁴> (折れた骨など⁴を) 整復する、整骨する.

II 再

- ① <sich⁴> 家具調度を調える :

Sie haben sich neu eingerichtet.

- ② <sich⁴ auf et⁴> (…⁴に対する) 準備<心構え>をする :

Sie richten sich auf den Winter ein.

einschalten

I 他

- ① <et⁴> (…⁴の) スイッチを入れる (反 ausschalten) :

das Radio einschalten

- ② <et⁴> (ギヤなど⁴を) 入れる :

den zweiten Gang einschalten

- ③ <j⁴> (…⁴を) 介入させる :

Da müssen wir den Arzt einschalten.

- ② <et⁴> (…⁴を) 挿入する :

Wir schalten jetzt eine kurze Pause ein.

II 再

<sich⁴> 介入する、割り込む :

Er schaltete sich in die Verhandlungen ein.

einschätzen

他

- ① <j⁴/et⁴> 《様態の語句と》 (…⁴を～のように) 評価する、判断する :

Ich schätze ihn <seine Arbeit> hoch ein.

- ② <j⁴> (…⁴の) 税額を見積もる :

Ich bin dieses Jahr zu hoch eingeschätzt worden.

einschenken

他

<et⁴> (飲み物⁴を) つぐ :

Sie schenkte den Kaffee ein.

《4 格目的語なしで》

Darf ich Ihnen noch einmal einschenken?

einschlafen

自〔完了 sein〕

- ① 眠り込む、寝入る :

Er schlief sofort ein.

- ② (手足などが) しびれる :

Mein Bein ist eingeschlafen.

- ③ 《口語》 (付き合いなどが) 除々になくなる、自然に止む :

Unser Briefwechsel ist allmählich eingeschlafen.

einschlagen

I 他

- ① <et⁴> (くぎ・くさびなど⁴を) 打ち込む :

einen Nagel in die Wand einschlagen

- ② <et⁴> (窓・戸など⁴を) 打ちこわす :

eine Fensterscheibe einschlagen

- ③ <et⁴> (...⁴を) 包む、くるむ :

Er schlägt das Kleid in ein Tuch ein.

- ④ <et⁴> (方向・道など⁴を) 取って進む :

den kürzesten Weg einschlagen

- ⑤ <et⁴> (ハンドルなど⁴を) 回す :

das Steuer nach rechts einschlagen

- ⑥ <et⁴> (...⁴を) 内側へ折り返す :

einen Saum einschlagen

II 自

- ① (雷・砲弾などが) 当たる、落ちる :

Der Blitz hat in das Haus eingeschlagen.

- ② <auf j⁴> (...⁴に) 打ってかかる、さんざん殴る :

Sie schlug zornig auf ihn ein.

- ③ [握手して] 承諾する :

Die Wette gilt, schlag ein !

einschließen

他

- ① <j⁴> (...⁴を) [鍵をかけて] 閉じ込める :

die Kinder in die Wohnung <in der Wohnung> einschließen

《再帰的に》

Er hat sich in seinem Zimmer eingeschlossen.

- ② <et⁴> (...⁴を) [鍵をかけて] しまう :

Geld einschließen

- ③ <et⁴/j⁴> (...⁴を) 含める :

Die Bedienung ist im Preis eingeschlossen.

[状態受動] サービス料は料金に含まれている

《過去分詞で》

Alle, mich eingeschlossen, sind dagegen.

- ④ <et⁴> (…⁴を) 取り囲む、取り巻く :

Eine Mauer schließt den Park ein.

einschränken

I 他

- ① <et⁴> (…⁴を) 制限する、減らす :

die Zahl der Teilnehmer einschränken

- ② <j⁴> (…⁴を) 制約する :

Man hat uns in unserer Handlungsfreiheit eingeschränkt.

II 再

<sich⁴> 生活を切りつめる、儉約する :

Sie müssen sich sehr einschränken.

《過去分詞で》

Wir lebten ziemlich eingeschränkt.

einschreiben

I 他

- ① <et⁴> (…⁴を) 記入する、書き込む :

et⁴ in den Terminkalender einschreiben

- ② <j⁴> (…⁴を) 登録する :

die Teilnehmer in eine Liste einschreiben

- ③ <et⁴> (郵便物⁴を) 書留にする :

einen Brief einschreiben lassen

II 再

<sich⁴> 自分の名前を登録する :

Ich habe mich in die Liste der Mitglieder eingeschrieben.

einsehen

他

- ① <et⁴> (…⁴を) 理解する ; (誤りなど⁴を) 悟る、認める :

Er hat sein Unrecht eingesehen.

- ② <et⁴> (庭など⁴を) のぞき見る、中を見る ;

Man kann den Garten nicht einsehen.

- ③ <et⁴> (書類など⁴を) 閲覧する、目を通す :

Kann ich die Unterlagen einsehen?

einsetzen

I 他

- ① <et⁴> (…⁴を) はめ込む :

eine neue Fensterscheibe einsetzen

- ② <et⁴> (戦力・機械など⁴を) 投入する ; (臨時便など⁴を) 増発する :

Truppen einsetzen

- ③ <j⁴> (…⁴を) 任命する :

einen Bürgermeister einsetzen

- ④ <j⁴ zu j³/als j⁴> (…⁴を…³/⁴に) 指定する :

Sie setzte ihn zu seinem Erben <als seinen Erben> ein.

- ⑤ <et⁴> (委員会など⁴を) 設置する :

eine Kommission einsetzen

- ⑥ <et⁴> (…⁴を) 賭ける :

10 Mark bei einer Lotterie einsetzen

II 再

<sich⁴ für et⁴> (…⁴のために) 尽力する :

Er hat sich für Lohnerhöhung eingesetzt.

III 自

〔急に〕 始まる :

Im Oktober setzte die Kälte ein.

einstecken

他

- ① <et⁴> (…⁴を) 差し込む :

den Stecker in die Steckdose einstecken

- ② <et⁴> (…⁴を) 〔持つて行くためにポケットなどに〕 入れる :

Vergiß nicht, ein Taschentuch einzustecken.

- ③ 《口語》 <et⁴> (辛いことなど⁴を) 耐え忍ぶ :

eine Beleidigung einstecken

- ④ 《口語》 <j⁴> (…⁴を) 刑務所にぶちこむ :

Sie haben ihn diesmal eingesteckt.

- ⑤ 《口語》 <et⁴> (…⁴を) 着服する、せしめる :

Sie hat ein anständiges Erbe eingesteckt.

einsteigen

自 〔完了 sein〕

- ① [乗り物に] 乗り込む、乗る：

Er stieg in den Bus ein.

- ② <et⁴> (建物など⁴に) [よじ登って] 忍び込む：

Der Dieb ist durch ein Fenster ins Haus eingestiegen.

- ③ <in et⁴> (事業など⁴に) 参加する、参画する：

Er will in das Geschäft einsteigen.

einstellen

I 他

- ① <et⁴> (不必要になったもの⁴を) しまう：

die Bücher einstellen

- ② <j⁴> (...⁴を) 雇い入れる、採用する：

Er wurde sofort eingestellt.

- ③ <et⁴> (カメラなど⁴の) 焦点を合わせる；

(テレビ・ラジオなど⁴を) 調節する：

das Fernglas scharf einstellen

den Fernsehapparat auf einen anderen Sender einstellen

- ④ <et⁴> (...⁴を) 中止する：

die Zahlungen einstellen

II 再

- ① <sich⁴> (人が) 来る、現れる；(季節などが) 始まる：

Wird sie sich bei uns einstellen？

Der Winter hat sich eingestellt.

- ② <sich⁴> [あることの結果として] 生じる：

Sorgen stellten sich bei ihr ein.

- ③ <sich⁴ auf et⁴> (...⁴に対して) 心構えをする、準備をする：

Wir haben uns noch nicht auf den Winter eingestellt.

- ④ <sich⁴ auf j⁴> (...⁴に) 合わせる、適応する：

Ich muß mich auf meine Schüler einstellen.

einteilen

他

- ① <j⁴/et⁴ in et⁴> (...⁴を...⁴に) 分ける、区分する：

Die Schüler wurden in fünf Gruppen eingeteilt.

- ② 《口語》<et⁴> (...⁴を) [うまく] 配分する、割り振る：

Ich habe mir die Arbeit genau eingeteilt.

- ③ <j⁴ zu et³/für et⁴> (…⁴を…³/⁴に) 割り当てる、差し向ける :

Er ist zum Außendienst <für den Nachtdienst> eingeteilt.

eintragen

他

- ① <j⁴/et⁴> (…⁴を) 記入する ; 登録する :

die Zensuren in ein Heft eintragen

《再帰的に》

Bitte tragen Sie sich⁴ in diese Liste ein!

- ② <j³ et⁴> (…³に利益⁴を) もたらす :

Sein letztes Buch trug ihm Ruhm ein.

《皮肉的に》

Seine Hilfe trägt ihm immer nur Undank ein.

eintreffen

自〔完了 sein〕

- ① (待っていたものが) 到着する :

Die Gäste treffen um 3 Uhr ein.

- ② (予想などが) 的中する、現実になる :

Meine Befürchtungen sind eingetroffen.

eintreten

I 自〔完了 sein〕

- ①〔ある場所に〕 入る :

Bitte treten Sie ein !

《比ゆ》

Die Verhandlungen sind in ein neues Stadium eingetreten.

- ② (政党・協会などに) 入る、会員になる :

in eine Partei eintreten

- ③ (出来事などが) 起こる、生じる、始まる :

Was wir befürchteten, trat ein.

- ④ <für j⁴/et⁴> (…⁴の) 味方をする、支持する :

Er ist sehr für mich eingetreten.

II 他

- ① <et⁴> (…⁴を) けって壊す、踏み破る :

Er hat die Tür eingetreten.

② < sich³ et⁴ > (踏みつけて…⁴を) 足の裏に突き刺す :

Ich habe mir einen Dorn eingetreten.

③ < et⁴ > (…⁴を) 踏んで押し込む :

den Stein in die Erde eintreten

einwenden

他

< et⁴ > (…⁴を) 異議として申し立てる、異議を唱える :

Dagegen habe ich nichts einzuwenden.

《daß 文と》

Er wandte/wendete ein, daß es zu spät sei.

einwerfen

他

① < et⁴ > (…⁴を) [石などを投げて] 壊す :

Er hat eine Fensterscheibe eingeworfen.

② < et⁴ > (…⁴を) 投げ込む :

eine Münze in den Automaten einwerfen

③ < et⁴ > (言葉など⁴を) さしはさむ :

Er warf ein, er sei dagegen.

einwickeln

他

< j⁴/et⁴ > (…⁴を) 包む、くるむ (反 auswickeln) :

das Geschenk in Papier einwickeln

《再帰的に》

Sie wickelte sich fest in ihren Mantel ein.

《比喩》

Er hat sich von ihr einwickeln lassen.

einwilligen

自

< in et⁴ > (…⁴に) 同意する、承諾する :

Er willgte in den Vorschlag ein.

einziehen

I 他

- ① <et⁴> (糸など⁴を) 引いて入れる ; (建物の部材⁴を) はめ込む :

einen Faden einziehen

eine Zwischenwand einziehen

- ② <et⁴> (帆・網など⁴を) [引っ張って] しまう、取り込む :

die Segel einziehen

- ③ <et⁴> (身体部分⁴を) 引っ込める :

Die Katze zieht die Krallen ein.

- ④ (財産など⁴を) 没収する、押収する ; (無効になった紙幣など⁴を) 回収する :

Man hat seinen Führerschein eingezogen.

Diese Münzen sind längst eingezogen worden.

- ⑤ <et⁴> (貸し金など⁴を) 取り立てる ; (情報など⁴を) 集める :

Schulden einziehen

Erkundigungen über seine Vergangenheit einziehen

- ⑥ 《軍事》 <j⁴> (兵員⁴を) 召集する (☆主に受動形で) :

Er wird im Herbst eingezogen.

- ⑦ <et⁴> (気体・水分など⁴を) 吸い込む :

den Duft einer Blume durch die Nase einziehen

II 自 [完了 sein]

- ① [新居などに] 移る、入居する (反 ausziehen) :

Sie sind gestern in das neue Haus eingezogen.

- ② 行進しながら入って来る :

Die Sportler ziehen in das Stadion ein.

- ③ (水分などが) しみ込む :

Das Regenwasser zieht in den Boden ein.

【前綴 mit- 】

mitbringen

他

- ① <j³ et⁴> (...³に...⁴を) (土産として) 持って来る :

Ich habe dir Blumen mitgebracht.

- ② <j⁴> (...⁴を) 連れて来る :

einen Freund mitbringen

- ③ <et⁴> (能力など⁴を) 持っている、備えている :

Er bringt für diese Stelle ausreichende Fähigkeiten mit.

mitgehen

自 [完了 sein]

- ① 一緒に行く :

Darf ich mitgehen ?

《比》 mit der Zeit mitgehen

- ② (授業・講演などを) 関心を持って聞く、魅了される:

Die Zuschauer gingen begeistert mit.

mitkommen

自 [完了 sein]

- ① 一緒に来る :

Kommst du mit ?

- ② 《口語》 [遅れないで] ついて行く :

Sie gehen so schnell, ich komme nicht mit.

mitmachen

I 他

- ① <et⁴> (...⁴を) 一緒にする、(...⁴に) 参加する :

Habt ihr die Demonstration mitgemacht?

- ② <et⁴> (他人の仕事など⁴も) 一緒に片づける :

Ich mache für ihn die Arbeit mit.

- ③ 《口語》 <et⁴> (苦難など⁴を) 体験する :

Er hat im Krieg viel mitgemacht.

II 自 [完了 haben]

- ① <bei et³> (...³に) 加わる :

bei einem Fest mitmachen

- ② 《口語》 機能する :

Seine Füße machen nicht mehr mit.

mitnehmen

他

- ① <et⁴> (...⁴を) 持って行く、携帯する :

Du mußt den Regenschirm mitnehmen.

② <j⁴> (…⁴を) 連れて行く :

Auf die Reise nehmen wir die Kinder nicht mit.

③ 《口語》 <et⁴> (チャンスなど⁴を) 利用する :

Jede Chance solltest du mitnehmen.

④ 《口語》 <j⁴> (…⁴に) [精神的・肉体的] 打撃を与える :

Die Krankheit nimmt ihn sehr mit.

mitteilen

I 他

<j³ et⁴> (…³に…⁴を) 知らせる、伝える、通知する :

Ich teilte ihm meine Adresse mit.

Ich muß Ihnen leider mitteilen, daß..

II 再

<sich⁴ j³> (…³に) 心を打ち明ける :

Wenn er sich mir doch etwas mehr mitgeteilt hätte!

【前綴 nach- 】

nachahmen

他

① <et⁴/j⁴> (…⁴を) まねる :

seine Sprechweise nachahmen

② <j⁴> (…⁴を) 手本にする :

Er versucht, seinen Vater nachzuahmen.

③ <et⁴> (…⁴を) 模造する、偽造する :

Es gelang ihr nicht, ein Meisterwerk nachzuahmen.

nachdenken

自 [完了 haben]

<über et⁴/j⁴> (…⁴について) 熟考する、

じっくり考える :

Er dachte darüber nach, ob seine Entscheidung richtig war.

nachfragen

自 [完了 haben]

照会する、問い合わせる：

Bitte fragen Sie später noch einmal nach.

nachgeben

I 自〔完了 haben〕

- ① <et³> (…³に) 譲歩する、屈する：

Sie gab seinen Bitten nach.

《目的語なしで》

Er gibt nie nach.

《諺》

Der Klügere gibt nach.

- ② <et³> (誘惑など³に) 負ける：

Er gab der Müdigkeit nach.

- ③ 〔外圧に〕まがる、崩れる；(綱などが) たわむ：

Der Boden unter seinen Füßen gibt bei jedem Tritt nach.

Das Seil gab nach.

II 他

<j³ et⁴> (…³に…⁴を) あとから与える：

sich³ Gemüse nachgeben lassen

nachgehen

自〔完了 haben〕

- ① (時計が) 遅れる (反 vorgehen)：

Die Uhr geht drei Minuten nach.

- ② <j³/et³> (…³の) 後をついて行く、跡を追う：

Er ist der Spur im Schnee nachgegangen.

- ③ <et³> (問題など³を) 究明しようとする：

Er ging diesem Problem nach.

- ④ <et³> (仕事などに) 専念する：

einem Studium nachgehen

- ⑤ <jt³> (出来事などが…³の) 心に残る：

Seine Worte gehen ihr lange nach.

nachkommen

自〔完了 sein〕

- ① 後から来る<行く>：

Geht schon voraus, ich komme gleich nach.

②〔遅れずに〕ついて行く：

Bei diesem Tempo kann ich nicht mehr nachkommen.

《mit et³ と》

Sie kommen mit der Arbeit gerade noch nach.

③ <et³> (命令・義務など³を) 守る、(要求など³を) 満たす：
einer Verpflichtung nachkommen

Ich kann seinen Forderungen nicht nachkommen.

nachlassen

I 自〔完了 haben〕

① (…の程度が) 弱まる：

Der Regen läßt nach.

② 《否定形で》 やめ (ない) ：

Er ließ nicht nach.

II 他

① <et⁴> (…⁴を) 弛める：

Er hat die Schrauben ein wenig nachgelassen.

② <et⁴> (負債・罰など⁴を) 免除する；(金額⁴を) 割り引く：
seine Schulden nachlassen

Er hat mir drei Mark vom Preis nachgelassen.

nachschlagen

I 他

<et⁴> (単語・事項など⁴を) 調べる：

Ich habe ein Wort im Wörterbuch nachschlagen.

II 自〔完了 sein〕

<et³> (…³の) 性質を受け継ぐ、(…³に) 〔性格などが〕似てくる：

Das Mädchen schlägt der Mutter nach.

nachsehen

I 自〔完了 haben〕

① <j³/et³> (…³を) 目で追う、見送る：

dem abfahrenden Zug nachsehen

② 目で確かめる：

Sieh einmal nach, wo die Bücher sind!

Ⅱ 他

① <et⁴> (…⁴を辞書などで) 調べる：

ein Wort im Wörterbuch nachsehen

② <et⁴> (…⁴を) 点検する：

Die Mutter sah die Wäsche nach.

③ <j³ et⁴> (…³に…⁴を) 大目に見る：

Sie sieht ihren Kindern alle Unarten nach.

nachweisen

他

① <et⁴> (…⁴を) 証明する：

Er konnte seine Unschuld nicht nachweisen.

② <j³ et⁴> (役所などが…⁴を) 紹介する、斡旋する：

ihm eine Arbeit nachweisen

【前綴 vor-】

vorbereiten

I 再

① <sich⁴ auf et⁴> (…⁴の) 準備をする：

Er hat sich lange auf eine Prüfung vorbereitet.

《過去分詞で》

Er ist gut vorbereitet.

② <sich⁴> (…の) 動きが始まっている：

Ein Unwetter schien sich vorzubereiten.

Ⅱ 他

① <j⁴ auf et⁴> (…⁴に…⁴への) 準備をさせる、心構えをさせる：

Der Trainer hat die Mannschaft auf das Spiel sehr gut vorbereitet.

② <et⁴> (…⁴の) 準備をする：

eine Reise vorbereiten

③ <et⁴ j⁴ für ~⁴> (…⁴を~⁴のために) 用意する、支度する：

alles für die Abreise vorbereiten

vorbeugen

I 他

<et⁴> (体の一部⁴を) 前方へかがめる :

Er beugt den Kopf vor.

II 再

<sich⁴> 前方へ身をかがめる、身を乗り出す :

Er beugte sich so weit vor, daß er fast aus dem Fenster gefallen wäre.

III 自〔完了 haben〕

<et³> (…³を) 予防する、防止する :

einer Krankheit vorbeugen

vorgehen

自〔完了 sein〕

① 前へ〔進み〕出る :

nach der Reihe an die Tafel vorgehen

② (他人よりも) 先に行く :

Bitte geh schon vor, ich komme gleich nach.

③ (時計などが) 進む (反 nachgehen) :

Die Uhr geht [zehn Minuten] vor.

④ 《場所の語句と》 (〜で) 進行しつつある、起こりつつある :

Was geht hier vor?

⑤ 優先する :

Die Gesundheit geht vor.

⑥ 《様態の語句と》 (〜の) 行動をとる、対処する :

gegen Verleumdungen mit aller Schärfe vorgehen

vorkommen

自〔完了 sein〕

① (ふつう良くないことが) 起こる :

Es ist öfter vorgekommen, daß der Motor versagt hat.

② 《場所の語句と》 (〜に) 見出される、存在する :

In dem Text kommen viele Fehler vor.

③ 《口語》 前に出る :

Komm mal vor !

④ <j³> 《様態の語句と》 (…³に〜のように) 思われる :

Die Sache kommt mir seltsam vor.

《非人称的に》

Es kam mir vor, als hätte ich das schon einmal gesehen.

vorlesen

他

<j³ et⁴> (...³に...⁴を) 読んで聞かせる :

Kindern Märchen vorlesen

vormachen

他

① <j³ et⁴> (...³に...⁴を) して見せる :

Kannst du mir das noch einmal vormachen ?

② <j³ et⁴> (...³に...⁴を) 真実だと思い込ませる :

Mir kannst du so leicht nichts vormachen.

vornehmen

I 他

① <et⁴> (...⁴を) する :

eine Änderung vornehmen

② <et⁴> (...⁴に) 従事する、取り組む :

eine Arbeit vornehmen

《3 格再帰代名詞と伴うこともある》

sich³ ein Buch vornehmen

③ 《口語》 <et⁴> (...⁴を) 前へ持って来る :

Nimm die Hand vor, wenn du gähnst!

II 再

① <sich³ et⁴> (...⁴する) 決心をする、計画する :

Ich habe mir heute diese Arbeit vorgenommen.

《zu 不定句と》

Er hat sich vorgenommen, mit dem Rauchen aufzuhören.

② 《口語》 <sich³ j⁴> (...⁴を) 呼びつけて説教する :

Ich muß mir ihn vornehmen.

vorschlagen

他

- ① <et⁴> (…⁴を) 提案する :

Ich habe ihm eine andere Lösung vorgeschlagen.

《zu 不定句と》

Er schlug vor, gleich aufzubrechen.

- ② <j⁴> (地位・役職などに…⁴を) 推薦する :

Ich habe ihn für ein Amt vorgeschlagen.

vorstellen

I 他

- ① <j³j⁴/et⁴> (…³に…⁴を) 紹介する :

Er hat uns seine Verlobte vorgestellt.

《3 格目的語なしで》

Die Firma stellt in Kürze ihr neues Modell vor.

- ② <et⁴> (…⁴を) [あるものの] 前に置く :

einen Schirm vorstellen

- ③ <et⁴> (…⁴を) 前にずらす ; (時計など⁴を) 進める (反 nachstellen) :

Er hat das rechte Bein noch etwas vorstellt.

die Uhr vorstellen

- ④ <et⁴> (…⁴を) 表す、表現する :

Die Plastik stellt eine junge Frau vor.

II 再

- ① <sich⁴> 自己紹介する :

Darf ich mich vorstellen ?

- ② <sich⁴> (医者に) 診察してもらいに行く :

Er muß sich in einer Woche zur Nachuntersuchung vorstellen.

- ③ <sich³jn/et⁴> (…⁴を) 想像する、思い浮かべる :

Er hatte sich seine Arbeit interessanter vorgestellt.

vortragen

他

- ① <et⁴> (詩など⁴を) 朗読する ; (曲など⁴を) 演奏する :

ein Gedicht vortragen

Sie trägt ein Stück auf dem Klavier vor.

- ② 《口語》 <et⁴> (…⁴を) 前方へ持っていく :

Er hat das Gepäck vorgetragen.

- ③ <et⁴> (…⁴を) 先頭に立って運ぶ :

eine Fackel vortragen

- ④ <j³ et⁴> (...³に...⁴を) 申し立てる、説明する :

Sie hat ihm die Gründe für ihren Entschluß vorgetragen.

《3 格目的語なしで》

Tragen Sie Ihre Angelegenheit schriftlich vor!

vorwerfen

他

- ① <j³ et⁴> (...³に...⁴を) 非難する、とがめる :

Er warf ihr vor, daß sie zu viel Geld ausgabe.

《相互的に》

Sie haben sich³ nichts vorzuwerfen.

- ② <j³ et⁴> (動物³にえさ⁴を) 投げ与える :

Er hat dem Löwen ein großes Stück Fleisch vorgeworfen.

- ③ <et⁴> (...⁴を) 前の方に投げる :

Wirf mal die Zigaretten vor!

vorziehen

他

- ① <et⁴ et³> (...⁴を...³よりも) 好む :

Er zieht Rotwein dem Weißwein vor.

《3 格目的語なしで》

Ich ziehe es vor, zu Fuß zu gehen.

- ② <j⁴/et⁴> (...⁴を) 優先的に扱う :

eine Arbeit vorziehen

- ③ <j⁴> (...⁴を) ひいきする :

Der Lehrer zieht die Schülerin den anderen gegenüber vor.

- ④ <et⁴> (事物を遮断するために...⁴を) [その前に] 引く :

den Vorhang am Fenster vorziehen

- ⑤ <et⁴> (...⁴を) 前方へ引く :

den Stuhl ein paar Zentimeter vorziehen

【前綴 zu- 】

zudecken

他

- ① <j⁴> (…⁴に) (毛布などを) かぶせる :

Er deckte den Kranken mit einer Decke zu.

- ② <et⁴> (…⁴に) 蓋をする ; 覆いをかぶせる :

eine Grube zudecken

《比喩》

einen Mißstand zudecken.

zuerkennen

- <j³j⁴/et⁴> (…³に…⁴を与えることを) (法律的に) 認める (反 aberkennen) :

Man hat ihm den ersten Preis zuerkannt.

zugeben

他

- ① <et⁴> (犯行など⁴を) 白状する :

Der Angeklagte hat den Diebstahl zugegeben.

- ② <et⁴> (…⁴を) (やむおえず事実だと) 認める :

Ich gebe zu, daß du recht hast.

- ③ <et⁴> (…⁴を) 許す (☆ ふつう否定詞を伴う) :

Er wird nie zugeben, daß sie allein reist.

- ④ <et⁴> (…⁴を) (商品のおまけ・アンコール曲として) 付け加える.

Der Sänger gab drei Lieder zu.

zugehen

自〔完了 sein〕

- ① <auf j⁴/et⁴> (…⁴の方に) 向って行く :

Ich ging einige Schritte auf ihn zu.

- ② <j³> (…³の) 手元に届く :

Der Brief ist mir gestern zugegangen.

- ③ 《非人称で ; 様態の語句を伴い》 (物事が…の状態) で経過する :

Auf dem Fest ging es lustig zu.

- ④ (ドアなどが) 閉まる、閉じる :

Der Koffer geht nicht zu.

- ③ 《様態の語句と》 (…の状態に) なる :

Der Obelisk geht〔nach oben〕spitz zu.

zugestehen

他

① <j³ et⁴> (...³に権利など⁴を) 認める.

② <et⁴> (...³に...⁴を) (やむおえず) 事実だと認める (→ zugeben) :

Er wollte nicht zugestehen, daß er einen Fehler gemacht hatte.

zuhören

自〔完了 haben〕

(話・音楽などに) 耳を傾ける :

Er hat fast nicht gesprochen, sondern nur zugehört.

zulassen

他

① <et⁴> (...⁴を) 許す、認める :

Er wollte keine Ausnahme zulassen.

《物を主語にして》

Diese Worte lassen eine andere Erklärung zu.

② <et⁴/j⁴> (...³を) 許可する、認可する :

Er wurde zum Studium zugelassen.

③ <j⁴> (...⁴に) (入場・入会などを) 許す.

Es wurden keine Journalisten zu der Veranstaltung zugelassen.

zumachen

《口語》

他

<et⁴> (...⁴を) 閉める、閉じる (反 aufmachen) :

ein Fenster zumachen

《比喩》

Ich habe die ganze Nacht kein Auge zugemacht.

Ⅱ 自〔完了 haben〕

店をたたむ ; 休業する :

Er hat zugemacht.

zumuten

他

<j³ et⁴> (…³に不当なこと⁴を) 要求する :

Die Arbeit wollte er uns nicht zumuten.

zunehmen

自〔完了 haben〕

① (程度が) 増大する、増える、強まる (反 abnehmen) :

Die Dunkelheit nimmt zu.

② <an et³> (…³が) 増える :

Mit den Jahren hat er an Erfahrung zugenommen.

③ (体重が) 増える、太る :

Ich habe schon wieder ein Kilo zugenommen.

zurufen

<j³ et⁴> (離れたところにいる人³に…⁴と) 大声で伝える :

Er rief ihr zu, sie solle warten.

zusagen

I 他

<j³ et⁴> (…⁴を) 約束する (同 versprechen) :

Er hat mir Unterstützung zugesagt.

II 自〔完了 haben〕

① (招待などを) 承諾する (反 absagen) :

Ich habe bereits zugesagt.

② <j³> (…³の) 気に入る :

Diese Wohnung sagt mir sehr zu.

zuschauen

<j³/et³> (…³の様子などを) (関心を持って) 見る、見守る :

Er sah ihr bei der Arbeit zu.

zusehen

自〔完了 haben〕

① <j³/et³> (…³の様子を) (関心を持って) 見る、見守る :

Sie sah ihm bei der Arbeit zu.

② 《daß/wie 文と》 (…になるように) 務める、心がける :

Sieh zu, daß du nicht so spät kommst !

zustimmen

自〔完了 haben〕

<j³/et³> (…³に) 賛成する、同意する：

Er stimmte dem Plan zu.

zutreffen

自〔完了 haben〕

(推測などが) 事実に合致する、正しい；(状況などを) 正しく捉えている、適切である：

Was Herr Kaufmann sagt, trifft nicht zu.

② <für et⁴/j⁴<auf et⁴/j⁴>> (…⁴に) あてはまる、適用できる：

Das Gesetz trifft auf diesen Fall nicht zu.

【前綴 zurück-】

zurückbleiben

自〔完了 sein〕

① 《場所の語句と》 (…に) とどまる、後に残る：

Sie ist allein zurückgeblieben.

② (ついて行けずに) 遅れる：

Der Läufer blieb weit hinter den anderen zurück.

③ (能力・発育などで) 遅れている：

Er bleibt hinter den Leistungen der anderen zurück.

④ (結果として) 後に残る；(後遺症が) 残る：

Nur die Erinnerung blieb zurück.

zurückführen

他

① <j⁴> (…⁴を) (出発した地点に) 連れ戻す：

Er führte uns ins Dorf zurück.

② <et⁴ auf et⁴> (…⁴が…⁴の原因だと) する：

Die Polizei führt den Unfall auf die vereiste Straße zurück.

zurückgeben

他

<j³ et⁴> (…³に…⁴を) 返す、返却する：

Kannst du mir das Buch bis nächste Woche zurückgeben ?

zurückgehen

自〔完了 sein〕

① (出発した地点に) 戻る、引き返す；(商品などが) 返送される：

Ich muß noch einmal ins Hotel zurückgehen.

② 後ろへ下がる、後退する：

Sie ging zwei Schritte zurück.

③ <auf et⁴/j⁴> (…⁴に) 源がある、由来する：

Diese Redewendung geht auf Luther zurück.

④ (熱などが) 下がる；(痛みなどが) 引く：

Das Fieber geht nur langsam zurück.

Ⅱ 他 <et⁴> (…⁴を) 戻る：

Wir gingen denselben Weg zurück.

zurückhalten

I 他

① <j⁴> (…⁴を) ひき止める；(群衆など⁴を) 押しとどめる：

Sie haben mit allen Mitteln versucht, ihn zurückzuhalten.

Du hättest ihn von diesem Schritt zurückhalten müssen.

② <et⁴> (感情など⁴を) 抑える；(発言など³を) 差し控える：

Er hielt seinen Ärger zurück.

《mit et³ と用いられることもある》

Sie hielt nie mit ihrer Meinung zurück.

Ⅱ 再

<sich⁴> 自制する：

Er hielt sich beim Trinken etwas zurück.

zurückkehren

自〔完了 sein〕

《雅語》戻る、帰る：

Er kehrte aus dem Urlaub zurück.

zurückkommen

自〔完了 sein〕

- ① 戻って来る、帰って来る :

Wann kommt ihr von der Reise zurück ?

- ② < auf et⁴ > (…⁴を) 再び取り上げる :

auf ein Thema zurückkommen

zurücklassen

- < et⁴ / j⁴ > (…⁴を) 後に残す、置いていく :

Die Flüchtlinge müssen ihre ganze Habe zurücklassen.

- ② < j⁴ > (ライバルなど⁴に) 差をつける :

Du hast deine Konkurrenten weit zurückgelassen.

zurücklegen

他

- ① < et⁴ > (…⁴を) (元の場所に) 戻す :

Er legte den Hammer in den Kasten zurück.

- ② < et⁴ > (…⁴を) (売らずに) とって置く :

Könnten Sie mir die Bluse bis morgen zurücklassen ?

- ③ < et⁴ > (お金⁴を) 貯める :

Sie legt jeden Monat 300 DM für eine Reise zurück.

- ④ < et⁴ > (ある距離⁴を) 進む :

Der Radfahrer hat heute 210 km zurückgelegt.

zurücktreten

自 [完了 sein]

- ① 後ろへ下がる ; (大水が) 引く :

Bitte von der Bahnsteigkante zurücktreten !

- ② 辞職<辞任>する :

Der Minister ist nicht zurückgetreten.

zurückziehen

I 他

- ① < et⁴ > (…⁴を) 後ろへ引く :

Er zog seine Hand zurück.

- ② < et⁴ > (訴えなど⁴を) 取り下げる ; (承諾など⁴を) 撤回する :

Der Abgeordnete zog seinen Antrag zurück.

II 再

- ① < sich⁴ > (静かなところに) 引き込む :

Er zog sich unmittelbar nach dem Essen in sein Zimmer zurück.

- ② < sich⁴ > (仕事・舞台などから) 引退する :

Er zog sich aus der Politik zurück.

- ③ < sich⁴ > (部隊が) 撤退する、撤収する.

Er will sich von der Bühne zurückziehen.

【前綴 zusammen- 】

zusammenbrechen

自〔完了 s〕

- ① 崩れ落ちる、倒壊する :

Die Brücke ist zusammengebrochen.

- ② (人が疲労などで) 倒れる (☆精神的な意味でも用いる) :

Er ist infolge Überanstrengung zusammengebrochen.

zusammenfassen

他

- ① < et⁴ > (...⁴を) 要約する、手短にまとめる :

Er faßte seine Eindrücke in wenigen Sätzen zusammen.

- ② < et⁴ > (...⁴を) (より大きな集団に) 統合する.

Die einzelnen Sportverbände wurden in einem Dachverband zusammengefaßt.

zusammenhalten

I 自〔完了 haben〕

(バラバラにならないで) くっついている :

Die Bretter der Kisten halten gut zusammen.

《比喩》

Wir wollen immer zusammenhalten.

II 他

- ① < et⁴/j⁴ > (...⁴を) (バラバラにならないように) 結びつけている :

Eine Schnur hält das Bündel zusammen.

《口語》

Er hielt sein Geld zusammen.

- ② <et⁴> (…⁴を) (比較するために) 並べておく :

Wenn man die beiden Stoffe zusammenhält, sieht man den Unterschied.

zusammenhängen

自 [完了 haben]

- ① <mit et³> (…³と) 関連している :

Seine Entscheidung hängt mit den vorangegangenen Ereignissen zusammen.

- ② (物が) つながっている.

Die beiden Teile hängen nur lose zusammen.

zusammenschmelzen

I 他

<et⁴> (金属⁴を) 融合させる.

II 自 [完了 sein]

(雪などが溶けて) 少なくなる ; (蓄えなどが大半) なくなる.

Der Schnee ist in der Sonne zusammengeschmolzen.

Das Geld ist beträchtlich zusammengeschmolzen.

zusammensetzen

I 他

<et⁴> (…⁴を) 組み立てる :

Maschinenteile zusammensetzen

II 再

- ① <sich⁴ aus et³/j³> (…³から) 成る :

Das Gerät setzt sich aus vielen Teilen zusammen.

- ② <sich⁴> (並んで) 一緒に座る ; (話し合うために) 会う :

Die beiden haben sich im Kino zusammengesetzt.

Können wir uns einmal zusammensetzen, um alles zu besprechen ?

zusammentreffen

自 [完了 sein]

- ① 出会う :

Wir trafen zufällig in der Stadt zusammen.

- ② (出来事が) 同時に起こる、かち合う.

Er ist im Theater mit alten Bekannten zusammengetroffen.

非分離前綴 be- を伴う動詞のリスト

————— 基本的な前綴を伴う動詞リスト (3) —————

黒田 廉

beabsichtigen

他

<et⁴> (…⁴を) 意図する、(…⁴する) つもりである :

Wir beabsichtigen, morgen nach Bonn zu fahren.

beachten

① <et⁴> (規則など⁴を) 守る :

die Vorschriften beachten

② <et⁴/j⁴> (…⁴に) 注意を払う、顧慮する :

Sie beachtet nicht seine Einwände.

beängstigen

他 <j⁴> (…⁴を) 不安にする :

Die Dunkelheit beängstigte ihn.

beantworten

他

① <et⁴> (…⁴に) [きちんと] 答える (→ antworten) :

eine Frage beantworten

② <et⁴ mit et³> (…⁴に…³で) 反応する :

die Frage mit einem Kopfnicken beantworten

bearbeiten

他

① <et⁴> (…⁴に) [目的に合わせて] 手を加える、加工する :

den Boden bearbeiten

Der Künstler bearbeitet den Marmor.

② <et⁴> (文書など⁴を) 処理する :

einen Antrag <ein Gesuch> bearbeiten

③ <et⁴> (小説など⁴を) 改作する、脚色する、改訂する :

ein Buch für einen Film bearbeiten

neu bearbeitete Auflage

④<et⁴> (問題など⁴を) 取り扱う、論じる :

Diese Frage möchte ich bald bearbeiten.

bedauern

他

①<j⁴> (...⁴を) 気の毒に思う、同情する :

Sie ist wirklich zu bedauern.

②<et⁴> (...⁴を) 残念に思う :

Ich bedauere diesen Vorfall aufrichtig.

《daß 文と》

Ich bedauere sehr, daß ich nicht mitkommen kann.

bedecken

I 他

①<et⁴ mit et³> (...⁴を...³で) 覆う、かぶせる :

den Leichnam mit einem Tuch bedecken

Der Boden war mit Teppichen bedeckt.

②<et⁴> (...⁴の) 一面を覆う :

Schnee bedeckt die Erde.

II 再

<sich⁴> 覆われる :

Der Himmel bedeckt sich.

bedenken

I 他

①<et⁴> (...⁴を) よく考える :

Du solltest die Folgen bedenken.

②<et⁴> (...⁴を) 考慮に入れる :

sein Alter bedenken

③<j⁴> (...⁴に) 贈りものをする :

Zum Geburtstag wurde er mit Geschenken bedacht.

II 再

<sich⁴> [どうしようか] 思案する :

Er bedachte sich einen Augenblick.

bedeuten

他

①<et⁴> (…⁴を) 意味する :

Was soll das eigentlich bedeuten ?

Das bedeutet einen Trost für mich.

②<et⁴> (単語などが…⁴という) 意味を表す :

Das Wort "Frau" bedeutete ursprünglich etwas anderes als heute.

③<et⁴> (…⁴位の) 意味<重要性>を持つ :

Er bedeutet viel bei seinen Kollegen.

④<et⁴> (…⁴の) 前兆である :

Die Wolken bedeuten Sturm.

bedienen

I 他

①<j⁴> (客⁴に) 給仕する、サービスする :

Der Kellner bedient die Gäste schnell.

②<j⁴> (…⁴に) 仕える、世話をやく :

Er läßt sich gern bedienen.

③<et⁴> (機械など⁴を) 操作する、あやつる :

ein Tonbandgerät bedienen

II 再

①<sich⁴> セルスサービスをする :

Bitte, bedienen Sie sich !

②《雅》<sich⁴ et²> (…²を) 使う、利用する :

Er bedient sich eines Zitats.

bedrohen

他〔完了 haben〕

①<j⁴> (…⁴を) 〔暴力を用いて〕おどす、脅迫する (→ drohen) :

Er bedroht mich mit dem Messer.

②<et⁴> (…⁴を) おびやかす (☆主語は事物) :

Eine Seuche bedroht die Bevölkerung.

bedürfen

自〔完了 h〕

<et²j²> (…²を) 必要とする :

Wir bedürfen deiner Hilfe.

beeilen

再

①<sich⁴> 急ぐ :

Beeil dich ! 急げ

《mit 前置詞と》

Er beeilt sich mit seiner Arbeit.

②<sich⁴> 《zu 不定句と》 (～しようと) 熱心に努める :

Er beeilte sich, seine Fehler wiedergutzumachen.

beeinflussen

<et⁴j⁴> (…⁴に) 影響を与える :

Dieses Ereignis hat sein Denken beeinflusst.

beenden

他

<et⁴> (…⁴を) 終える (→ abschließen)

den Streit beenden

Er beendete das Gespräch.

befallen

他

①<j⁴> (感情などが…⁴を) 襲う、とらえる :

Mich befiel Angst.

②<et⁴> (伝染病・害虫などが…⁴を) 襲う、存在を危うくする :

Das Land wurde von einer Seuche befallen.

befehlen

I 他

①<j³et⁴> (…³に…⁴を) 命令する :

Sie befiehlt ihm strengstes Stillschweigen.

《zu 不定句と》

Er befahl ihr, ihm zu folgen.

②<j⁴> 《方向の語句と》 (…⁴に～へ) 行くように命令する :

Er wurde zum Chef befohlen.

③<et⁴> (…⁴に対して) 命令権を持つ (Ⅱ 自を参照) :

eine Armee befehlen

Ⅱ 自 [完了 haben]

<über et⁴> (…⁴に対して) 命令権を持つ :

Er befiehlt über ein Heer.

befestigen

他

①<et⁴> 《場所の語句と》 (…⁴を〜へ) 固定する :

ein Schild an der Tür befestigen

②<et⁴> (道路・岸など⁴を) 堅固にする ; 《軍》 (…⁴の) 防備を固める :

das Ufer befestigen

die Grenzen befestigen

befinden

I 再

①<sich⁴> 《場所の語句と》 (〜に) いる、ある :

Er befindet sich im Zimmer.

②《雅》<sich⁴> 《状態の語句と》 (〜の状態に) ある :

Sie befanden sich in einer schwierigen Lage.

③《雅》<sich⁴> 《様態の語句と》 (体の具合が〜) だ :

Er befindet sich heute wohl.

Ⅱ 他《雅》

<et⁴/j⁴> 《様態の語句と》 (…⁴を〜と) 判定する、

認める :

Er wurde [für] schuldig befunden.

彼は有罪だと判断された

Ⅲ 自 [完了 haben]

<über et⁴> (…⁴を) 判定する :

Über die Sache hat nur der Fachmann zu befinden.

befolgen

他<et⁴> (命令・助言など⁴に) 従う (→ folgen) :

einen Rat befolgen

befördern

他

①<et⁴/j⁴> (…⁴を) 輸送する :

Güter mit der Bahn befördern

②<j⁴> (…⁴を) 昇進<昇級>させる :

Er wurde zum Major befördert.

befragen

他<j⁴> (…⁴に) 尋ねる、質問する :

einen Zeugen befragen

befreien

I 他

①<j⁴> (…⁴を) 解放する、救出する :

ein Land vom Faschismus befreien

Die Polizei hat die Geiseln befreit.

②<j⁴ von et³> (…⁴を義務など³から) 免除する :

den Schüler vom Unterricht befreien

③<j⁴/et⁴ von et³> (…⁴の…³を) 取り除く :

das Beet von Unkraut befreien

II 再

<sich⁴ von et³> (…³から) 自由になる :

Er konnte sich von den Fesseln befreien.

befürchten

他<et⁴> (…⁴を) 心配する、恐れる :

Ich befürchte das Schlimmste.

Er befürchtet, das wird nicht gut gehen.

begeben

再《雅》

①<sich⁴> 《方向の語句と》 (～へ) 赴く、行く :

Er hat sich auf den Heimweg begeben.

②<sich⁴ an et⁴> (…⁴に) 取り掛かる、着手する :

Sie begaben sich wieder an die Arbeit.

③<sich⁴> (出来事が³) 生じる :

Es begab sich, daß..

④<sich⁴ et²> (…²を) 諦める :

Er begibt sich einer einmaligen Chance.

begehen

他

①《雅》<et⁴> (誕生日・祭日など⁴を) 祝う :

ein Jubiläum begehen

②<et⁴> (犯罪・失敗など⁴を) 犯す :

ein Verbrechen begehen

Selbstmord begehen

③ <et⁴> (道など⁴を) 歩く ; 巡回する :

eine Bahnstrecke begehen

begeistern

I 他

①<j⁴> (…⁴を) 感激させる :

Die Aufführung begeisterte die Zuschauer.

②<j⁴ für et⁴> (…⁴を…⁴に) 熱中させる :

Sie begeisterte ihn für ihre Pläne.

II 再

<sich⁴> 感激する :

Er begeistert sich für den Sport.

begleiten

他

①<j⁴> (…⁴に) 同行する、送って行く :

Sie begleitet ihn zum Bahnhof.

②<j⁴> (…⁴の) 伴奏をする :

Er begleitete den Sänger auf dem Klavier.

③《雅》<et⁴> (…⁴に) 伴う ; (…⁴に) 付け加える、
添える :

Das Glück begleitete ihn während der Reise.

Er begleitete sein Geschenk mit ein paar Zeilen.

begreifen

I 他

①<et⁴> (…⁴を) 理解する、把握する :

einen Zusammenhang begreifen

②<j⁴> (…⁴ [の気持ちなど] を) 理解する :

Ich kann ihn gut verstehen.

《再帰代名詞と》

Er kann sich selbst nicht verstehen.

II 再

<sich⁴> 理解できる、自明である :

Es begreift sich von selbst, daß..

begründen

I 他

①<et⁴> (…⁴を) 理由づける、根拠を挙げる :

Er kann seine Behauptung nicht begründen.

②<et⁴> (…⁴の) 基礎をつくる :

Dieser Schritt begründete seinen Reichtum.

③<et⁴> (会社・団体など⁴を) 設立する :

einen Verein begründen

④<et⁴> (理論など⁴を) 築く :

Er begründete eine neue Lehre.

II 再

<sich⁴ in et³> (…³に) 理由がある、根拠づけられる :

Seine Arroganz begründet sich in seinem Reichtum.

begrüßen

他 [完了 haben]

①<j⁴> (客など⁴に) [歓迎の] あいさつをする (→ grüßen) :

Er begrüßt die Gäste höflich.

《再帰的に》

Sie begrüßten sich mit Handschlag.

②<et⁴> (…⁴を) 歓迎する :

Wir begrüßen seinen Entschluß.

behalten

他

①<et⁴> (…⁴を) 手元に置く :

Das übrige Geld kannst du behalten.

②<et⁴> 《場所の語句と》 (…⁴を元の位置に) 置いておく :

den Hut auf dem Kopf behalten

③<j⁴> 《場所の語句と》 (…⁴を～に) とどめておく :

Sie hat ihn über Nacht in ihrer Wohnung behalten.

④<et⁴> (…⁴を) 保つ、維持する :

die Nerven behalten

⑤ <et⁴> (…⁴を) 記憶にとどめる :

Ich kann seinen Namen einfach nicht behalten.

behandeln

他

①<et⁴/j⁴> 《様態の語句と》 (…⁴を～のように) 取り扱う :

Er hat mich als Freund behandelt.

Das Gerät muß sachgemäß behandelt werden.

②<et⁴ mit et³> (…⁴を…³で) 処理する :

den Boden mit Wachs behandeln

③ <et⁴> (…⁴を) 論じる、〔テーマとして〕扱う :

ein Problem ausführlich behandeln

④<j⁴/et⁴> (…⁴を) 治療する :

eine Verletzung behandeln

behaupten

I 他

①<et⁴> (…⁴を) 主張する :

das Gegenteil behaupten

《zu 不定句と》

Er behauptete, mich gesehen zu haben.

《daß 文と》

Sie behauptete, daß er verreist sei.

② 《雅》<et⁴> (地位・名声など⁴を) 守り通す :

seine Stellung behaupten

II 再

<sich⁴> 自分を主張する、頑張り通す :

Es gelang ihr nicht, sich in ihrer Stellung zu behaupten.

behindern

他<j⁴/et⁴> (…⁴を) 邪魔をする、妨害をする (→ **hindern/verhindern**) :

Die Kinder haben ihn bei seiner Arbeit behindert.

beherrschen

I 他

①<et⁴> (…⁴を) 支配する :

Eine Junta beherrscht das Land.

②<j⁴> (…⁴の) 心を占める :

Sie beherrscht ihn völlig.

③<et⁴> (…⁴を) 制御する、抑制する :

Er beherrschte seinen Zorn.

④<et⁴> (…⁴に) 使いこなせる、マスターしている :

Er beherrscht vier Sprachen.

⑤<et⁴> (…⁴を) 圧してそびえている、眼下に見おろす :

Der Berg beherrscht die ganze Landschaft.

II 再

<sich⁴> 自制する :

Er konnte sich nur schwer beherrschen.

behüten

他 <et⁴/j⁴> (…⁴を) 守る、保護する :

einen Schatz behüten

《vor 前置詞と》

Er behütet das Kind davor, daß ihm etwas zustößt.

bekämpfen

他

①<j⁴> (…⁴と) 戦う、打ち勝とうとする :

einen politischen Gegner bekämpfen

《相互的に》

Die Familien bekämpfen sich auf Leben und Tod.

②<et⁴> (病気・偏見など⁴を) 克服しようと努力する :

eine Seuche bekämpfen

bekennen

I 他

<et⁴> (罪・過ちなど⁴を) 認める :

seine Schuld bekennen

《zu 不定詞と》

Er bekannte, gelogen zu haben.

II 再

① <sich⁴ zu et³/j³> (...³に) 属することを公言する :

Er bekennt sich zu einem Glauben.

② <sich⁴> 《様態の語句と》 (自分を〜だと) 認める :

Er bekannte sich als schuldig.

beklagen

I 他

<et⁴/j⁴> (...⁴を) 嘆く、嘆き悲しむ :

sein Schicksal beklagen

II 再

<sich⁴ über et⁴/j⁴> (...⁴について) 苦情<不平>を言う :

Sie beklagt sich über den Lärm.

bekommen

I 他

① <et⁴> (...⁴を) もらう、受け取る :

einen Brief bekommen

② <et⁴> (...⁴を) [努力して] 手に入れる :

eine neue Stellung bekommen

③ <et⁴> (...⁴の) 状態になる :

Angst bekommen

④ <et⁴> (...⁴を) してもらう ; くらう (☆ 動作名詞を目的語に ; 受動的な意味になる) :

einen Kuß bekommen

⑤ <et⁴> 《様態の語句と》 (...⁴を〜の状態に) する :

Ich habe die Arbeit nicht fertig bekommen.

《方向の語句と》

den Fleck aus dem Kleid bekommen

⑥ <et⁴> 《過去分詞と》 (...⁴を〜して) もらう :

Er bekommt eine Krawatte geschenkt.

⑦《zu 不定句と》（～が）できるようになる；（～を）しなければならなくなる：

Er bekam den Ast zu fassen.

Er hat manches böse Wort zu hören bekommen.

Ⅱ 自〔完了 sein〕

<j³>（…³に）ある効果を持つ、性に合う：

Die Kur wird ihm gut bekommen.

beladen

他

①<et⁴>（…⁴に）〔荷などを〕積む、積み込む、載せる：

Sie beluden den Wagen mit Kohle.

《再帰的に》

Er hat sich mit ihrem Gepäck beladen.

②<j⁴ mit et³>（…⁴に仕事・責任など³を）背負わせる：

Sie belädt ihn übermäßig mit Arbeit.

belegen

他

①<et⁴>（…⁴を）おおう：

den Fußboden mit einem Teppich belegen

②<et⁴>（部屋など⁴を）予約する、（席⁴を）確保する：

ein Zimmer belegen

Hast du schon Plätze für uns belegt?

③<et⁴>（…⁴を）〔資料によって〕裏付ける：

Er hat die Ausgaben durch Quittungen belegt.

④<j⁴ mit et³>（…⁴に～³を）課する、割り当てる：

Waren mit Zoll belegen

⑤<et⁴>（雌の動物⁴と）交尾する：

Dieser Hengst hat die Stute belegt.

beleidigen

他

①<j⁴>（…⁴を）侮辱する、（…⁴の）感情を害する：

Mit diesen Worten hat sie ihn tief beleidigt.

②<et⁴>（目・耳など⁴に）不快感を与える：

Das beleidigt das Auge.

belohnen

他

①<j⁴> (…⁴に) 報いる、ねぎらう :

Sie belohnt ihn für seine Mühe.

②<et⁴> (…⁴に) 報いる :

Seine Ausdauer wurde durch den Erfolg belohnt.

bemerken

他

①<et⁴/j⁴> (…⁴に) 気づく、認める :

Sie bemerkte seine Verlegenheit.

②<et⁴> (…⁴を) 述べる、付言する :

Er bemerkte zu Recht, daß..

bemühen

I 再

①<sich⁴> 努力する :

Er hat sich vergeblich bemüht.

《zu 不定句と》

Er bemühte sich, seinen [rger zu unterdrücken.

②<sich⁴ um et⁴/j⁴> (…⁴を得ようと) 努力する :

sich um eine Stellung bemühen

③<sich⁴ um j⁴> (…⁴のために) 世話をやく :

Er bemühte sich um den Verletzten.

④《雅》<sich⁴>《方向の語句と》(～へ) 足を運ぶ :

Bitte, bemühen Sie sich nach oben !

II 他

<j⁴> (…⁴を) 煩わす、苦勞をかける :

Darf ich Sie noch einmal bemühen?

benehmen

再

<sich⁴>《様態の語句と》(～のように) 振舞う、(～の) 態度を取る :

Er hat sich anständig benommen.

beneiden

他

<j⁴> (…⁴を) うらやむ :

Alle beneiden ihn.

《um, wegen の前置詞句と》

Ich beneide ihn um seine Energie.

benötigen

《雅》

他 <jn/et⁴> (…⁴を) 必要とする :

Ich benötige deine Hilfe dringend.

benutzen

他

①<et⁴> (…⁴を) 使用する :

Darf ich mal dein Handtuch benutzen?

②<j⁴/et⁴> (…⁴を) 利用する :

Sie benutzte ihn nur für ihre Karriere.

beobachten

他

①<et⁴/j⁴> (…⁴ [の動き・変化など] を) 観察する (→ betrachten) :

Er beobachtet die Vögel durch ein Fernglas.

②<et⁴> (…⁴に) 気づく、確認する :

Ich habe schon oft beobachtet, daß..

③《雅》<et⁴> (規則など⁴を) 守る :

Bitte beobachten Sie genau meine Anweisungen!

beraten

I 他

①<j⁴> (…⁴に) 助言をする :

Sie berät ihn beim Einkauf.

②<et⁴> (…⁴を) 審議<協議>する :

ein Gesetz beraten

II 自 [完了 haben]

<über et⁴> (…⁴について) 協議<相談>する :

Sie haben lange über das Vorhaben beraten.

Ⅲ 再

< sich⁴ mit j³ > (…³ と) 協議<相談>する：

Er hat sich mit seinem Anwalt über die Sache beraten.

《複数形の主語と；相互的に》

Sie haben sich lange darüber beraten.

berechnen

I 他

① < et⁴ > (費用・距離など⁴を) 計算して出す：

die Kosten berechnen

② < j³ et⁴ > (…³ に…⁴ [の費用] を) 請求する：

Wieviel berechnen Sie mir?

③ < et⁴ auf / für et⁴ > (…⁴ を〜と) 見積もる：

Die Bauzeit wird auf sechs Monate berechnet.

bereuen

他

< et⁴ > (…⁴ を) 後悔する：

Er hat seine Tat tief bereut.

《zu 不定句と》

Ich bereue es nicht, mitgekommen zu sein.

berichten

I 他

< j³ et⁴ > (…³ に…⁴ を) 報告する：

Er hat mir alles berichtet.

《3 格なしで》

Sie berichtete aufgeregt, daß ...

Ⅱ 自〔完了〕

< über j⁴ / et⁴, von j³ / et³ > (…⁴ / ³ について) 報告する：

Er berichtete über seine Reise.

berichtigen

I 他

① < et⁴ > (誤り・欠点など⁴を) 訂正する、直す：

einen Fehler berichtigen

②<j⁴> (…⁴の) 誤りを正す :

Bitte berichtige mich, wenn ich etwas Falsches sage.

Ⅱ 再

<sich⁴> 誤りを改める :

Er berichtigte sich sofort.

berücksichtigen

他

①<et⁴> (…⁴を) 考慮する、考えに入れる :

Wir müssen sein Alter berücksichtigen.

②<et⁴/j⁴> (… [の希望など] ⁴に) 配慮する、尊重する :

ein Gesuch berücksichtigen

berufen

Ⅰ 他

<j⁴> (…⁴を) [高い地位などへ] 招へいする、任命する :

Er wurde als Professor nach Hamburg berufen

Ⅱ 再

<sich⁴ auf j⁴/et⁴> (…⁴を) 証人<証拠>として引き合いに出す、盾にとる :

Sie berief sich auf ihn als Zeugen.

beruhen

自 [完了]

<auf et³> (…³に) 基づく、起因する :

Seine Aussagen beruhen auf Wahrheit.

beruhigen

Ⅰ 他

<j⁴/et⁴> (…⁴を) 落ち着かせる、なだめる :

ein weinendes Kind beruhigen

Ⅱ 再

<sich⁴> (人などが) 落ち着く ; (風などが) 静まる :

Das Kind hat sich allmählich beruhigt.

Der Sturm beruhigte sich.

berühren

I 他

① <jn/et⁴> (…⁴に) 触れる、接触する、さわる :

Bitte nichts berühren !

② <et⁴> (…⁴に) 言及する :

Er hat dieses Problem nicht berührt.

③ <j⁴> (…⁴の) 心に触れる :

Es berührt mich angenehm.

④ <et⁴> (…⁴に) [旅の途中で] 立ち寄る :

Wir haben Bonn nur berührt.

II 再

<sich⁴> (物が) 接する ; (意見などが) 合致する :

Die Grundstücke berühren sich.

Unsere Interessen berühren sich in diesem Punkt.

beschädigen

他

<et⁴> (…⁴に) 損傷を与える :

Das Haus wurde durch Bomben <vom Blitz> beschädigt.

beschaffen

他

<et⁴> (資金・資材など⁴を) 調達する、[苦勞して] 手に入れる :

das nötige Material für die Arbeit beschaffen

《3 格再帰代名詞と》

Er hat sich³ die Genehmigung beschafft.

bescheiden

I 再

① 《雅》 <sich⁴ mit et³> (…³に) 甘んじる、満足する :

Mi diesem Ergebnis mußte ich mich bescheiden.

II 他

① 《雅》 <j³ et⁴> (運命・神が..³に..⁴を) 与える (☆ 主に状態受動で) :

Ihm war kein Erfolg beschieden.

② 《雅》 <j⁴> 《方向の語句と》 (…⁴を〜へ) 呼び出す :

Der Kanzler hat ihn persönlich zu sich beschieden

③ 《官庁》 <et⁴> (...⁴に対して) 回答する :
einen Antrag abschlägig bescheiden

beschleunigen

I 他

① <et⁴> (...⁴ [の速度] を) 速める :

Er beschleunigte seine Schritte.

② <et⁴> (...⁴ [の時期] を) 早める :

Sie beschleunigen die Abreise <die Hochzeit>.

II 自 [完了]

《様態の語句と》 加速が〜だ :

Das Auto beschleunigt gut.

III 再

<sich⁴> 速くなる :

Durch die Aufregung beschleunigt sich sein Puls.

beschließen

I 他

① <et⁴> (...⁴を) 決める、決心する :

Er beschloß abzureisen.

② <et⁴> (...⁴を) 決議<議決>する :

ein Gesetz beschließen

③ <et⁴> (...⁴を) しめくくる、終える :

Er beschloß seine Rede mit folgenden Worten:...

II 自 [完了 haben]

<über et⁴> (...⁴について) 票決する :

über ein Gesetz beschließen

beschränken

I 他

① <et⁴> (...⁴を) 制限する :

die Zahl der Teilnehmer beschränken

② <j⁴ in et³> (...⁴を...³において) 制約する :

Sie beschränkte ihn in seiner Handlungsfreiheit.

③ <et⁴ auf et⁴> (...⁴を...⁴に) 限定する :

Er hat seine Ausgaben auf das Notwendigste beschränkt.

II 再

①< sich⁴ auf et⁴> (…⁴に) 限定する :

In der Diskussion muß man sich auf das Wesentliche beschränken.

②< sich⁴ auf j⁴/et⁴> (…⁴に) 限定される :

Diese Maßnahme beschränkt sich auf die Rentner.

beschreiben

他

①< et⁴/j⁴> (…⁴を) 叙述<描写>する :

den Täter beschreiben

②< et⁴> (図形など⁴を) 描く :

Das Flugzeug beschrieb mehrere Kreise.

③< et⁴> (…⁴に) 字を書く、(…⁴を) 字で埋める :

Das Kind beschreibt die ganze Seite.

beschweren

I 再

< sich⁴> 苦情を言う :

Sie hat sich über schlechte Bedienung beschwert.

II 他

< et⁴> (…⁴に) 重しをのせる :

Briefe beschweren

(飛ばないように) 手紙の上に重しをのせる

beschwören

他

①< et⁴> (…⁴を) 誓う、誓約する :

Der Zeuge beschwor, daß..

②< j⁴> 《zu 不定句と》 (…⁴に～を) 懇願<哀願>する :

Sie beschwor ihn, sie nicht zu verlassen.

③< et⁴> (霊・悪魔など⁴を) [魔力で] あやつる :

Mit Zauberformeln kann er den Teufel beschwören.

besetzen

他

①< et⁴> (席など⁴を) 確保する :

einen Stuhl für ihn besetzen

②<et⁴> (地位・役など⁴を) 埋める :

Die Stelle muß mit einem erfahrenen Fachmann besetzt werden.

③<et⁴> (...⁴を) 占拠<占領>する :

ein Land besetzen

④<et⁴> (...⁴を) [飾りに] 縫いつける :

ein Kleid mit Borte besetzen

besichtigen

他<et⁴> (...⁴を) 見学する、視察する :

die Gemäldesammlung besichtigen

besiegen

I 他

①<j⁴> (...⁴に) 打ち勝つ :

einen Gegner besiegen

《再帰的に》

Sich selbst besiegen ist der größte Sieg.

②<et⁴> (欲望・困難⁴を) 克服する :

Schwierigkeiten besiegen

Er besiegte seine Begierden.

besinnen

再

①<sich⁴> よく考える、思案する :

Er besann sich einen Augenblick.

②<sich⁴ auf j⁴/et⁴> (...⁴を) 思い出す :

Ich besinne mich kaum auf ihn.

③<sich⁴ auf et⁴/j⁴> (...⁴を) しっかり意識する、自覚する :

Er besinnt sich auf seine Pflicht.

besitzen

①<et⁴> (...⁴を) 持っている、所有している :

ein Haus besitzen

②<et⁴> (...⁴の) 性質を備えている :

Er besitzt Mut.

besorgen

他

①<et⁴> (…⁴を) 調達する、入手する：

Können Sie mir ein Hotelzimmer besorgen?

②<j⁴> (…⁴の) 世話をする：

einen Kranken besorgen

③<et⁴> (用事など⁴を) 済ます：

Einkäufe besorgen

besprechen

I 他

①<et⁴> (…⁴を) 論じる、話し合う：

Sie besprachen die politische Lage.

②<et⁴> (本など⁴を) 批評する、論評する：

ein neuerschienenes Buch besprechen

③<et⁴> (…⁴に) 吹き込む：

ein Tonband besprechen

④<j⁴/et⁴> (…⁴を) 呪文ではらう：

einen Kranken besprechen

II 再

<sich⁴ mit j³> (…³と) 話し合う、相談する：

Ich habe mich mit ihm über diesen Vorfall besprochen.

私は彼とこの事件について話し合った

bestechen

I 他

①<j⁴> (…⁴を) 買収する：

Er hat einen Zeugen mit Geld bestochen.

②<j⁴> (…⁴の) 心をひきつける、魅了する：

Seine Freundlichkeit hat mich bestochen.

《目的語なしで》

Sie besticht durch ihr gutes Aussehen.

bestehen

I 自〔完了〕

① 存在している :

Das Geschäft besteht schon lange.

Darüber besteht kein Zweifel.

② < aus et³ > (…³から) 成る、できている :

Der Gegenstand besteht aus Gold.

③ < in et³ > (…の本質が…³に) ある :

Worin besteht die Schwierigkeit ?

④ < auf et³ > (…³を) あくまでも主張する、固執する :

Er bestand hartnäckig auf seinem Recht.

⑤ < vor j³ / et³ > (批判など³に) 屈しない、持ちこたえられる :

Seine Arbeit kann vor jeder Kritik bestehen.

⑥ < in et³ > (…³を) 乗り切る :

Er hat im Kampf großartig bestanden.

II 他

< et⁴ > (…⁴に) 受かる :

Er hat die Prüfung mit Auszeichnung bestanden.

bestellen

他

① < et⁴ > (…⁴を) 注文する :

Ich habe mir eine Flasche Wein bestellt.

② < et⁴ > (切符・部屋など⁴を) 予約する :

für ihn ein Hotelzimmer bestellen

③ < j⁴ / et > (…⁴を) 呼び出す (☆ 場所・時刻を表す語句を伴う) :

Er hat mich auf Freitag bestellt.

④ < j³ et⁴ > (…³に伝言など⁴を) 伝える :

Bestelle ihm schöne Grüße von mir !

⑤ < j⁴ > (…⁴を) 指名する :

einen Vertreter bestellen

⑥ < et⁴ > (…⁴を) 耕作する :

einen Acker bestellen

bestimmen

I 他

① < et⁴ / j⁴ > (…⁴を) [権限を持って] 決める :

einen Nachfolger bestimmen

②<et⁴> (…⁴を) [調査して] 確認する、決める :

das Alter eines Fundes bestimmen

③<et⁴ für et⁴> (…⁴を～のために) 割り振る、予定する :

Er hat das Geld für ein Auto bestimmt.

④<et⁴> (…⁴を) 特徴づける :

Der Turm bestimmt das Stadtbild.

⑤<j⁴> (…⁴に) 決定的な影響を与える :

Das Gebirge bestimmt die Menschen dieser Gegend.

⑥<j⁴ zu et³> (…⁴を…³する) 気にさせる :

Sie bestimmte ihn zum Bleiben.

Ⅱ 自 [完了 haben]

<über et⁴> (…⁴について) 決定権を持つ :

Über mein Geld bestimme ich selbst.

bestrafen

他

<j⁴/et⁴> (…⁴を) 処罰する :

einen Verbrecher streng bestrafen

bestreiten

他

①<et⁴> (…⁴に) 反論する、反駁する、否定する :

eine Behauptung bestreiten

②<et⁴> (…⁴ [の費用] を) 支払う、まかなう :

die Kosten der Reise selbst bestreiten

Sein Studium bestreiten die Eltern.

③<et⁴> (催し・会話など⁴を) リードする :

Er hat die Unterhaltung allein bestritten.

besuchen

他

①<j⁴> (…⁴を) 訪問する、会いに行く (英 visit) :

einen Freund besuchen

②<et⁴> (催しものなど⁴を) 訪れる、見学に行く :

ein Konzert besuchen

betätigen

I 他

<et⁴> (機械など⁴を) 操作する :

die Bremse betätigen

II 再

<sich⁴> (ある一定の領域で) 働く、活動する :

sich als Gärtner betätigen

betonen

他

①<et⁴> (...⁴を) 強調する、力説する :

Er hat seinen Standpunkt betont.

②<et⁴> (音節・単語⁴に) 強勢を置く、アクセントを置く :

ein Wort falsch betonen

betrachten

他

①<et⁴> (... [の性状・外観など]⁴を) じっくり観察する :

ein Bild eingehend betrachten

《再帰的に》

Sie betrachtet sich im Spiegel.

②<et⁴> (...⁴を) [一定の方法で] 考察する :

eine Frage objektiv betrachten

③<et⁴/j⁴ als~⁴> (...⁴を~と) みなす :

Ich betrachte ihn als meinen Freund.

《再帰的に》

Er betrachtete sich als mein Freund

《als の後ろに形容詞を伴って》

Ich betrachte die Angelegenheit als erledigt.

betragen

I 他

<et⁴> (...⁴の) 額になる、数値になる :

Die Rechnung beträgt 500 Mark.

II 再

<sich⁴> 《様態の語句と》 (〜の) 態度をとる、(〜のように) 振舞う :

Er hat sich ihr gegenüber unfreundlich betragen.

betreffen

他

① <et⁴/j⁴> (…⁴に) かかわる、関連する：

Dieser Vorwurf betrifft mich nicht.

② 《雅》 <et⁴/j⁴> (…⁴に) ふりかかる、襲う：

Ein schweres Unglück hat die Familie betroffen.

betreiben

他

① <et⁴> (特定の営業⁴に) 携わる、従事する：

Ackerbau betreiben

② <et⁴> (…⁴を) はかどらせる、急がせる：

den Umbau des Hauses betreiben

③ <et⁴> (機械⁴を) [特定のエネルギーで] 動かす：

eine Maschine elektrisch betreiben

betreten

他

① <et⁴> (…⁴の) 上にのる、上を歩く：

den Rasen betreten

② <et⁴> (…⁴の) 中へ入る：

ein Zimmer betreten

Ich werde sein Haus nie mehr betreten.

betrügen

I 他 <j⁴> (…⁴を) だます：

eine Firma betrügen

《前置詞 um と》

Sie haben ihn um sein ganzes Geld betrogen.

II 再 <sich⁴> 勘違いをする：

Er betrügt sich selbst.

beunruhigen

I 他

<j⁴> (…⁴を) 不安にする、心配させる :

Diese Nachricht hat ihn tief beunruhigt.

Ⅱ 再

<sich⁴> 不安になる、心配になる :

Bitte beunruhigen Sie sich nicht !

beurteilen

他

<j⁴/et⁴> (…⁴を) 判断する、評価する :

Sie beurteilt einen Menschen nach seinem [ußeren.

bewahren

他

①<j⁴/et⁴ vor et³> (…⁴を…³から) 守る :

Gott bewahre mich davor !

②<et⁴> (…⁴を) 保ち続ける、保持する :

dem Freund die Treue bewahren

③<et⁴> (…⁴を) [心の中に] とどめる :

die Worte im Gedächtnis bewahren

Ⅱ 再

①<sich³ et⁴> (…⁴を) 保つ、維持する :

Sie hat sich ihre Unbefangenheit bewahrt.

②<sich⁴> 保ち続けられる :

Dieser Brauch hat sich bis heute bewahrt.

bewähren

再

<sich⁴> 有能である<信頼できる/役に立つ>ことが示される、実証される :

sich als Lehrer bewähren

beweisen

他

①<et⁴> (…⁴を) 証明する、立証する :

Er hat seine Unschuld eindeutig bewiesen.

《3 格と》

Ich habe ihm bewiesen, daß er unrecht hat.

②<et⁴> (…⁴を) 示す、(…⁴の) 表れである：

Er hat seinen Mut oft bewiesen.

bewerben

再

<sich⁴ um et⁴> (…⁴に) 応募する、申し込む：

sich um eine Stelle bewerben

sich um ein Stipendium bewerben

《um 前置詞句なしで》

Er hat sich bei der Firma als Buchhalter beworben.

bewundern

他

①<et⁴/j⁴> (…⁴に) 感服<感心>する、敬服する：

Ich bewunderte seine Ausdauer.

②<et⁴> (…⁴を) 賛嘆<賛美>する：

Er bewunderte das Gemälde.

bezahlen

他

①<et⁴> (…⁴の) 代金を支払う：

eine Ware bar bezahlen

《目的語なしで》

Herr Ober, ich möchte bitte bezahlen.

②<et⁴> (家賃・料金など⁴を) 払う：

die Miete bezahlen

③<et⁴> (ある金額⁴を) 払う：

Sie hat hundert Mark für das Buch bezahlt.

④<et⁴> (…⁴の) 報酬を支払う：

Die Überstunden werden bezahlt.

⑤<j⁴> (…⁴に) 報酬を支払う：

Ich kann den Arzt nicht bezahlen.

bezeichnen

他

①<et⁴> (…⁴に) 印を付ける：

Er bezeichnet die Kisten mit Nummern.

② <et⁴/j⁴ als ~> (…⁴を~と) 呼ぶ :

Diese Arbeit kann man als gelungen bezeichnen.

《再帰代名詞と》

Er bezeichnet sich als Architekt.

③ <et⁴/j⁴> (…⁴を) 意味する、表す、指す :

Das Wort bezeichnet verschiedene Dinge.

④ <et⁴> (…⁴に) 名をつける、命名する :

Tiere bezeichnen

⑤ <et⁴> (…⁴の) 特徴を挙げる、描写する :

Er bezeichnete den Treffpunkt genau.

beziehen

I 再

① <sich⁴ auf j⁴/et⁴> (…⁴に) 関連する、関係する :

Diese Kritik bezieht sich nicht auf dich <auf deine Arbeit>.

② <sich⁴ auf et⁴> (…⁴を) 引き合いに出す :

sich auf eine Urkunde beziehen

③ <sich⁴> (空が雲に) 覆われる :

Der Himmel bezog sich.

II 他

① <et⁴> (…⁴に) [カバーなどを] かぶせる :

ein Bett frisch beziehen

② <et⁴> (…⁴に) 入居する :

Er hat ein neues Haus bezogen.

③ <et⁴> (給料・年金など⁴を) [定期的に] 受け取る :

Er bezieht ein hohes Gehalt.

④ <et⁴> (…⁴を) [定期的に] 取り寄せる :

die Zeitung durch die Post beziehen

⑤ <et⁴ auf j⁴/et⁴> (…⁴を…⁴へ) 関係づける :

Er bezieht immer alles auf sich.

教育研究学内特別経費

言語研究 VI

1996年3月

編者 在間 進, 馬場 彰, 敦賀陽一郎

発行所 東京外国語大学

〒114 東京都北区西ヶ原4-51-21

電話 03-3917-6111